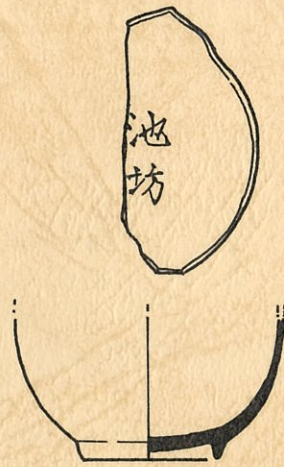


平安京跡研究調查報告

第 19 輯

平安京左京五条三坊八町



財團法人 古代學協會

京 都

平 成 9 年

序

本書は、當協会が平成7年1月から同年3月にかけて京都市下京区室町四条下ル鶏鉾町の池坊短期大学の学内において実施した発掘調査の報告である。

このあたり一帯は平安京の中心であって、左京五条三坊八町にあたり、貴顯、庶民が軒を並べていた。例えば、この八町には平安時代中期、右近衛中将・源雅通（1017年卒）の邸宅があった。この地域の繁栄は時代が降っても廃れることがなかった。現に今回の発掘調査に際して比較的纏まって検出された室町時代の層からは、多量の常滑焼や備前焼の大甕が出土したが、それらは酒や油を扱う商家存在した事実を証示している。また同時代の遺構で、これまで京域内で数多く発見されながらも、その性格が判然としなかった方形土坑が此処でも検出されたし、またその西側に認められた柵状のピット列や中から発見された鋤先等や鉄製品は、これらを埋葬施設とみなす説に対して大きな疑問を投じた。さらに本遺跡は、最下層から相当量の弥生式土器が出土しており、四条烏丸一帯に弥生時代の集落が広がっていたことが今さらながら判明した次第である。

先年、京都は建都千二百年を迎えた。その記念事業の一環として當協会は、関係諸機関の協力を得て『平安京提要』を刊行したのであった。その基礎となった豊富な出土遺物や各種の遺構は、都市遺跡としては世界的にも稀にみるものである。近年京都市内で実施される多大な件数に上る発掘調査が平安京史の解明に著しく貢献していることは、今さら言うまでもない。ただ人家の櫛比する市街地であるために十分な調査期間が与えられないこと、また出土遺物の良好な所蔵設備が乏しいことは、研究者たちの苦慮するところとなっている。

今次の発掘調査に際して原因者である池坊学園理事長をはじめとする同学の関係者各位の理解と協力を賜るところ甚大であった。本報告はそうした御厚意の結果として結実したものであって、その点感謝に堪えぬ次第である。

なお、出土遺物は當地に新たに建設された学舎の一角に所蔵され、歴史の研究と教育の一環として永久に保管されることとなっている。

平成9年3月

(財) 古代學協會理事長
古代學研究所教授兼所長
角田 文衛

例 言

1. 本書は池坊学園の委託を受けて、(財)古代学協会が実施した発掘調査の報告書である。
2. 執筆分担は下記のとおりである。
 - 第1章 辻村純代
 - 第2章 遺構は前川佳代が、遺物は千喜良淳が主として執筆し、辻村が一部補筆した。
 - 第3章 第1節 千喜良淳, 第2節 前川佳代
3. 挿図中に使用した方位および座標は、平面直角座標系Ⅵによる。
4. 出土遺物は池坊短期大学、調査の記録は(財)古代学協会においてそれぞれ保管する。
5. 第2章における土師皿の型式分類は第3章第1節を参照されたい。
6. 本書の編集は辻村が担当した。

目 次

序	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査地の環境と調査の概要	2
第2章 遺構と遺物	7
第1節 江戸時代とそれ以降	7
第2節 室町時代	21
第3節 鎌倉時代	49
第4節 平安時代	59
第5節 弥生時代	69
第3章 後論	79
第1節 左京五条三坊八町出土の中近世土器について	79
第2節 土地区画の歴史的変遷—左京五条三坊八町—	97
Summary	105

図 版 目 次

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 図版第1 | 調査地調査前風景 | 図版第16 | 平安時代の溝 No. 200(下：遺物出土状況) |
| 図版第2 | 上：南区全景
下：北区全景 | 図版第17 | 自然流路 No. 300 |
| 図版第3 | 上：室町時代～江戸時代の遺構
下：江戸時代の柱穴列 | 図版第18 | 自然流路 No. 300 (遺物出土状況) |
| 図版第4 | 上：井戸 No. 19
下：井戸 No. 107 | 図版第19 | 江戸時代土坑出土遺物 (1～10：No. 51, 11：No. 40, 12：No. 10) |
| 図版第5 | 布掘りの溝状遺構 No. 52 | 図版第20 | 江戸時代土坑及び包含層出土遺物と弥生土器 (1～4・6：No. 7・51・70・10・包含層, 5：No. 300) |
| 図版第6 | 上：布掘りの溝状遺構 No. 137
下：室跡 No. 33 | 図版第21 | 室町時代土坑出土遺物 (1～7：No. 62, 8～16：No. 36, 17：No. 38) |
| 図版第7 | 上：井戸 No. 45 断ち割り状況
下：井戸 No. 45 井戸木枠 | 図版第22 | 室町時代土坑出土遺物 (1～12：No. 38, 13～24：No. 38 下層) |
| 図版第8 | 土坑 No. 36 (下：土器出土状況) | 図版第23 | 室町時代土坑出土遺物 (No. 38 最下層) |
| 図版第9 | 上：土坑 No. 36 (完掘状況)
下：土坑 No. 36 (北側杭列断ち割り状況) | 図版第24 | 室町時代土坑出土遺物 (No. 140) |
| 図版第10 | 土坑 No. 38 | 図版第25 | 室町時代井戸出土遺物 (No. 45) |
| 図版第11 | 上：土坑 No. 38 (鋤先出土状況)
下：土坑 No. 38 (完掘状況) | 図版第26 | 室町時代井戸出土遺物 (No. 45) |
| 図版第12 | 土坑 No. 140 (下：鉄製品出土状況) | 図版第27 | 室町時代井戸出土遺物 (No. 45) |
| 図版第13 | 上：土坑 No. 140 (完掘状況)
下：土坑 No. 61 | 図版第28 | 室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No. 43) |
| 図版第14 | 上：かわらけ溜り No. 43
下：甕出土状況 No. 62 | 図版第29 | 室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No. 43) |
| 図版第15 | 上：土坑遺物出土状況 No. 44
下：埋め甕出土状況 No. 113・114・129 | 図版第30 | 室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No. 43) |
| | | 図版第31 | 鎌倉時代の土坑及び包含層出土遺物 (1～5：No. 128, 6・7：A・B 2 セクション 3 層, 8～12：No. 100, 13：No. 132 周辺) |

挿 図 目 次

- | | | | | | |
|-----|---------------------------|-----|------|--------------------------|----|
| 第1図 | 平安京条坊と遺跡の位置 | 2 | 第7図 | 江戸時代遺構全体図 | 8 |
| 第2図 | 遺跡の位置とその周辺 | 2 | 第8図 | 柱穴列1・2 (北区E 4・5・6) 遺構図 | 9 |
| 第3図 | 四行八門制と調査地の位置並びに
既往の調査地 | 2 | 第9図 | 土坑 (No. 51：南区F 2・3) 出土遺物 | 10 |
| 第4図 | 調査地全体図 | 3・4 | 第10図 | 土坑 (No. 51：南区F 2・3) 出土遺物 | 11 |
| 第5図 | グリット設定図 | 5 | | | |
| 第6図 | 石列と水溜 (南区A・B 1・2) 遺構図 | 7 | | | |

第11図	土坑 (No. 51 : 南区 F 2・3) 出土遺物	12	第39図	土坑 (No. 140 : 北区 F・G 5) 出土遺物	37
第12図	土坑 (No. 51 : 南区 F 2・3) 出土遺物	14	第40図	土坑 (No. 61 : 北区 B 5) 遺構図	38
第13図	南・北区出土江戸時代陶磁器	14	第41図	土坑 (No. 61 : 北区 B 5) 出土遺物	38
第14図	井戸 (No. 107 : 南区 F 3) 出土遺物	16	第42図	土坑 (No. 62 : 北区 B 5) 遺構図	39
第15図	井戸 (No. 47 : 北区 F 4・5) 出土遺物	17	第43図	土坑 (No. 62 : 北区 B 5) 出土遺物	40
第16図	井戸 (No. 47 : 北区 F 4・5) 出土遺物	18	第44図	土坑 (No. 62 : 北区 B 5) 出土遺物	41
第17図	北区出土青銅製品	19	第45図	かわらけ溜り (No. 43 : 南区 A 4・5) 遺物出土状態図と東壁断面図	42
第18図	南区出土特種土器	19	第46図	かわらけ溜り (No. 43 : 南区 A 4・5) 出土遺物	43
第19図	土坑 (No. 10 : 北区 F 4・E 5) 出土耳かき	20	第47図	土坑 (No. 1 : 南区 B 4・5) 出土遺物	45
第20図	室町時代遺構全体図	21	第48図	土坑 (No. 5 下層 : 北区 B 5) 出土遺物	46
第21図	布掘りの溝状遺構 (No. 52 : 南区 A・B 3) 図	22	第49図	土坑 (No. 162 : 北区 D 5) 出土遺物	47
第22図	布掘りの溝状遺構 (No. 137 : 南区 E 3) 図	22	第50図	北区 B 4 出土遺物	48
第23図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 遺構図	23	第51図	鎌倉時代遺構全体図	49
第24図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	24	第52図	埋め甕 (No. 113・114 : 北区 C・D 5) 出土状態図	50
第25図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	25	第53図	埋め甕実測図	50
第26図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	26	第54図	土坑 (No. 44 : 南区 A 3) 遺構図	51
第27図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	27	第55図	土坑 (No. 44 : 南区 A 3) 出土遺物	51
第28図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	28	第56図	南北溝 (No. 93 : 北区 E 5, No. 90 : 北区 E 4) 断面図	52
第29図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	29	第57図	No. 93 出土遺物	52
第30図	井戸 (No. 45 : 南区 C 3) 出土遺物	29	第58図	No. 90 出土遺物	52
第31図	室跡 (No. 33 : 北区 A・B 5) 遺構図	29	第59図	土坑 (No. 100 : 北区 E 4) 出土遺物	53
第32図	土坑 (No. 36 : 北区 D・E 5) 遺物 出土状況並びに遺構図	30	第60図	土坑 (No. 50 : 南区 B 4・5) 出土遺物	54
第33図	土坑 (No. 36 : 北区 D・E 5) 遺物 出土状況並びに出土遺物	31	第61図	土坑 (No. 158 : 北区 D 5・6) 出土遺物	54
第34図	土坑 (No. 38 : 北区 E 4) 遺構図	32	第62図	土坑 (No. 132 : 北区 C・D 5) 周辺出土遺物	55
第35図	土坑 (No. 38 : 北区 E 4) 出土遺物	33	第63図	A・B 2 セクション第2層出土遺物	56
第36図	土坑 (No. 38 : 北区 E 4) 出土遺物	34	第64図	A・B 2 セクション第3層出土遺物	56
第37図	土坑 (No. 140 : 北区 F・G 5) 遺物 出土状況並びに遺構図	35	第65図	A・B 2 セクション第2・3層 出土手づくぬ土器	57
第38図	土坑 (No. 140 : 北区 F・G 5) 出土遺物	36	第66図	土坑 (No. 124 : 北区 D 4) 混入遺物	57
			第67図	南・北区出土石製品	58
			第68図	平安時代遺構全体図	59

第69図	溝 (No. 200 : 北区E 5・6) 出土遺物	60	第85図	No. 200 出土弥生土器	72
第70図	溝 (No. 200 : 北区E 5・6) 出土遺物	61	第86図	No. 300 出土弥生土器	73
第71図	土坑 (No. 157 : 南区E 2) 出土遺物	61	第87図	No. 300 出土弥生土器	74
第72図	南区出土緑釉陶器	61	第88図	No. 300 出土弥生土器	75
第73図	南区出土灰釉陶器	62	第89図	No. 300 出土弥生土器	76
第74図	北区出土灰釉陶器	62	第90図	No. 300 出土石器	76
第75図	南区出土瓦器	62	第91図	土師皿分類図	79
第76図	南区出土輸入陶磁器	63	第92図	出土土師皿編年試案図(1)	81
第77図	北区出土輸入陶磁器	64	第93図	出土土師皿編年試案図(2)	82
第78図	北区出土輸入陶磁器	65	第94図	土師皿法量グラフ	83
第79図	北区出土輸入陶磁器 (染め付け)	65	第95図	東播系須恵器拓影(1)	87
第80図	南区出土瓦	66	第96図	東播系須恵器拓影(2)	88
第81図	南・北区出土銭貨拓影	68	第97図	常滑大甕スタンプ文拓影(1)	91
第82図	自然流路 (No. 200 : 南区A 3・4) 遺構図	69	第98図	常滑大甕スタンプ文拓影(2)	92
第83図	自然流路 (No. 300 : 北区) 弥生土器出土分布図	70	第99図	調査地遺構変遷図	98
第84図	自然流路 (No. 300 : 北区) 弥生土器出土状態図	71	第100図	『寛永後万治前洛中絵図』に 描かれた八町域	101
			第101図	『洛中絵図』に描かれた 八町の範囲と調査地	102
			第102図	八町の四行八門制と町割及び 調査区位置図	103

表 目 次

第1表	左京五条三坊八町の調査一覧	5	第4表	左京五条三坊八町の 居住者・所有者一覧	99
第2表	江戸時代井戸一覧	15			
第3表	出土銭貨一覧	68			

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

池坊学園（京都市下京区室町四条下ル鶏鉾町491番地）では学舎改築に先立って、当地の発掘調査を財）古代学協会・古代学研究所に依頼された。調査地は四条通りの南、烏丸通りの一筋西にあたる室町通りと2筋西の新町通りとの中間に位置し、祇園祭りの頃には鉾や山が飾られる京都の中心地の一角を占める。改築予定地は四条通りに面した門から入って約30m南、まわりを民家と学舎に囲まれた南北22m×東西26mのコンクリート敷きの空き地で、調査開始までは北半部にクラブハウスとして利用している2階建てのプレハブが建っていた。

古代学研究所教授・江谷 寛を調査担当者として池坊学園と古代学協会との間で交わされた発掘契約書に基づき、平成7年1月5日から同年3月6日まで発掘調査（発掘面積400㎡）を実施した。調査体制は次のとおりである。

調査担当者 江谷寛

調査員 辻村純代，前川佳代

調査作業員 橋本庄次，橋本俊夫，山中祥夫，鎌田定一，坪内助松，三谷昭三，安田英男，山室俊男，川勝英司，柴田 勝，神谷 篤，井領岑生，栗田尚典，飯沼卓二郎

掘削及び排土作業 大高建設

また、発掘後の整理作業には、次の方々の手をわずらわせた。

千喜良淳，前川佳代，山田喜代子，下村順子，西村典子，山本祐子，村松裕紀

報告書作成にあたっては遺構を前川佳代，遺物を千喜良淳がそれぞれ担当した。

青銅製品の保存処理は西田泰民氏のご厚意による。発掘調査，及び整理作業中に下記の方々からは貴重なご教示，ご指導を得た。

植山 茂，宇野隆夫，梅川光隆，梶川敏夫，國分政子，佐藤龍馬，清水和明，鋤柄俊夫，寺升初代，永田信一，前川 要，百瀬正恒，森下英治 各氏（五十音順）。

発掘調査後，作業員として参加いただいた山室俊男氏が病に斃れ，急逝されました。厳寒のなかで精力的に作業を続け，朗らかで誠実な人柄で周囲を和ませてくださった同氏の死を心より悼み，そのご冥福を祈るとともにこの報告書をご霊前に捧げたいと思います。

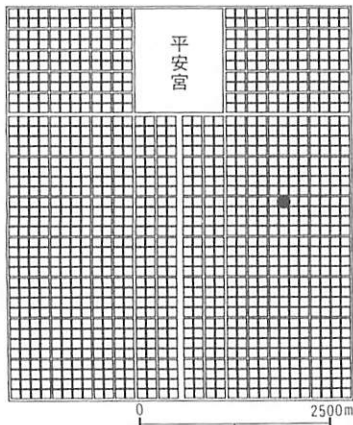
第2節 調査地の環境と調査の概要

発掘調査地は平安京左京五条三坊八町にあたる（第1・2図）。周辺で実施された既往の調査地は第3図、及び第1表に示したとおりである。No. 7 地点で京都市埋蔵文化財研究所が実施した発掘調査では弥生時代から近世までの遺構、遺物が多数発見されているものの、室町時代に土取りが盛んに行われたため、下層遺構の保存状態は良好とは言えない。西側に隣接する当調査地も似たような状況にあるだろうと予想された。

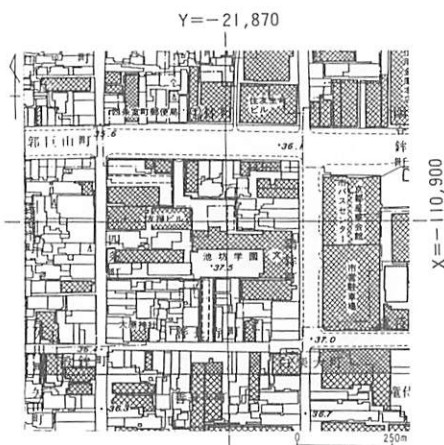
調査を実施するにあたり、まず発掘区内に国土方眼座標を設置し、それを基準に4mのグリッドを組んだ。南北ラインは東からA, B, C…、東西ラインは南から1, 2, 3…と呼ぶこととした（第4図）。調査の進め方は、当初の話し合いにより南半部をまず発掘調査し、そこを埋め戻したあとに北半部の発掘調査を実施することとなった。

現地表から約2.0mの深さまで機械掘削を行なって室町時代の面を検出し、そののち手掘りによる遺構検出にかかった。機械掘削時に検出した近世の遺構からは多量の国産陶磁器のほか、李朝の白磁や高麗青磁も発見された。予想されたとおり、室町時代の遺構は密集し、かつ調査区全域に広がっていた。その多くは土取りの跡である不整形の大型土坑であるが、ほかに石積み井戸や地鎮遺構の可能性のある長方形プランをもつ土坑なども検出され、新たな知見も得られた。

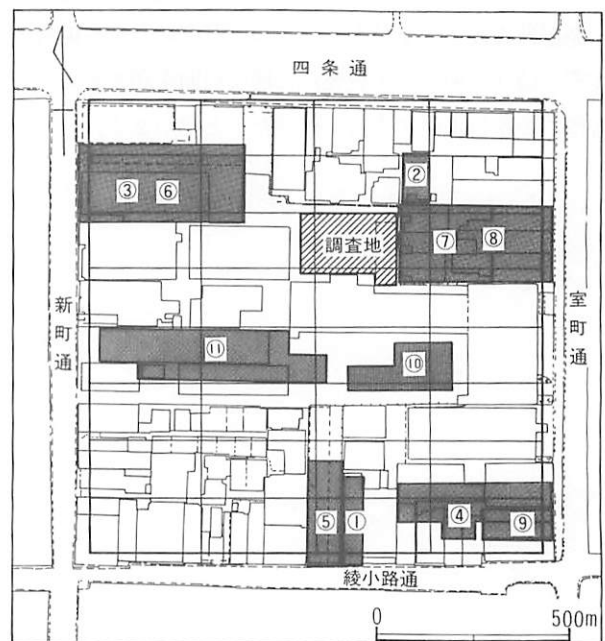
鎌倉時代や平安時代の遺構は破壊されたり、寸断されていて遺構面としてとらえるのが難しい状況ではあったけれども、宅地割の溝らしき遺構も残存しており、当地域における土地利用の変遷を明らかにしていく上で重要な資料を提供することができた。この時期の遺構が調査地の西半に偏っているのに対して、弥生時代の流路は東半に残っていて、なかから少なからぬ土器や石器が出土した。現地表下3m、この流路の底部まで掘り下げて調査を終了した（第5図）。



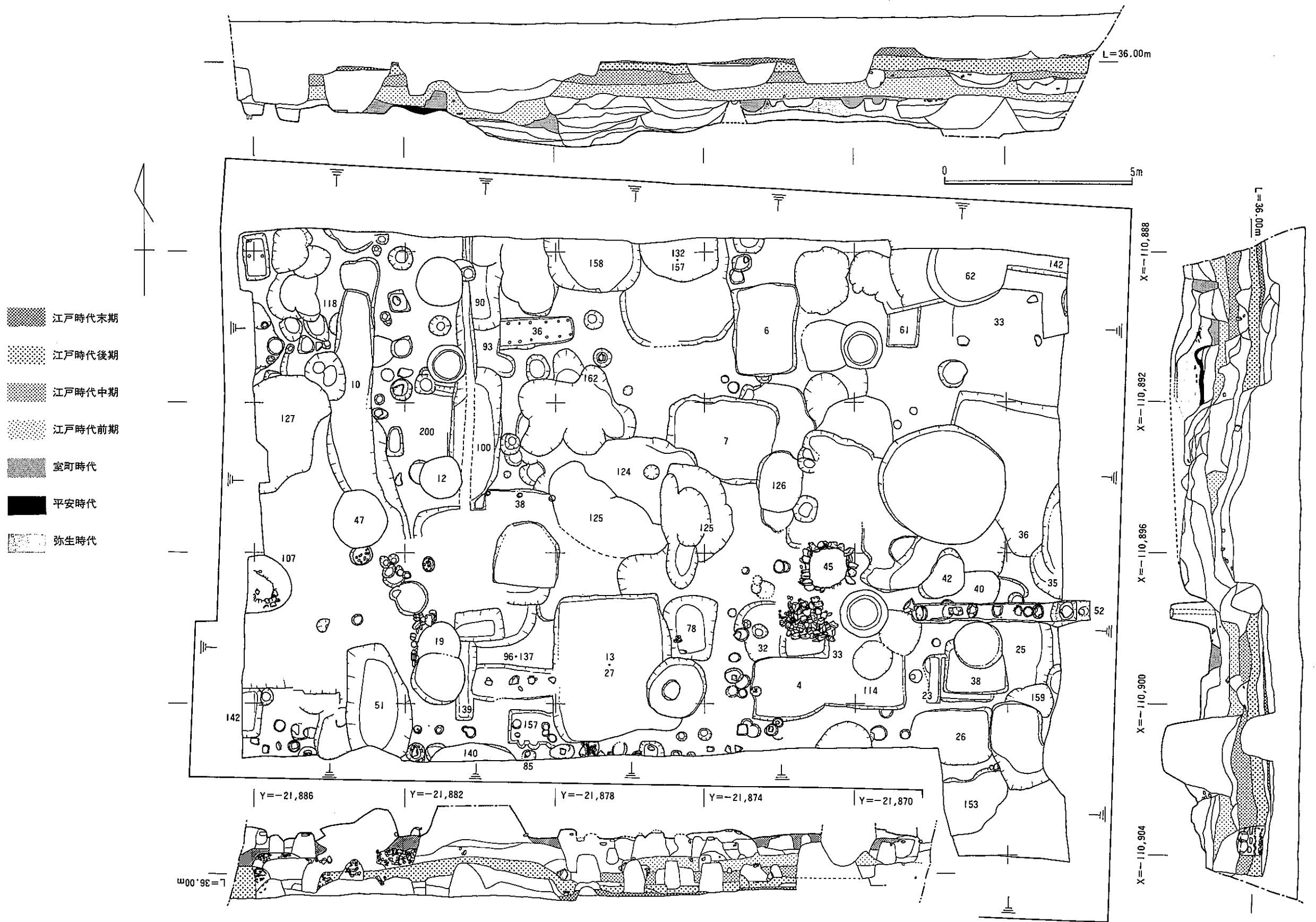
第1図 平安京条坊と遺跡の位置（平安京左京五条三坊八町）



第2図 遺跡の位置とその周辺



第3図 四行八門制と調査地の位置並びに既往の調査地

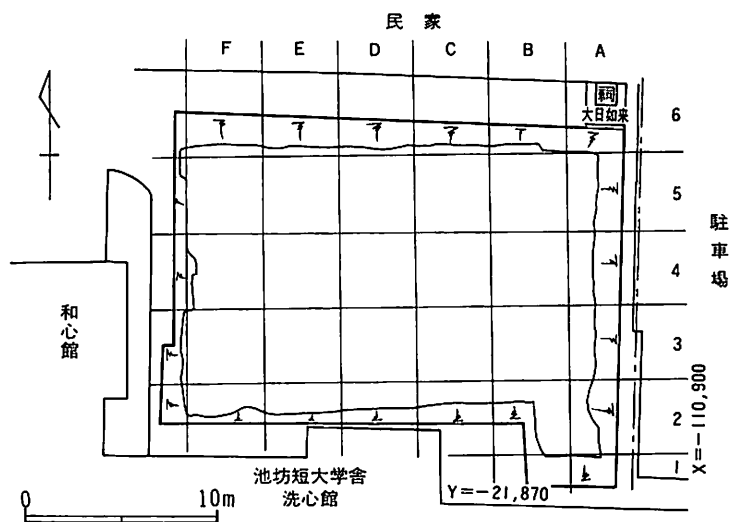


第4図 調査地全体図

第1表 左京五条三坊八町の調査一覧

番号	年月	調査地位置	調査形態	成果	出典
1	1986. 8	下. 綾小路通西入善長寺町140. 145	試掘	GL-0.4m以下包含層5, 平安~鎌倉2, 室町2, 江戸後1	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』(※昭和62年)
2	1987. 3	下. 室町通四条下る鶏鉾町63	立会	No. 1, GL-0.55m以下鎌倉~室町の包含層2, -1.07mにて土坑3, 鎌倉1, 時期不明2。 No. 2, GL-1.34mにて弥生の流路跡。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』(※昭和63年)
3	1987. 5	下. 新町通四条下る四条町345	立会	No. 1, GL-1.8mにて弥生の遺物を含む流れ堆積。 No. 2, GL-1.19mにて平安後期の土坑。 No. 3, GL-1.2mにて平安後・末・時期不明の土坑各1。	''
4	1988. 4	下. 室町通四条下る鶏鉾町498 他	立会	GL-1.45mにて室町の包含層, -1.9mにて土坑4, 室町1, 時期不明3。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』(※平成元年)
5	1989. 3	下. 綾小路通室町西入善長寺町145-2	立会	GL-1.05m以下室町の包含層2。-2.15mにて弥生中期の落ち込み。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』(※平成2年)
6	1989. 11	下. 新町通四条下る四条町347-1 他	立会	GL-1.9mにて土坑3, 鎌倉1, 江戸2。	''
7	1990. 8	下. 室町通四条下る鶏鉾町483 他	試掘	GL-1.5mにて鎌倉~室町の遺構, -1.7~1.9mにて平安の遺構, -1.7~-2.3mにて弥生・古墳前期の遺構	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』(※平成3年)
8	1990	''	発掘	弥生時代中期~近世にかけての遺構。	『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(※平成6年)
9	1991. 11	下. 室町通綾小路上る鶏鉾町500	立会	GL-1.39mにて鎌倉~室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』(※平成4年)
10	1993. 6	下. 室町通四条下る鶏鉾町491	立会	地表下0.4mにて江戸の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』(※平成6年)
11	1993. 10	''	立会	地表下1.89m以下古墳前期, 平安~鎌倉の包含層, 鎌倉・室町の土坑。	''

※財) 京都市埋蔵文化財研究所報告



第5図 グリッド設定図

第2章 遺構と遺物

第1節 江戸時代とそれ以降

近・現代の遺構

石列と水溜 (南区: A・B 1・2) (第6図)

南区東南端をユンボで掘削中、地表面から1.2m下方で石列を検出したため、一旦このレベルで止めて遺構検出を行った。当初、石列は東西に直線的に並ぶものと思われたが、東から約3.0mの地点で南に屈曲し鉤状となる。石は人頭大で南北に2重に並んでいるようで約20個からなる。石列の東端は東壁にかかっており、そのまま東に続くものと思われるが、西端は述べたように南に鉤状に曲って途切れる。

水溜遺構は石列が屈曲する西側で検出した。その上端は先の石列の下面に相当する。枠は径0.66m、深さ6.18mの円形の漆喰製で、内面には小石がところどころにはめられている。側壁の厚さは16~20cm、底は約22~25cmを測る。南西の方向、底から約20cm上に径12cmほどの排水口を設けている。その先は調査区外へ延びるため、排水施設は検出できなかった。

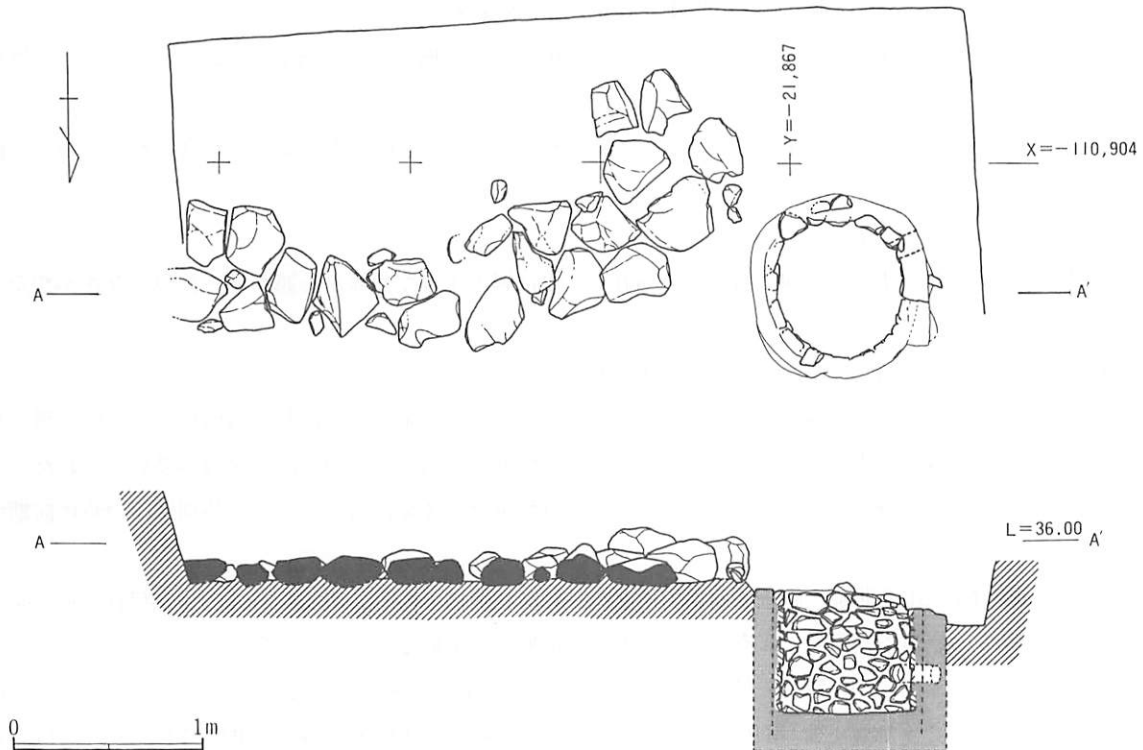
年代は江戸時代末期以降のものとして推定される。

江戸時代 (第7図, 第8図)

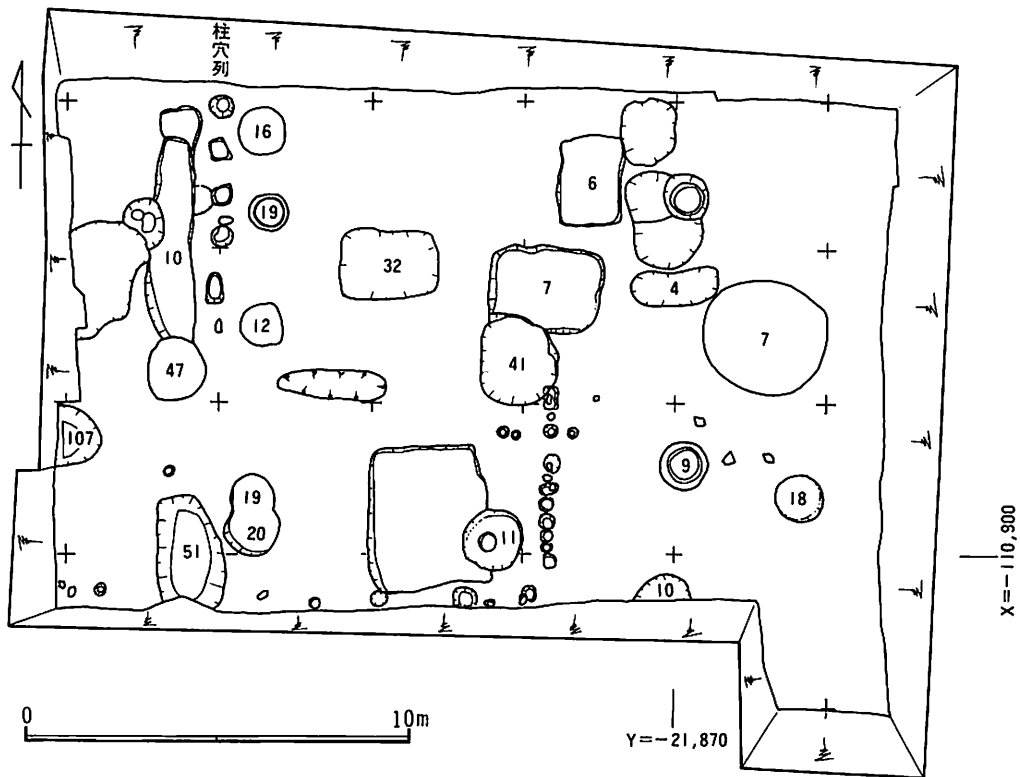
江戸時代の遺構

柱穴列 (北区 No. 87・18・80, 17・21・22 : E 4・5・6)

北区北西部Eライン上で検出した。柱穴はほぼ1.2m間隔で並ぶが根石を伴うものと伴わないものがあり、両者はやや軸線がずれるので、根石を伴わない87-18-80を柱穴列1、根石を伴う17-21-22を柱穴列2と想定



第6図 石列と水溜 (南区A・B 1・2) 遺構図



第7図 江戸時代遺構全体図

した。両者共に柱間は2.4mを測る。柱穴の規模は以下の通りである。

No. 87 径0.5m、深さ0.4mの円形。

No. 18 径0.5m、深さ0.33mの隅丸方形。

No. 80 径0.7m、深さ0.18m。形は不明確であるが円形を呈すると思われる。

No. 17 一辺0.5m、深さ0.32mの方形。根石は長径0.24mで完掘面より10cm土が入れられ、その上に置かれている。

No. 21 径0.56m、深さ0.26mの円形。根石は長径0.26mでやはり柱穴内に少し土が盛られてその上に置かれていた。

No. 22 石のみを検出。長径0.36m。

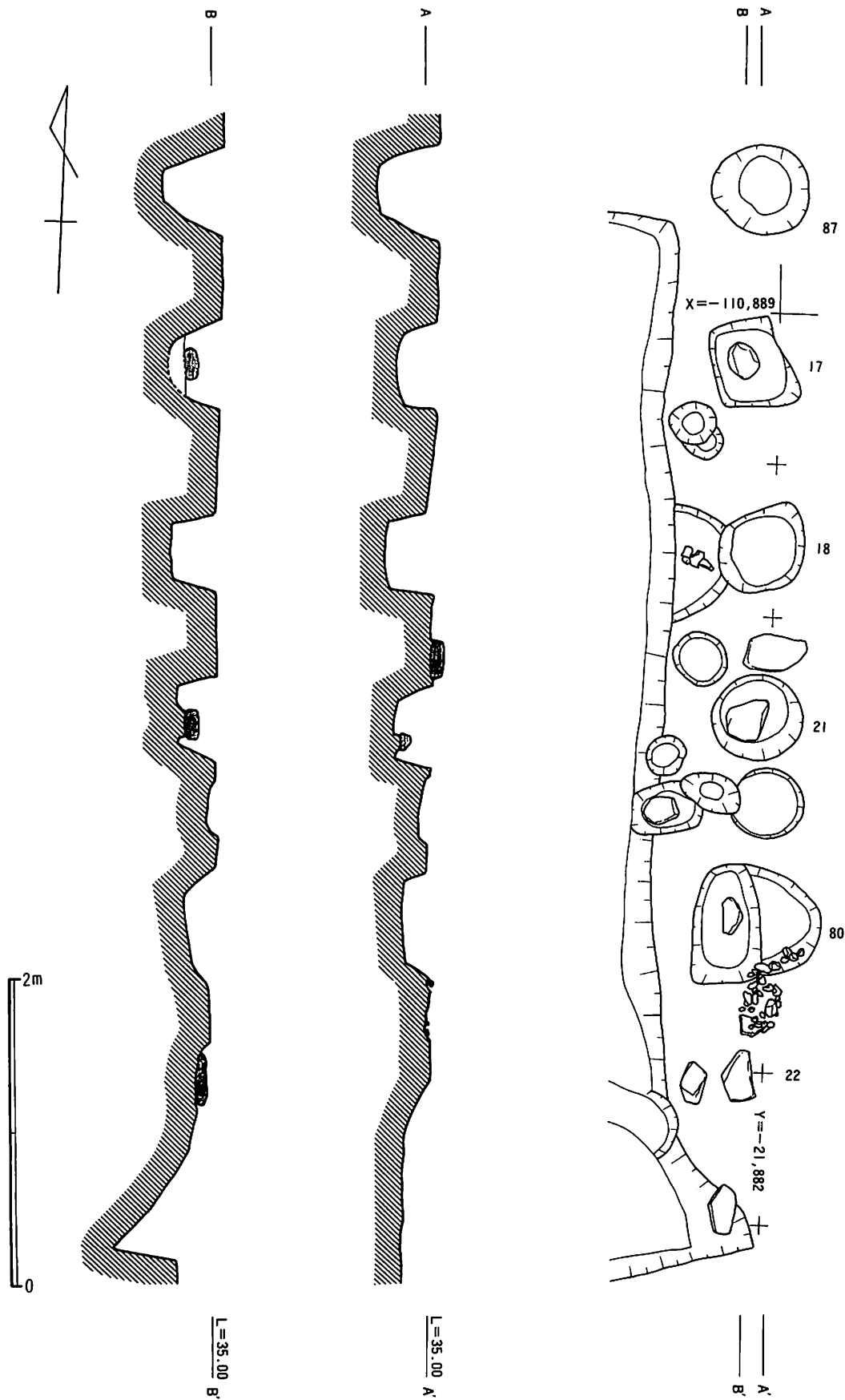
柱穴列は方位を同じくするので建て替えとみられ、ここに塀のような外界から遮断する施設の存在が想定される。

土坑 (南区 No. 51 : F 2・3, 北区 No. 10 : F 4・5)

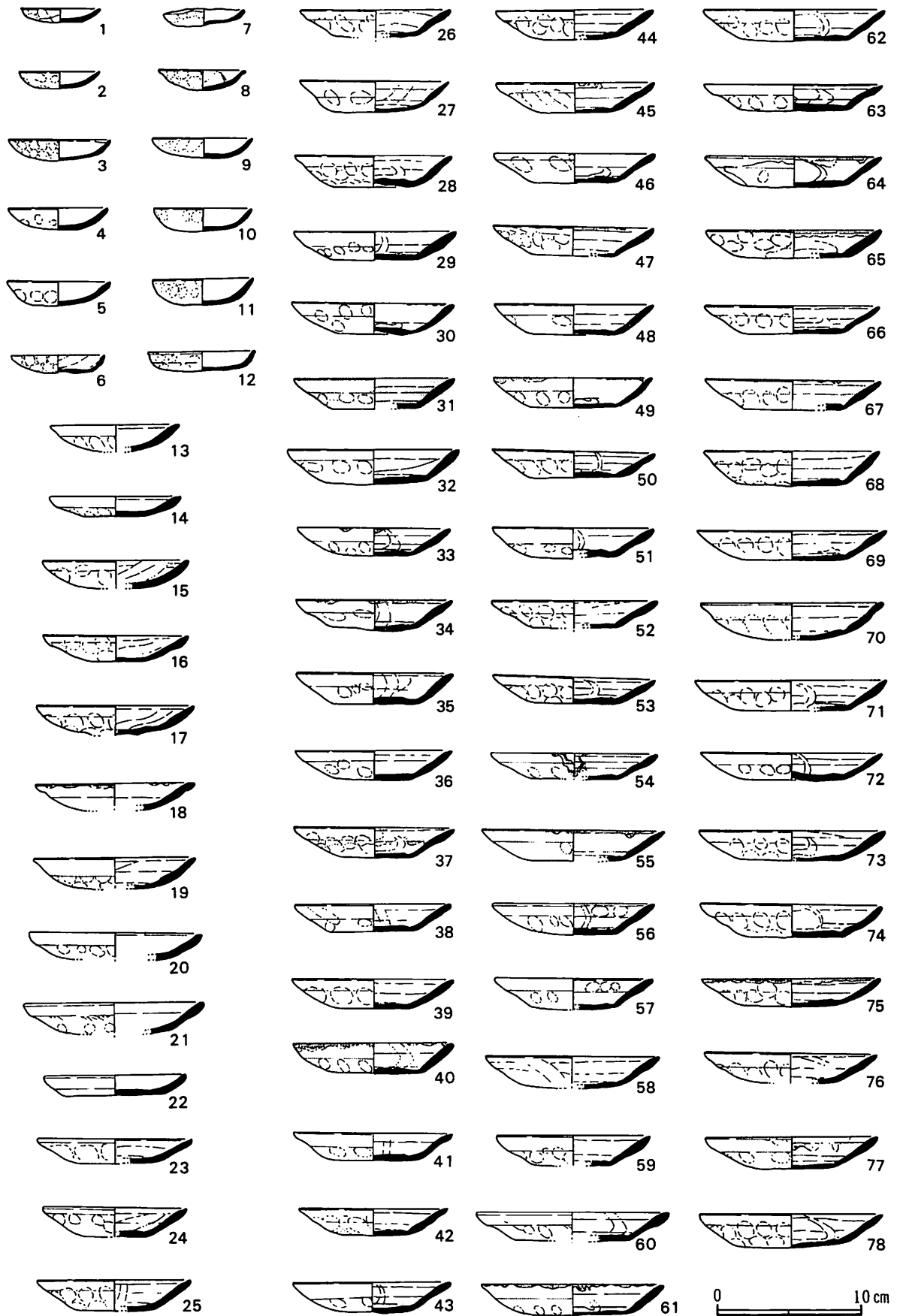
南区 No. 51 は調査区西南で検出したもので、南北1.4m、東西0.9mの南北に長い楕円形で、南壁土層より確認した掘り方の上端幅は約2.75mを測る。埋土は暗緑灰色砂泥であるがその中に、炭層が幾層にもわたって入る。土器・陶磁器・青銅製品の他、魚骨や貝殻などの自然遺物も多量に含んでいる。時期は江戸時代前期である。

北区 No. 10 は No. 51 の北部、調査区西部で南北に長い溝状遺構である。南北4.2m以上、東西1.0mで何回も掘り直してゴミの廃棄に利用したようで、遺物も江戸前期から中期までのものが含まれる。

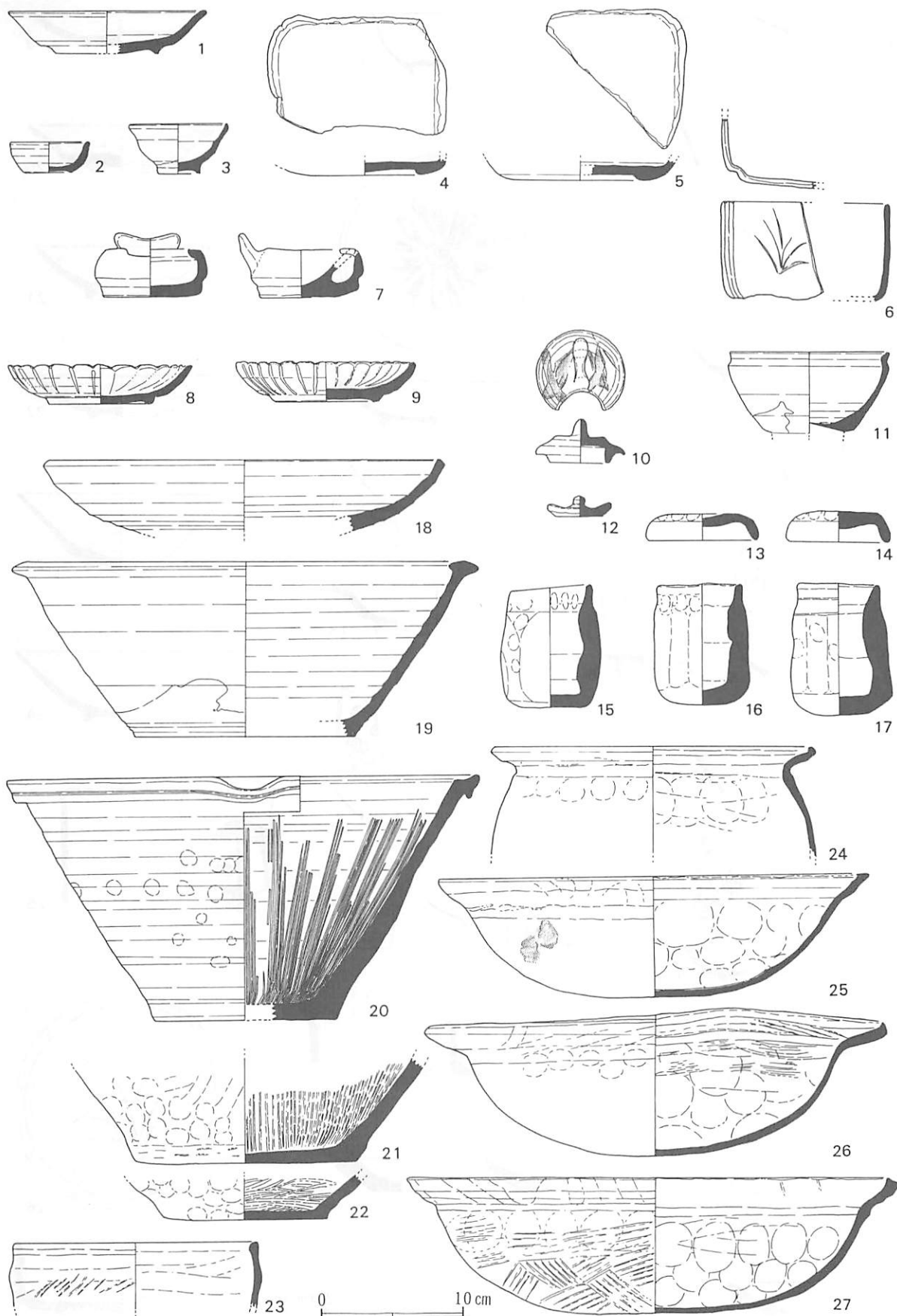
土師皿 (第9図1~78), 国産陶器 (第10図1~12, 18~20, 第11図9, 10, 12, 13, 16~26図版第19), 瓦質土器 (第10図21, 22), 土師質土器 (第10図23~27), 焼塩壺 (第10図13~17), 輸入陶磁 (第11図1~8, 11, 14, 15) が大量に出土した。



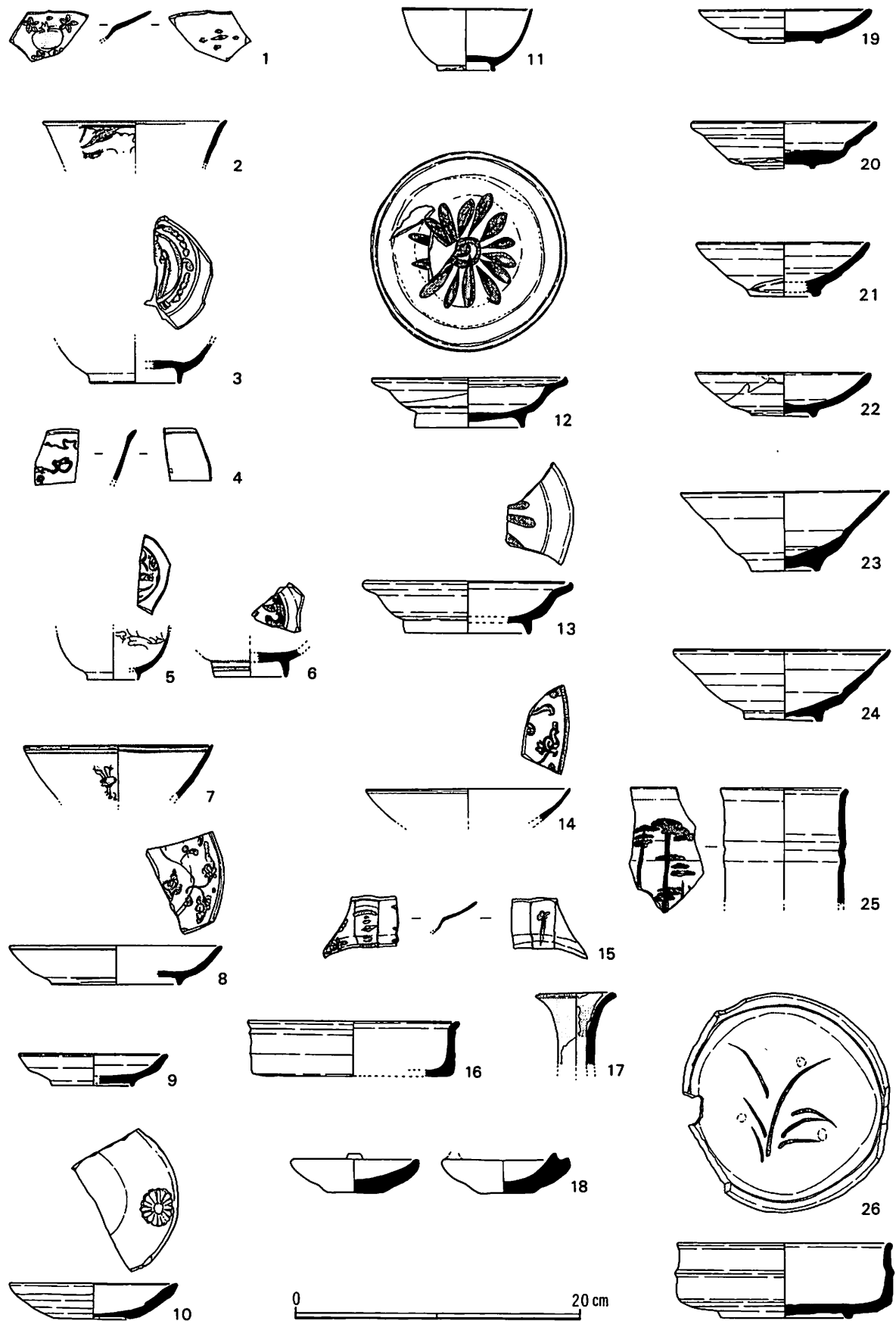
第8図 柱穴列1・2 (北区E4・5・6) 遺構図
 A: 柱穴列1 (No. 87・18・80), B: 柱
 穴列2 (No. 17・21・22)



第9図 土坑 (No. 51: 南区F 2・3) 出土遺物



第10図 土坑 (No. 51 : 南区F 2・3) 出土遺物



第11図 土坑 (No. 51 : 南区 F 2・3) 出土遺物

土師皿 橙色系L類(1~12), 同J類(13~17), 同K類(18~21, 23), 同I-1類(24~51), 同I-2類(52~78)からなる。22は鎌倉時代の混じりである。L類は手づくねによって成形され、全面に指頭圧痕が看取され、ひずみが大きい。口径約5cmと約8cmを測る、大小2つのタイプが存在する。J類の底部は丸底に近い形態を呈し、内面にはナデ上げの痕跡がある。ユビオサエを多用する。口縁端部はヨコナデによって尖り気味である。K類は平底である。内面にナデを施すが、I類のようにナデによる凹線は形成されない。ユビオサエを多用し、口縁端部は強いヨコナデによって上方につまみ上げる。18は、口縁部に燈明痕を残す。I-1類は平底を呈し、底部から口縁部にかけて外側に直線的に伸びる。内面は時計回りのナデを3段階に施し、底面から口縁部に向かってナデ上げる。その際に、底面には凹線状の沈線が形成される。この沈線がI類を特徴付ける要素である。ユビオサエを多用し、口縁端部はヨコナデによって尖り気味におさめる。ヨコナデが強く及んで、口縁部が外反するもの(37, 41~43)も存在する。口縁部に燈明痕を残すもの(33, 34, 40, 45, 47, 49)もある。I-2類はI類より口径の大きいもので、基本的な成形技法はI類と同様である。I-1類に比べて口径が大きいので、形態的にはより大きな皿状を呈する。63は強いヨコナデによって口縁部が外反し、端部が尖る。この形態的な特徴は次代において一般的に見られるものであり、新しい要素といえる。燈明痕を残すもの(54, 61, 64, 65, 75, 77)も存在する。特に65はそれが外面の全域に及んでいる。燈明痕の残存状況からK類、I類は供膳用の皿としてだけでなく、燈明皿としても一般的につかわれていたことがわかる。

国産陶器 唐津焼, 志野焼, 備前焼, 信楽焼, 美濃焼, 瀬戸焼, 織部焼, 京焼がある。

第10図1, 第11図19~24は唐津焼の皿である。浅い皿状を呈するもの(1, 19, 22)と、見込みと口縁部の境に段を有し、向付に近い形態を呈するもの(20, 23, 24)とがある。釉は内面から外面に及ぶが、高台は施釉されない。施釉は概して粗雑に行われ、22は外面にも十分な釉が及んでいない。高台も粗く削り出されており、口縁部がひずむものも散見される。これらの事実は、当時、これらの皿が大量生産された日用雑器であったことを物語っている。唐津焼では、皿の他に小鉢(第10図3)や湯飲み(第11図25)が出土している。小鉢には乳白色の釉がかかっている。筒状を呈し、短く僅かに外反する口縁端部をもつ湯飲みの外面には、鉄絵で松文が描かれている。いわゆる絵唐津である。茶灰色の釉が掛かる。

第10図4~6は志野焼の向付である。正方形に近い形態を呈すると思われる、高台は底部を円形に削り取ることによって作り出している。6は外面に鉄絵で草文を描く。乳白色の釉が掛かる。2は小鉢である。ロクロ水引きによる稜線が看取され、高台は底部を削り取ることによって成形している。7(図版第19-2)は志野焼で燈明具、10はそれに伴う蓋である。本体の外面には羽根状に上方に立ち上がる取っ手を有し、内部には灯心を載せるための舌状の突起が底部から口縁部に向かって伸びている。蓋は頂部につまみ状の取っ手が付く。一部分が円形に割られており、この部分から灯心の先が出るようになっている。蓋の上面には鉄絵によって禪状の文様が描かれている。8・9(図版第19-5, 6)は口縁端部に切り込みを入れ、菊花状に仕上げた皿で、その形から菊皿と呼ばれている。内面も菊花の花弁に模して凹凸を作り出す。高台は浅い削り出しによって成形している。19は大鉢である。口縁端部は内側と外側の両方向に拡張し、広く平らな面を作る。内面にはロクロ水引きによる稜線が看取される。内外面とも施釉するが、高台部には及んでいない。

12は備前焼の蓋である。茶入れか、なつめの蓋であろう。18は備前焼の大皿である。外面にはロクロによって面とりした削り痕が残る。

20は信楽の摺鉢である。口縁端部は幅広の面をもち、片口を有する。内面には摺目が密に施される。体部外面には指頭圧痕が認められる。

第11図18(図版第19-3)は美濃焼の燈明皿である。内面には燈心を載せる舌をもつ。第10図11は天目茶碗である。高台は欠損している。

第11図16(図版第19-7), 26は瀬戸焼の向付である。いわゆる黄瀬戸であり、内面には草の文様が描かれる。17は織部焼の瓶である。口縁部周辺には織部釉が掛かる。

12 (図版第19-4)・13は織部焼の皿である。高台を有し、受け口状の口縁部をもつ。内面には菊花文が描かれている。

第11図10は京焼である。灰色の釉が掛かり、口縁部内面に菊花状の貼り付け紋が施されている。

瓦質土器 第10図21・22は捏鉢である。両者とも内面に縦方向の幅広いヘラミガキを施し、外面はユビオサエで仕上げている。摺目をもたない。

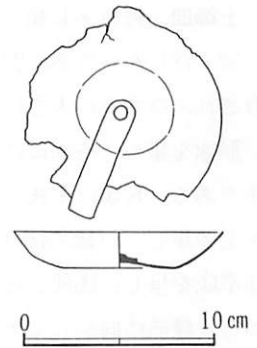
土師質土器 23・24は甕である。23は口縁端部を丸くおさめ、外面には粗いハケを施したのち、横方向のナデによって仕上げている。胎土は赤褐色を呈する。播磨産の甕と考えられる。24は「く」の字口縁を有し、端部は上方につまみあげる。内外面には大きなユビオサエが看取される。大和産の甕である。25～27 (図版第19-9・10) は土師質の焙烙である。丸底から屈曲して口縁部へ

と続き、端部は上方につまみ上げる。内外面には大きな指頭圧痕が認められ、27は外面に粗いハケを残している。3者とも外面にススが付着している。13～17は焼塩壺である。13・14は蓋である。外面に指頭圧痕が看取される。15～17は体部外面を面取りし、口縁部にユビオサエを施す。渡辺氏の分類¹⁾によれば、A類に属する。

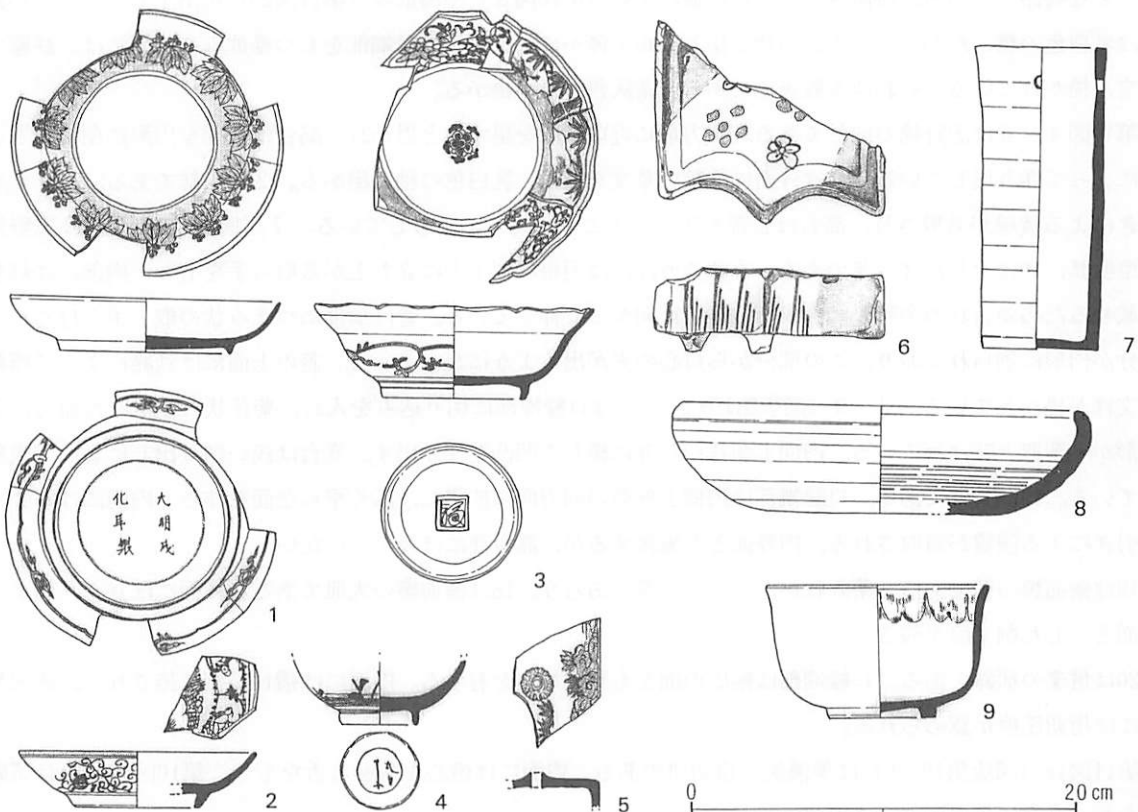
中国陶磁 第11図1～7, 11, 14, 15は染め付け碗である。1 (図版第19-8), 15は景德鎮窯産である。8は染め付けの皿である。これらは破片のため描かれている文様は定かでない。

青銅製品 第12図は灯火皿である。小林氏のトウサン式灯火皿G群²⁾に分類される。

これらの遺物の年代であるが、土師皿は17世紀前半に属する。また、国産陶器は大阪城下の編年では徳川初期 (1615-1622)³⁾に相当する。土師皿と国産陶器の年代に矛盾がないことから、これらの遺物は17世紀前半前葉に位置付けておきたい。



第12図 土坑 (No. 51 : 南区F 2・3) 出土遺物



第13図 南・北区出土江戸時代陶磁器

1 : 北区F 4・5-10 2 : 北区D・E 4-48 3 : 北区C 5-6 4 : 北区F 5-95・45下層 5 : 北区F 4・5-10 6 : 北区E 4-40 7 : 北区F 4・5-10 8 : 南区B 2-26 9 : 北区E・F 6-137

近世陶器・磁器 (第13図)

ここでは、共伴遺物は少なく年代決定の基準に欠けるが、優品と思われるものを提示する。

1～5は古伊万里⁴⁾である。1は染付小皿で、内面には桐の葉の絵柄を、外面には唐草文を有する。高台には「大明成化年製」の銘がある。中国磁器の影響で1630年代頃から生産が開始されるが、後代に比べ文字が明瞭であることから17世紀中頃と考えたい。3も染付小皿で、内面に竹や草木の絵柄を、外面には唐草文を有する。見込みには手書きの5弁花文が、高台には「福」の銘がある。同様の字体をもつ類例が南川原窯ノ辻窯、樋口2号窯に散見されることから、1680年代～18世紀初頭に位置付けたい。2も皿である。内面には草木文、外面には七宝の連続文を有する。この類例が古伊万里のなかに確認できないことから、中国製の可能性も残しておきたい。4は丸型の湯飲み碗である。外面には草木文、高台には「大明年製」の銘がある。樋口窯では18世紀前半に類例がある。5は染付水滴である。型押し成形で作られ、外面には笹の絵柄を有する。18世紀後半～19世紀前半に属する。6は織部焼の向付で、内面には梅鉢の絵柄を有する。3足である。いわゆる桃山陶器であろう。7と8は備前焼である。7は花生け、8は鉢で、どちらも17世紀初頭に位置付けられる⁵⁾。9は京焼であるが、焼成は充分ではなく、磁化していない。胎土は黄橙色を呈する。内面は青色と黄色の釉による波状文が巡る。

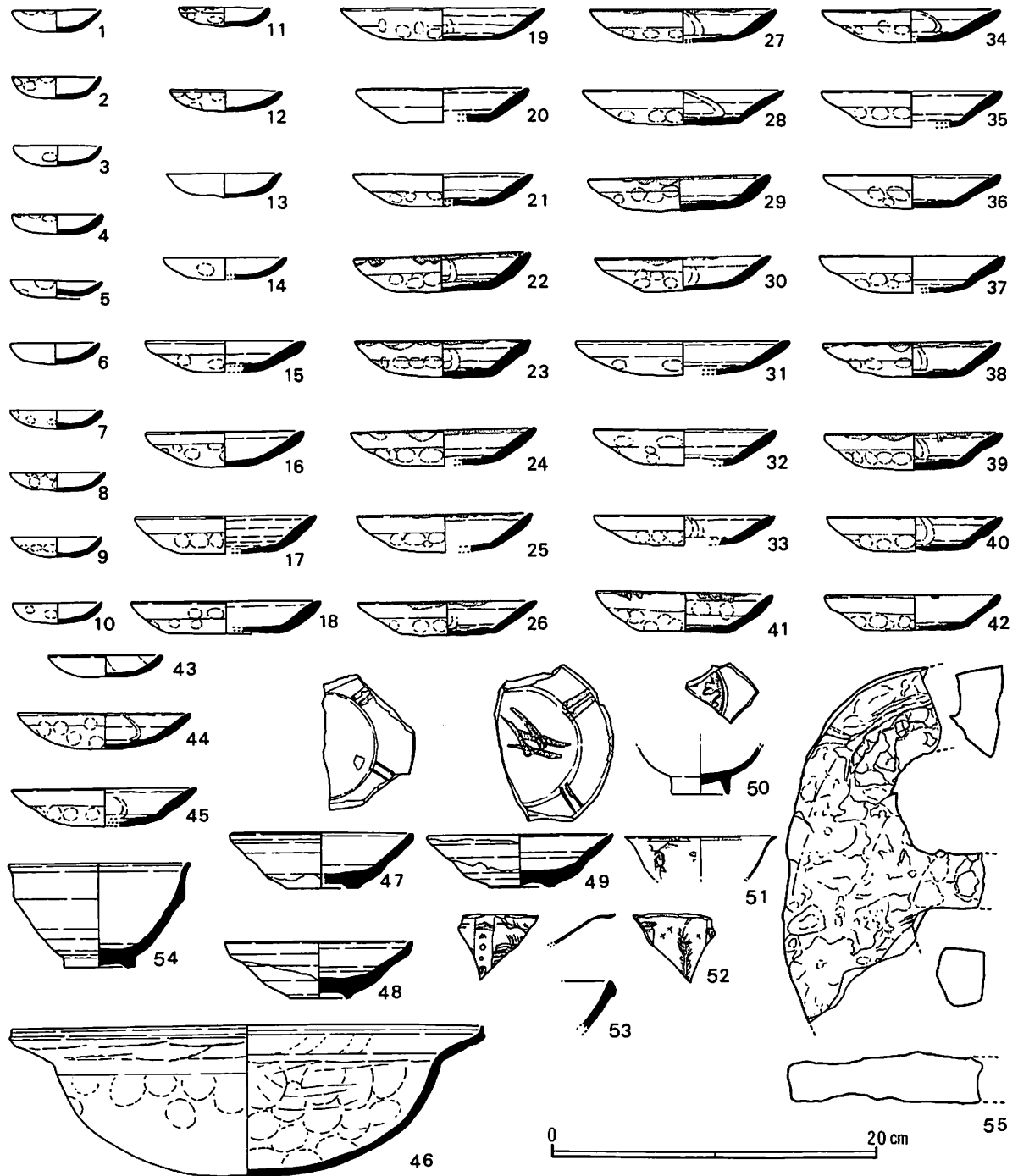
井戸 (南区 No. 107, 第14図)

土師皿 橙色系L類 (1～14, 43), 同J類 (15, 16), 同K類 (17～21, 41, 42), 同I-1類 (22～27, 29, 30, 32～40, 43, 44), 同I-2類 (28, 31) から成る。他に、焙烙 (46), 唐津焼 (47～49), 美濃焼 (54), 輸入陶磁 (50～53), 瓦 (55) が出土している。

土師皿L類は前代に比べてその量を増し、一定数の割合を占めるようになる。成形は手づくねによっており、外面に指頭圧痕が看取されるものも多い。口径がやや大きなもの (12～14) を含んでいる。全体的にひずみが

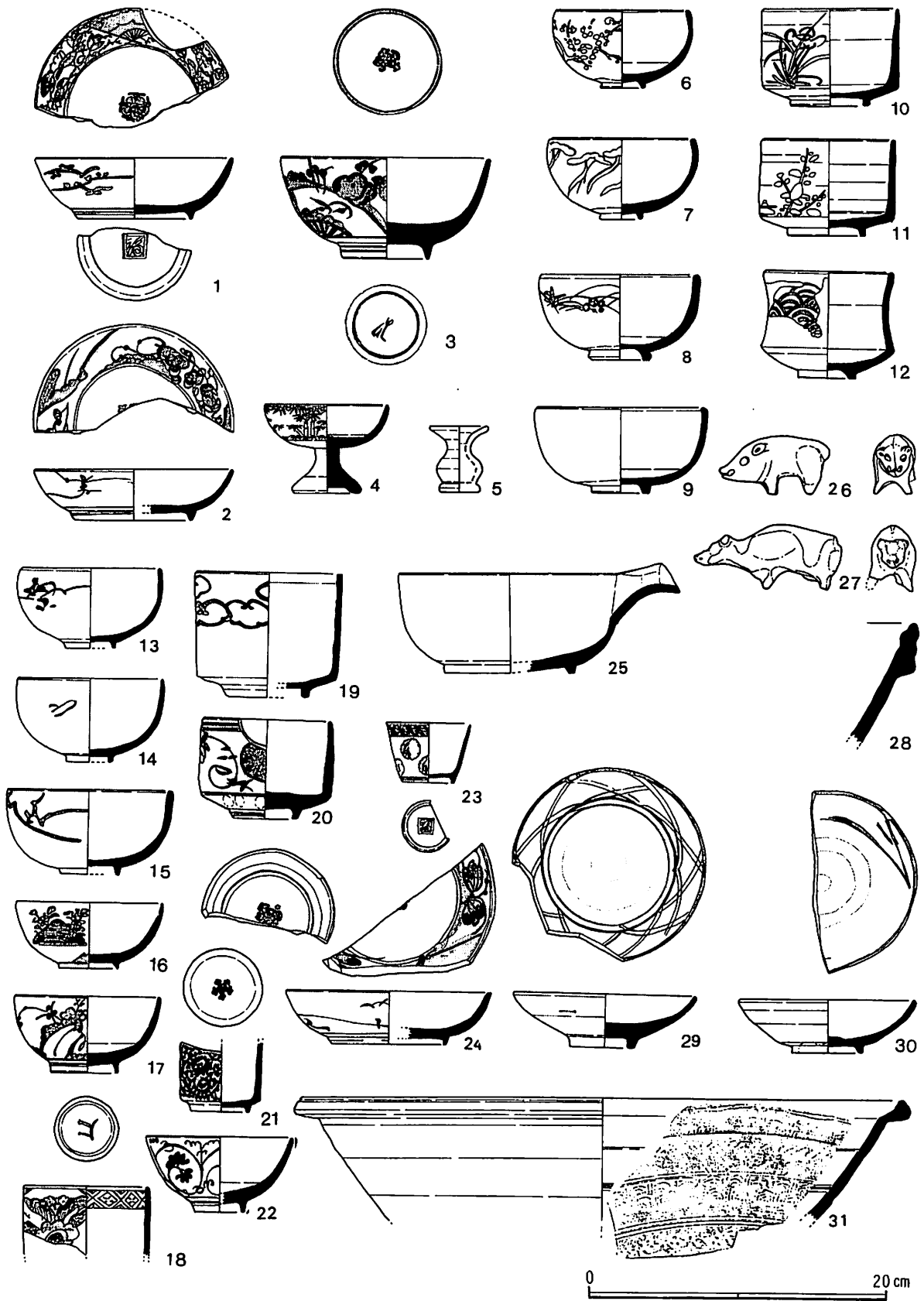
第2表 江戸時代井戸一覧

地区	遺構	グリット	年代	構造	規模	図版
南	7	B 4	近代	コンクリートの井戸枠	径3.0 m	
南	9	B・C 3	近世	漆喰の井戸枠	径1.2 m 枠0.9 m	
南	10	B 2	近世中葉	素掘り、枠不明	径1.4 m	
南	11	D 3	近世	枠不明	径1.6 m 底部径0.5 mの枠跡あり	
南	12	E 3	近世	漆喰の井戸枠	径1.3 m	
南	18	B 3	近世	漆喰の井戸枠	検出面より2 m下	
南	19	E 3	近世	枠不明	径1.2 m	
南	107	F 3	近世初頭	石組井戸 (検出面より1.0 m下に石組)	径1.6 m 石組径0.6 m	図版第4下
北	8	B 5	近世中葉	漆喰の井戸枠	径1.2 m 枠0.9 m	
北	12	E 4	近世	漆喰の井戸枠	径1.1 m	
北	16	E 5	近世	漆喰の井戸枠	径1.3 m	
北	19	E 5	近世後半	瓦枠	径1.0 m 枠0.8 m	図版第4上
北	47	E・F 5	近世中～後	枠不明	径1.4 m	



第14図 井戸 (No. 107: 南区F3) 出土遺物

大きく、上からみると楕円形を呈するものがほとんどである。J類はやや円底気味の底部からゆるやかに内湾しながら口縁部へと伸びて、端部はやや尖り気味におさめる。口縁部はヨコナデを施し、外面には指頭圧痕を認める。K類は平底から屈曲して直線的に口縁部が立ち上がる。口縁部には幅の広いヨコナデを施し、内面にも同様の時計回りのナデを数回施す。19の内面には底部から口縁部へのナデ上げが認められる。I-1類はこの時期に最も多いタイプである。平底から屈曲して口縁部分が伸び、口縁部にはK類と同じく、幅の広いヨコナデを施す。内面にも時計回りのナデを数回施し、その結果、底面に凹線状の溝が作られる。そして、最後に底面から口縁部に向かってナデ上げる。外面はユビオサエによって成形する。外面のヨコナデが強いために口縁部がやや外反している。37~40は、時期的に一段階新しいものである。I-2類はI-1類に比べて口径が大きい大皿タイプであるが、成形技法はI-1類と変わらない。これらの土師皿は16世紀後半後葉から17世紀後半



第15図 井戸 (No. 47: 北区F4・5) 出土遺物

前葉にかけてのもので、時期的にはやや幅がある。

土師質土器 焙烙 (46) は丸底状の体部から外反して口縁部が伸び、端部はつまみ上げる。口縁部は幅広くヨコナデを施し、体部内外面ともに大きな指頭丘痕が残る。底部外面にはススが付着している。

国産陶器 唐津焼 (47, 48, 49) の3点の皿は高台の幅や口縁端部の形態に違いが認められるものの、いずれもロクロによって削り出された高台をもち、底部から外反気味に口縁部が伸びる。48・49は内面に鉄釉による文様を描く、いわゆる絵唐津である。美濃焼の碗は高台を有する底部から体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は直立する。内外面ともに鉄釉が掛けられた天目形である。

輸入陶磁 中国製の染め付け (51・52) と白磁 (53) とがある。 後者は口縁部の形態からみて、これらの一類とは異なる古いものであり、混入の可能性が高い。

瓦 (55) は鬼瓦である。半分が欠損しており全体像は不明であるものの、土師器の年代以前には遡らない。

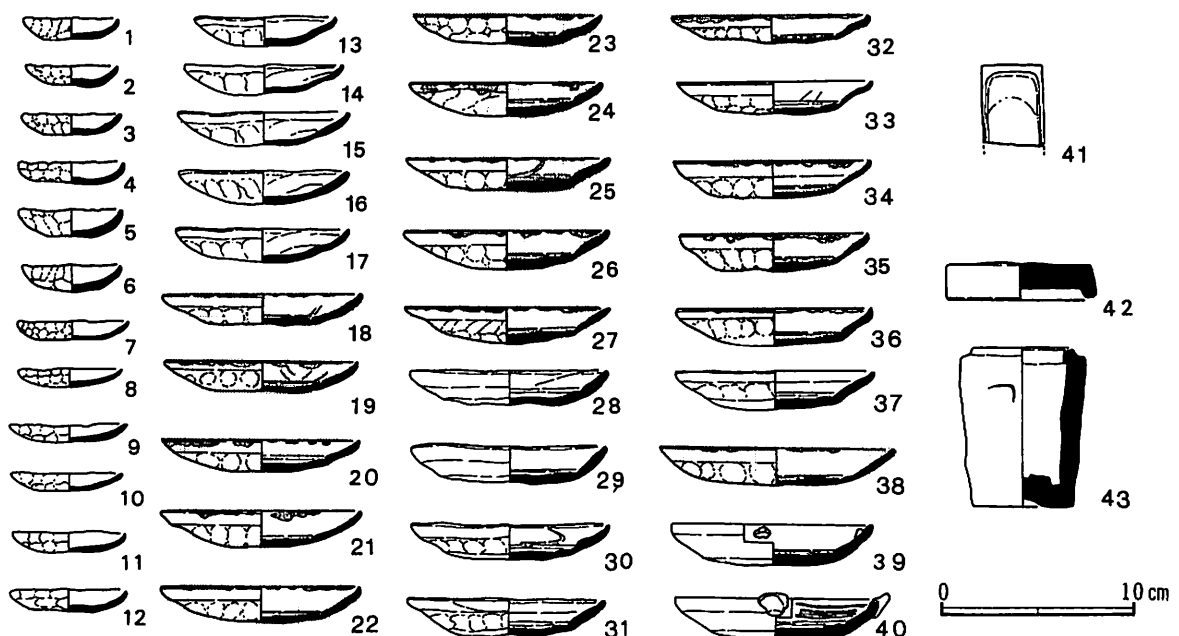
井戸 (北区 No. 47, 第15・16図)

土師皿 (第16図1~38)、灯明皿 (第16図39・40)、京焼 (第15図6~15, 19・25)、古伊万里 (第15図1~5, 16~18・20~24・29・30)、備前焼 (第15図28)、唐津焼 (第15図31)、焼塩壺 (第16図42・43)、土人形 (第15図26・27)、硯 (第16図41) がある。

土師皿 橙色系L類 (1~12)、同J類 (13~17)、同I-1類 (18~31) から成る。I-1類は外面にユビオサエを施し、口縁端部をつまみ上げる。内面は凹線から発展した沈線が巡る。灯明皿は土師皿に釉薬を掛けたものである。39は内面に、40は外面にそれぞれ3カ所の突起を有する。そのため、この皿はその上に土師皿を重ね合わせて使用したと考えられる。トウサン式灯火皿で小林分類のE類⁶⁾ に属する。

国産陶磁器 京焼には碗 (6~9, 13~15)、丸型湯飲み碗 (10~12, 19)、片口鉢 (25) がある。卵色の素地に銕絵で山水文 (13・15)、松文 (7)、梅枝文 (6・11)、雲文 (19)、水仙文 (10)、草花文 (8)、青海波文 (12) を描く。碗の高台は削り出しによるもので、径が小さい。胎土は黄橙色を呈する。

古伊万里には皿 (1・2・24・29・30)、飯碗 (3・16・17・22)、筒形湯呑み碗 (18・20)、そば猪口 (21・23)、仏飯器 (4)、花生 (5) がある。1は口縁部内面に扇文と草花文、外面に唐草文を描く。見込みには手書きの5弁花文⁷⁾、高台の側面には2本の罫線、高台裏には円圏の中央に『福』字銘を有する。2は口縁部内



第16図 井戸 (No. 47: 北区F 4・5) 出土遺物

面に梅枝文，外面には唐草文を描く。見込みにはコンニャク印判による5弁花文，高台の側面には2本の野線を有する。24・29は胎・底部は共に薄い。24は外面にたこ唐草文様を描く。見込みにはコンニャク印判による5弁花文を有する。たこ唐草文様は1690年以降に生産され，幕末まで存続する。29は口縁部外面に斜格子の带状連続文，体部には円形文，底部には2本の野線を描く。高台裏は円圏の中央に『福』字銘を有する。30は口縁部内面に草花文を描く。見込みにはコンニャク印判による5弁花文を有する。外面は崩れていて文様は判然としない。底部には3本の野線を描く。

3は外面に梅枝文を描く。いわゆる，くらわんか碗である。見込みにはコンニャク印判による5弁花文，高台の側面には2本の野線，高台裏は円圏の中央に判読不明の銘を有する。16は外面に山水，草花文を描く。17は外面に梅枝文，高台裏の円圏には判読不明の銘を有する。22は外面に唐草文，高台の側面には2本の野線を描く。18は外面に草花文，内面に带状の連続文を描く。この带状の連続文は広瀬向窯などでは18世紀後半以降に現れる。

20の外面には2本の野線の下に唐草文とコンニャク印判による円形文を描く。高台の側面にも2本の野線を描き，高台裏の円圏にコンニャク印判の5弁花文を有する。

21は胎・底部が共に厚く，見込みには蛇の目釉ハギが看取される。口縁部内面には2本の斜格子文を描く。23は21に比べ，胎・底部とも薄い。見込み蛇の目釉ハギが看取され，口縁部内面には鏤絵で文様を描くが，崩れていて種類は判然としない。見込み蛇の目釉ハギが見られる皿は樋口窯では18世紀前半以降に生産される。

4は外面に竹文を描く。胎は厚い。仏飯器はダンバギリ窯などでは1630年代から生産される。5は高さ4.4cmの模造品である。

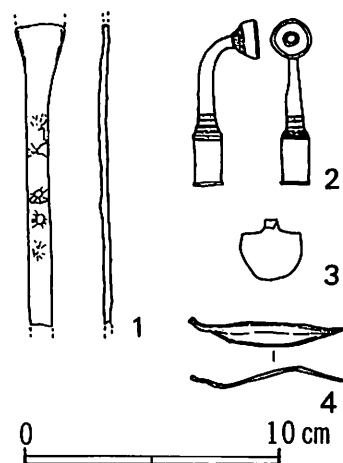
31は三島手の大皿である。内面に波状文と亀甲文を有する。

26・27はそれぞれ猪と牛をかたどった，手づくねの土製品である。41は砂岩製の硯で半分は欠損し，『海』の部分だけが残存する。

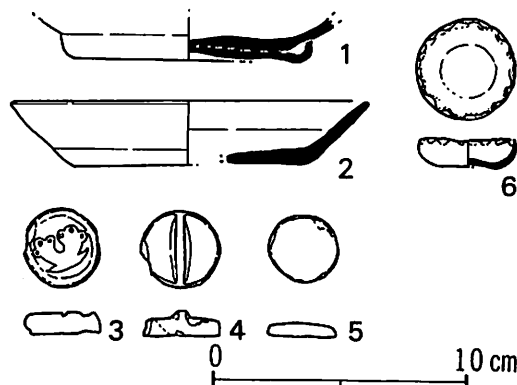
これら遺物の年代であるが，土師皿の年代が17世紀後半，焼塩壺が小林・両角分類⁹⁾でいう4期に属するとすれば17世紀末～18世紀前葉であるのに対し，古伊万里の一群はそこまで古く遡らない。たこ唐草文，底部の『福』字銘，見込み蛇の目釉ハギは17世紀末に出現するものの，くらわんか碗や筒形湯呑み碗，そば猪口の盛行は18世紀中葉以降の傾向を⁹⁾示し，土師皿や焼塩壺の年代とは約半世紀の齟齬をきたすことになる。この原因としては，土師皿がこの時期になると，ほとんど形態的な変化をせず，そのために時期決定が困難なこと¹⁰⁾や，陶磁器の長期的使用により一遺構内に異なった年代遺物が経年的に堆積されることが考えられる。従って，ここでは17世紀末から18世紀中葉までの約60年間の一括遺物としておきたい。

青銅製品 (北区，第17図)

1は扁平な棒状具で両端とも欠損する。一端は扇形に広



第17図 北区出土青銅製品
1 : D 6 2 : F 2
3 : F 5-118 4 : C 4-41



第18図 南区出土特種土器

1 : A・B 2 セクション 2 : D 3-78南
3, 4 : D 3-13 5 : F 2-3-51
6 : A 4

がる。外面には刻陰がある。用途は不明である。
 2はキセルの雁首である。保存状態は比較的良好である。3はハート形の飾り金具である。4は笹の葉を模したような飾り金具である。

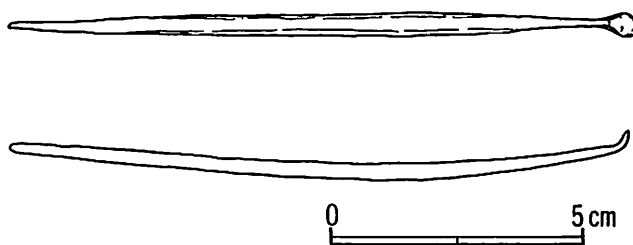
特殊土器 (南区, 第18図)

1は丸底の土師器の底部にコースター皿が接合されたような形態を呈する土器である。用途は不明である。類例は管見に及ばなかった。平安時代の混入と思われる。2は糸切りする底部から「く」の字に折れ曲り、そのまま口縁部となる皿である。

底部に一ヶ所、焼成後と思われる穿孔がある。呪術関係資料とも考えられるようだが、類例は少なく実態は不明である¹⁰⁾。なお、土師皿自体は畿内産以外であろう。3～5はいわゆる土製の面子である。表面にスタンプ状の文様のあるもの(3)、つまみのあるもの(4)、無文のもの(5)がある。6は塩皿である。手づくねによって作られており、口縁端部は波状を呈す。近年この種の土器を紅皿と捉える考え方も示されている¹¹⁾。

耳かき (北区, 第19図, 図版第20-4)

暗褐色を呈するべっ甲製の耳かき。全長は12.6cmで、側面は舟底状に緩やかな曲線を描く。中央部の最大幅4.5cm、厚さ4.0mmで、両端にむかって細くなる。いっぽうの先端は尖り、他方には小さな匙面が彫り出されている。繊細で丁寧な作りの優品である。



第19図 土坑 (No. 10 : 北区 F 4 ・ E 5) 出土耳かき

第2節 室町時代

室町時代 (第20図)

宅地割りとしての布掘り施設 (南区 No. 52 : A・B3, No. 137 : E3)

No. 52 (第21図, 図版第5)

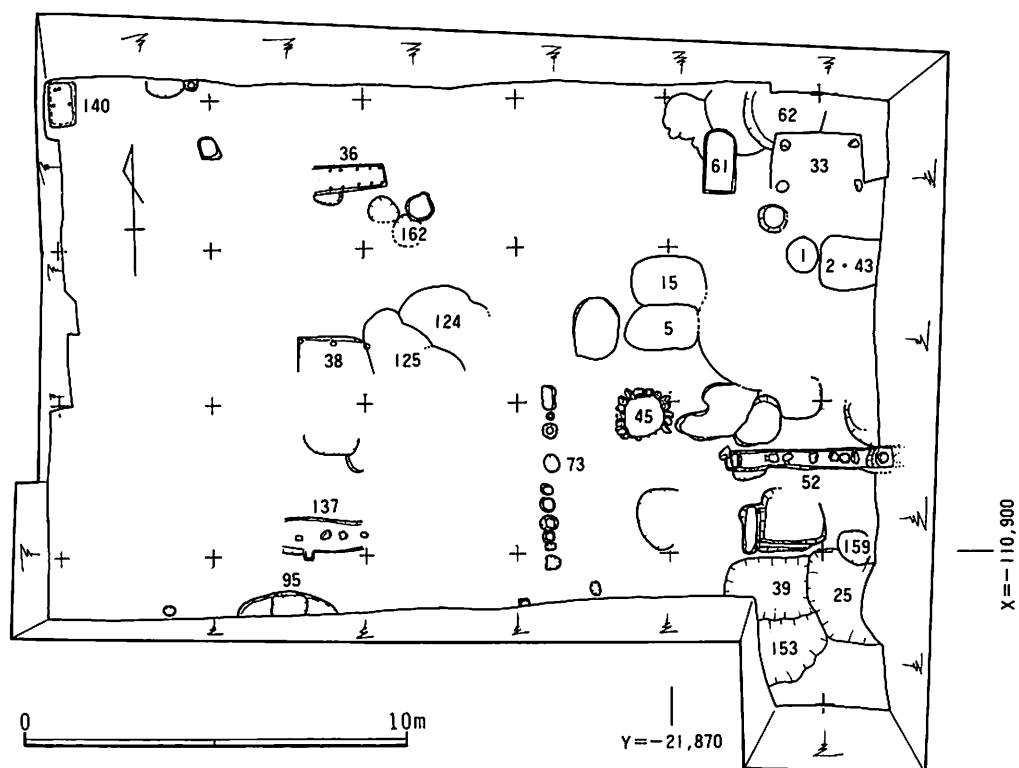
グリットB3から始まり、東西に走る布掘りの溝状遺構である。検出長は4.6m、幅は0.52m、深さは平均0.74mを測るが、西端(52-11)のみ0.9mと深い。壁は直に立ち上がる。

埋土は淡黄色の粘土で、検出当初は径16~18cmの淡灰色でグライ化した柱穴が見え、それを掘ると根石が検出された。初めに布掘りを行い、根石を置き、柱を立てて壁を構築したようである。西端だけが南で検出した焼け土を多く含む土坑の埋土と同じ土が入っており、柱が腐って穴だけが丸く開いていた。焼け土を多く含む土坑は、後述するように火事場の後片付けと土取りを兼ねたものと考えらる。その土坑埋土と同じ土が No. 52の壁として使用されていることから、土坑が掘られ埋められた後に No. 52 が構築されたと考えたい。

根石の間隔は一定ではないが、52-5, 52-6, 52-8, 52-10は1mを測る。西端52-11は一段深くなりまた根石も他のものに比べて大きいので、柱を太くするか何か構築上の理由があったと思われる。ちょうど西端から4mの位置である。

東隣で京都市埋蔵文化財研究所が行った調査地でも同様の溝状遺構が二条確認されている¹²⁾。その南側の一条は No. 52 と一続きの溝と考えた場合、総検出長は約30mとなり、本調査区で西端を確認したことになる。室町通り側まで続く遺構とすると、約46mとなる。また北に8mの地点で検出されているもう一条の遺構の続きは確認されなかった。位置的には北区 No. 33の室跡と重なる。

宅地割りの施設といっても、間口が8m、奥行きが46mの規模は、町屋の壁とすると大き過ぎる。また当調査地で確認した西端は、L字に屈曲するわけでもなく、そのまま立ち上がることをみても単独の構築物、つ



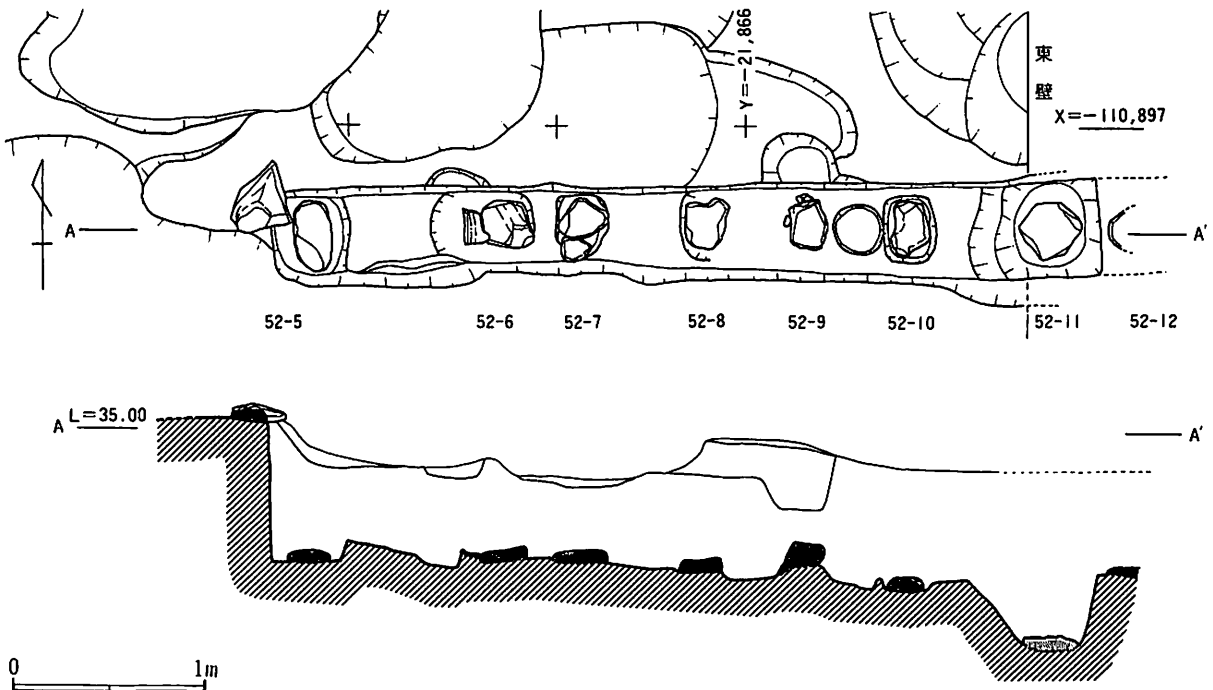
第20図 室町時代遺構全体図

まり塀や築地塀などで、構築方法から頑強な施設と考えられる。左京八条三坊六町から同様の遺構が検出されている¹³⁾。そこでは六町中心ラインに、室町小路から六町中央部に入る通路状の遺構の北側柵列が布掘り状の溝を伴っている。東隣の調査で検出された二条の布掘り遺構の間は土を突き固めたり、ジャリを敷き詰めたといった道路状の痕跡はなかったらしい。

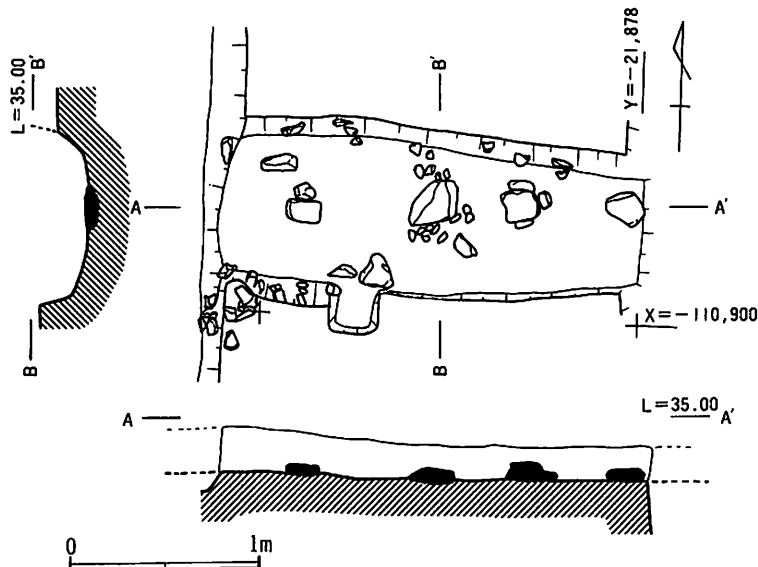
年代は室町時代後半である。

No. 137 (第22図, 図版第6上)

検出幅0.72~0.96m, 下端幅0.56~0.72m, 深さ0.24m, 検出長2.2mで東西に走る。断面は鍋底状を呈し底幅は広い。根石を四つ確認した。間隔は西から0.6, 0.4, 0.56mを測る。埋土には土器や平安の瓦が入り、拳大の礫層であった。



第21図 布掘りの溝状遺構 (No. 52: 南区A・B3) 図



第22図 布掘りの溝状遺構 (No. 137: 南区E3) 図

No. 52 と同様の宅地割の施設と考えているが、両端を近世の土坑に切られており、広がりはつかめない。No. 52 とは形状が異なっている。年代は No. 52 と同じく室町後半である。

井戸 (南区 No. 45 : C 3, 第23図, 図版第7)

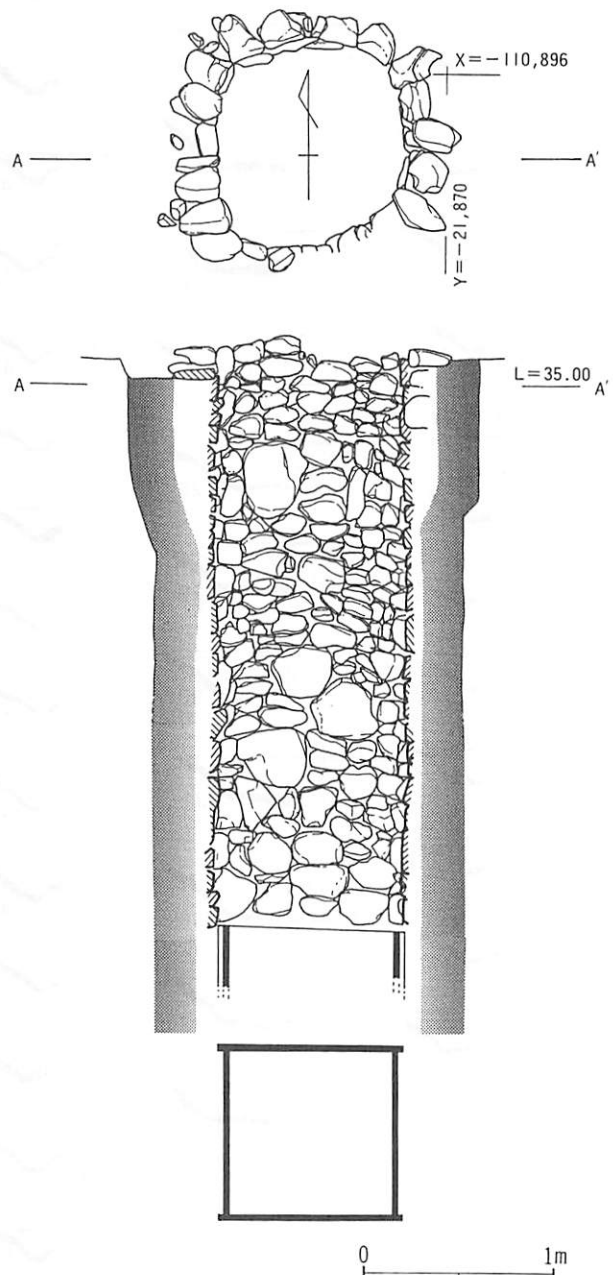
石組内径法1.0~1.1m, 深さ約3.63mで, 円形の掘り形は径1.84mを測る。石は大きめの石をとところどころに配し, その間には人頭大の石の小口を表に積んでいる。底部には内方86cmの方形の木枠を設ける。木枠材は東西98cm, 南北86cmで縦24cm, 厚さ3.0cmを測り, 組み方は東西が優先する。

井戸内には甕や土師器がぎっしりつまっていた。堆積状況は検出面より1.35m付近まで甕片が, それ以下から2.30mまで土師器皿が, 以下は底まで甕片というように交互に入っており, 一時期に廃棄されたものと考えられる。土器以外に, 青銅製容器が出土している。

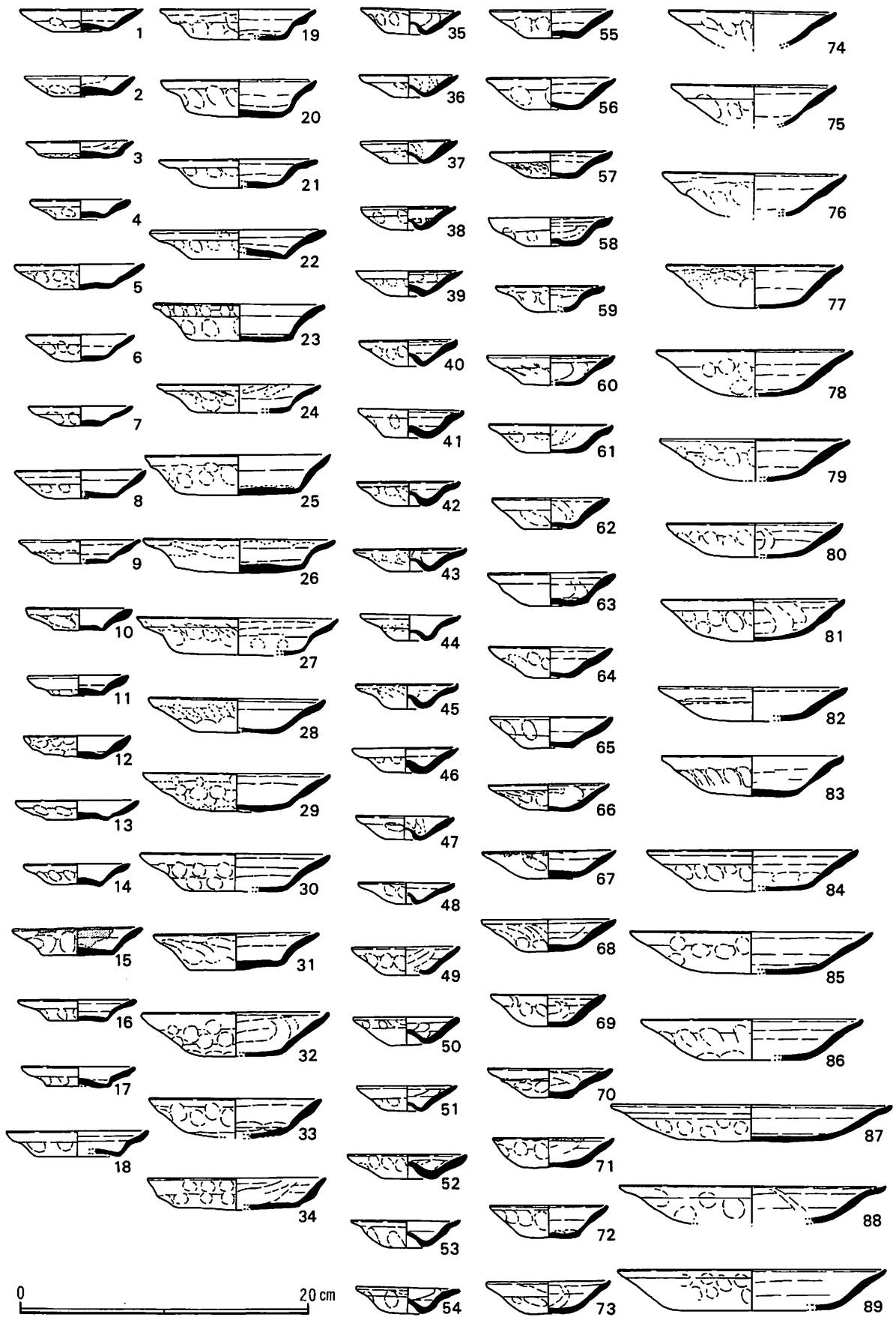
土師皿 (第24図1~89, 図版第25), 常滑焼 (第25図1, 4, 5, 6, 第26図1~3, 第27図1~10, 図版第27-1), 備前焼 (第25図2, 3, 第28図1~10, 図版第26), 瓦質土器 (第29図1~5), 青銅製品 (第30図, 図版第27-2) がある。

土師皿は白色系A類 (55~73), 同B類 (35~54), 同C類 (74~89), 褐色系D類 (1~13), 同E類 (14~34) から成る。A類はこの時期になって初めて普遍化するものである。口縁部は強くヨコナデし, 胴部下半をユビオサエで仕上げる。口縁部は胴部からゆるやかに外反して開き, 端部は上方につまみ上げる。内面は三段階に時計回りのナデを施し, 底から口縁部に向かってナデ上げる。黄白色を呈する。67には灯明痕がある。B類は体部の屈曲が大きくなり, 口縁端部のつまみ上げが顕著になるものが多くなる。同時に, 底部の内側への突出 (へソ) も尖くなる。これらは新しい特徴と言える。C類は, 皿状を呈す胴部から口縁部が外反して開く形態をとるものがほとんどである。また, 口径が非常に大きいもの (84~89) も出現する。E類も口径によって2種類 (14~18), (19~34) に分類される。15~18は口径がD類と大差ないが, E類の形態を取る。他のE類は口縁部の屈曲がまちまち強くなり, ほぼ水平に開くもの (21, 22, 26, 27) も現れる。これらの土師皿は全体的に個体差が総じて器種分化が進んでいると言える。A類の出現, C類, E類の器種分化, B類の形態の変化などから, これらの土師器は鋤柄編年 (No. 73 溝1) に併行し, 15世紀前半後葉に位置付けられている。

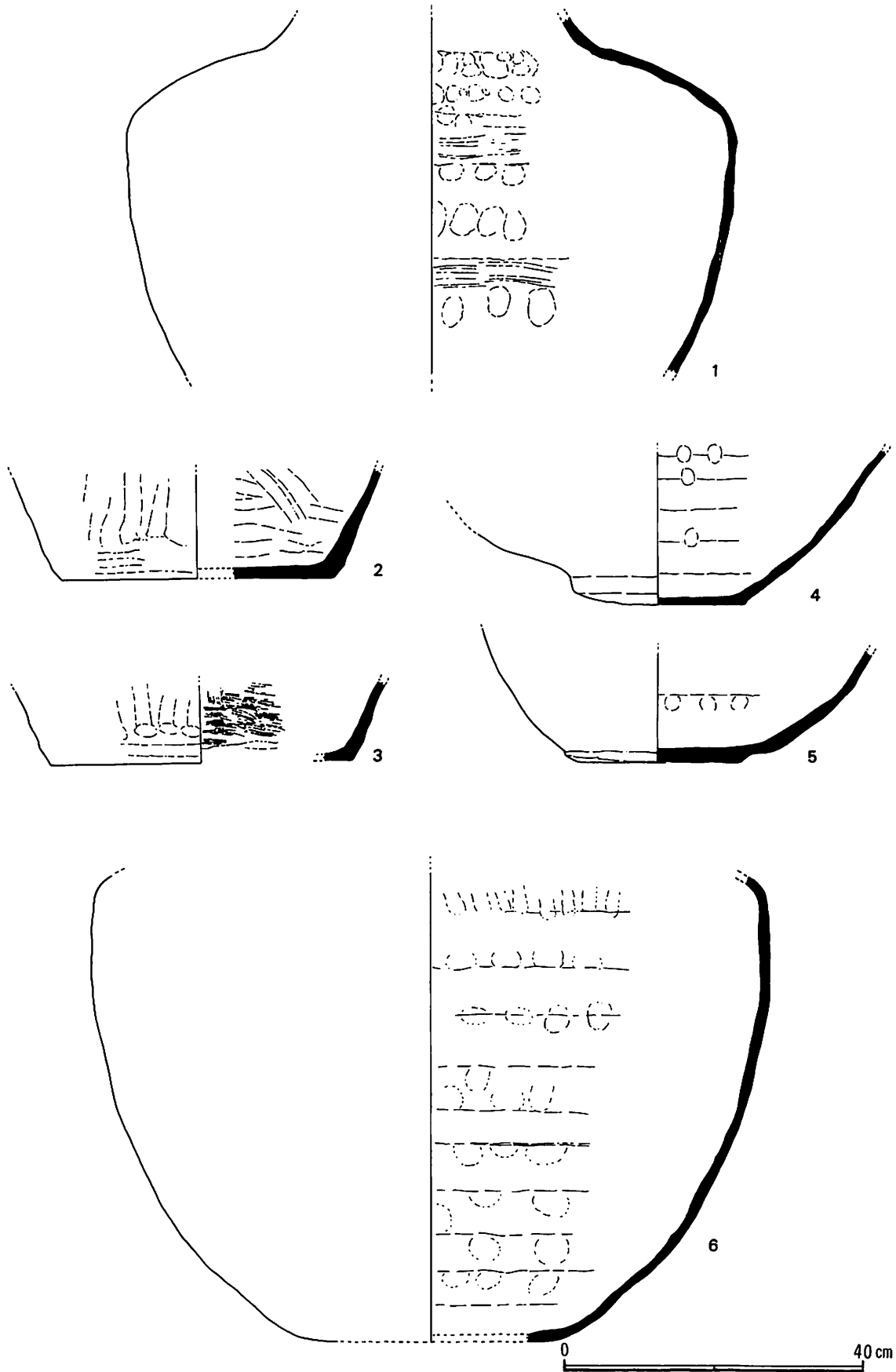
国産陶器 常滑焼は19個体確認されている。第26図1はほぼ完形に近く復元できるもので容量は216ℓ (1石2斗) を測る。第26図1~3は非常に肩の張った付部をもち, 口縁端部はN字状を呈する。底部 (第25図4・5) は成作時に粘土の重量に耐えられなかったのか, 大きくひずんでいる。内面は粘土紐のつまみ上げ痕



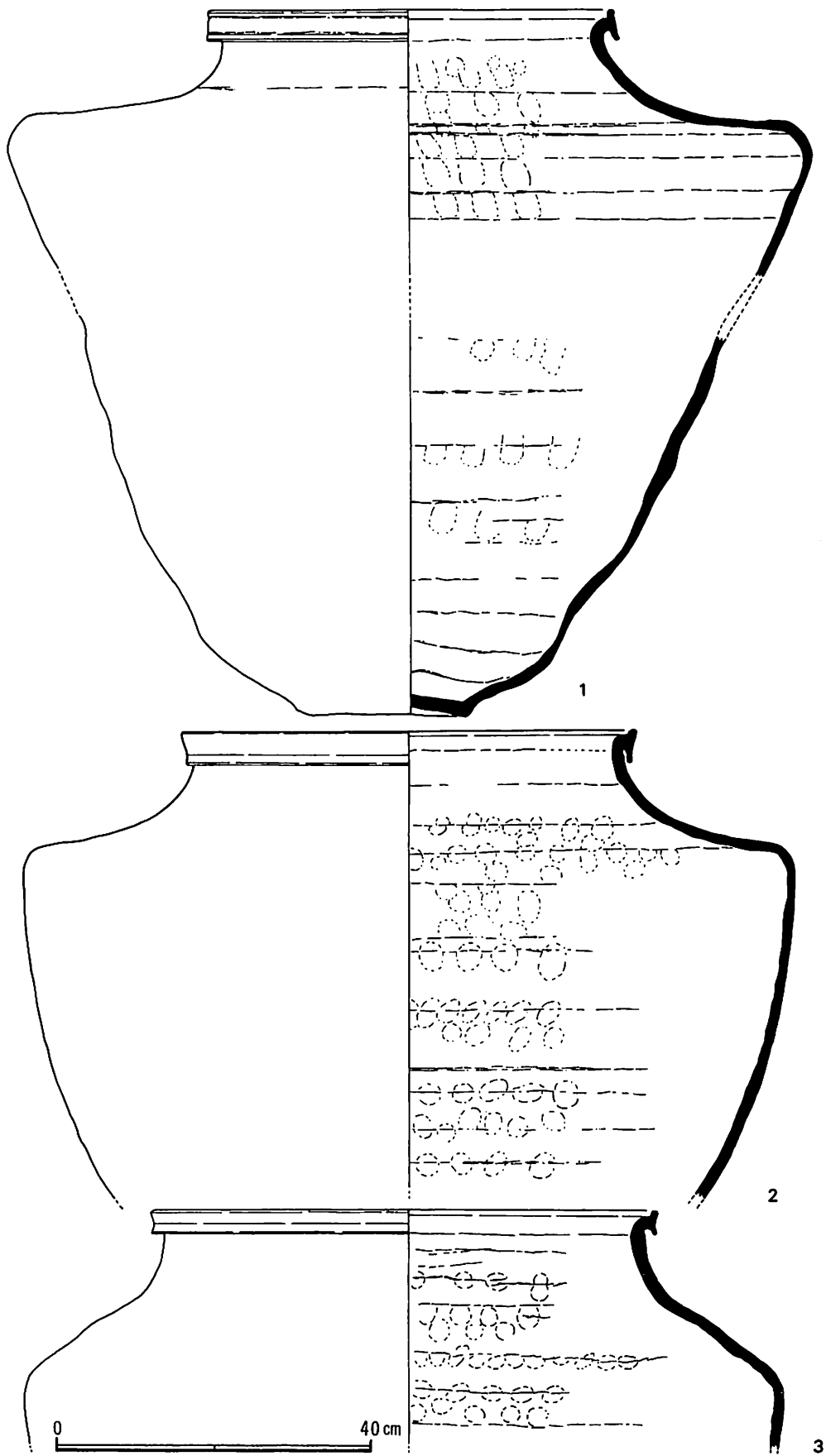
第23図 井戸 (No. 45 : 南区C 3) 遺構図



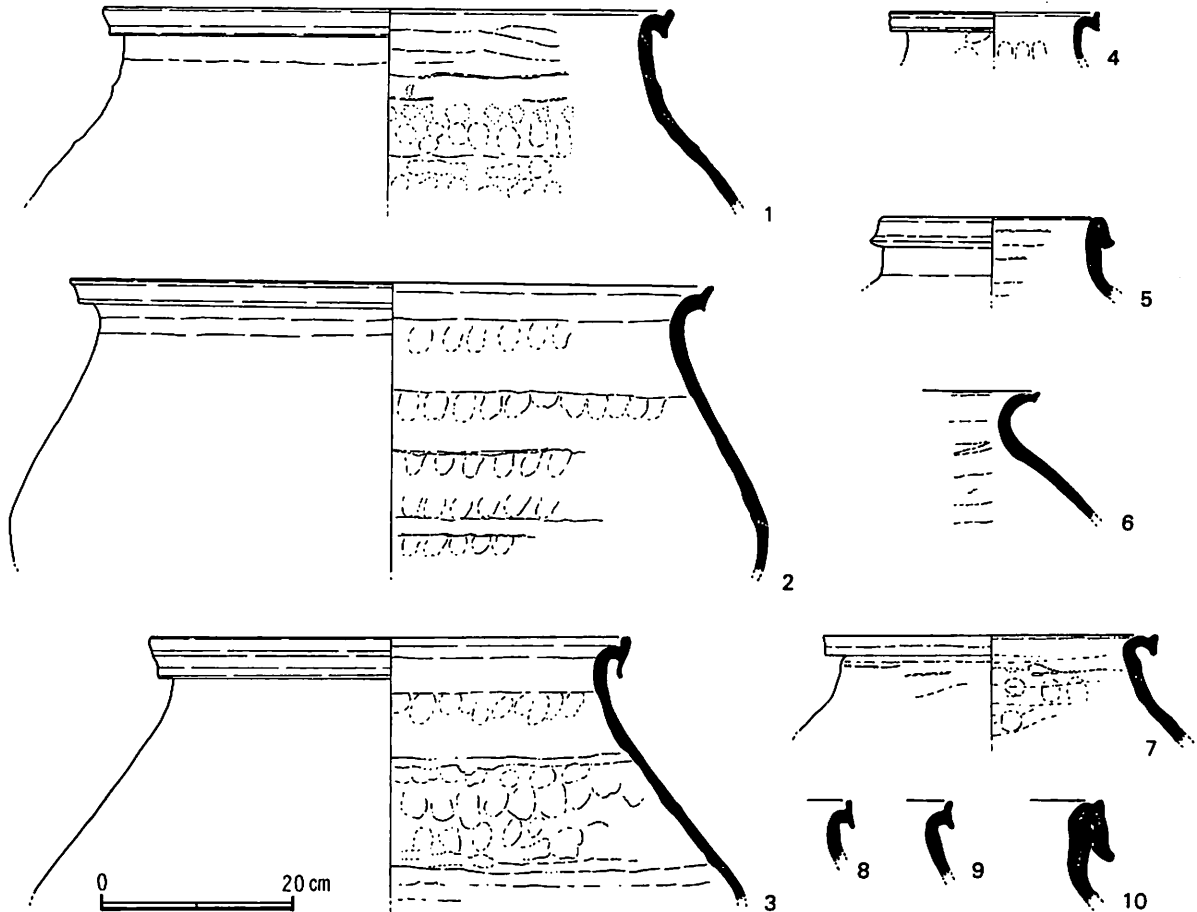
第24図 井戸 (No. 45 : 南区C3) 出土遺物



第25図 井戸 (No. 45 : 南区C 3) 出土遺物



第26図 井戸 (No. 45 : 南区C3) 出土遺物



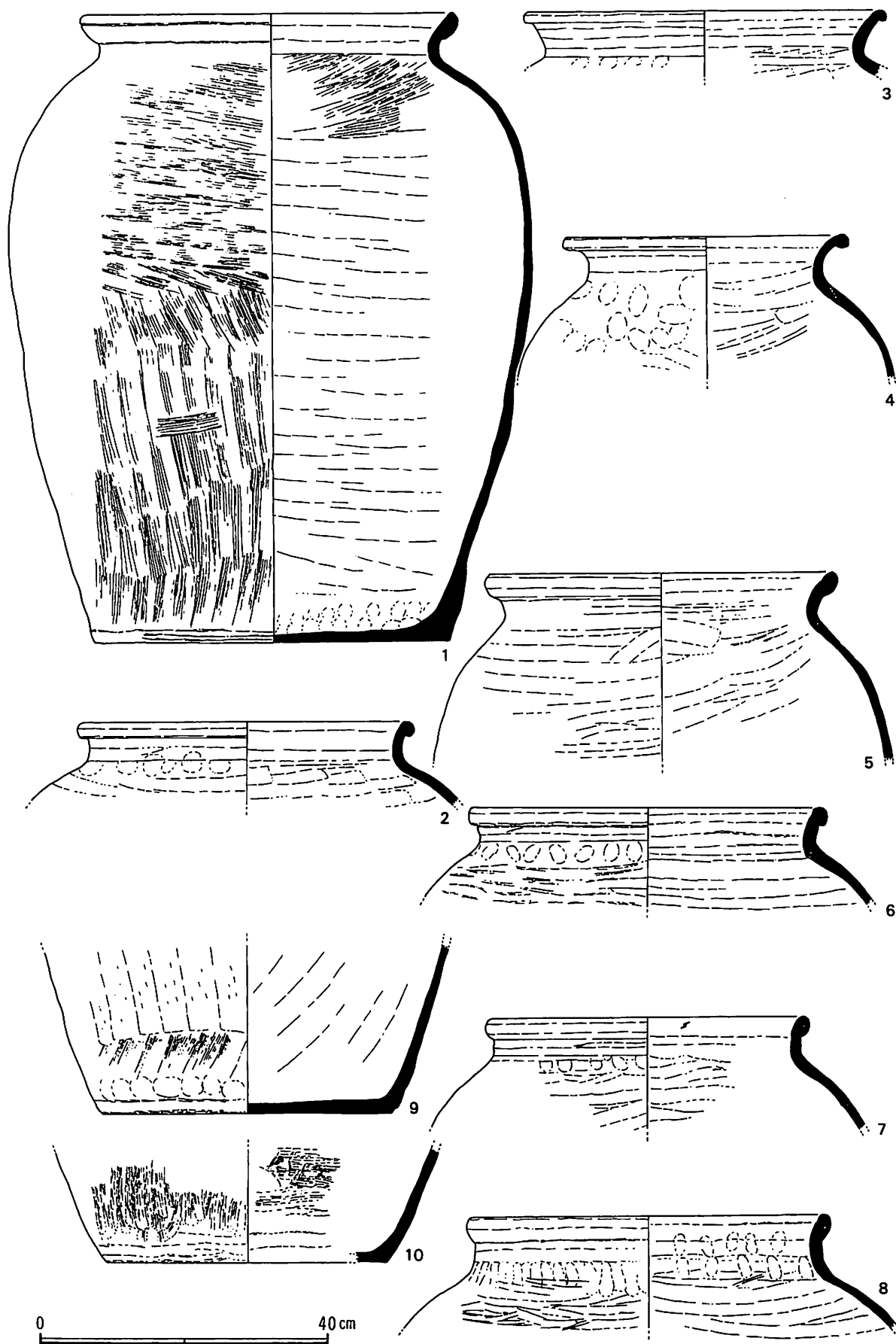
第27図 井戸 (No. 45: 南区C 3) 出土遺物

を明瞭に残し、その上に粗い指頭圧痕が看取される。指頭圧痕は粘土紐のつなぎ目部分に見られることから、これらの甕は粘土紐の輪積みによって製作されたことが解かる。他も同様である。また、口径部の形態から第26図1は中野編年7期¹⁴⁾ (1300~1350年), 同2は8期 (1350~1400年), 同3及び第27図8・9は6b期 (1275~1300年), 第27図1は6a期 (1250~1275年), 同26は4期 (1190~1220年), 同3は8期 (1350~1400年), 同10は9期 (1400~1450年) に相当する。同4, 5, 7は壺である。同4はL字状口縁を呈し, 中野編年5期 (1220~1250年), 同5は9期, 同7は5~6a期に相当する。

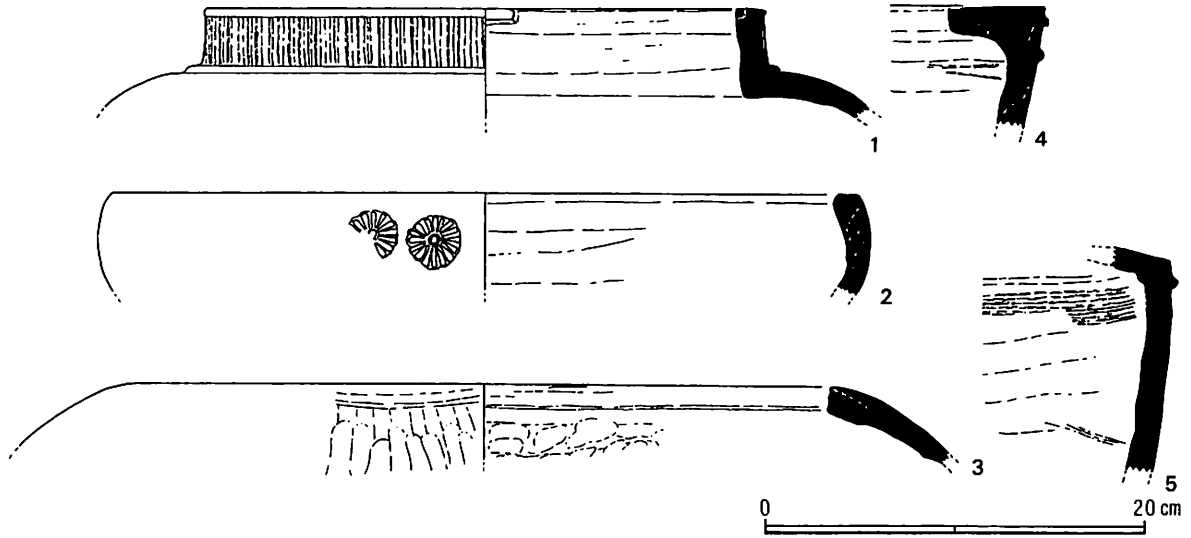
備前焼 (第28図) は全て甕である。1は完形に復元できる唯一のものである。口縁部は玉縁状を呈し, 胴部は上半を横方向, 下半を縦方向の粗いハケ状の板ナデを施す。底部も横方向の粗い板ナデを施す。底部も横方向の粗い板ナデを仕上げる。内面は底部に大きな指頭圧痕が観取できるものの, それ以上は横方向の板ナデを頸部まで施す。頸部はヨコナデによって仕上げる。頸部外面に大きな指頭圧痕が看取されるもの (2~4, 6~8) も多い。底部は常滑焼とは異なり非常に安定した作りである。口縁部の形態から1, 2, 5~8は間壁編年Ⅲ期¹⁵⁾ (13世紀後半後葉~14世紀末), 3, 4はⅡ期 (13世紀初頭~13世紀後半前葉) に相当する。2は型式学的に見てⅢ期の中でも古相を示すと言える。

瓦質土器 風炉 (第29図1) と火鉢 (同2~5) がある。奈良火鉢に類似する。1は丸く張る胴部から直立する口縁部をもつ。内面は粗いヨコナデを施す。2, 3は胴部からそのまま内傾する口縁部をもつものである。2は外面に菊花紋をもつ。3は縦方向幅の広いヘラミガキを施す。内面は両者ともヨコナデを施すが, 3は指頭圧痕が明瞭に看取される。4, 5は胴部が方形の箱形を呈するものである。外面には粘土紐の突帯を巡らす。内面は粗いハケ状のナデを施す。

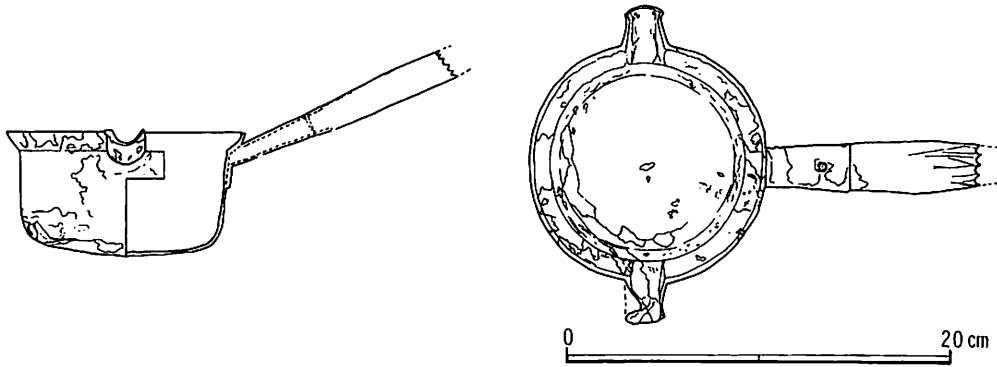
青銅器 第30図 (図版第27-2) は把手の付いた鍋状の容器である。口縁部の両端に注ぎ口が付く。把手は



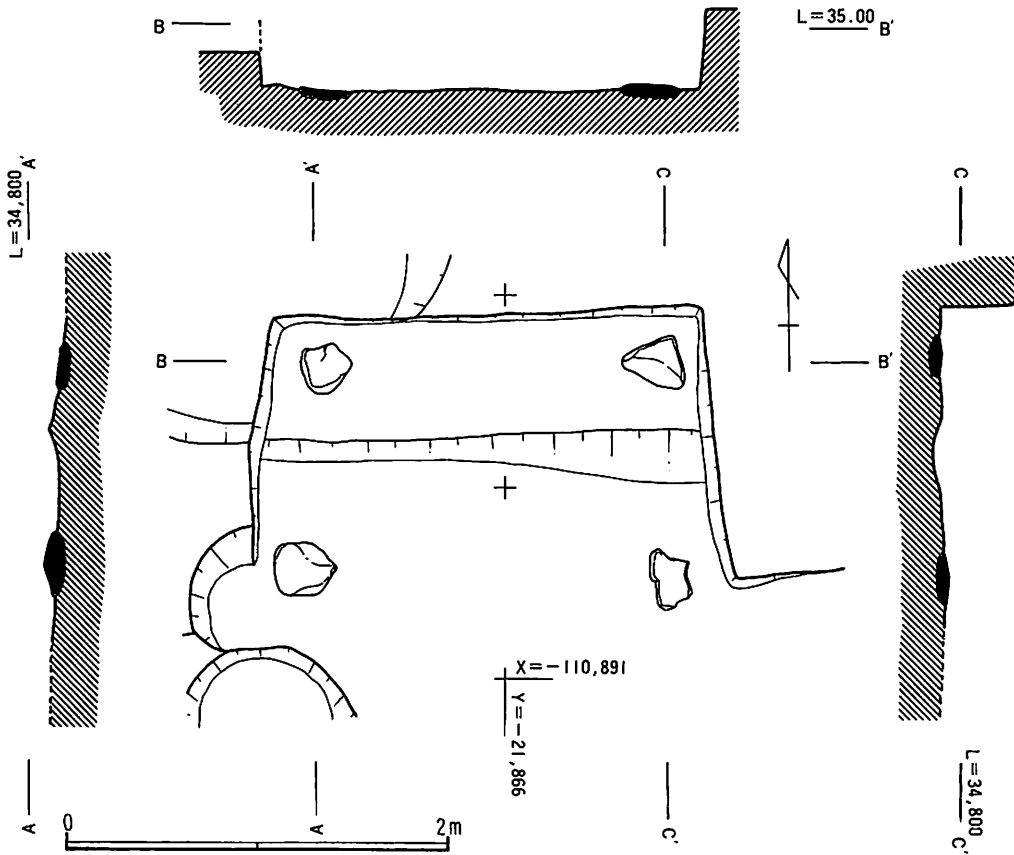
第28図 井戸 (No. 45 : 南区C3) 出土遺物



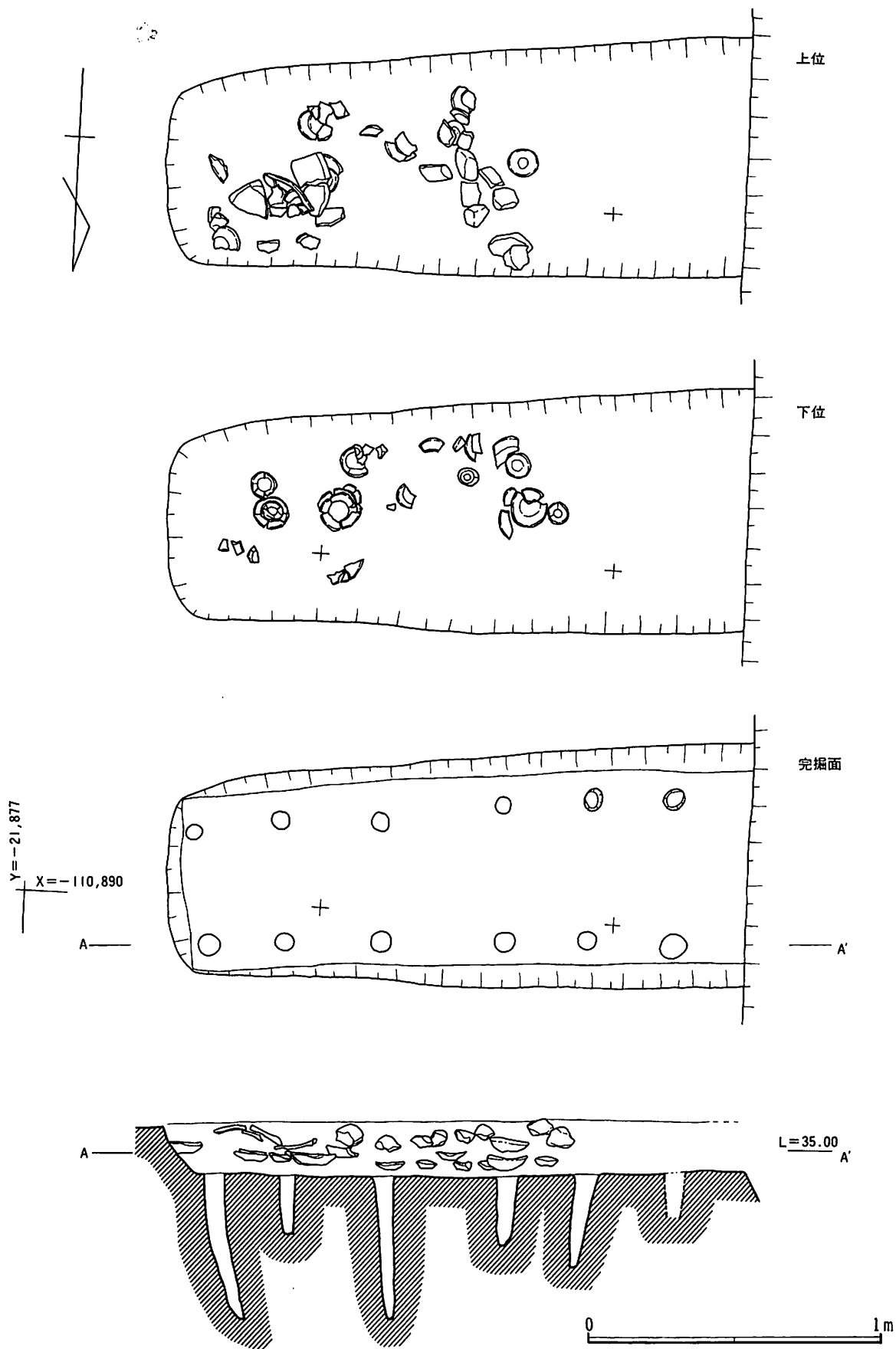
第29図 井戸 (No. 45 : 南区C 3) 出土遺物



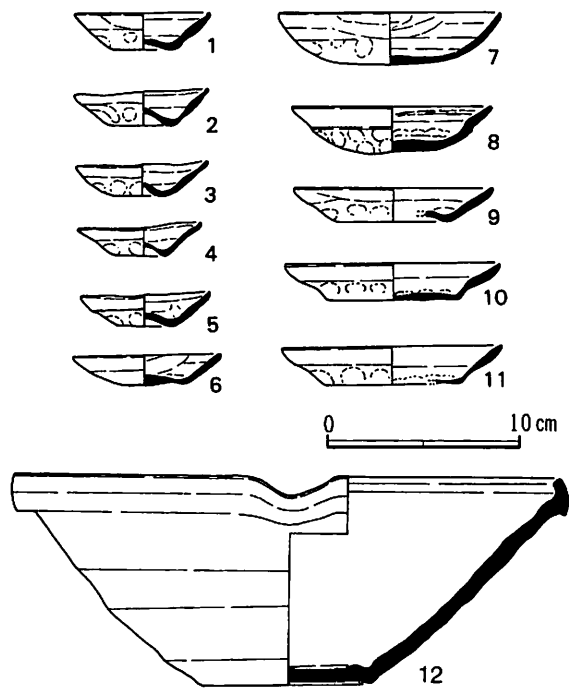
第30図 井戸 (No. 45 : 南区C 3) 出土遺物



第31図 室跡 (No. 33 : 北区A・B 5) 遺構図



第32図 土坑 (No. 36 : 北区D・E 5) 遺構図



第33図 土坑 (No. 36 : 北区 D・E 5) 出土遺物

るが、東西に長い方形の土坑である。深さは検出面より約18cmを測る。埋土は黄褐色粘土粒を含む粘性のある灰褐色土で、少量の炭、拳大の礫を含む。上位より完形の土師器小皿とはほぼ完形になるねり鉢が土圧により押しつぶされたような状態で出土し、下位からは完形の土師器小皿が重ねられた状態で出土した。それらを取り除くと底面に南北壁際に平行して径5～8cmの杭穴をそれぞれ6つずつ検出した。杭穴の深さをみるため北杭列を断ち割ると浅いもので20cm、深いものは48cmも打ち込まれている様子がわかった。また杭先はほとんどが尖らせてあったが、東から2本めは南北とも横断面が扁平な形であった。底面は地山と考える堅い礫層で、杭をこれほど深く打ち込むには、打ち込みやすい高さから相当の労力をもって行ったものと考えられる。

土師皿 (第33図, 図版第21, 1～11) は白色系B類 (同1～5), 同C類 (同7), 褐色系D類 (同6), 同E類 (同8～11) から成る。C類の形態は底の深い皿状を呈する。

東播系須恵器 同12 (図版第21-16) は捏鉢である。口縁部は受け口状を呈し、片口である。平安京内では14世紀前半¹⁶⁾にみられる。

これらの遺物は土師皿はC類の形態から、鋤柄編年 (No. 72土坑39) に併行し、14世紀中葉に位置付けられる。

No. 38 (E 4, 第34図, 図版第10・11)

東西1.84m以上, 南北0.54m以上で南側は後世の攪乱を受けて削平されている。深さは検出面から0.46mを測り、壁はほぼ直に立ち上がる。完形の土師器小皿が多量に出土したため、三段階に分けて掘り進めた。埋土は概ね三層に分かれる。上層は礫混じりの多量に炭を含んだ灰色粘質土で、中層は黒灰色粘質土、下層は黄色粘土粒を含む暗褐色砂泥である。全層から土師器小皿の完形、中層から古銭、中層直下で完形のねり鉢、最下部では鉄製の鋤先が出土した。ねり鉢は北壁に立て掛けるように据えられており、鉄製の鋤先は完形の土師器小皿の上に置かれていた。完掘すると、北壁際に径12～14cmの柱穴が3つ、西から0.84m, 1.06mの間隔で検出された。底面には根石と思われる石を据える。

土師皿 (第35図1～65, 図版第22・23), 東播系須恵器 (同66, 67), 輸入陶磁 (同68), 鉄製品 (第36図, 図版第21-17) がある。

土師皿 土師皿は白色系A類 (1, 2), 同B類 (3～10), 同C類 (11～34), 褐色系D類 (35～43), 同E

木製で先端を欠損する。容器全体に亘って緑青をふく。酒などを熱めたものであろう。

以上のこれらの遺物の年代は、備前焼と常滑焼に13世紀初頭まで遡るものが散見されるものの、最も新しい土師皿の年代を基準とするのが妥当であろう。従ってこれらの遺物は15世紀前半後葉に一括投棄されたものと考えたい。

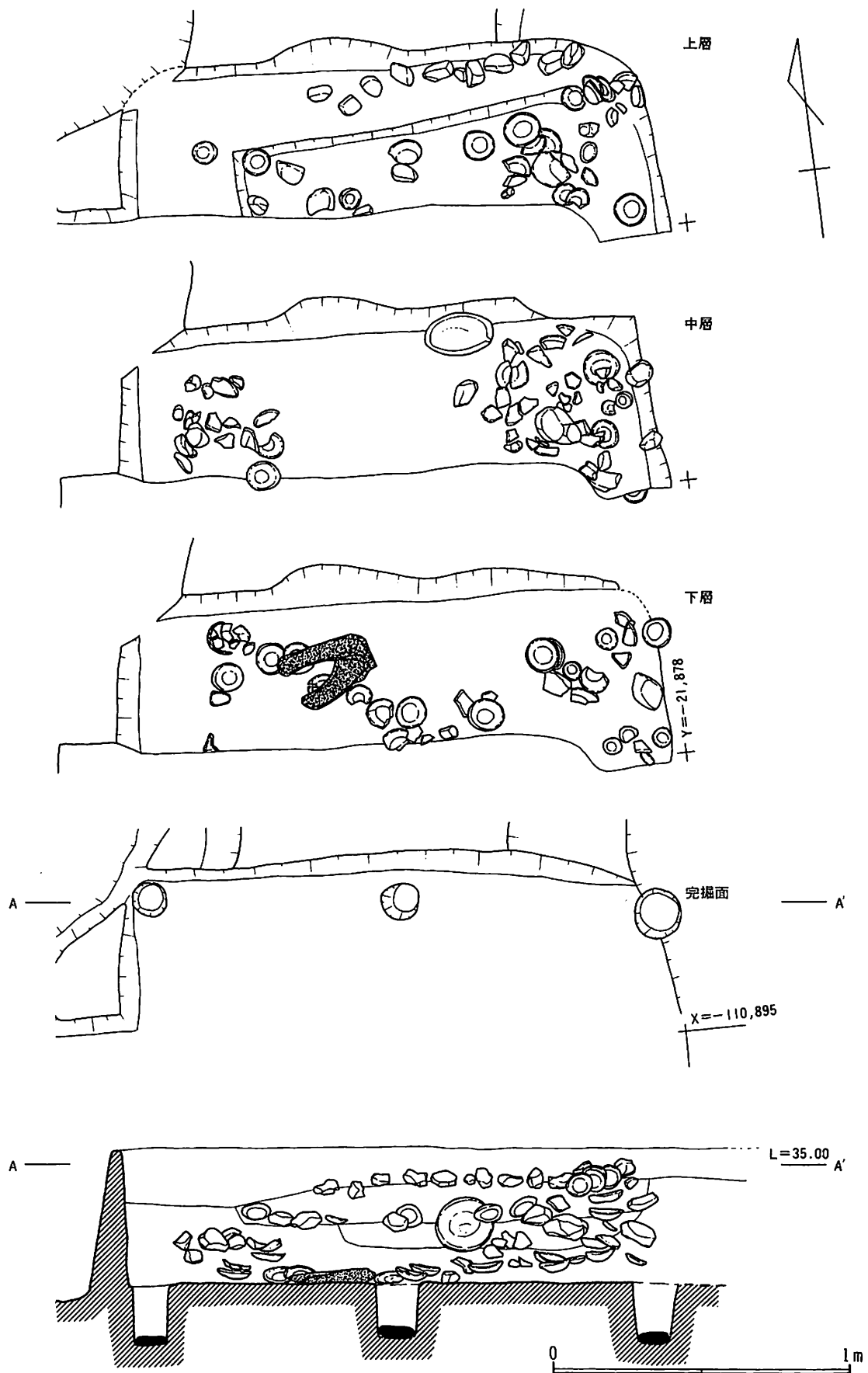
室跡 (北区 No. 33 : A・B 5, 第31図, 図版第6下)

北辺2.24m, 東辺1.44m, 深さ0.4mで方形を呈し、壁はほぼ直に立ち上がる。埋土は赤褐色で拳大の礫が入っていた。東西南北の隅に長径16cmほどの礎石を据えている。南辺は削平されており、南への広がり不明である。No. 62に切られている。

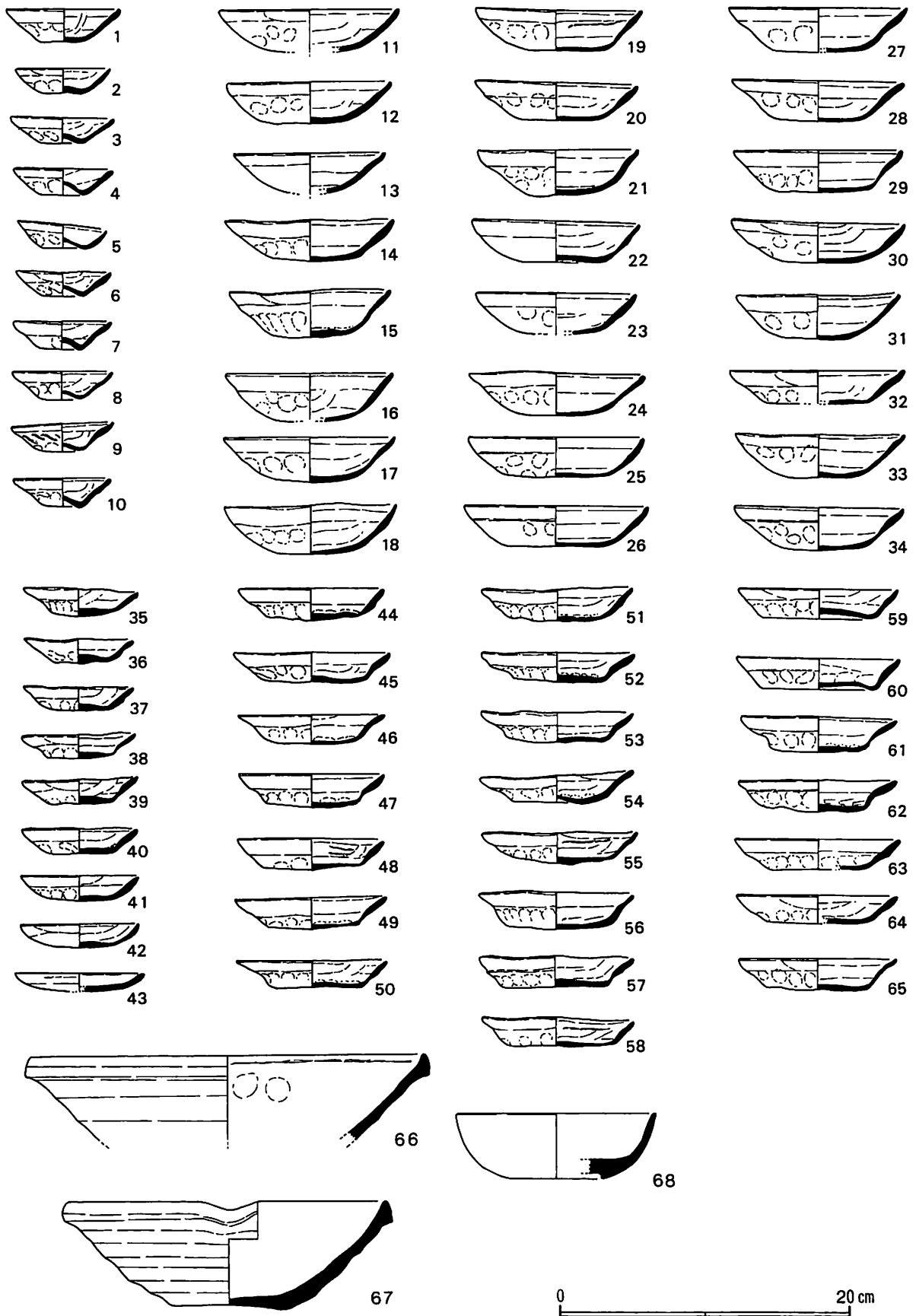
方形土坑 (北区 No. 36・38・140・61)

No. 36 (D・E 5, 第32図, 図版第8・9)

東西1.7m以上, 南北0.6mで西端は削平されている。



第34図 土坑 (No. 38 : 北区 E 4) 遺物出土状況並びに遺構図



第35図 土坑 (No. 38 : 北区E 4) 出土遺物

類(44~65)から成る。A類はこの時期僅かに数点存在する。1はその中でも、口径が大きく開き、器高も概して高く、底部から斜めに伸びる口縁部を有する。これは次世代に通じる新しい特徴である。それに対し、2は口縁部が内弯気味にゆるやかに伸び、口径、器高とも従来と変化はなく、古い形態を呈する。基本的な成形技法は両者とも同じであるが、細かい点で相違を見出すことができる。体部外面にはユビオサエを施すことは同様だが、口縁部外面のヨコナデが後者に比べ、前者は幅が広がっている。同様に内面の回転ナデも、後者はB類同様、幅の狭いナデを施し、口縁部に向ってゆるやかにナデ上げる。それに対し前者は三段階の時計回りのナデを施し、ナデ上げも勢いよく施されていることが特徴的である。この技法は次世代へ受け継がれるものである。B類はいわゆる「ヘソ皿」である。体部に粗いユビオサエを施し、口縁部も強くヨコナデを行う結果、屈曲気味に外反する口縁部が形成される。口縁端部はつまみ上げるものが多い。「ヘソ」部の突出は強くなく、内面の回転ナデもゆるやかにナデ上げている。9には口縁部のヨコナデの際に生じた粘土の「振れ」が看取される。C類は丸みを帯びた底部から、内弯しながら口縁部へ続く形態を呈する。体部外面には大きなユビオサエが強く施され、口縁部には幅の広い強いヨコナデが行われるため、B類同様、体部と口縁部が屈曲気味に外反するものも多い。口縁端部は短かく上方につまみ上げ、内面に稜を作るものも散見される。体部内面には三段階に回転ナデが施され、底部から口縁部に向ってゆるやかにナデ上げている。D類は厚いレンズ状の底部から口縁部が屈曲して伸びる形態を呈する。底部~体部外面には粗いユビオサエを施し、口縁部はヨコナデによって仕上げている。内面は数回に亘って時計回りのナデを施し、ゆるやかにナデ上げている。E類の中には上記した以外の特徴をもつ41, 42, 43も存在する。三者は、それぞれ、内弯して短く立ち上がる口縁部を有し、43などは非常に浅い皿状を呈する。基本的な成型技法は他と大きく相違はないが、42, 43は外面に指頭圧痕が看取されない点が異っている。これらの三者の形式的には位置付けは困難であるが、ここでは、一応、比較的古い特徴を示す一群(混在の可能性も否定出来ない)として据えておきたい。E類はユビオサエによって粗雑に成型された平底から、口縁部が屈曲して内弯気味に伸びる形態を呈する。体部外面には底部から連続する指頭圧痕が看取され、口縁部には幅の広いヨコナデを施している。内面には数段に亘って時計回りのナデが施され、ゆるやかにナデ上げる。また、内面の底部と体部境目には明瞭なユビオサエ(爪状圧痕)が残存する

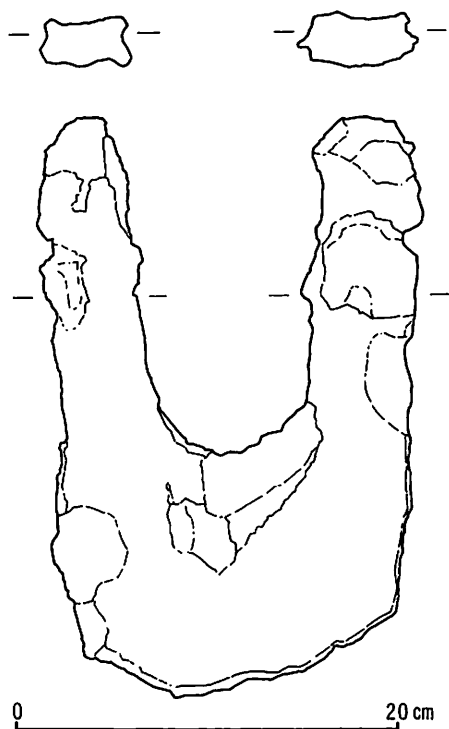
例(44, 46, 47, 49, 50, 51, 52, 54, 60, 61~63)も多く存在し、成型技法の一端を知るうえでは見落とせない。

東播系須恵器 66, 67は捏鉢である。両者とも、体部外面にはロクロ成型による水引き痕が観察され、口縁端部は、外傾する広い面を有し、僅かながら上下に拡張する。67は底部外面に糸切り痕を残している。旧平安京内では14世紀中頃から後半にかけて¹⁷⁾散見される。

輸入陶磁 68は龍泉窯産の青磁碗である。厚い底部から、ゆるやかに屈曲して口縁部が上方へ伸びる。

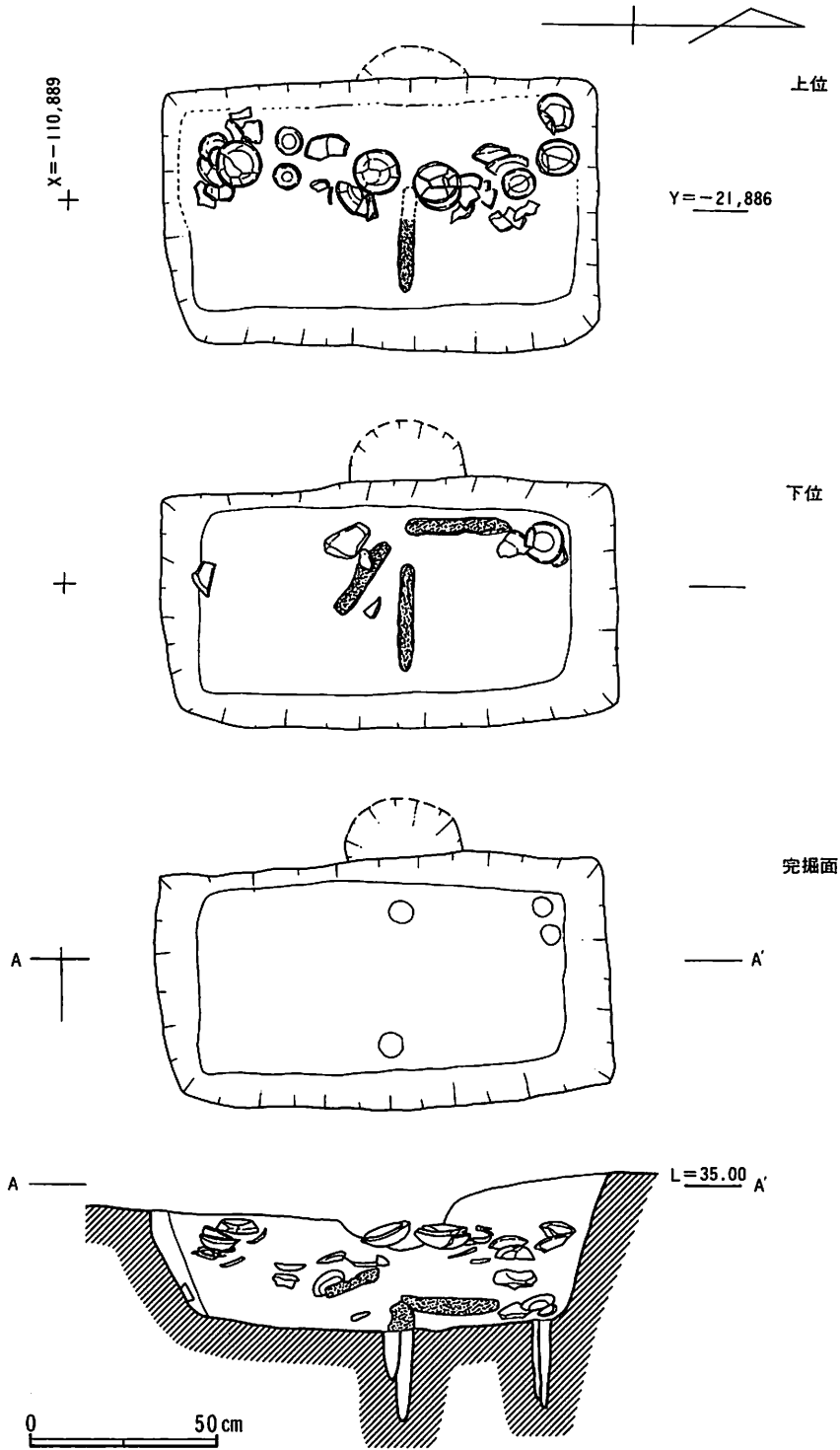
鉄製品(第36図) 鉄製の鋤先である。刃部は二又に分かれるもので、先端は両方とも欠損している。鋤先は不製部分に装着するものである。全体に錆びが激しく生じている。

これら一群の遺物年代であるが、土師皿はC類、E類の形態や、僅かながらA類が存在することなどから、鋤柄編年(PG22土壙1)~(No.73土壙21)に併行すると思われる。従って、ここでは、これらの遺物を14世紀後半後葉~15世紀初頭に位置付けておきたい。



第36図 土坑(No. 38: 北区E4)出土遺物

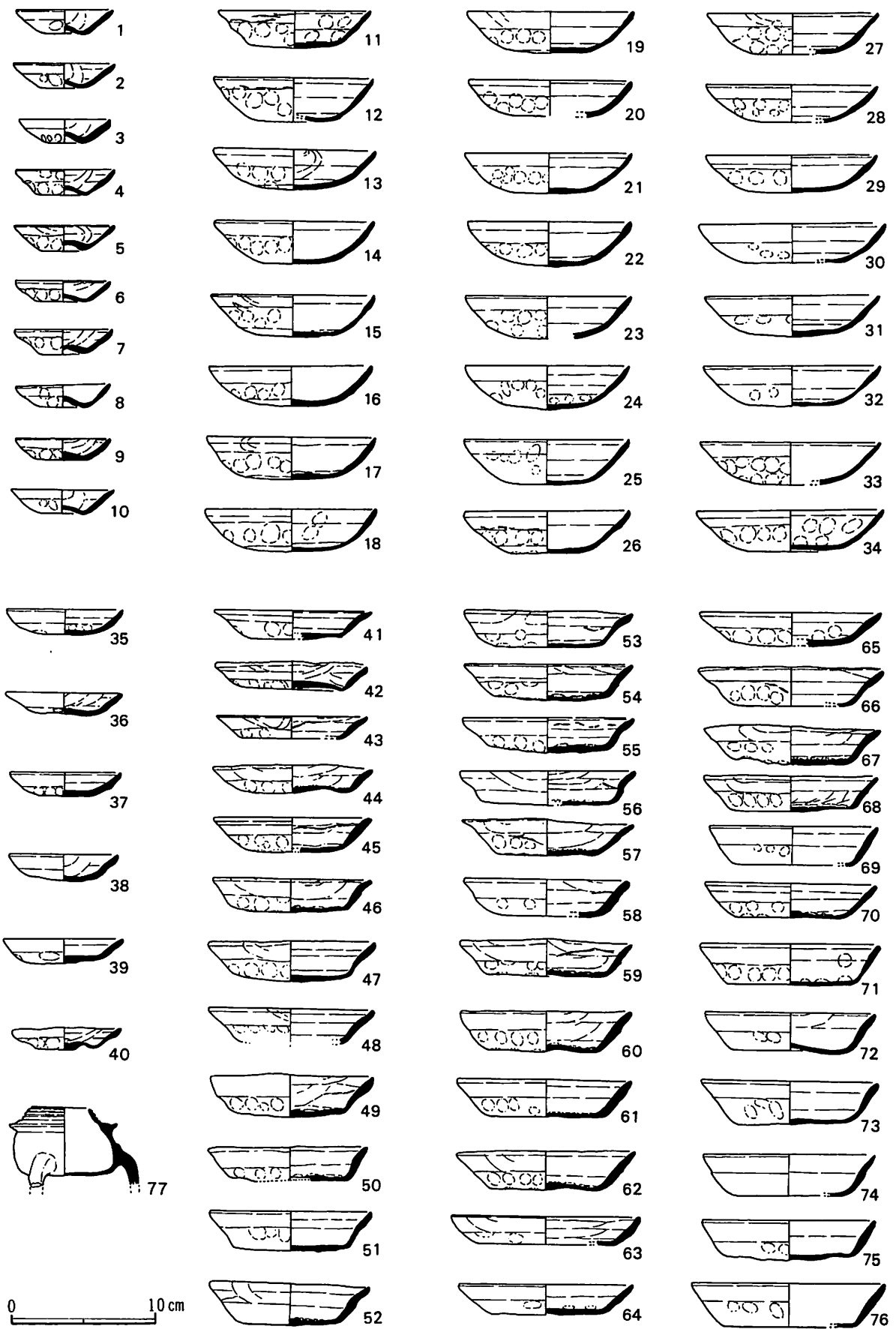
No. 140 (E・F5, 第37図, 図版第12・13上)



第37図 土坑 (No. 140 : 北区 F・G 5) 遺物出土状況並びに遺構図

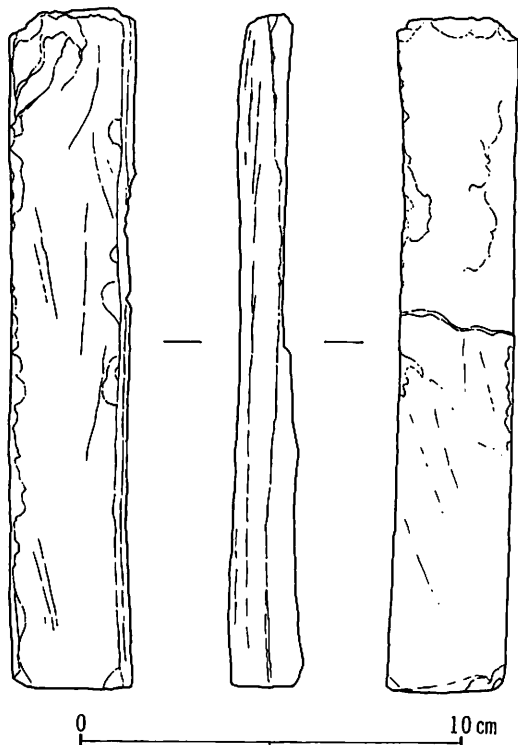
南北1.22m, 東西0.7m, 南北長の方形で深さは0.3~0.4m, 壁はやや直に立ち上がる。北西壁の際で検出したため初めはプランがはっきりせず, 多量の土師器小皿が出土したので, No. 36・38と同性格の土坑かと思ひ西へ拡張して確認したため, 平面図は西拡張部分のみとなっている。埋土は暗灰色砂泥で, 礫を少量含む。上位より土師器の完形と瓦質ミニチュア羽釜, 砥石など, 下位より鉄製棒製品3本が出土した。完掘面からはNo. 36と同じく杭穴を4つ検出したが, その配置に規則性はなく, 上屋構造は想定し難い。

土師皿 (第38図, 図版第24) 白色系B類 (1~10), 同C類 (11~34), 褐色系D類 (35~40), 同E類 (41~76)



第38図 土坑 (No. 140 : 北区F・G5) 出土遺物

から成る。B類はいわゆる「ヘソ皿」である。体部外面に大きなユビオサエを施し、口縁部は幅の広いナデで仕上げる。ユビオサエはあまり強くなく、体部から口縁部まではなだらかに連続する。「ヘソ」部の突出もまだ、顕著ではない。口縁端部はヨコナデによって尖り気味におさめている。内面は時計回りのナデを二、三段階に分けて施し、底面から口縁部に向かってナデ上げている。9のように二重に施される例もある。6, 7は体部外面にユビオサエが一層強く施されているため、口縁部がゆるやかに外反する。これらは比較的新しい特徴を示す。C類は若干丸みを帯びた平底から内湾気味に口縁部が立ち上がる。体部外面には大きな指頭圧痕がランダムに観察される。口縁部は幅の広いヨコナデが時計回りに一、二回施される。ナデ上げが看取されるもの(15, 17, 19, 27)もある。端部は特にヨコナデが強く、ほとんどが上方につまみ上げる。内面にも数段に亘って時計回りのナデが施され、13はナデ上げが看取される。ナデの後、粗いユビオサエを施すもの(11, 18, 24, 34)も存在する。D類は底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に続く形態を呈する。底部外面はユビオサエによって成形され、口縁部には幅の広いヨコナデを施す。内面には二段に亘って時計回りのナデが施され、ナデ上げが看取されるもの(15, 17, 19, 27)もある。端部は特にヨコナデが強く、ほとんどが上方につまみ上げる。内面にも数段に亘って時計回りのナデが施され、13はナデ上げが看取される。ナデの後、粗いユビオサエを施すもの(11, 18, 24, 34)も存在する。D類は底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に続く形態を呈する。底部外面はユビオサエによって成形され、口縁部には幅の広いヨコナデを施す。内面は二段に亘って時計回りのナデが施され、ナデ上げが看取されるもの(36, 38)もある。40は底部が厚く、レンズ状の形態を呈する。外面はユビオサエが粗雑に施され、口縁部はヨコナデによって仕上げている。内面調整は他と同様である。しかし、ユビオサエが非常に強く施されるために口縁部は短く外反する形態を呈する。これは比較的新しい特徴を示している。E類は平坦な底部から外反して口縁部が立ち上がるものである。底部から体部にかけては乱雑なユビオサエによって成形されている。口縁部には幅の広いヨコナデを時計回りに強く施し、その結果、体部から短く屈曲するものが多い。内面は口縁部から底面にかけて数回に亘って時計回りのナデを施している。一回のナデごとに口縁部に向かってナデ上げを行っている状況が観察される。形態は概して乱雑なものが多い。



第39図 土坑(No. 140: 北区F・G5)出土遺物

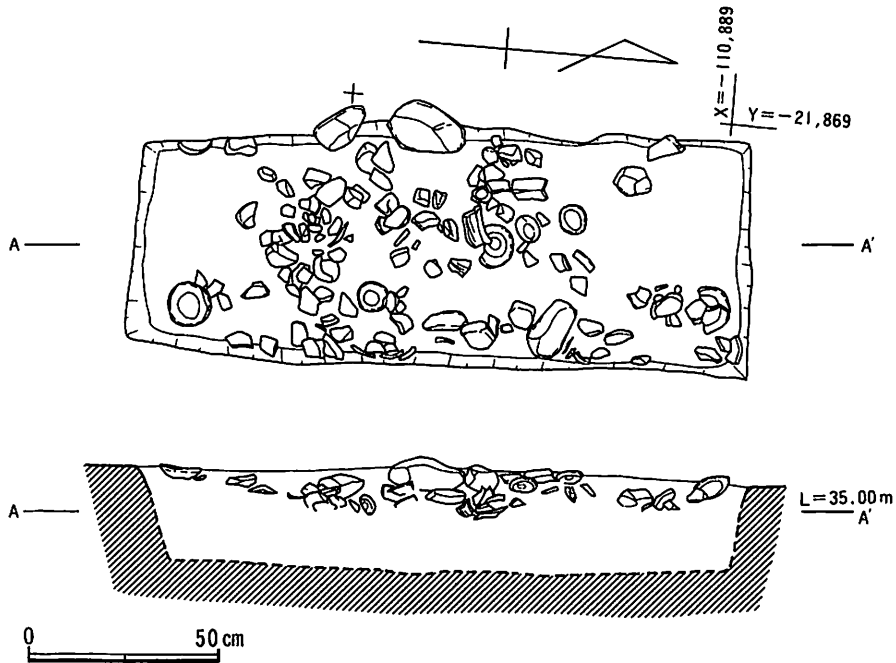
多い。その中であって、61~64, 69~76は比較的作りも良く、口縁部も他と異なり、あまり屈曲せずゆるやかに立ち上がる。底部から体部にかけてのユビオサエや、口縁部、体部内面のナデも前者に比べ丁寧に施されているのが注視される。これらの一群は古い特徴を残すものと考えられ、E類に関しては、型式学的に新旧が混在する状況を見出すことができる。これらの土師皿は、E類にやや古相を示す一群が存在するものの、概ね勤柄編年(No. 72土城39)に併行することから、14世紀中葉に位置付けておきたい。

この他に砥石(第39図, 図版第24-25)と、図示することは出来なかったが、これらの土器と共に鉄製棒状製品が出土している。

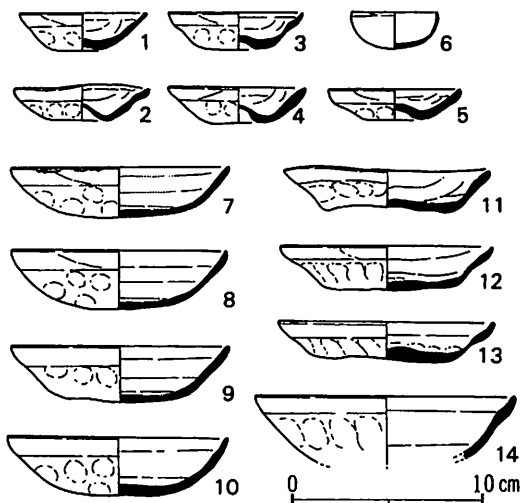
No. 61 (B5, 第40図, 図版第13下)

検出時よりプランがはっきりしなかったが、南北1.62m, 東西0.62m, 深さ0.22mとして検出した。埋土は炭混りの褐灰色砂泥で、大きめの礫を含む。土師器皿, 常滑焼麴片, 青磁片など多種の遺物が出土した。

前記No. 36・38・140とは出土遺物の内容が異なり、



第40図 土坑 (No. 61 : 北区B5) 遺構図



第41図 土坑 (No. 61 : 北区B5) 出土遺物

底面に杭穴や柱穴は検出されなかったため、それらとは性格の異なる遺構と思われる。

土師皿 (第41図1~14) 白色系B類 (1~5), 同C類 (7~10, 14), 褐色系E類 (11~13), 分類不可 (6) から成る。B類はいわゆる「ヘソ皿」である。この時期から出現する。ヘソ部は上にあまり突出しない。C類は内外面ともヨコナデを施すが内面のナデ上げはまだ看不られる。14のように大型もある。E類は口縁部を強くヨコナデし内湾気味に外反する。これらの土師皿は鋤柄綱年 (No. 80土坑51) に併行することから、13世紀後半後葉に位置付けられる。

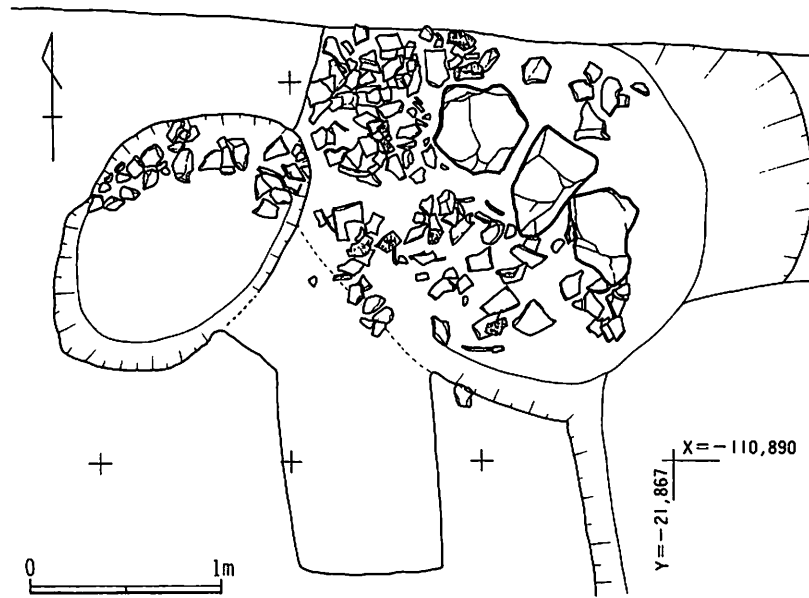
方形土坑について

No. 36・38・140 は形態や構造, 出土遺物の構成に類似点が認められる。No. 36・38は東西に長い方形で、ねり鉢を入れる。No. 38と140は鋤と鉄棒といった鉄製品を伴う。また No. 36と140は底面に杭穴が穿たれており、38は根石を持つ柱穴を設ける。No. 36・140は13世紀後半から14世紀, No. 38は14世紀から15世紀に機能していたと考えられる。

京都市内の類似遺構の報告でも、またこの遺構の説明をした人からも「墓」ではないかという声が聞かれるが、棺桶片や釘片、骨といった確証物は本遺構からは検出されていない¹⁸⁾。また底面で検出した杭穴や根石を伴う柱穴に対する説明が「墓」では不可能であろう。たまたま地中に残った物でしか判断できない考古学の分野において、これらの遺構を墓とは断定し難い¹⁹⁾。また当初 No. 38で鋤先が出土したことから「地鎮」とも考えていたが、これも確証はない。

この遺構の特徴は次の3点と考えられる。

- ・底面壁際に杭, あるいは柱穴をもつ遺構である。
- ・遺物の出土状態が、たんに投棄されたものではなく、据えられ、埋納されたと考えられる。



第42図 土坑 (No. 62 : 北区B5) 遺構図

・平面プランは正東西南北に軸をもち、方位に規制された遺構と考えられる。

一つめの特徴から遺構の形態をみると、堀内明博氏が集成分類された地下式土坑群の「D類②-0」に類似する。その分類基準は「掘り形の形状が長方形で、床面の壁際に杭あるいは柱跡が密で、壁には板の並べた痕跡が在り、内法の長軸1.8m未満で付属施設のないもの」であり²⁰⁾、形態や床面の杭・柱跡や規模は合致するが、壁に板を並べた痕跡は本遺構では検出されなかった。

底面に杭穴や根石を伴う柱穴が確認されることから、上屋構造をもつ何らかの構築物を想定できる。例えば年代を無視すれば、古墳時代の横穴式木室は、掘り窪めた壁際に柱穴痕が密に並んでいる。その構造は側壁が合掌状になるものや、四壁からなり、屋根を切妻状にしたものがあるという²¹⁾。壁については板材や丸太を立て掛けたのではないかという推測もなされている。規模を無視すれば構造的に方形土坑と大変類似し、上屋構造を考える上で参考になる。特に No. 38 は根石を伴う柱穴をもつため、頑強な上屋構造を想定できよう。反対に No. 140 は杭穴に規則性が見られず、上屋構造は不安定となろう。第三の特徴は上屋構造が存在したからこそ方位に規制が加えられたと思えるのである。その機能であるが、上述の構造で、横穴式木室のように玄室を作り出すのだから、室のような、堀内氏のいわれる収納施設であった可能性は高い²²⁾。

そしてその構築物が廃棄される際に遺物が入れた。出土遺物には前述したようにその構成に類似性が認められ、またいわゆる「かなもの」が入っていることから鎮めの儀礼であった可能性がある²³⁾。つまり第二の特徴である。

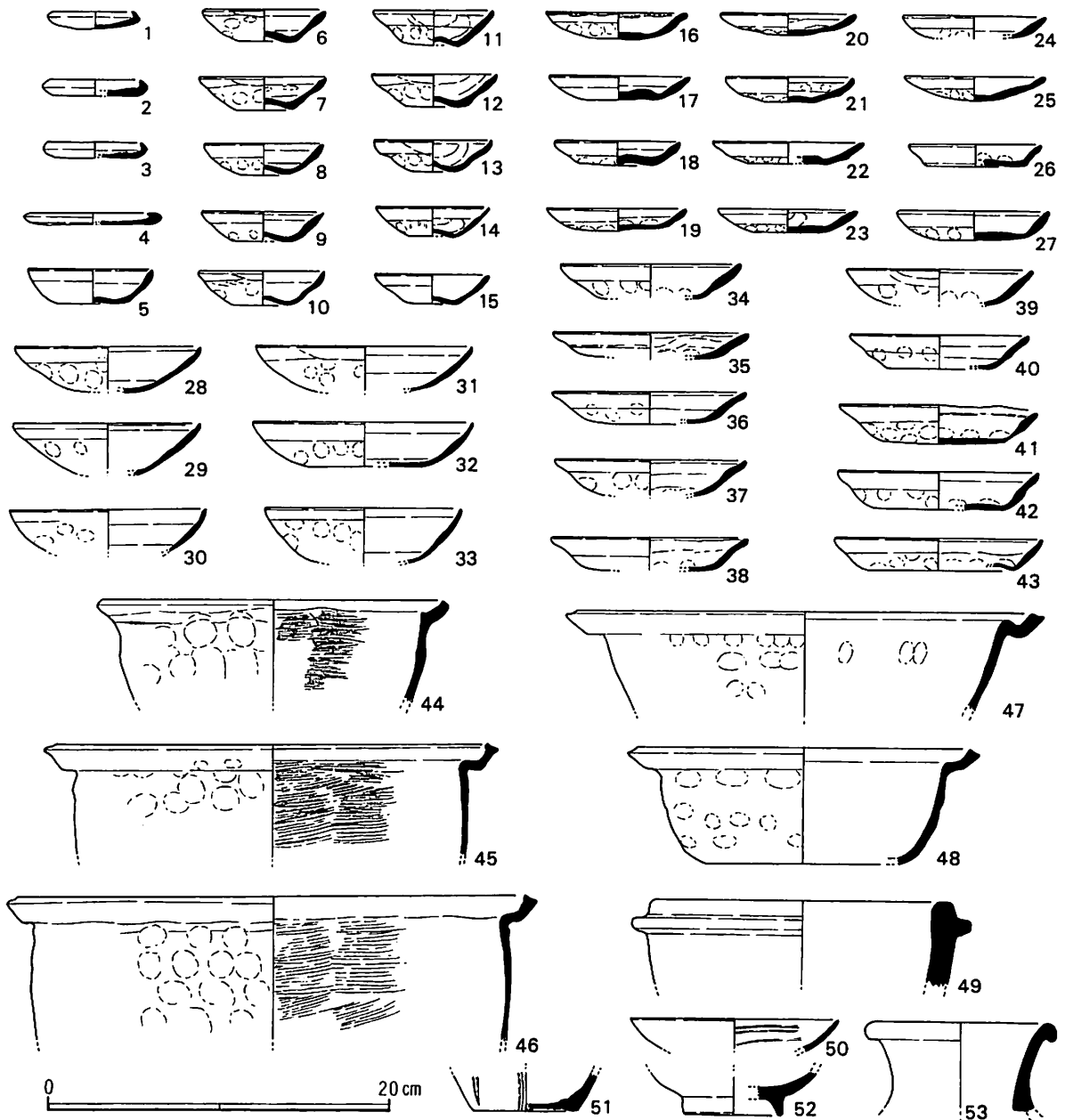
この遺構には2つの性格が考えられる。当初の構築物（1次的性格）と、その施設を廃棄した後の呪術の様相が色濃い性格（2次的性格）である。2次的性格を遺物の出土状態や構成から、当初の遺構の廃棄儀礼と判断した²⁴⁾。

土坑群（土取り穴）（No. 62 ほか：B5，第42図，図版第14下）

No. 62 は径2.7m，深さ約0.7mを測るすり鉢状の土坑で、径40cmの大きな石が三個出土し、他はほとんどが甕の破片であった。

周辺の土坑からも多量の甕片が出土しており、鎌倉から室町時代にかけてこの周辺では大量に甕を使用した場所だったようである。

土師皿（第43図1～43），瓦質土器（同44～48），石鍋（同49），瓦器（同50），緑釉陶器（同51），輸入陶磁



第43図 土坑 (No. 62 : 北区B 5) 出土遺物

(同52, 53), 常滑焼 (第44図54~60, 62~73), 須恵器 (同61, 74, 75) がある。

土師皿 白色系A類 (第43図5), 同B類 (6~15), 同C類 (28~33), 褐色系D類 (16~27), 同E類 (34~43), H類 (1~4) から成る。A類は新しく出現するもので, 平底から内弯気味に口縁部が立ち上がる。口縁部は幅の広いヨコナデを施し, 内面も時計回りのナデを施す。B類はいわゆる「へソ皿」である。口縁部を強くヨコナデし, 体部下半にユビオサエを施す。内面にはナデ上げが看取される。C類は口縁部を広くヨコナデし, 体部に弱いユビオサエを施す。内面には回転ナデが数回に亘って施される。D類は強いヨコナデによって口縁部が外反し, 底部から体部にかけて粗いユビオサエを施す。E類も強いヨコナデによって口縁部が外反し, 端部をつまみ上げる。体部外面にはユビオサエを施す。

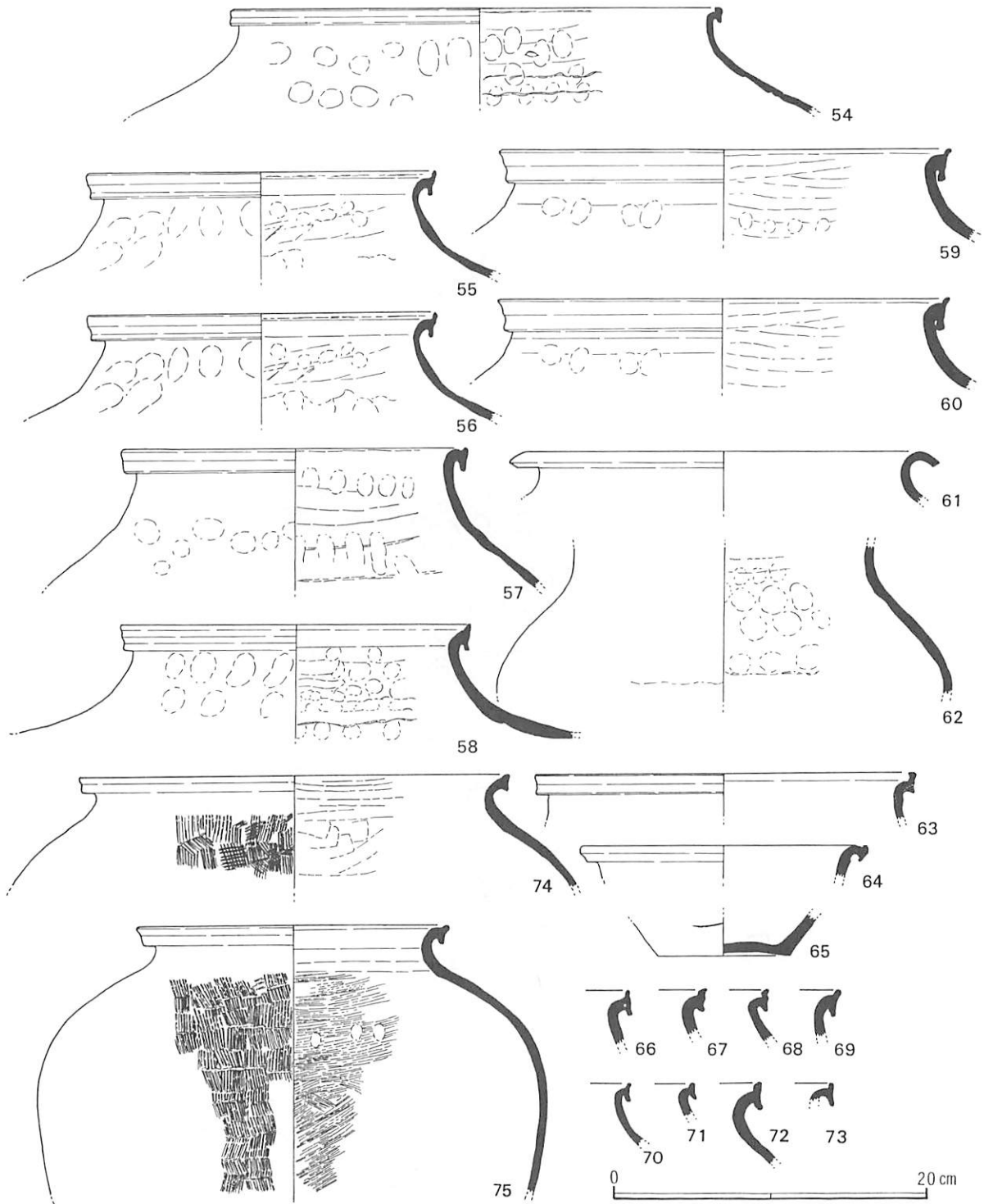
瓦質土器 44~48は鍋である。口縁部の形態によって3タイプに分けられる。a類 (44) は灰黒色を呈する。口縁部は内弯気味に立ち上がり, 端部に面を有する。体部内面には細かいヨコハケを施し, 外面には粗いユビオサエで仕上げている。やや厚手である。b類 (45, 46) も灰黒色を呈する。口縁部は受け口状を呈する。端

部は上方につまみ上げることによって面を有する。やや薄手である。調整技法はa類と同様であるが、作りはb類の方が丁寧である。c類(47, 48)は灰白色を呈する。口縁部は外側に屈曲して開く。体部内面はa, bとは異なり、ハケは施さない。内外面とも粗いユビオサエで仕上げる。やや厚手である。b類は鋤柄分類²⁵⁾の鍋-3, C類は鍋-4に相当する。

石製容器 石鍋(49)は森田分類²⁶⁾のB-2群, 木戸分類²⁷⁾Ⅲ-a類に相当する。

瓦器 椀(50)は浅い皿状を呈し、内面に暗紋が施されている。

緑釉陶器 51は外面に施釉されている。

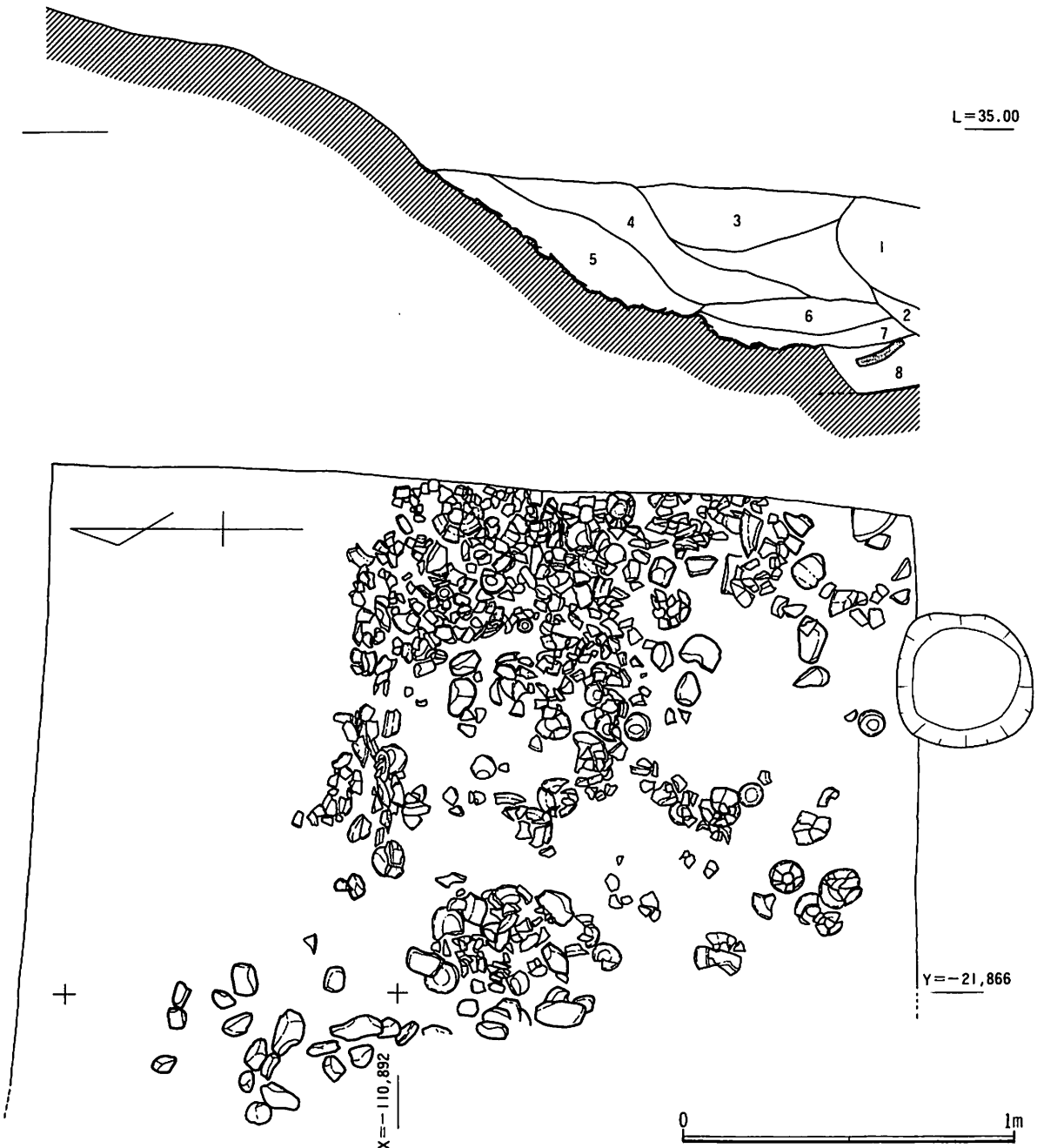


第44図 土坑 (No. 62: 北区B5) 出土遺物

輸入陶磁 両者とも白磁である。52は底部，53は壺の口縁部である。

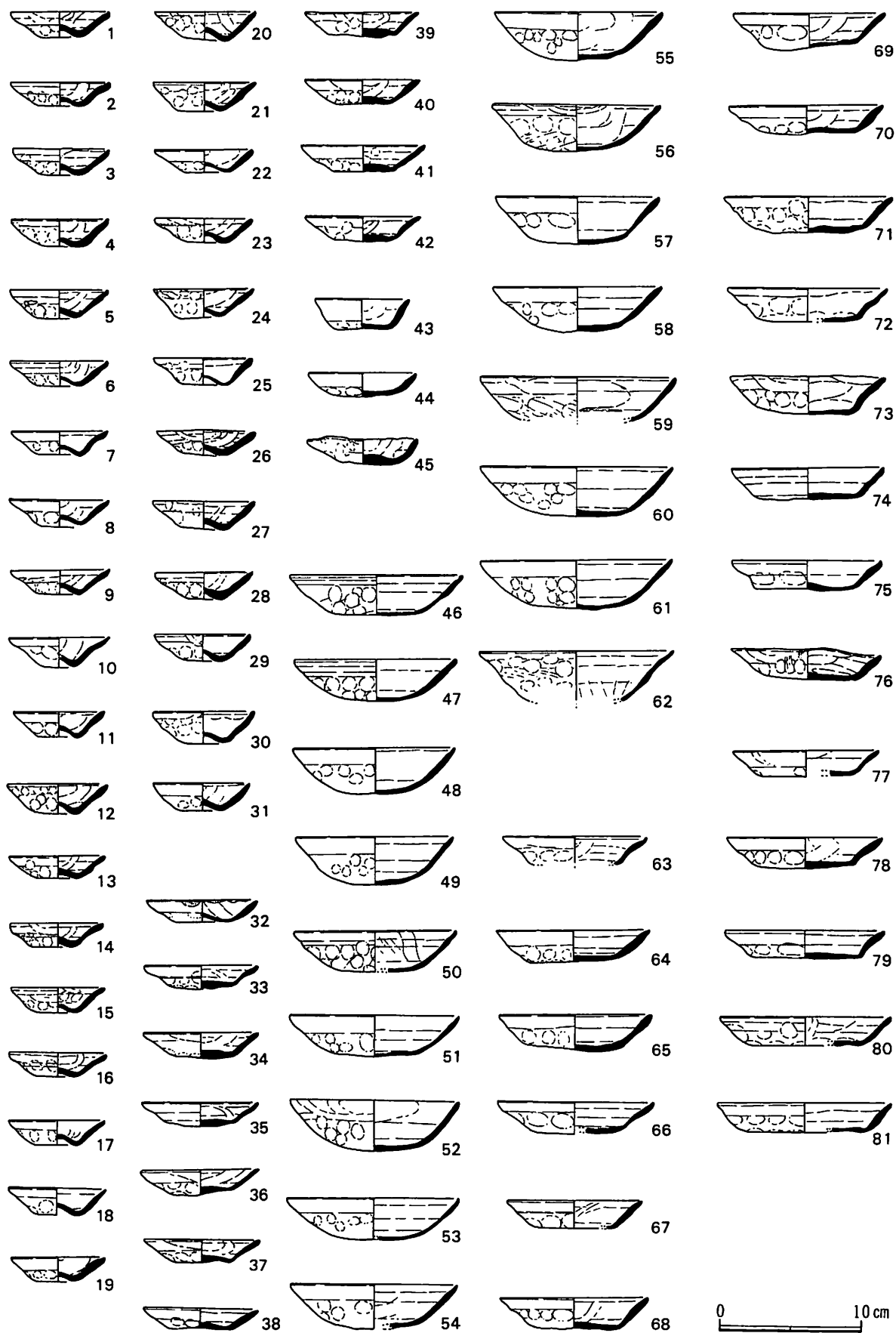
国産陶器 常滑焼（第44図，図版第30）は全て甕である。54～60はN字状口縁を呈する。全て内外面を粗いユビオサエで仕上げている。54～58，66～73は中野編年²⁸⁾の7期（1300～1350年），59，60は8期（1350～1400年）に相当する。これらの中では63が5期（1220～1250年），64は6 a 期（1275～1300年）に属し，やや古相を示す。

須恵器 61，74，75は形態的に東播系須恵器に類似する。61は大きく外反する口縁部である。口縁端部は発達して長く伸び，しっかりした面をもたない。産地は不明である。



第45図 かわらけ溜り (No. 43: 南区A 4・5) 遺物出土状態図と東壁断面図

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 7.5YR 5/1 褐灰色粘質土 | 2. 7.5YR 3/3 暗褐色粘質土 |
| 3. 10YR 3/1 黒褐色粘質土 | 4. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂質土 |
| 5. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質土 | 6. 2.5Y 5/3 黄褐色シルト |
| 7. 5YR 4/4 赤褐色砂質土 (炭混) | 8. 7.5YR 4/1 褐灰色粘質土 (炭混) |



第46図 かわらけ溜り (No. 43: 南区A 4・5) 出土遺物

須恵器(同)74, 75は灰白色を呈する。外面に綾杉状のタタキを施し、内面にはハケ状の粗い板ナデを施す。口縁部はN字状を呈する。渥美焼の可能性はある。

これら一群の遺物の年代であるが、土師皿は鋤柄編年(No. 41井戸2)に併行し、14世紀前半前葉に属する。これに比べ、石鍋(49)は若干古いものの、常滑焼とも大きく齟齬はきたさない。従ってこれらの遺物を14世紀前半前葉に位置付けておきたい。

かわらけ溜り (南区 No. 43: A 4・5, 第45図, 図版第14上)

南区北東部で室町時代の土器溜りが検出された。炭を多量に含んだ褐灰色粘質土層の上から、コンテナ10箱余りの土師皿を採取した。褐灰色粘質土は南に向かって溝状に傾斜し、土師皿はその傾斜面に貼り付くような状態で出土した。土師皿は東西1.5m, 南北2.0mの範囲に分布している。発掘区の東壁に遮られているけれども、分布は更に東方に広がっているものと推定される。

土師皿(第46図, 図版第28・29) 白色系A類(43), 同B類(1~31), 同C類(46~62), 褐色系D類(32~42, 44, 45), 同E類(63~81)から成る。

A類は、この時期、その存在はまだ稀少である。白色系に分類しているが、胎土は他の器種に比べ、灰白色を呈している。形態も歪みが大きい。若干上げ底気味の底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。口縁部外面には幅の広いヨコナデが施され、その結果、端部が僅かに外反する。底部外面はユビオサエによって仕上げている。内面の時計回りのナデも幅の広いもので、口縁部と体部~底面の二段階に施されている。その際、底面から口縁部に向かってゆるやかにナデ上がる。B類はいわゆる「ヘソ皿」である。体部外面は粗いユビオサエによって成形し、口縁部には強いヨコナデを行う。体部と口縁部は強いユビオサエとヨコナデを施すことによって外反し、端部は上方につまみ上げられている。口縁部のヨコナデは時計回りに「ぐるっと」一回巡り、最後は乱雑にナデ上げられている。(1, 14, 15, 20, 23, 24, 26, 29)。逆回転のものも一例(30)。内面にも、口縁部から底面にかけて、時計回りのナデが二~三段階に施されており、やはり、底面からの幅の広いナデ上げが看取される。「ヘソ」部はあまり上方に突出していない。C類は丸みを帯びた底部から内湾ぎみに口縁部が伸びる形態を呈するものが多い。体部外面には大きな指頭圧痕が看取され、口縁部には幅の広いヨコナデを一~数回施している。口縁端部はほとんど上方につまみ上げており、内面に稜をつくるもの(46, 48, 55, 60, 61)も存在する。体部外面は全てユビオサエによって仕上げているが、粗いケズリ状の板ナデを施す例(56, 59, 62)も散見される。口縁部のヨコナデはB類と同様であるが、ナデ上げの痕跡が二重に看られるもの(52, 56)もある。体部内面も口縁部から底面に向かって数回の時計回りのナデが施されるが、ここでも、二重にナデ上げるもの(50, 55, 56)が存在している。D類はレンズ状の厚い底部から外反気味に口縁部が伸びる形態を呈する。底部はユビオサエによって乱雑に成形され凹凸が目立つ。それに対して口縁部には強いヨコナデが施され、底部との境を明瞭に画している。特に33, 34はその傾向が顕著である。口縁端部はヨコナデによって突り気味におさめられるものが多い。内外面のナデによる調整は基本的に白色系と変わる点は見出だせない。ただ、45のように形態が非常に歪んでまったく手づくねによったと考えられるものも存在する。32には口縁端部に灯明痕を残している。E類はユビオサエによって成形された平坦な底部から、口縁部が屈曲して開く形態を呈するものである。底部~体部外面には粗い指頭圧痕がランダムに看取され、口縁部には幅の広いヨコナデを施している。D類同様、体部と口縁部の境は明瞭に区分されるものが多い。内外面のナデ調整も白色系と大差無いが、前者に比べ総じて粗雑である点が注目される。

これらの土師皿の年代であるが、46, 47, 80, 81などは比較的早く、62はやや新しい特徴を有しているが、他はほぼ型式学的に共通する点が多い。従って、これらの土師皿は、鋤柄編年(No. 73土壙21)に併行し、14世紀~15世紀初頭に位置付けられる。

焼け土を多く含む土坑 (南区 No. 25・38・39・153・159: A・B 2・3)

方形(No. 38・39)や楕円形(No. 25・153・159)を呈し、いずれもベースである黄褐色土を深さ1.5mほ

ど掘り込んでいる。埋土は褐灰色(10YR2/1)にぶい黄色(2.5Y6/4)の土が混じり、焼壁土や礫・土器を多量に含んでいる。ベースの土は壁土に適したもので、火災の復旧に伴う壁土の採取と火事場の後片付けを兼用したものであろう。類似の土坑は東隣の京都市埋蔵文化財研究所が行った調査で検出されている。

時期は室町後半以降と考えている。

土坑 (南区 No. 1: B 4・5)

径0.8mの円形土坑で、深さは約20cm。No. 50と重複し、当遺構の方が新しい。埋土は淡灰色泥土で、炭と拳大の石が混じる。

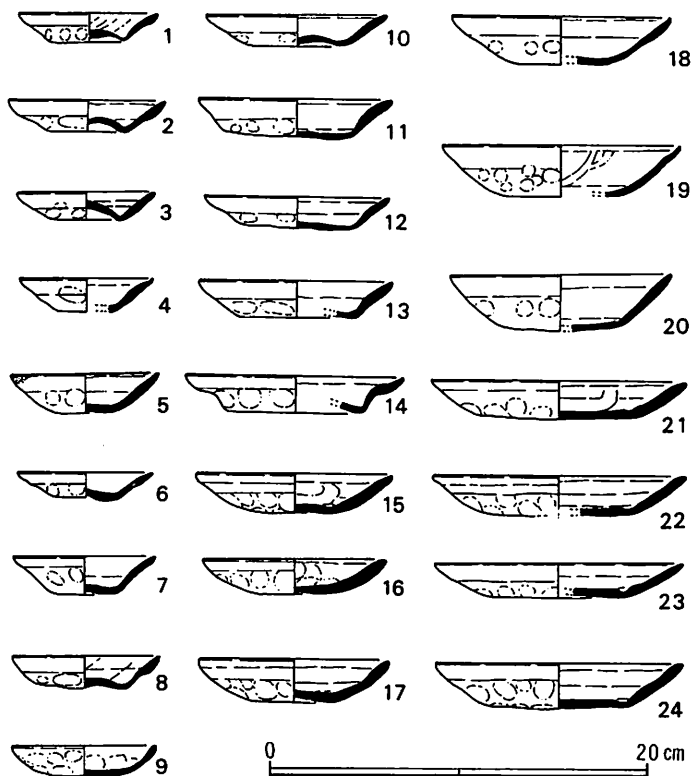
土師皿(第47図) 白色系B類(4, 5, 7), 同C類(18, 19), 褐色系D類(1~3, 6, 8), 同E類(10~14), 橙色系L類(9), 同I-1類(15~17), 同I-2類(21~24), 同K類(20)から成る。

この時期の特徴はI類, K類, L類が出現することである。I類は口径によって2分され、小さいものはI-1類, 大きいものはI-2類とする。B類はいわゆる「ヘソ皿」であるが、底部の突出部は退化し、平底に近い状態を呈する。外面のユビオサエも顕著ではなくなる。C類は口縁部を広くヨコナデし、端部は上方につまみ上げる。外面には指頭圧痕が看取される。E類は底部を粗いユビオサエで成形し口縁部を広くヨコナデする。14は端部を上方につまみ上げている。I-1類はややあげ底気味の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がる。底部~体部はユビオサエによって成形し、口縁部は幅の狭いヨコナデを二~三回に亘って施す。内面には時計回りの強いナデを数回施し、口縁部に向ってナデ上げている。その結果、内面に凹線状の溝が残る。I-2類も同様である。K類はC類の形態や技法を踏襲するが、胎土は黄白~黄橙色を呈し、器壁も厚い。L類は手づくねで作られており、全体に指頭圧痕が残る。全体的にひずみが大きく、上から見るとやや楕円形を呈している。

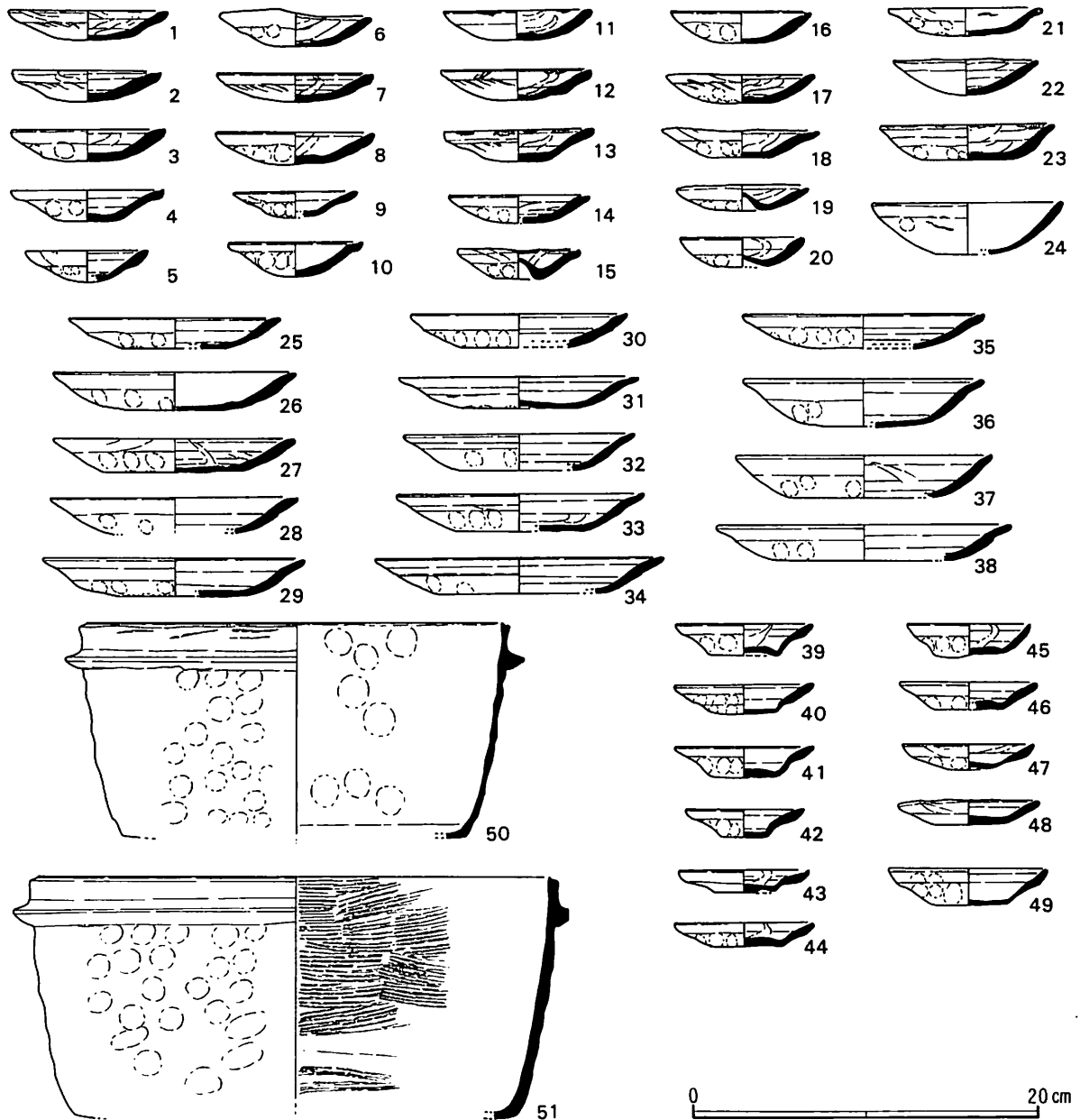
これらの土師皿は鋤柄編年(No. 52濠2)に併行することから、16世紀中葉に位置付けられる。

土坑 (北区 No. 5 下層: B 5)

東西2.3m, 南北1.0mの隅丸方形の土坑である。埋土は上層と下層に分けられ、下層の灰黄色泥土から多量



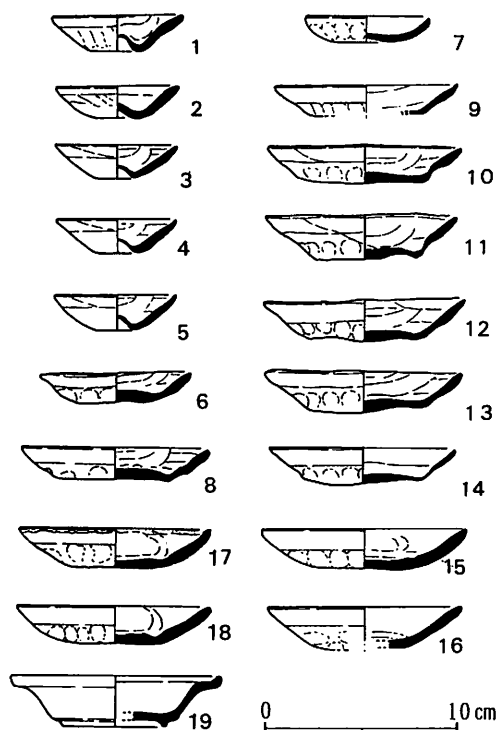
第47図 土坑(No. 1: 南区 B 4・5)出土遺物



第48図 土坑 (No. 5 下層 : 北区B5) 出土遺物

の土師器が出土した。土師器は完形品も混じるがほとんどが小片で、コンテナ数約20箱に及んだ。

土師皿 (第48図) 白色系A類 (4, 5, 9, 10, 13, 14, 18, 22), 同B類 (15, 19, 20), 同C類 (24), 褐色系D類 (43, 44, 46~48), 同E類 (39~42, 45, 49), 橙色系I-1類 (1~3, 6~8, 11, 12, 16, 17, 21), 同I-2類 (23, 25) から成る。A類は口縁端部を若干つまみ上げるもので、丸底の形態を呈すもの (5, 9, 10, 14, 22), 平底を呈すもの (4, 13, 18) がある。外面には指頭圧痕が看取されるものが多い。この時期になると口径が著しく縮小化していく傾向がある。B類はいわゆる「へそ皿」である。三個体が確認できているが、それぞれ形態に個体差がある。15は口縁部が折り曲げ気味に外反し、端部はつまみ上げる。「へそ」部は突出の度合が増している。この特徴は旧来の形態を残すものである。それに比べ、19, 20は浅い皿状を呈している。これは、他の土師皿が全体的に平坦化する傾向と一致するものであろう。C類は一点のみ存在する。非常に古い形態を呈するもので、混在の可能性はある。D類もB類同様、平坦化傾向が強まり、43のように平底から屈曲して水平に伸びる口縁部をもつものは少なくなる。端部も43は上方につまみ上げるが、他は丸くお



第49図 土坑 (No. 162 : 北区D5) 出土遺物

さめている。外面のユビオサエも顕著ではなくなる。E類はこの時期になると口径が著しく縮少し、小型化する。若干上げ底気味の底部から屈曲して外反するもの(39~42)が多いが、45, 49のように定型化しないものも出現する。口縁端部は全て丸くおさめている。外面は大きな指頭圧痕が看取される。D類とE類は形態的に差異がなくなり、その区別が困難になりはじめる。橙色系I-1, 2類はこの時期になって新たに出現する器種である。他の器種の胎土が灰白~白色、または茶褐~赤褐色であったのに対し、これらの器種は黄橙色の胎土を有する。水簸されたと思われる精良な粘土を用いて製作されており、前二者とは明らかに区別されるものである。I-1類はやや丸底の底部からゆるやかに内弯して伸びる口縁部をもつ。端部はヨコナデによって、やや尖り気味におさめる。外面はあまりユビオサエを施さなくなり、ナデによって仕上げる。内面は他の器種と同様に、横方向のナデを施し、底面から口縁部に向かってナデ上げている。口縁部は強いヨコナデによって成形されており、回転時にできたと思われる粘土の「振れ」

が看取されるもの(1, 2, 7, 12, 17)がある。11, 12は燈明痕が残存する。I-2類は基本的にはI-1類を大型化したものである。成形時の調整技法もほぼ同様である。ただ、口縁部は体部上位から外反する点がI-1類とは異なっている。I-2類は口径も様々であり、今回は一括して扱うが、将来的には細分の可能性を孕んでいる。

瓦質土器 同50, 51は羽釜である。外面は灰黒色、内面は灰白色を呈する。底部は欠損するが、両者とも底の浅い鍋状の形態を呈する。体部から口縁部にかけては直線的に上方に伸びる。口縁部は面をもつが、内側を上方につまみ上げるのが特徴的である。口縁部からやや下ったところに、「罎」が巡る。「罎」の上下に強いヨコナデを施すことによって、「罎」と体部を接合している。外面は粗いユビオサエをランダムに施している。51は、内面に横方向の粗いハケ状のナデを施す。これに対して、50は内面をナデによって仕上げ、指頭圧痕が看取される点が異なっている。しかしながら、両者は口縁端部や体部の形態が非常に近似し、鋤柄分類CI-7類²⁹⁾に分類される。15世紀後半に属する。

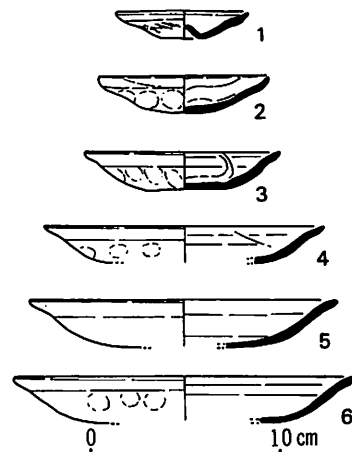
土師皿は鋤柄編年(No. 80土壙55)に併行し、15世紀後半後葉に属する。これは羽釜の年代とも齟齬をきたさない。従ってこれら一群の遺物は15世紀後半後葉に位置付けたい。

土坑 (北区 No. 162 : D5)

径約0.7m、深さ約0.4mの円形土坑である。南西部は近世初期の土坑 No. 32 に切られる。埋土は灰褐色泥土で炭と拳大の石が混じる。検出面から約20cm下で完形の土師器が正位の状態でいくつか出土した。故意に置かれたものなのか捨てられた際の所産なのかは判断できなかった。

土師皿(第49図、図版第21-1~7) 白色系B類(1~5)、褐色系E類(8)、橙色系L類(7)、同I-1類(15~18)、同L類(6)からなる。B類はいわゆる『へそ皿』である。体部外面はユビオサエによって成形するものの、前代ほど強くなく、むしろ口縁部に強いヨコナデを施すのが特徴的である。このため、3は口縁部が外反し、4はヨコナデの時計回りの回転方向に向かって、粘土の『振れ』が生じている。両者とも器高が低く、扁平化している。E類は体部外面に大きなユビオサエを施し、口縁部は幅広くヨコナデを行う。ヨコナデは強く施され、端部は上方につまみ上げている。内面には幅広い回転ナデが施される。この時期になる

とE類も器壁を薄く、口径も小さく、器高の低く、扁平、小型化する傾向にある。I-1類は平坦な底部から口縁部が内弯気味にゆるやかに立ち上がる形態を呈する。体部外面には大きなユビオサエを施し、口縁部は幅広のヨコナデを行う。内面にも時計回りの回転ナデを施すが、白色系や褐色系のように単位は認められない。しかし、底面のナデ上げの名残である凹線状の溝が底面の周縁を巡り、やはり口縁部に向かってナデ上げられているのが特徴的である。1には口縁端部に灯明痕が観察される。L類は全体を手づくねによって成形したものである。底部から体部にかけて指頭圧痕が粗雑に散見され、口縁部のみヨコナデを施す。内面には幅の広いナデを回転させるのではなく、長線方向に1回のみ施している。口径は上からみると楕円形を呈し、一定ではない。総じていびつな形態を成している。



第50図 北区B4出土遺物

国産陶器 同19は瀬戸焼・美濃の小鉢である。底部には高台を有し、口縁部は体部から水平に折れ曲がる。口縁端部は上方につまみ上げる。器体全体に暗褐色の釉が掛けられている。これらの遺物は鋤柄編年(No. 52濠2)に併行し16世紀中頃に位置付けられる。

包含層(北区:B4)出土土器

土師皿(第50図1~6)は白色系B類(1), 橙色系I-1類(3), 同J類(2), 白色系C類(4~6)から成る。

B類は口縁部を強くヨコナデすることによって粘土の「振れ」が看取される。口縁端部は尖る。C類は浅い皿状の形態を呈す。この時期になると橙色系I類, J類が出現する。これらの土師皿は鋤柄編年(No. 80土壙55)に併行することから、15世紀後半後葉に位置付けられる。

第3節 鎌倉時代

鎌倉時代 (第51図)

埋め甕 (北区 No. 113・114 : C・D 5, 第52図, 図版第15下)

北区中央やや北寄りに常滑焼甕の底部を据えた状態で東西に2基検出された。底部中央で80cmの間隔を測る。No. 113から約4 m離れたNo. 129でも同様の甕が検出されている。またNo. 113の南No. 111の土坑にも甕が存在したとすると、No. 129南のNo. 161も111の延長上にある。ゆえに1列5個並んでいたとして2列10個の甕が並んでいた可能性がある。

重複している土坑は、それが埋められた後に甕が置かれているので、それ以前に掘られたものである。周辺の土坑群もまた同じで、おそらく土取りをした後、整地が行われて甕が据えられたものと思われる。

甕 第53図は常滑大甕の底部である。全体的にひずみが大きい。内・外面に粗い板ナデを施す。

土坑 (南区 No. 44 : A 3, 第54図, 図版第15上)

検出時よりプランは明確でなく、南北約1.2 m, 東西1.0 m, 深さ約0.4 mと浅い土坑である。埋土も地山とあまり変わらない暗褐色泥砂で炭を含む。常滑甕片, 瓦質火鉢, 輸入陶磁器, 土師器など鎌倉時代初頭の遺物が一括して出土した。

土師皿 褐色系D類 (第55図1~5), 褐色系G類 (6~9) から成る。D類, G類とも底部のニビオサエが顕著である。

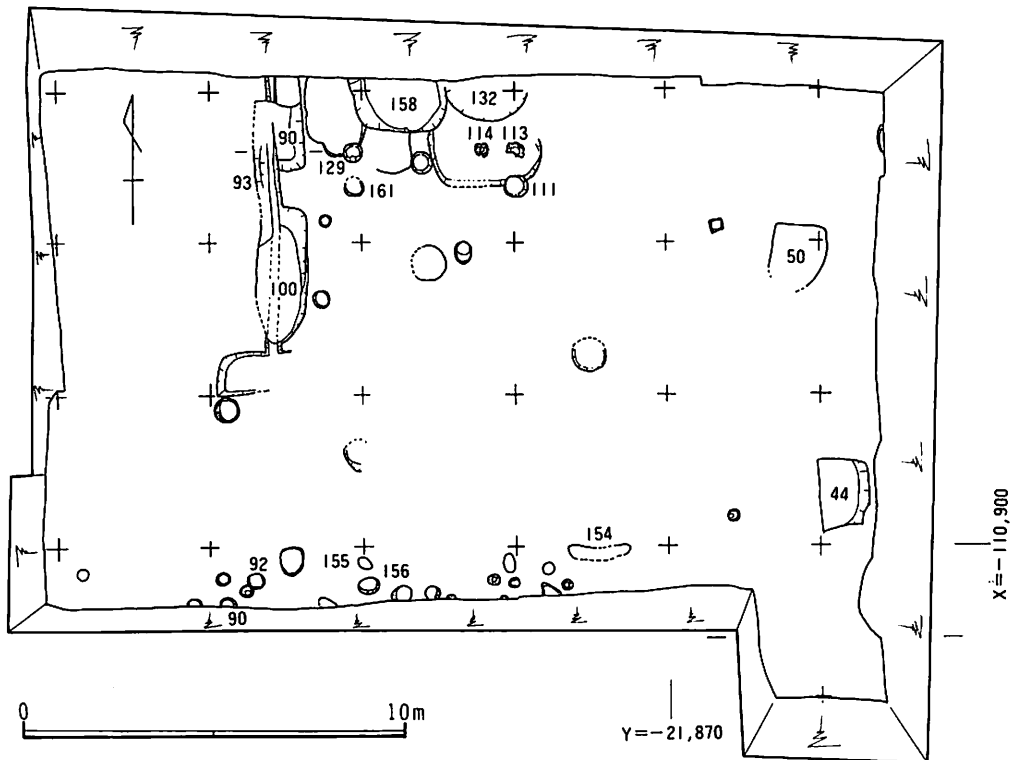
灰釉陶器 10は高台のついた底部である。

青磁 11, 12は碗である。12は口縁端部に刻むことによって菊花状を呈する。内面には蓮弁文が看取される。

瓦質土器 13は大型の盤である。

瓦 14は平瓦である。表と裏に布目が残る。

これらの遺物の年代は、土師小皿が鋤柄編年 (No. 48土壙2B) に併行することから、13世紀前半後葉に位置



第51図 鎌倉時代遺構全体図

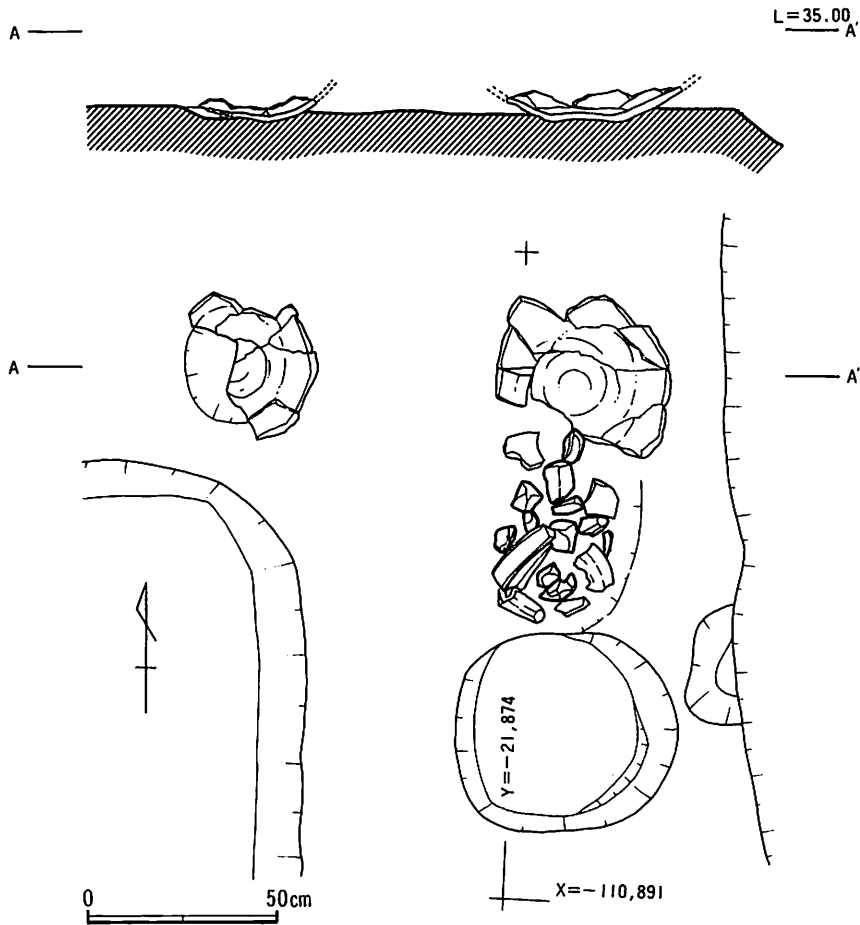
付けたい。

溝と浚渫のための土坑 (北区 No. 93・90・100, グリット E 4・5)

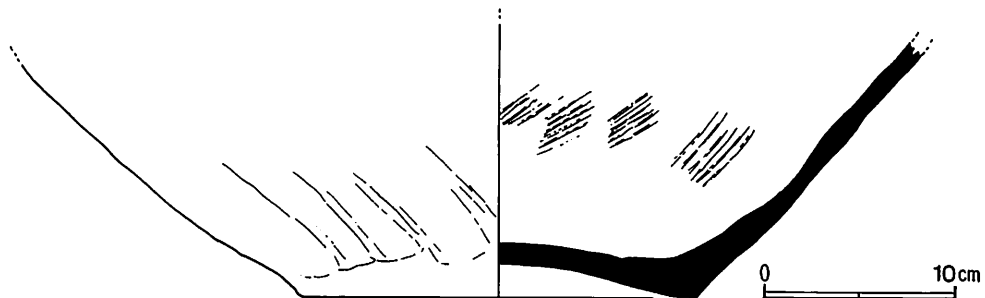
南北溝 (No. 93 : E 4・5) (第56図)

上端幅は約50cm, 深さは検出面から約50cmで, 断面はU字状を呈す。埋土は暗褐色砂泥土で, 検出長は約7 mを測る。南区では検出されていない。この溝に伴うとみられる土坑が No. 90 と No. 100 である。

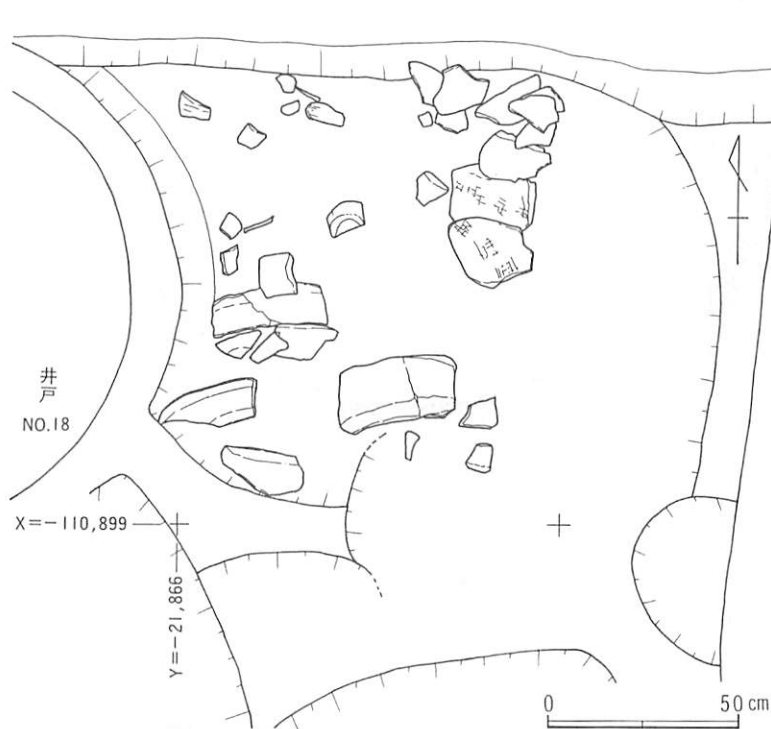
土師皿 褐色系G類 (第57図1~3), 白色系A類 (同図4, 5), 同C類 (同図6, 7), 褐色系E類 (同図8, 9) から成る。G類は形態的に扁平化する。A類, C類はこの時期から出現する。E類は口縁部を強くヨコナデし, 端部は尖り気味である。これらの土師器は鋤柄編年 (No. 48土墳2B)に併行することから13世紀前半後葉に位置付けられる。



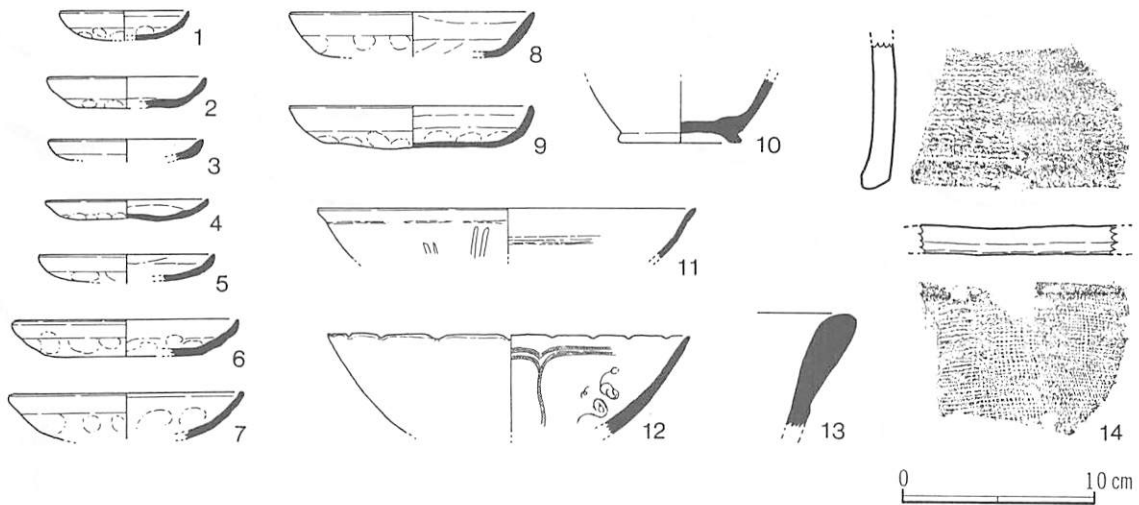
第52図 埋め甕 (No. 113・114 : 北区 C・D 5) 出土状態図



第53図 埋め甕実測図



第54図 土坑 (No. 44 : 南区A3) 遺構図



第55図 土坑 (No. 44 : 南区A3) 出土遺物

土坑 (No. 90 : E5)

東西幅は南北溝幅を入れて1.1m, 南北1.6m以上, 深さ約50cmを測る。

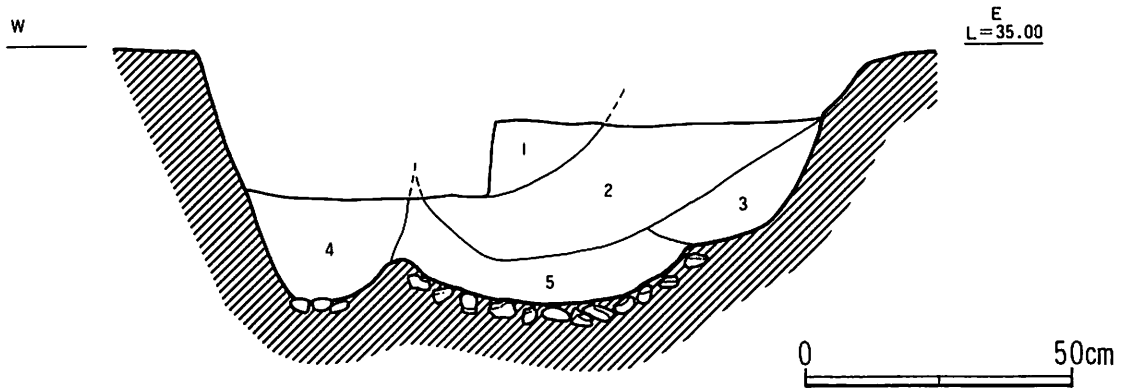
土師皿 褐色系D類 (第58図1, 2), 同E類 (同3~5), 白色系C類 (同6, 7) から成る。D類は底部のユビオサエは顕著ではなくなる。E類は口縁部が外反気味に屈曲し, 端部はつまみ上げる。C類はこの時期から出現する。

灰釉陶器 8は高台のついた底部である。外面はヘラケズリを施す。

東播系須恵器 9は捏鉢である。端部は上方に拡張し, 広い面をもつ。

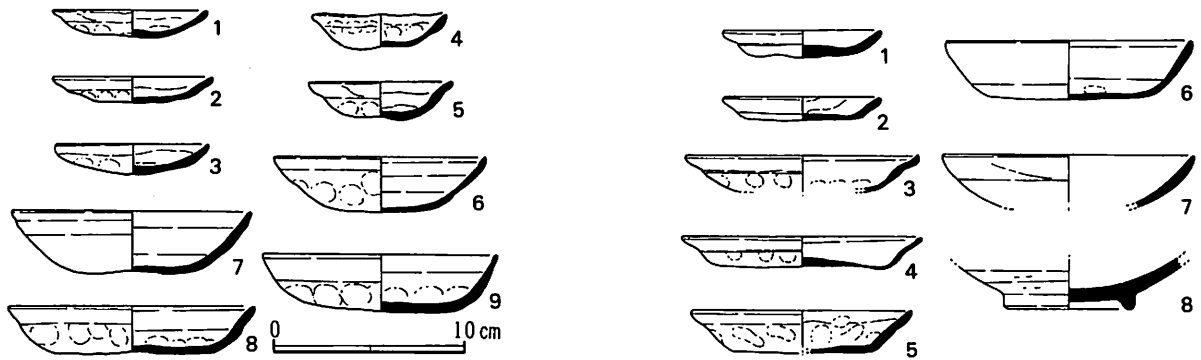
瓦質土器 10は羽釜である。口縁端部は強くヨコナデし, 凹線状を呈する。外面には大きな指頭圧痕が看取される。鋤柄分類のCI-5類³⁰⁾に属す。

これらの遺物は, 土師皿が鋤柄編年 (No. 41井戸2) に併行することから, 14世紀前半前葉に位置付けた

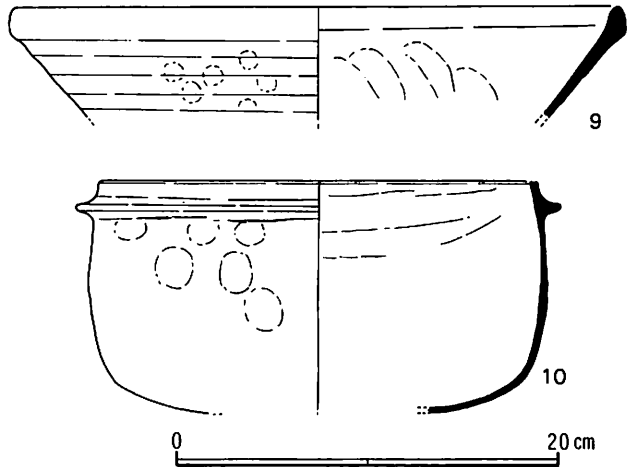


第56図 南北溝 (No. 93 : 北区E 5, No. 90 : 北区E 4) 断面図

1. 10YR 3/3 暗褐色砂泥 2. 10YR 1.7/1 黒色砂泥炭混
 3. 10YR 3/2 黒褐色土黄色粘土粒・炭混 4. 10YR 3/3 暗褐色砂泥
 5. 10YR 2/3 黒褐色粘質土



第57図 No. 93 出土遺物



第58図 No. 90 出土遺物

い。

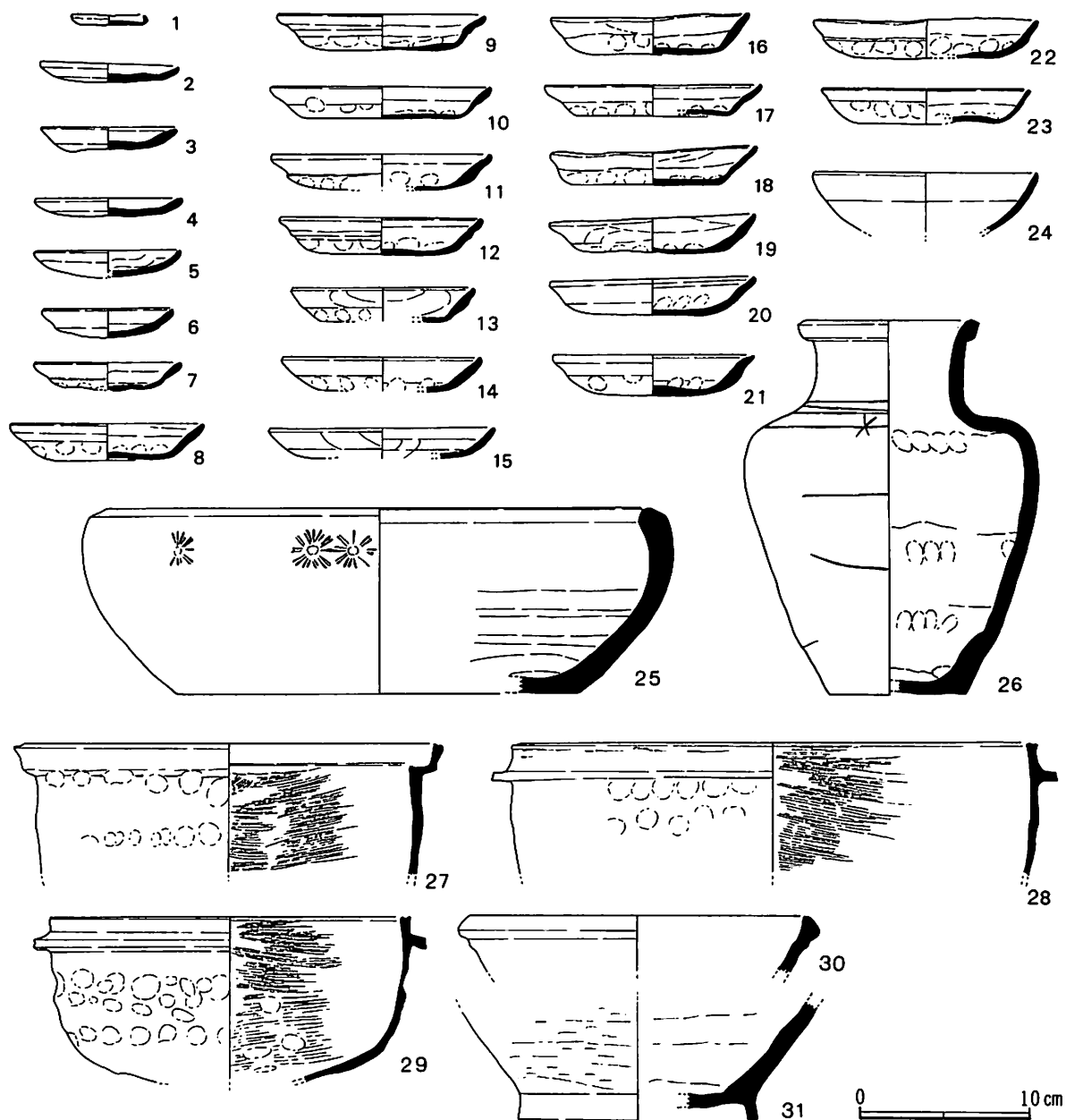
土坑 (No. 100 : E 4)

東西幅は約1.4m, 南北約3.5m, 深さ約80cmである。

溝は堆積土より, 流水していたというよりは澱んだ状態であったと思われる。土坑は埋め土の堆積状況より何回も掘り返されたものと考えられ, 南北溝と重なることから, 溝さらえとその汚物廃棄のための土坑と思われる。三者とも遺物に時期差は認められないことから短期間に何度も掘り換えされたものと考えられる。

土師皿 褐色系D類 (第59図2~7, 図版第19-10, 11), 同E類 (同8~23, 図版第19-8, 9), 白色系C類 (同24), 同F類 (同1) から成る。D類は底部外面のユビオサエは顕著ではなくなる。E類は底部外面にユビオサエを施し, 口縁部はヨコナデによって外反気味に屈曲する。端部はつまみ上げる。この時期になるとC類が出現する。

瓦質土器 25 (図版第19-13) は火鉢である。口縁部は内弯し, 端部に面をもつ。口縁部直下には菊花状の



第59図 土坑 (No. 100 : 北区 E 4) 出土遺物

スタンプ文が施される。27は鍋である。口縁部は受け口状を呈する。外面にはユビオサエ、内面には粗いハケを施す。鋤柄分類鍋-2³¹⁾に属す。28, 29は羽釜である。外面は鍋と同様粗いユビオサエを施し、内面には横ハケを施す。鋤柄分類 CI-3³²⁾に属する。

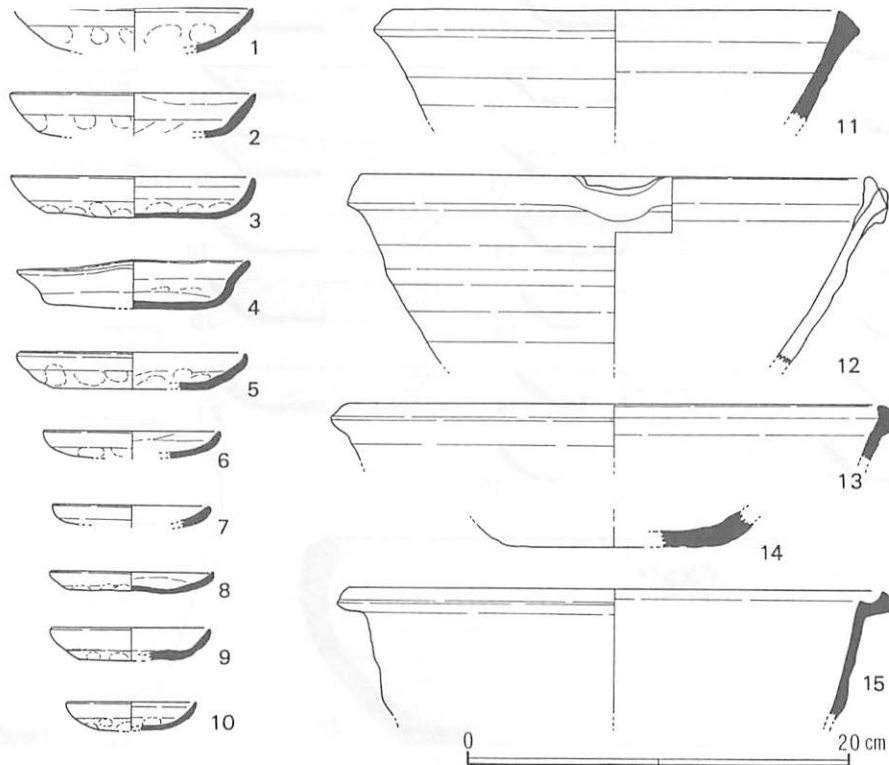
東播系須恵器 30は捏鉢である。口縁端部は拡張して面をもつ。平安京では13~14世紀にかけて盛行する。31は高台が付く底部である。外面を横方行にヘラケズリを行う。

常滑焼 26 (図版第19-12) は壺³³⁾である。口縁部は水平に折れ曲り、端部に面をもつ。頸部には「×」状のヘラ記号が施される。類例は少なく時期は不明である。

これらの遺物の年代であるが、土師皿が鋤柄編年 (No. 80土壙51) に併行し、瓦質土器とも矛盾はしないことから、13世紀後半後葉に位置付けたい。

土坑 (南区 No. 50 : B 4)

かわらけ溜まり No. 43 の西側で検出した土坑である。東西1.4m, 南北1.6m以上, 深さ約0.3mである。埋土は褐黄色泥土で炭が混じる。



第60図 土坑 (No. 50 : 南区B 4・5) 出土遺物

土師皿 褐色系D類 (第60図6～10), 同G類 (3, 5), 同E類 (2, 4), 白色系C類 (1) から成る。D類は口縁部にヨコナデ, 体部下半にユビオサエを施す。G類もD類と同様の技法で成形する。E類は口縁部を強くヨコナデし, 外反させる。体部下半はユビオサエで仕上げる。

東播系須恵器 11～14は捏鉢である。口縁部の形態に2種類ある。11は端部に幅の広い面を有し, 内弯気味に突出する。鋤柄分類B-1類に属する。12・13は口縁部がわずかに内弯し, 受け口状を呈する。12は片口を有する。同分類C-2類に属する。魚住窯跡では, 11は12世紀中頃～後半に, 12は13世紀前半代に位置付けられている³⁴⁾。

瓦器 15は鍋である。地下鉄烏丸線No. 67土壙15出土遺物中に類例がある³⁵⁾。13世紀後半前葉である。

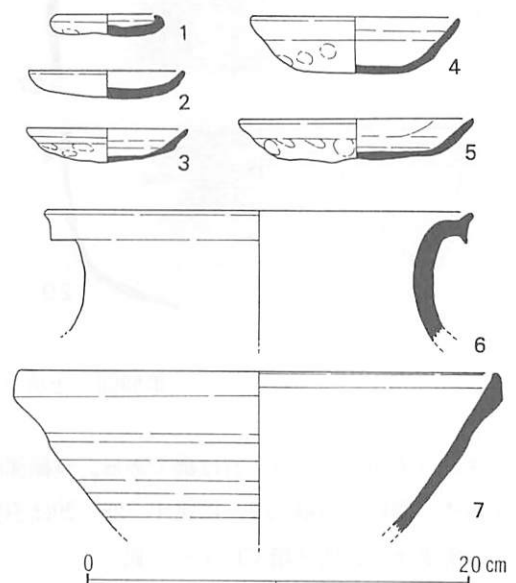
土師皿は鋤柄編年 (No. 48土壙2B) に併行し, 13世紀前半後葉に属する。しかし, 瓦質鍋はそれよりやや新しい。

したがって, 両者を鑑みるに, これらの遺物を 13世紀中葉に位置付けたい。

土坑 (北区 No. 158 : D 5・6)

土師皿 (第61図1～5), 常滑焼 (同6), 東播系須恵器 (同7) がある。

土師皿 H類 (1), 褐色系D類 (2, 3), 白色系C類 (4), 褐色系E類 (5) から成る。H類はコースター状を呈し, 白色で清良な胎土を有する。前代から残存している。D類は浅い皿状を呈し, 両者ともナデによって成形されている。3には外面に指頭圧痕が看取される。C類は新しく出現するものである。やや丸底気味の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がる。口縁部は幅の広いヨコナデを施し, 内面にも同様の時計回りの



第61図 土坑 (No. 158 : 北区D 5・6) 出土遺物

ナデを施す。外面には指頭圧痕が看取される。E類は全体的にユビオサエによって成形されるため、底部はややいびつな平底からゆるやかに立ち上がる。口縁部は幅の広いヨコナデを施し、内面にもナデを行う。外面には指頭圧痕が看取される。

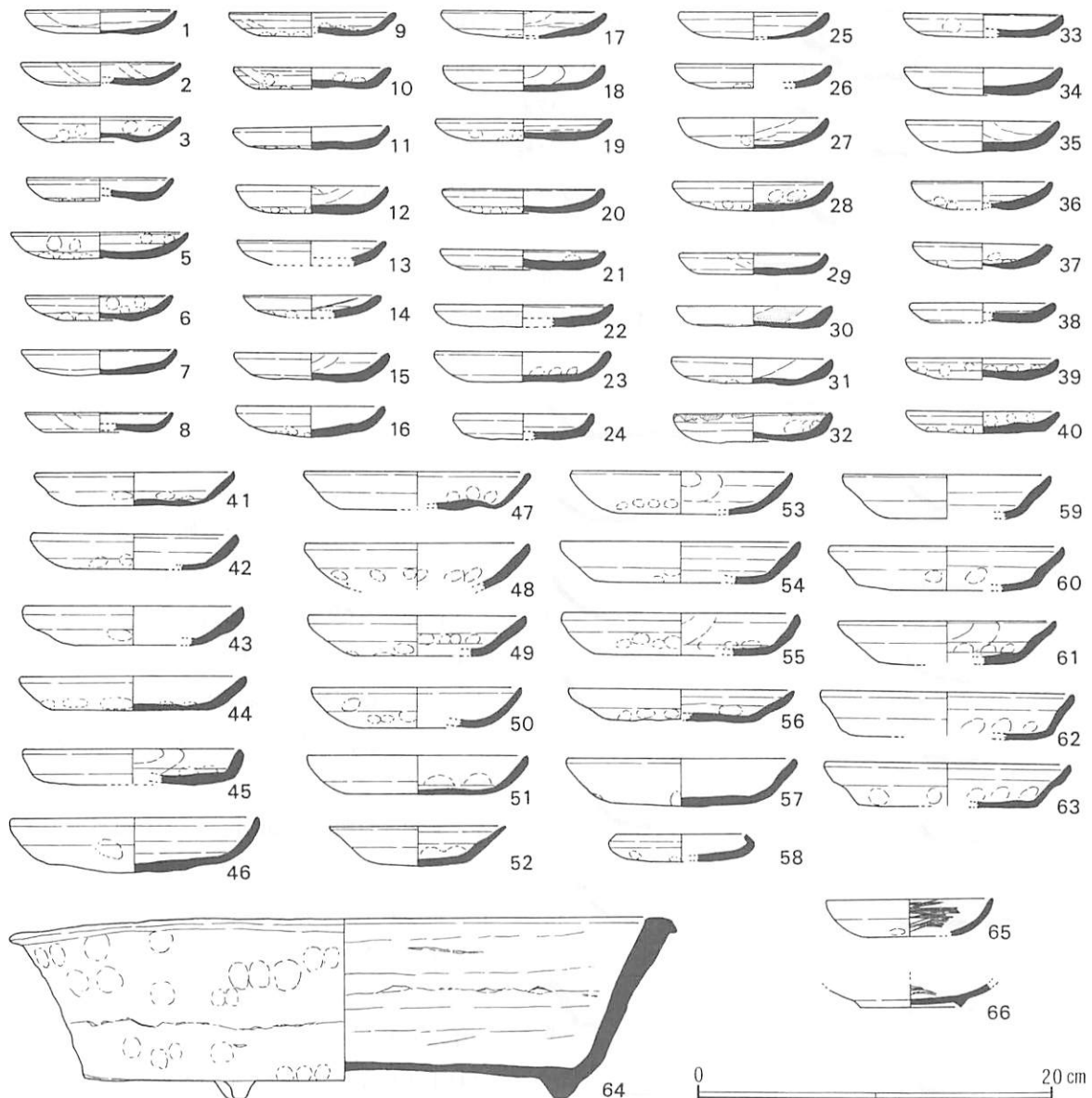
国産陶器 常滑焼6は甕である。口縁端部はN字状を呈し、中野編年6a期³⁶⁾に属し、13世紀中頃に位置付けられている。

東播系須恵器 7は捏鉢である。全体的にロクロ回転ナデによって成形され、口縁端部は広い面を有する。魚住古窯址群では13世紀前半前葉に位置付けられている。

これらの遺物は土師皿が鋤柄編年 (No. 48土壙2B) に併行する。これに対し、常滑焼はやや新しく、東播系須恵器はやや古い相を示す。以上のことから、これらの遺物を13世紀前半後葉に位置付けておきたい。

土坑 (北区 No. 132 : C・D 5) 周辺

土師皿 褐色系D類 (第62図1~40)、同G類 (同41~51, 53)、同E類 (同54~57, 59~63)、白色系A類 (同52)、H類 (同58) から成る。D、G、E類が大半を占めるが、白色系A類が出現するのが注目される。A類は他と異なり、灰白色を呈する清良な胎土で製作される。H類は前代から残存している。また、E類には

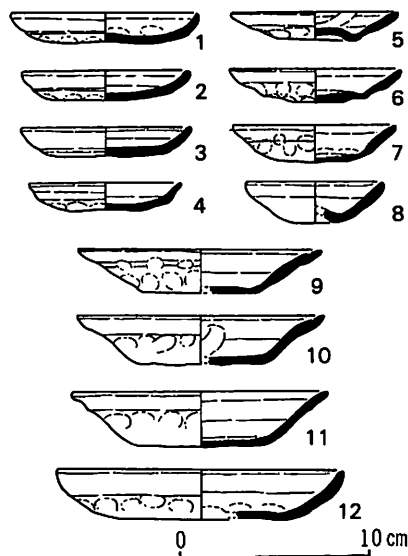


第62図 土坑 (No. 132 : 北区C・D 5) 周辺出土遺物

強いヨコナデによって口縁部を屈曲させるもの(62, 63)がある。他と比べ新しい様相を示す。

瓦質土器 (図版第31-13) 64は大盤である。灰黒色を呈し、外面にユビオサエを明瞭に残す。端部は広く面取りする。内外面とも粘土紐のつなぎ目が観察される。三足である。火鉢としての用途が考えられる。旧平安京内では13世紀³⁷⁾を中心に存在する。

瓦器 65は皿である。口縁部内面には暗紋が密に施される。楕葉型であろう。66は碗である。高台の形態から近江編年³⁸⁾ I-6期に属す。13世紀前半代である。土師皿は鋤柄編年(No. 72土城73)に併行し、12世紀末~13世紀前半前葉に属する。これは瓦器碗の時期とも一致する。したがって、これらの遺物は13世紀前半前葉に位置付けられる。



第63図 A・B 2 セクション第2層出土遺物

A・B 2 セクション

南区で検出した近・現代の石列と水溜め遺構の下層は、緑褐色砂泥土(厚さ約40cm)と、その下位に堆積している礫を多く含む灰色泥砂土(厚さ約30cm)とに分かれる。この2層をそれぞれ2層, 3層とした。

A・B 2 セクション2層(南区, 第63図)

土師皿 褐色系D類(1~4), 同E類(5~7), 同G類(12), 白色系B類(8), 同C類(9~11)から成る。D類は全体的にナデによって成形され、底部外面にはユビオサエ, 口縁部にはヨコナデを施す。口縁端部は丸くおさめる。E類は底部をユビオサエによって雑に成形し、口縁部には強いヨコナデを施す。G類はD類を大型化したもので、外面にユビオサエ, 口縁部には幅の広いヨコナデを施す。B類はいわゆるヘソ皿である。口縁部にはヨコナデを施す。C類は新たに出現するものである。全体的にユビオサエで成形され、

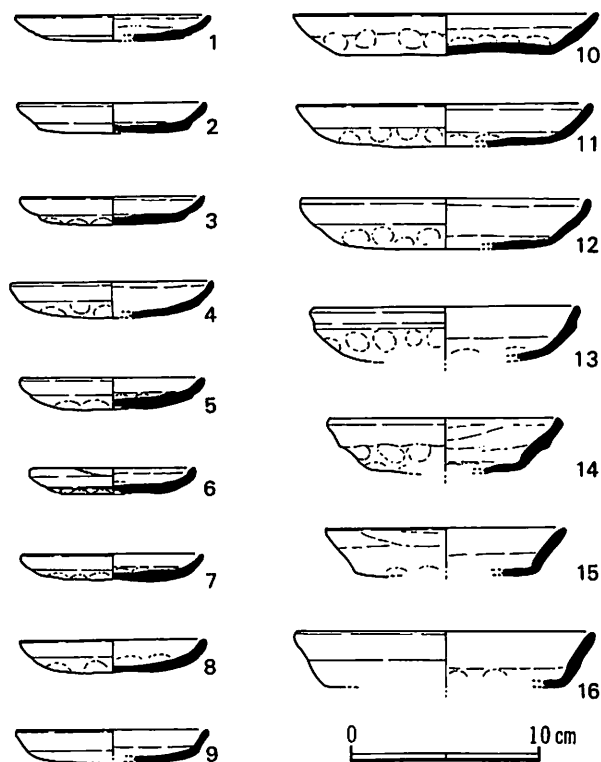
口縁部は強いヨコナデを施し、ゆるやかに外反する。内面には時計回りのナデを二, 三回施す。白色の清良な胎土を有する。

これらの土師皿は鋤柄編年(No. 80土城51)に併行し、13世紀後半後葉に属する。

A・B セクション3層(南区, 第64図)

土師皿 茶褐色を呈する褐色系D類(1~9), 同E類(13, 14), 同F類(15, 16)から成る。1~9は口縁部外面に強いナデを施す。2, 3, 9はナデが強調され、他に比べ新しい様相を示す。G類も大きさは違うがD類と同じ成形技法による。E類はD類, G類に比べ、口縁部外面のナデや体部下半のユビオサエが一層顕著であるが、個体ごとに若干の形態差がある。これらの土師皿は鋤柄編年(No. 72土城73)に併行し、12世紀末~13世紀前半前葉に位置付けられる。

手づくね土器 第65図1~3(図版第31-6, 7)は粘土紐を巻き上げて、手づくねで成形した筒型土器である。不安定な底部と内湾して開く口縁部



第64図 A・B 2 セクション第3層出土遺物

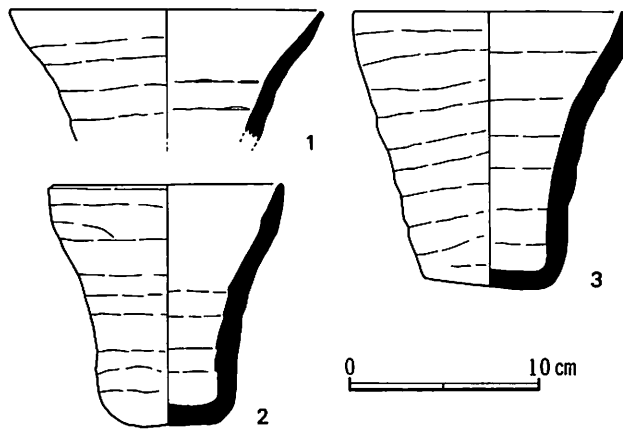
をもつ。製塩土器だろうか。類例は左京七条三坊五町・SE131³⁹⁾と吉田近衛町 S539 井戸⁴⁰⁾に見られる。共伴する土師皿は両方とも鋤柄編年 (No. 48土城2B)に属することから、本例も13世紀前半後葉に位置付けたい。

土坑 (北区 No. 124 混入土器: D 4, 第66図)

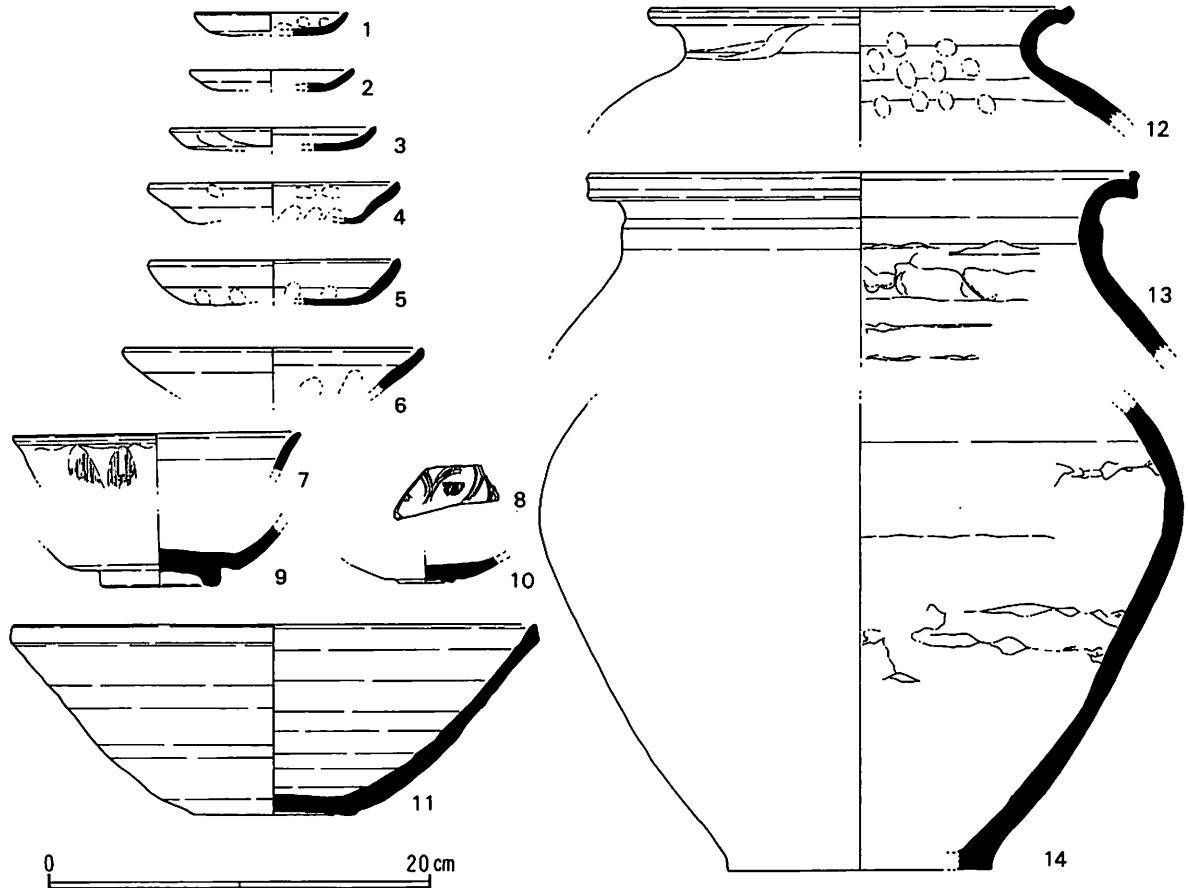
土師皿 褐色系D類 (1~3), 同G類 (5), 同E類 (4, 6) から成る。全て、口縁部を強くヨコナデシ、体部下半はユビオサエで仕上げる。E類は端部をつまみ上げる。

東播系須恵器 11は捏鉢である。灰白色を呈し、口縁部は垂直な端部を有する。底部は糸切りをする。同種の捏鉢は魚住21号窯の理科学的な分析から1210~1260年が与えられている⁴¹⁾。

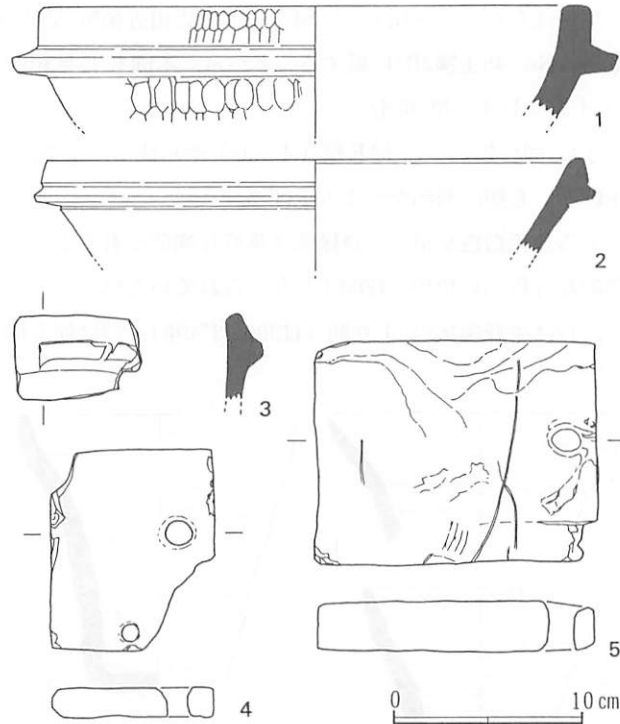
常滑焼 12, 13は壺である。12は中野編年⁴²⁾ I b 期 (1130~1150年), 13は同5期 (1220~1250年) に属す



第65図 A・B 2 セクション第2・3層出土手づくね土器



第66図 土坑 (No. 124: 北区D 4) 混入遺物



第67図 南・北区出土石製品

1 : E 4 2 : A 5-34 3 : D 3-29 4 : B 5-62下
5 : 南区

る。

輸入陶磁 7～10は龍泉窯の青磁である。7は横田・森田分類⁴³⁾の碗I-6bに、8は同分類のⅢ-2類に属する。

土師皿は鋤柄編年 (No. 72土壙73) に併行する。これは他の遺物の年代とも一致する。従って、これらの遺物は13世紀前半前葉に位置付けられる。

石製品 第67図1～3は羽釜である。1は外面に縦方行の工作痕が看取される。口縁端部は面をもつ。森田分類⁴⁴⁾B-3群に属する。13世紀前半～14世紀初頭である。2は端部はやや尖るもので、同分類C-2群に属する。14世紀後半～15世紀前半である。3は転用されてはいるが同分類C-2群であろう。4、5は方形の石板である。両者とも一、二ヶ所に孔を穿ち、5は擦痕が観取される。用途は不明である。太宰府出土のもの⁴⁵⁾に類例がある。

第4節 平安時代

平安時代 (第68図)

溝 (北区 No. 200 : E 5・6, 図版第16)

北区西側で検出した南北溝である。検出幅2.0m, 深さ0.14mを測る。上部の削平が著しく構築当初の規模はわからない。埋土はオリーブ色粘質土で、溝北部では平安時代中期の土器が多量に廃棄された状態で出土した。南区の調査の際には溝の肩部が削平されており検出されなかったが、延長線上で平安時代中期の緑釉陰刻花文椀などが出土する層位が確認されているので、調査区内を南北に貫いていたと考えられる。なお、溝から1009年鑄造の北宋銭「祥符元宝」が出土している。溝は平安時代中期の遺物以外みられない事から、中期以降廃絶したと考えられる。

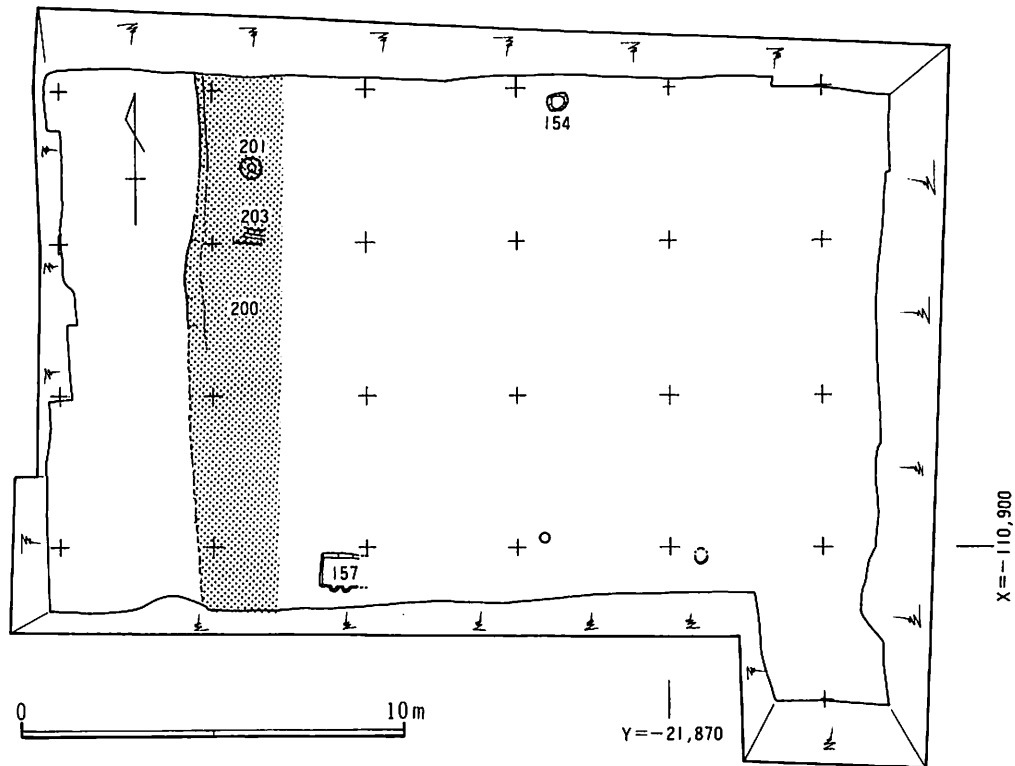
この溝は位置的に一町を中心推定ラインの東側に相当する。一町内の区画割の構造が発掘調査によって徐々に明らかになりつつあるが、当溝が一町を中心を画するの道路が中心で東側溝となるかは判然としない。溝の西側に道路らしき痕跡は検出されなかった。

南北溝を完掘後、溝底部で土坑 No. 201 と溝状遺構 No. 203 を検出した。両者とも掘り込みは浅く、溝と同時期の遺物が出土している。溝との関係はつかめなかった。

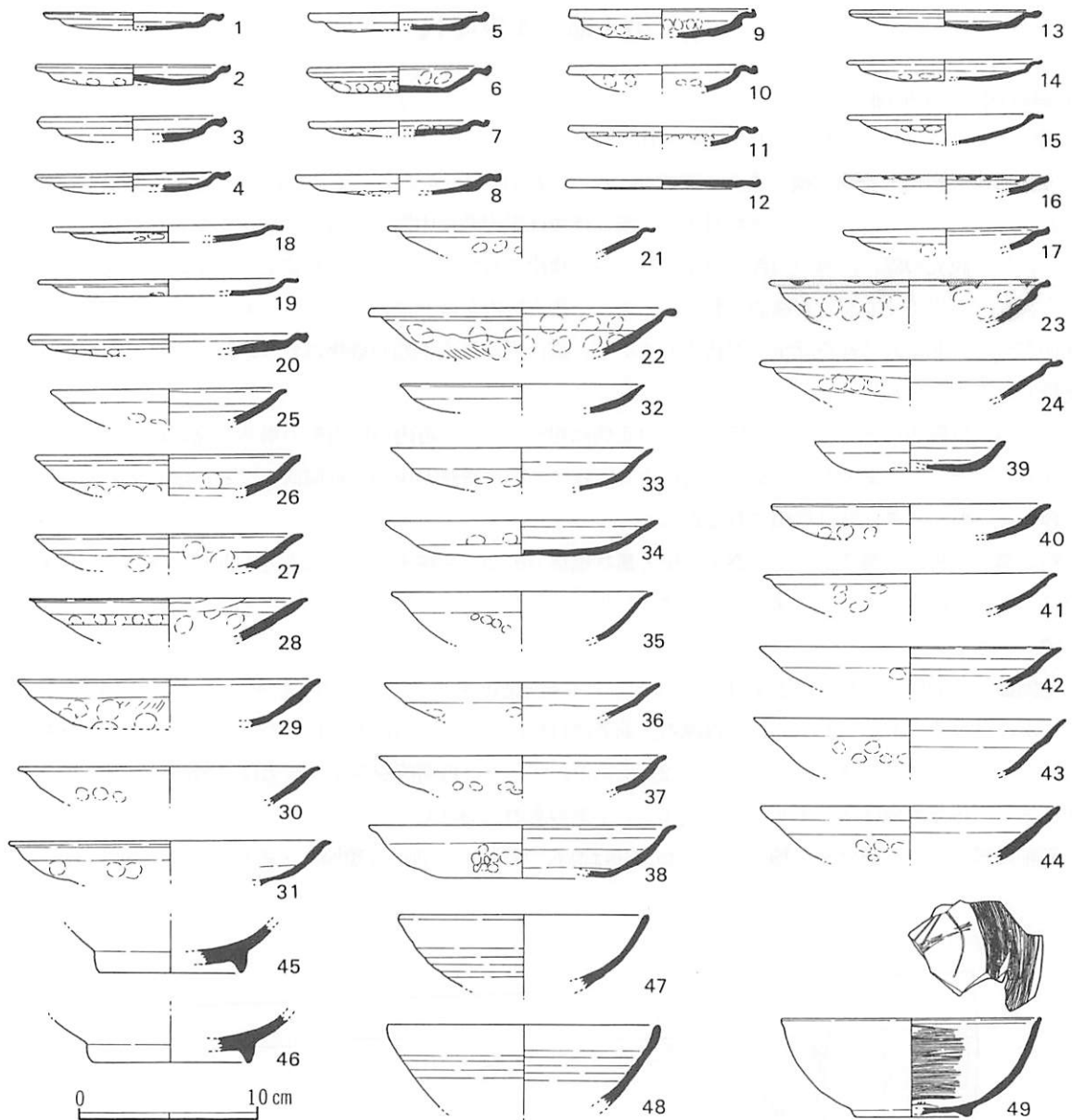
溝 (南半)

土師皿 第69図1~43 (図版第31-1~4) には口縁部がいわゆる「て」の字状を呈するもの(1~23), ゆるやかに外反するもの(23~43) から成る。前者は口径によってさらに大(17~23) 小(1~17) に分類される。扁平でコースター状を呈するもの(12) もある。16, 22は燈明痕を残す。後者は口縁部に二段階のヨコナデを施し、体部外面はユビオサエで仕上げる。小型のもの(38) もある。

灰釉陶器 同45~48は全て椀である。45, 46は高台の形態から前川分類椀A・折戸53号窯式第3段階⁴⁶⁾ に



第68図 平安時代遺構全体図



第69図 溝 (No. 200 : 北区E 5・6) 出土遺物

属する。

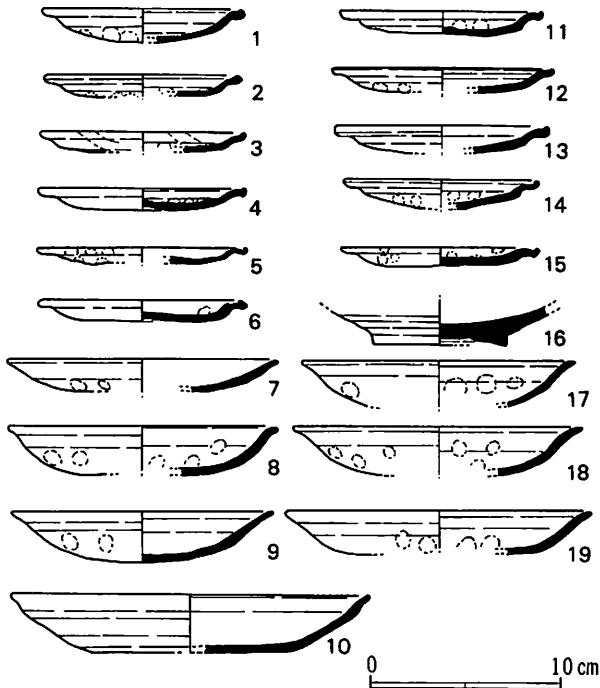
黒色土器 同49 (図版第31-5) は内面に暗紋を密に施す。外面は無紋である。黒色土器A類に属し、森編年の畿内系Ⅲ類・Ⅶ期⁴⁷⁾ に相当する。土師皿は「て」の字口縁の形態や器種構成から鋤柄編年 (No. 23土壙6) に属する。これは灰釉陶器、黒色土器とも年代的齟齬はない。以上のことから、これらの遺物は、10世紀末～11世紀初頭に位置付けられる。

溝 (北半)

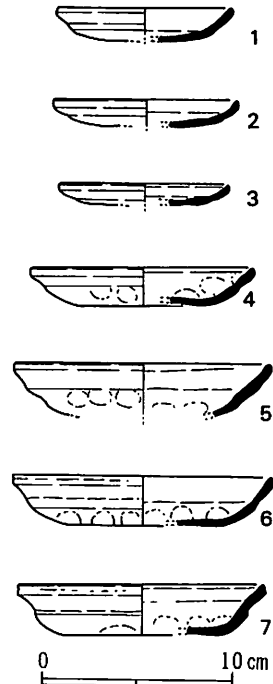
土師皿 第70図1～6, 11～15はいわゆる「て」の字口縁をもつ皿である。口縁部はヨコナデ、体部はユビオサエによって仕上げる。器形には底がやや深いもの (1, 13, 14) と浅いもの (2～12, 15) がある。7～10, 17～19は口縁部をゆるやかに外反させる皿である。口縁部はヨコナデ、体部はユビオサエによって仕上げる。口径によって7～9, 17～19と10の二種類に分類される。

緑釉陶器 同16は猿投産である。

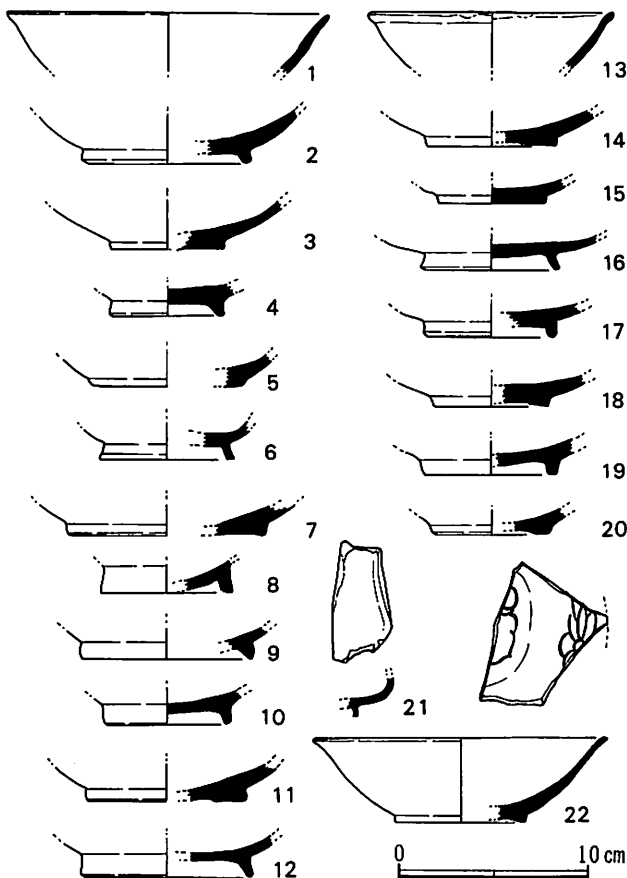
「て」の字口縁の端部を上方につまみ上げることや、皿の器種構成から考えて、鋤柄編年 (No. 23土壙6)



第70図 溝 (No. 200: 北区 E 5・6) 出土遺物



第71図 土坑 (No. 157: 南区 E 2) 出土遺物



第72図 南区出土緑釉陶器

1~4: A・B 2 セクション 5: A 3 6, 7: E 2-90 8, 9: E 3-137 10, 11: E 5 12: F 2 13, 14: B 2-114 15: A 2-25下層 16: B 2-153 17: B 3-23 18: C 2-154 19: D 3-13 20: D 3-27 21, 22: F 2

に属する。従ってこれらの遺物は 10世紀末～11世紀初頭に位置付けられる。

土坑 (南区 No. 157: E 2)

東西1.2m以上, 南北0.9m, 深さ約0.14mを測る方形土坑である。東は No. 155・156に切られ, かつ大きく No. 27に切られる。南も柱穴と重複するが, 新旧関係はつかめなかった。埋土はやや粘りけのある暗灰褐色土で, 拳大の礫を多く含む。

土師皿 (第71図 1~7) 褐色系D類 (1~3), 同E類 (4~7) から成る。E類は口縁部を強くヨコナデし, 端部をつまみ上げるものが多い。全て, 体部下半はユビオサエで仕上げるが, 5は特に強調されている。これらの土師皿は鋤柄編年 (No. 73土坑73) に併行し, 12世紀末～13世紀前半前葉に位置付けられる。

緑釉陶器 (第72図) 破片が多く, 器形の解るものは少ない。以下, 高台の形態から産地の判明するものを記述する。1, 2, 8, 14, 15, 18, 21, 22は猿投産である。21は耳皿である。22は内面に陰刻花文を有する。平尾編年 I 期新～II 期古⁴⁰⁾ に属する。810～870年頃に位置付けられる。6, 9, 12, 13,

16は胎土がスエ質を呈することから篠産であろう。3, 5, 19は胎土が黄橙色を呈し、軟質であることから洛北、洛西系と把えたい。

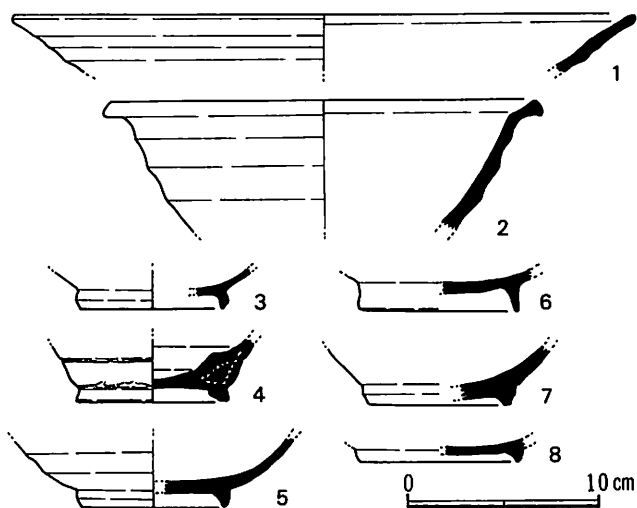
灰釉陶器 第73図1～8は須恵質で灰釉が掛かるもので、いわゆる灰釉陶器である。1は大きく開く口縁部をもつ。2は体部から屈曲して開く口縁部をもつ椀である。両者とも自然釉が掛かる。3～8は底部である。それぞれ底部の形態から以下に分類される。3は前川分類の椀A類に含まれ⁴⁹⁾、折戸53号窯式第2段階に属する。(以下、同分類、同編年を用いる。) 4は深鉢で6段階に属する。5は椀Aで第3段階に属する。6は深鉢で第4段階に属する。7は不明である。8は椀Aで第3段階に属する。

第74図1～8は灰釉陶器である。7は底部外面に「f」字状の墨書がある。

瓦器 (第75図) 1～4は瓦器である。1は皿で内面に暗紋を施す。瓦質ではあるが、形態は大和系の土師皿を模す。2～4は椀である。全て内面に暗紋を密に巡らし、外面には指頭圧痕が観取される。2, 4は口縁端部に沈線をもたず、内弯気味に立ち上がることから楠葉型であろう。宇治田編年⁵⁰⁾のⅢ-3期に相当する。3は口縁端部に沈線を巡らすことから大和型である。近江編年Ⅰ-4期に属し、12世紀前半～中葉に位置⁵¹⁾付けられる。

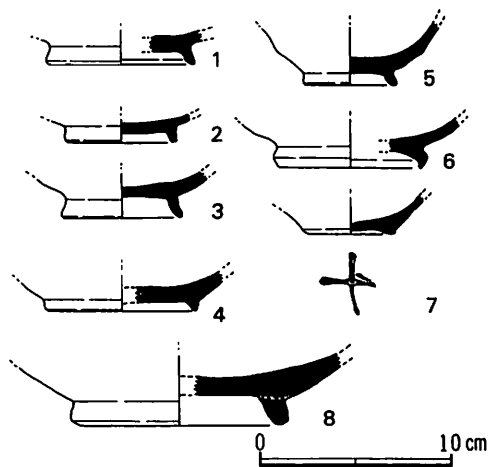
輸入陶磁 (南区, 第76図) 1は青磁碗である。体部外面は蓮弁を削り出し、縦方行の櫛目文を有する。横田・森田分類⁵²⁾・龍泉窯系碗Ⅰ-5 a類に属する。3は青磁皿で見込みは無文である。横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ-1 a類に属する。5は白磁碗で、横田・森田分類・V-2類に属する。16は青白磁の把手付小壺である。外面は削り出しによる花鳥文を有する。景德鎮窯系であろう。

9, 10, 11は玉縁状口縁をもつ白磁椀である。9は横田・森田分類のⅡ-1類に属する。北宋前半代である。10は同分類のⅣ-2類に属する。南宋前半代である。11は同分類のⅡ-1類に属する。北宋前半代である。12, 13は青磁皿である。12は横田・森田分類の同安窯系皿Ⅰ-2類に、13は同分類の同安窯系皿Ⅰ類に属する。15は青磁の壺である。16は把



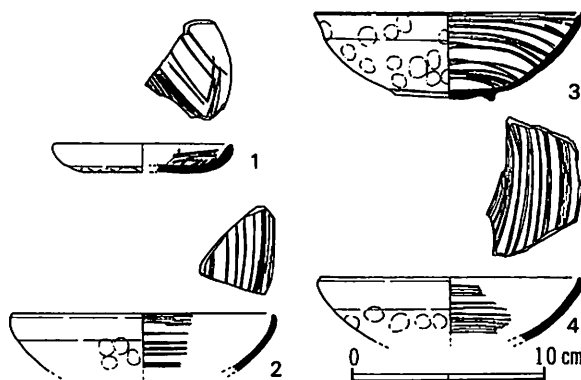
第73図 南区出土灰釉陶器

1 : B 3-42 2 : F 2・3-51 3 : B 2-26 4 : B 2-114 5 : E 2 6 : C 3-4 7 : C 3-73 8 : E 2-85



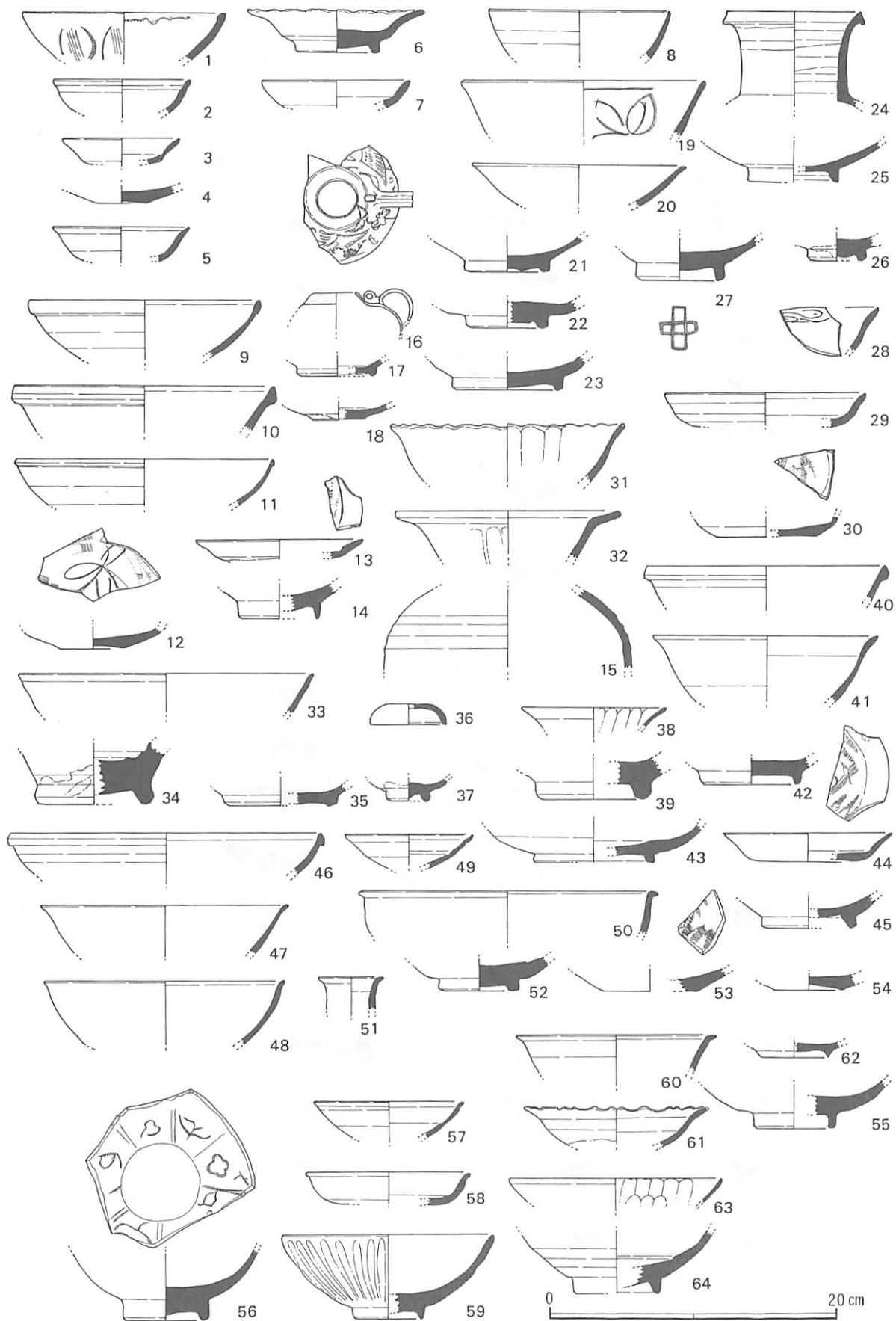
第74図 北区出土灰釉陶器

1 : E・F 5-21 2 : C・D 5 3 : D 5-88 4 : D 5・6-158 5 : A 4 6 : A・B 5-33 7 : D 4, C 5 8 : E 4-11



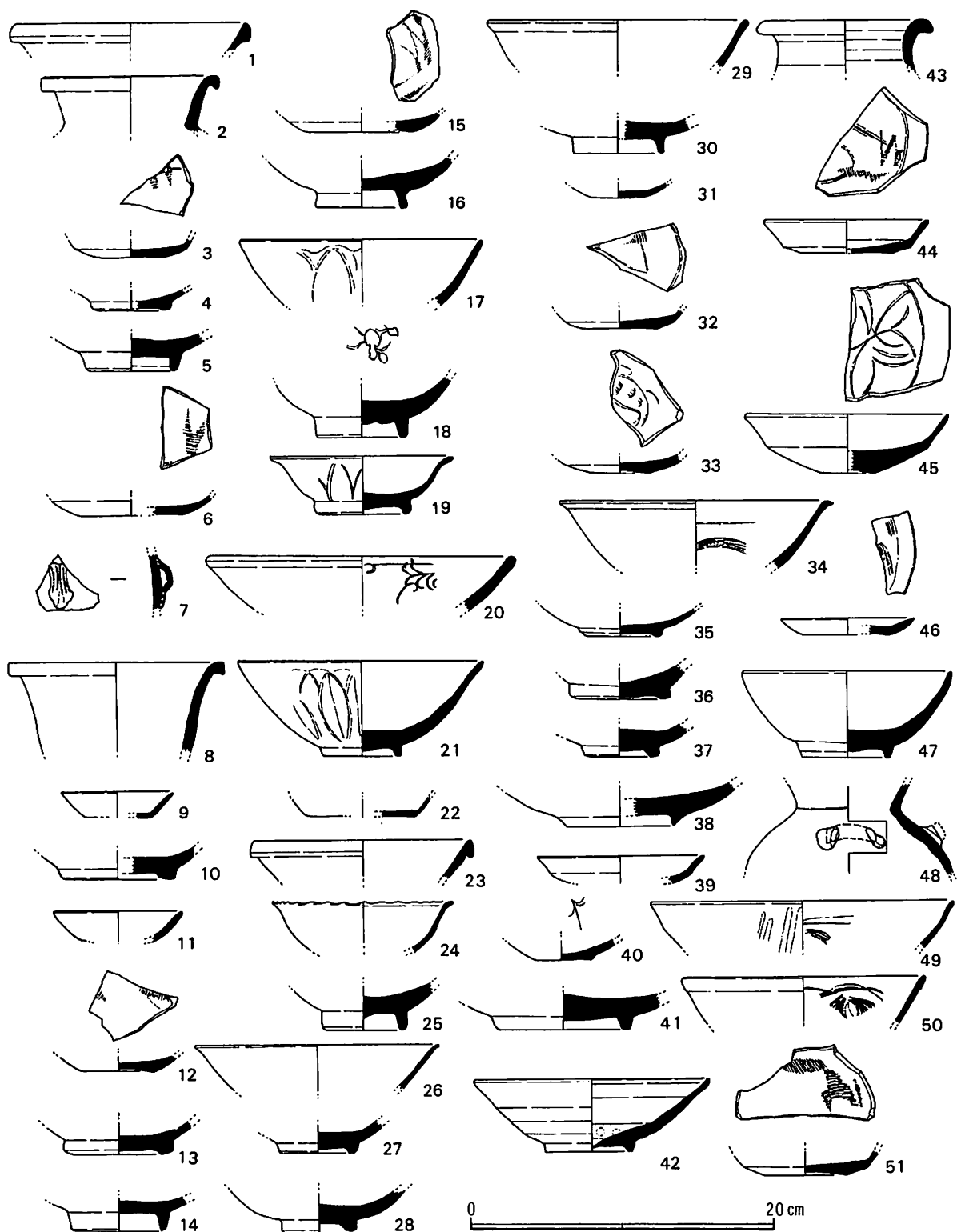
第75図 南区出土瓦器

1 : E 3-137 2, 4 : B 2-26 3 : A・B 2 セクション2層



第76図 南区出土輸入陶磁器

1~4 : A・B 3-34 5 : A 3-35 6 : A 4-2 7 : A 4-36 8 : A・B-5 9~15 : A・B 2 セクション
 ヌ 16 : B 2-2・3 下層 + A 3-159 17~19 : B 2-26 20 : A 3-35 21 : B 2-25 下層 22 : B 2-26
 23 : B 2-153 24~26 : B 3-42 27 : B 3-38 28 : B 4-51 東 29 : B 3-40 30 : B 3-38 31 : B 4-19
 32 : B 4・5-1 33 : C 2-159 34, 35 : C 2-154 36 : C 3-4 37, 38 : C 3-32 39 : C 3-33 40 :
 D 3 整地土 41~43 : D 3-13 44 : D 3-78 45 : D 4-125 46 : E 2-92 47~49 : E 2 50 : E 3-96
 51 : E 2-95 52 : E 2-156 53 : E 3-96 54 : E 2-140 55 : E 3-139 56~58 : F 2 59~60 : F 3
 61 : F 3-1 62 : F 3-2 層 63 : F 4-108 64 : G 2-142



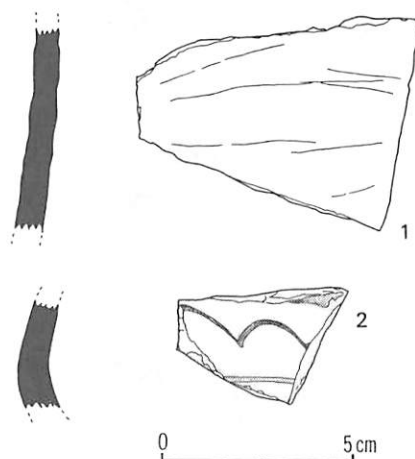
第77図 北区出土輸入陶磁器

1~4 : A・B 5 5 : A 2 6 : A 5 7 : D 4 周辺 8 : A 4-33 東 9 : E 4・5 10 : A 4-33 東
 11 : E 4・5 12 : E 5-90 13, 14 : D 6-158 15 : B 5 16 : C 4・5-7 17 : B 5-61 18~20 : B・
 C 4・5 21 : D 6, E 5 22 : E 4・5 23, 24 : E 5-36 25 : F 4 26~28 : D 6-158 29 : C 4・5
 30, 31 : C 4-126 32, 33 : D・C 5・6-132 34 : D 5-88 35 : D 4-32 36 : E 4 37 : E 4-12 38 :
 E 4-78 39 : E 5-93 40, 41 : F 5-127 42 : C 5 43~45 : D・C 5・6-132 46 : D 4-32 47 : D 4-
 125 48 : E 4・5-100 49 : D 4-142 50, 51 : D・C 5・6-157

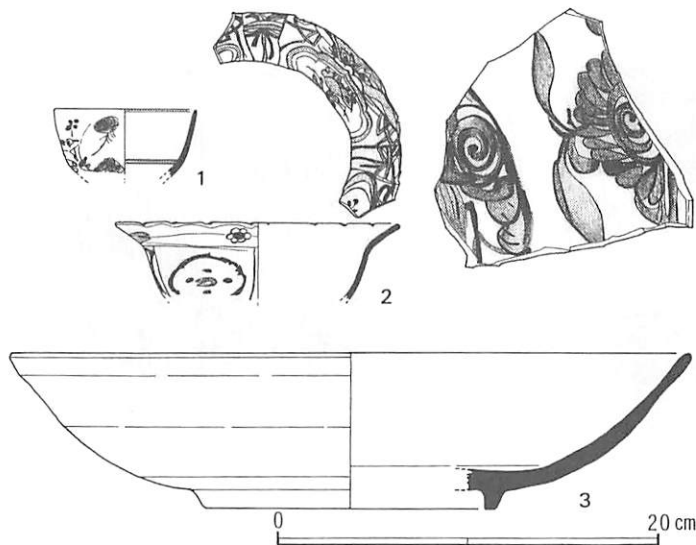
手の付いた青白磁である。19は内面に蓮華文を有する青磁碗である。横田・森田分類の龍泉窯系碗Ⅰ-2類に属する。20は白磁碗で、横田・森田分類のⅧ-1類に属する。12世紀初頭である。24は青磁壺である。下條分類G 4 D19に属する⁵³⁾。13世紀初頭であろう。27は青磁碗の底部であるが、外面に「申」の墨書がある。28は青磁碗で、口縁部内面に花文を有する。左京三条四坊四町⁵⁴⁾に出土例がある。景德鎮湖田窯系の可能性が有する。30は青磁皿で、横田・森田分類の同安窯系皿Ⅰ類に属する。31は青磁碗で、口縁部は菊花状を呈する。32は青磁皿である。口縁部は屈曲し、体部外面には鎬のない花卉文を有する。亀井分類の青磁A群皿Ⅰ類に属する。龍泉窯系である。36は青白磁の合子蓋である。景德鎮窯系であろう。40, 41は白磁碗である。40は玉縁状口縁をもち、横田・森田分類のⅣ-1類に属する。南宋前半代である。41は同分類のⅤ-2類に属する。44は青磁皿で、横田・森田分類の同安窯系皿Ⅰ類に属する。46~49は白磁碗である。46は玉縁状口縁を持つ。横田・森田分類のⅣ-1類に属する。南宋前半代である。47, 48は同分類のⅤ類に属する。50は白磁盤で、下條分類のG 4 D19に属する。13世紀初頭であろう。51は白磁壺である。53は青磁皿で、横田・森田分類の同安窯系皿Ⅰ類に属する。56は内面に片彫り文を有する青磁碗である。横田・森田分類の龍泉窯系碗Ⅰ-7類に属する。59も体部外面に削り出しの細長い蓮弁文を有する青磁碗である。横田・森田分類の龍泉窯系碗Ⅲ-2類、小野分類の青磁蓮弁文碗B群に属する。16世紀中葉であろう。61は白磁皿で、口縁部は菊花状を呈する。63は白磁皿で、内面に鎬葉状の陰刻を有する。

輸入陶磁 (北区, 第77・78・79図) ここでは北区から出土した、輸入陶磁のうち、共伴遺物が少なく、時期決定が困難なものや、包含層出土のものについて記載する。

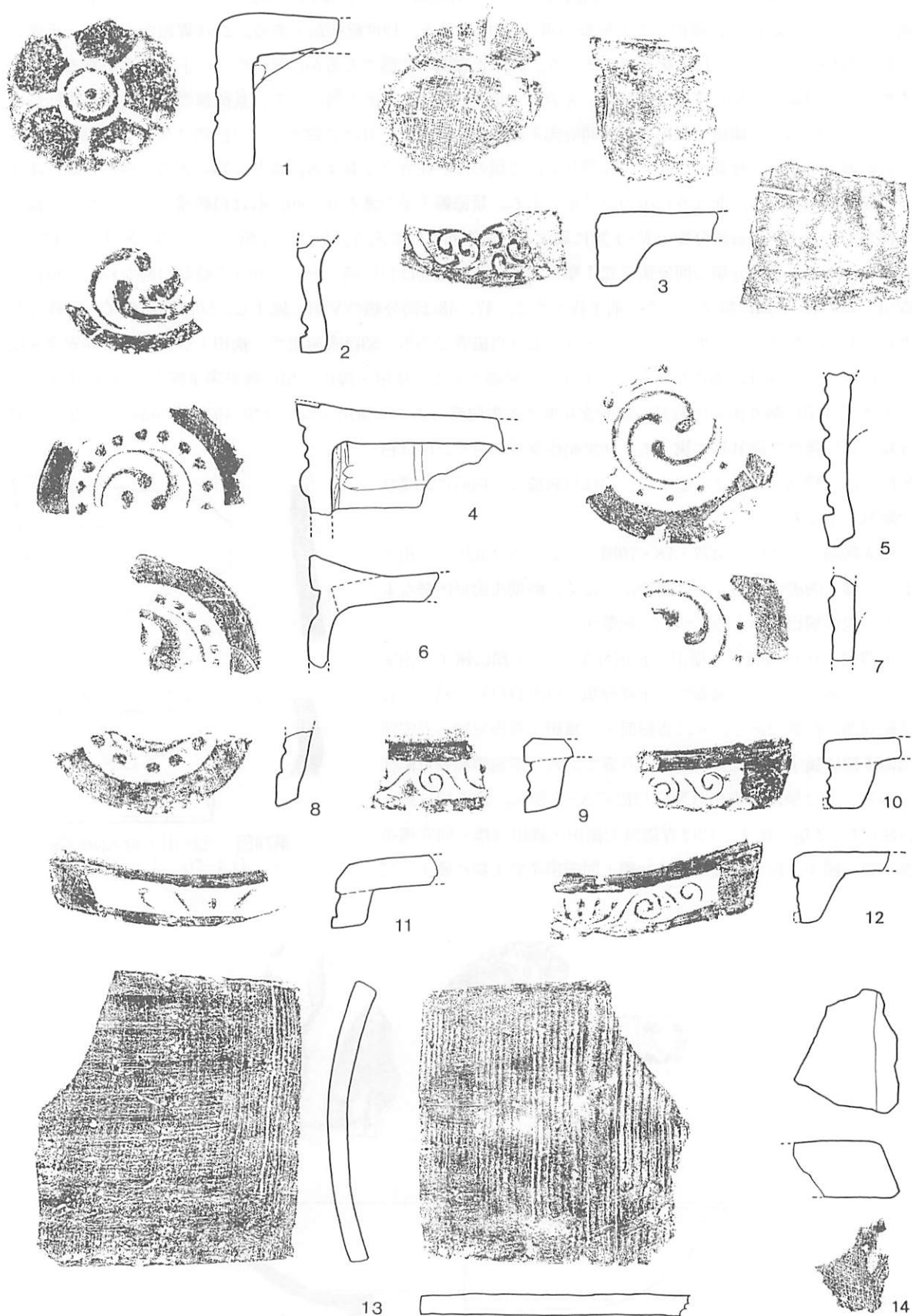
第77図1は白磁碗で、横田・森田分類・Ⅳ-1類に属す。南宋前半代である。2は白磁壺で、下條分類(G21D11)に属す。12世紀初頭~前葉である。6は青磁皿で、横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ類に属す。7は青白磁の四耳壺である。景德鎮窯の可能性が有する。9は横田・森田分類・白磁皿Ⅹ-2類に、11も同分類・白磁皿Ⅹ-2類に属す。12は青磁皿で横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ類に属す。15も青磁皿で同分類・同安窯系皿Ⅰ類に属す。17



第78図 北区出土輸入陶磁器
1 : D 4-70 2 : E 4-100



第79図 北区出土輸入陶磁器(染め付け)
1 : E 5-40 2 : C 4-7 3 : D・E 4・5-32



第80図 出土瓦

1 : E 2-31 2 : F 3-107 3 : E 3-96 4 : E 2 西南隅北部 5~7, 11 : F 2・3-51 8, 12 : F 3-107 9 : B 4-7 10 : A 4 13, 14 : A・B 2 セクション

は青磁碗で、体部に鏤のない蓮弁文をもつ。横田・森田分類・龍泉窯系碗Ⅰ-5類に属する。18も青磁碗である。見込みに花文様を有する。横田・森田分類・龍泉窯系碗Ⅰ-5c類に属する。19は青磁小碗である。横田・森田分類・龍泉窯系小碗Ⅲ-4類に属する。21は青磁碗で体部に鏤蓮弁をもつ。横田・森田分類・龍泉窯系碗Ⅰ-5b類に属する。42（図版第20-2）は李朝の茶碗である。見込みと高台には砂目が残る。暗青灰褐色を呈する。32, 33は共に青磁皿である。32は横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ類に属する。33は龍泉窯の可能性ある。34は内面に櫛目文を有する白磁碗である。横田・森田分類・Ⅴ-4類に属する。43は青磁皿で、横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ類に属する。44は内面に花文を有する青磁皿である。横田・森田分類・龍泉窯系皿Ⅰ-1b類に属する。45は青磁皿で、横田・森田分類・龍泉窯系皿Ⅰ-2類に属する。47は青白磁の四耳壺である。景德鎮窯の可能性ある。48は青磁碗である。体部外面には片彫り平行線を、内面にはクシ状工具による花文を有する。横田・森田分類・同安窯系碗Ⅲ-1類に属する。49は白磁碗で、内面にクシ状工具による花文を有する。50は青磁皿で、横田・森田分類・同安窯系皿Ⅰ類に属する。

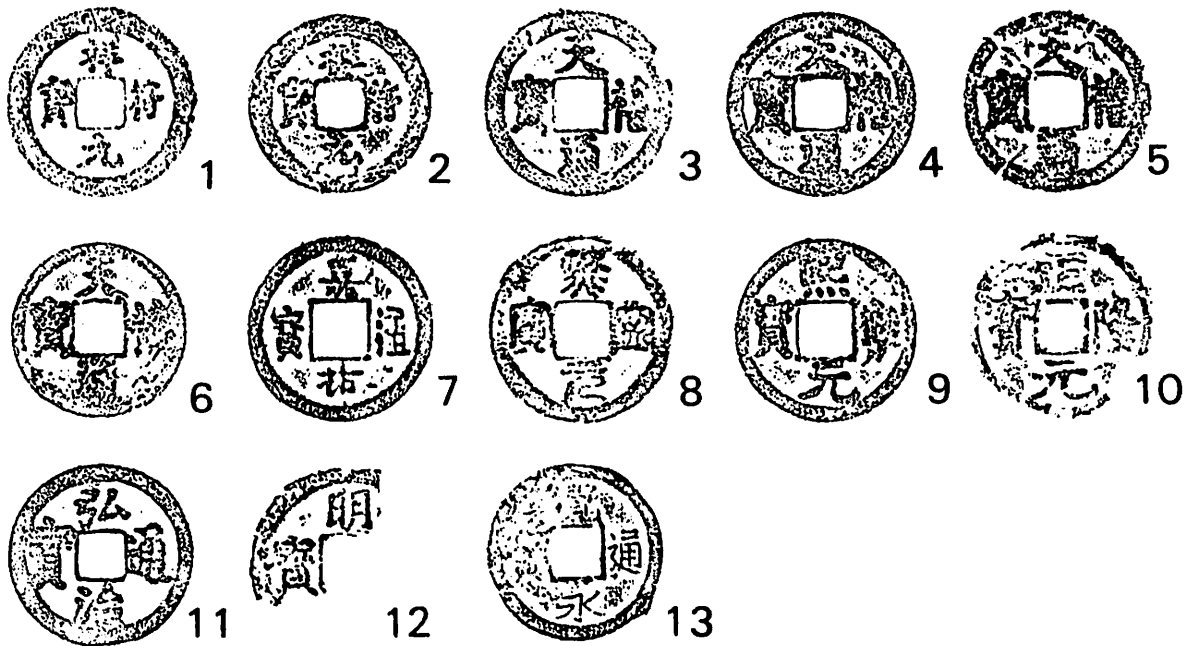
第78図1（図版第20-3）は李朝の粉青沙器の梅瓶である。内面は灰色を呈し、外面は白色の釉が掛かる。その上からハケ状工具による横方行の線条痕を施す。2は中国華南産の三彩である。外面には黄釉がかかり、文様部分は緑釉で仕上げている。左京五条二坊十六町⁵⁵⁾から出土例がある。晋江窯系の可能性ある。

第79図1, 2は中国製染付碗と鉢である。2（図版第20-1）は口縁部が外面し、端部は菊花状を呈する。見込みには花鳥文、口縁部内面には獣面が描れており、ヨーロッパではモンスターマスク⁵⁶⁾と呼ばれていたものである。明末頃にやや高級品として大量に焼かれ各地へ輸出された。3は大皿である。低火度で焼成されたもので、胎土は完全に磁器とは成っていない。黄橙色を呈する。内面には花文を有する。福建省産である。

瓦（第80図）出土瓦の総量はコンテナにして12箱分、うち平安時代から鎌倉時代にかけての瓦は2箱程度である。従って、平安時代の建物を想定するには無理がある。

14は緑釉ののし瓦である。凹面の布目痕が非常に細かく、また釉が濃緑色を呈している点などから平安時代前期と考えられる。1は平安時代中期、10世紀代と推定される単弁五葉蓮華文軒丸瓦である。圏線で表現された中房の中央に蓮子1個を配し、花卉は厚く盛りあがる。裏面には布目痕が残る。一本造りによるもので、砂粒や小石を含み、暗灰色を呈する。2, 3は共に12世紀代の軒瓦である。3は偏行唐草文の軒平瓦で、平瓦部凸面中央には十字のヘラ記号が認められる。砂粒・小石を多く含み、黄白色を呈する。凸面にはユビオサエがみられる。平安京内から多く出土する栗栖野瓦窯産の瓦である。2は瓦当面が楕円形を呈する三巴文軒丸瓦である。珠文帯はなく、外縁幅が狭い。裏面にはナデ調整を施す。瓦当と平瓦との接合角度が鈍く、また瓦当裏面が直線的でなくて凹み加減であることから、それ以外の三巴文軒平瓦よりは時期的に古く位置付けられる。4～8の三巴文軒平瓦はいずれも珠文を配し、外縁帯の幅も広い。9～12は均正唐草文軒平瓦である。唐草文が簡素で、胎土は砂粒を含んでいて粗い。これらの軒瓦はほぼ同時期、15～16世紀と考えられる。13は平瓦で、表面には14と比べてかなり粗い布目痕、凸面にはタタキ目が残る。はなれ砂を使用しており、時期は12～13世紀と推定されている。

錢貨 (第3表, 第81図)



第81図 南・北区出土錢貨拓影

第3表 平安京左京五条三坊八町出土錢貨一覽表

図版 番号	錢貨名	出土地	渡来国	初鑄年	書 体	錢 径 (A) mm	錢 径 (B) mm	内 径 (C) mm	内 径 (D) mm	錢 厚 mm	量 目 g	残存	備 考
1	祥符元寶	北区, No. 200	北宋	1009	楷	25.7	25.6	19.3	19.3	1.15~1.35	3.26	完	平安時代中 期南北溝よ り出土
2	祥符元寶	南区, F 3, 西南	北宋	1009	楷	24.15	24.2	18.75	18.5	1.05~1.1	2.24	完	
3	天禧通寶	北区, B 5, No. 62	北宋	1017	楷	25.7	25.65	20.4	20.5	1.2~1.4	3.62	一部欠	
4	天禧通寶	南区, F 3, 1層	北宋	1017	楷	25.2	25.25	20.8	20.5	1.05~1.2	3.36	完	
5	天禧通寶	南区, F 3, 西南	北宋	1017	楷	24.45	24.85	20.25	20.75	1.05~1.1	2.09	完	
6	天禧通寶	北区, D・E 4・5, No. 32 北半	北宋	1017	楷	23.35	23.4	19.5	20.2	0.08~1.0	2.03	完	
7	嘉祐通寶	北区, E 4, No. 79	北宋	1056	楷	24.55	24.55	20.4	20.25	1.12~1.3	3.26	完	背面上部に 右上りで一 本筋が入る
8	熙寧元寶	北区, E 4, No. 79	北宋	1068	篆	24.8	24.8	20.6	19.4	1.15~1.3	3.02	完	
9	熙寧元寶	北区, B 5, No. 61	北宋	1068	楷	24.55	24.3	20.2	20.85	0.9~1.35	3.15	完	
10	正隆元寶	北区, C 4	金	1157	楷	24.7	24.4	21.55	21.9	1.0~1.4	1.91	一部欠	
11	弘治通寶	南区, F 3, 1層	明	1488	楷	24.4	24.4	19.7	20.1	1.25~1.4	3.55	完	背面右下に 「一」
12	明 寶	北区, C 4, No. 4			楷	(24.0)	(24.0)	(21.0)	(21.0)	0.8~1.5	0.92	欠	
13	寬永通寶	北区, No. 118			楷	23.55	23.7	20.2	20.15	1.15~1.3	2.84	完	

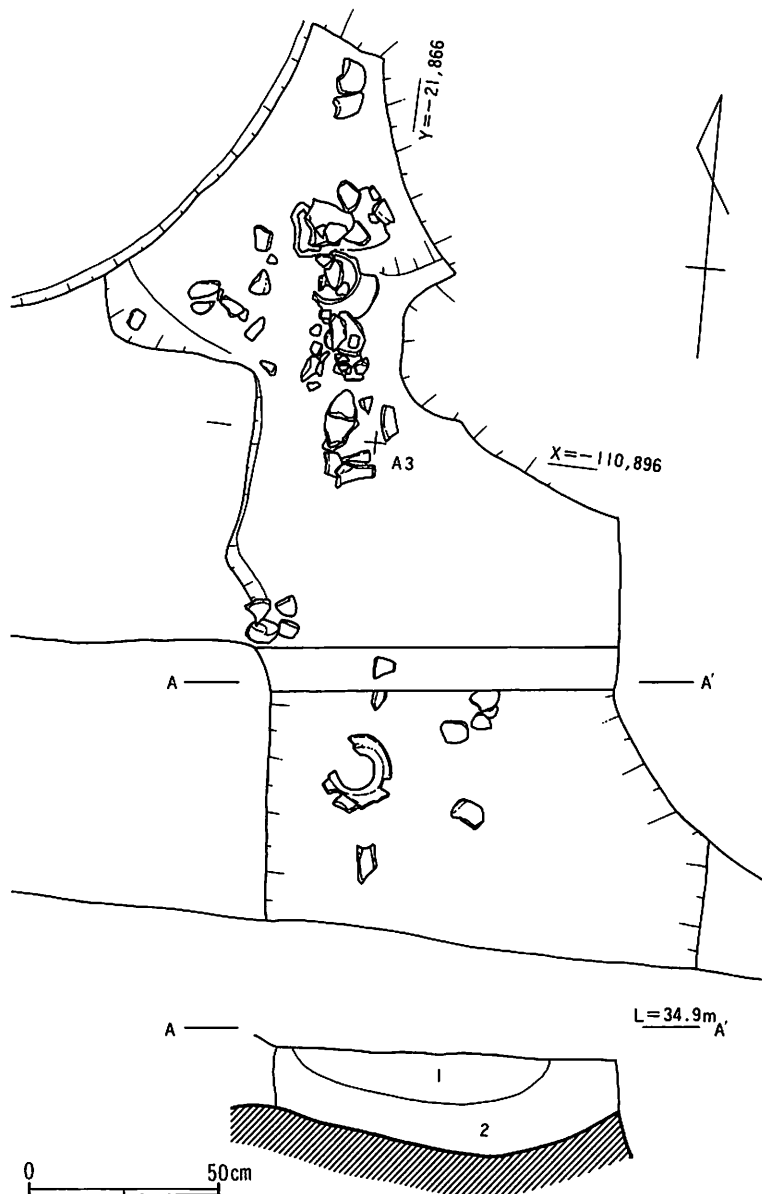
第5節 弥生時代

自然流路 (北区 No. 300 : A・B・C・D 5・6, 第82・83・84図, 図版第17・18)

現地表より2.4m下方で, 調査区の北端を東西に流れる幅約4.5mの自然流路を検出した。北西方向から流れてきて, 緩やかに屈曲して東へ流れている。

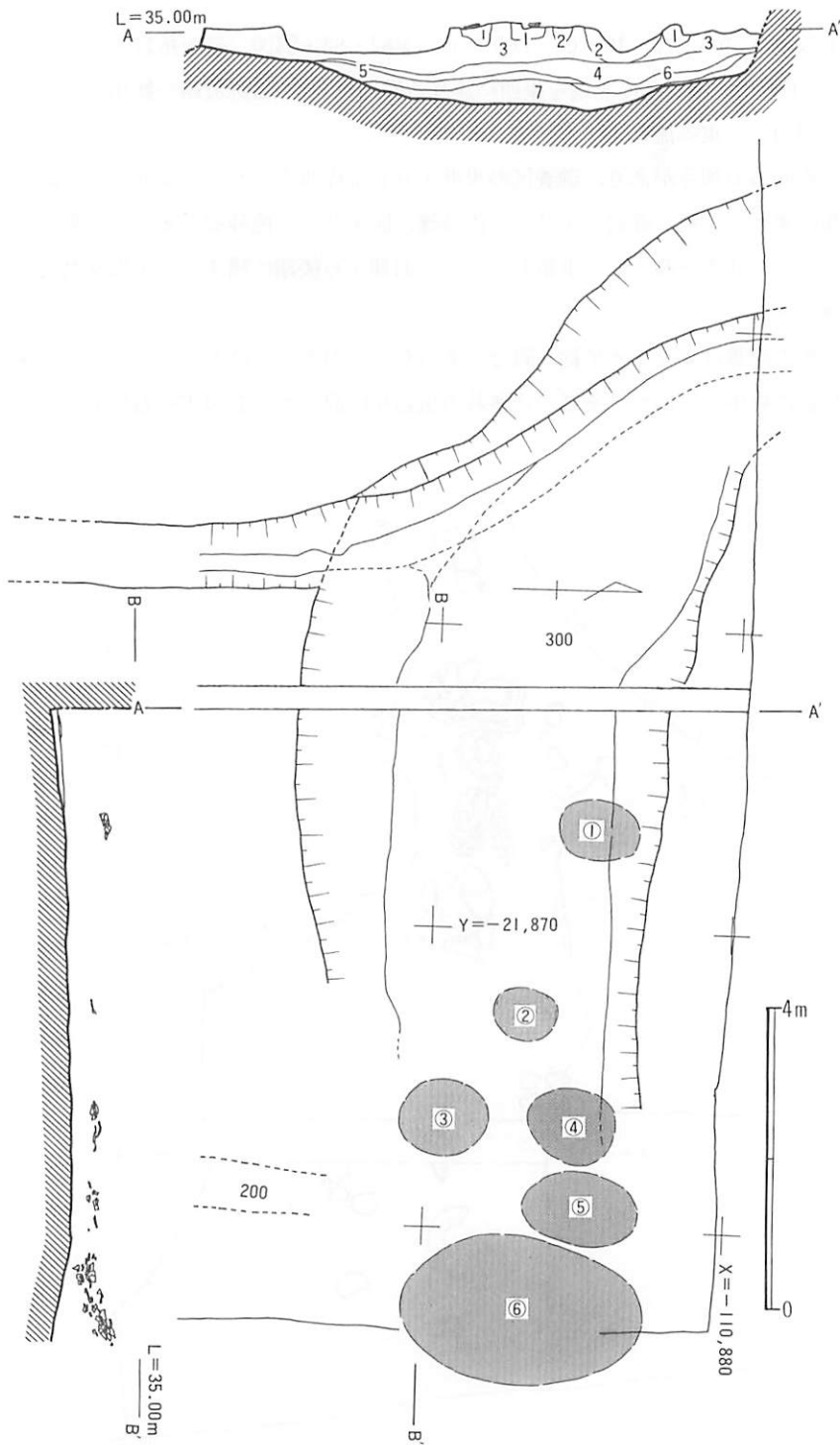
岸から河床まで約90cmの深さがあり, 調査区の東壁より8m程西方で残した南北アゼの断面(第83図)で見ると, 河床から順にオリーブ色砂礫層, オリーブ色砂礫, 灰オリーブ色砂層, オリーブ黄色シルト層, オリーブ褐色シルト層が若干, 北側を高くして堆積している。前期から後期に属す弥生土器を含むのは, このうち上方2枚のシルト層である。

出土した弥生土器の総量はコンテナで約3箱分であった。このうちのほとんどはアゼより東側で出土し, 特に調査区の東壁付近に集中していた。そこでは多数の土器片に混って, 石包丁や石剣も出土した。



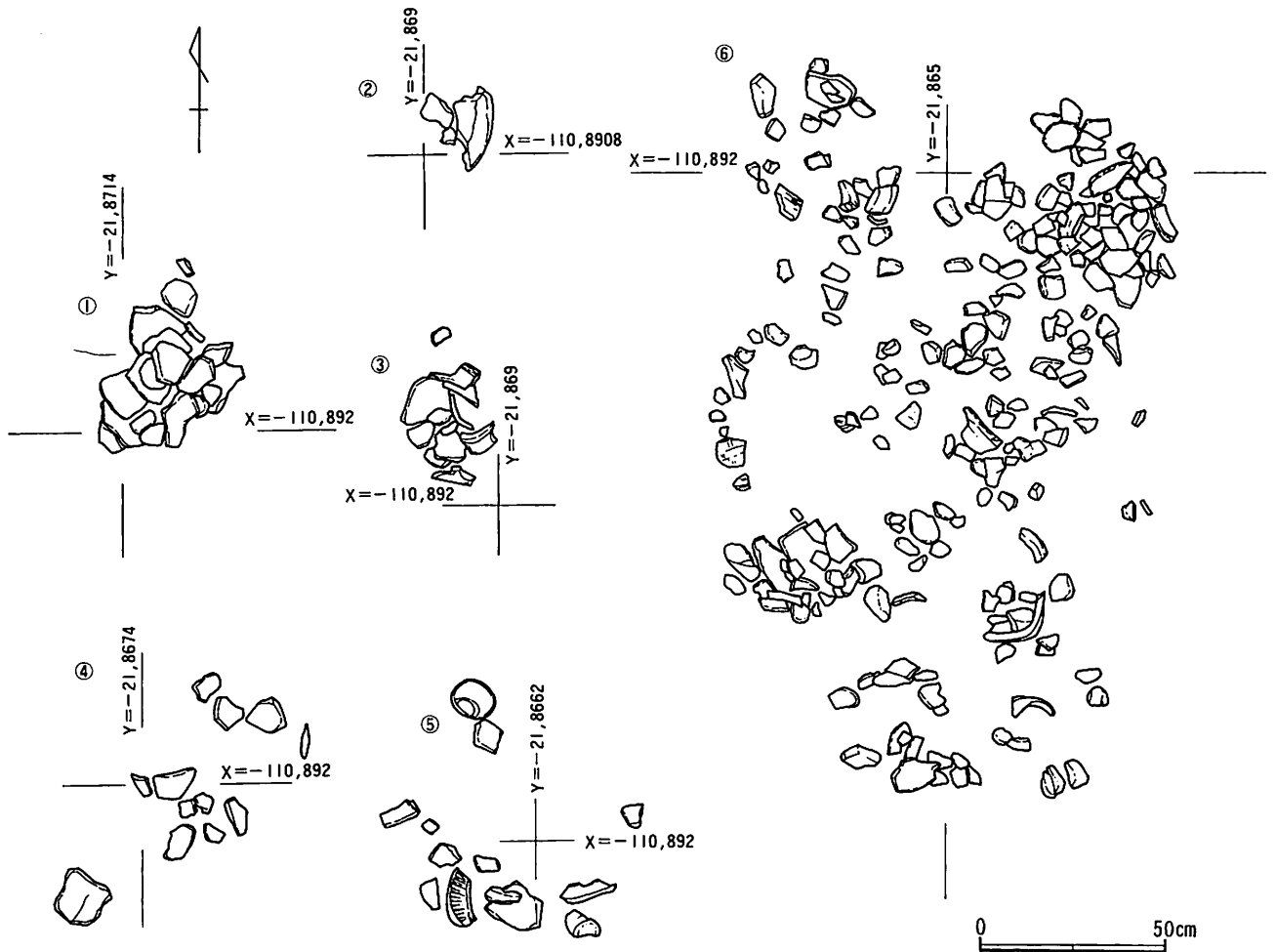
第82図 自然流路 (No. 200 : 南区 A 3・4) 遺構図

1. 2.5Y 6/3 鈍い黄色砂質土
2. 2.5Y 6/4 鈍い黄色砂泥



第83図 自然流路 (No. 300 : 北区) 弥生土器出土分布図

1. 2.5 Y 4/4 オリーブ褐色粘質土 (室町時代 遺物包含層)
2. 5 Y 3/2 オリーブ黒粘質土
3. 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色シルト (弥生時代 遺物包含層)
4. 2.5 Y 6/4 オリーブ黄色シルト (弥生時代 遺物包含層)
5. 5 Y 5/2 オリーブ色砂層 (やや粗い砂粒で所々に細礫を含む)
6. 5 Y 5/3 灰オリーブ砂層 (非常に細かい砂粒)
7. 5 Y 5/4 オリーブ色砂礫層 (弥生時代 遺物包含層)



第84図 自然流路 (No. 300 : 北区) 弥生土器出土状態図

この流路から南に分流する幅の狭い流路がある。川幅は約1mで、深さは約50cmである。先の流路西端の傾斜地を切り込み、北西方向から流れてくるが、流れを分かってからは、直線的に南下するようである。しかしながら、調査区南半では後世の遺構によって断ち切られているので詳細はわからない。

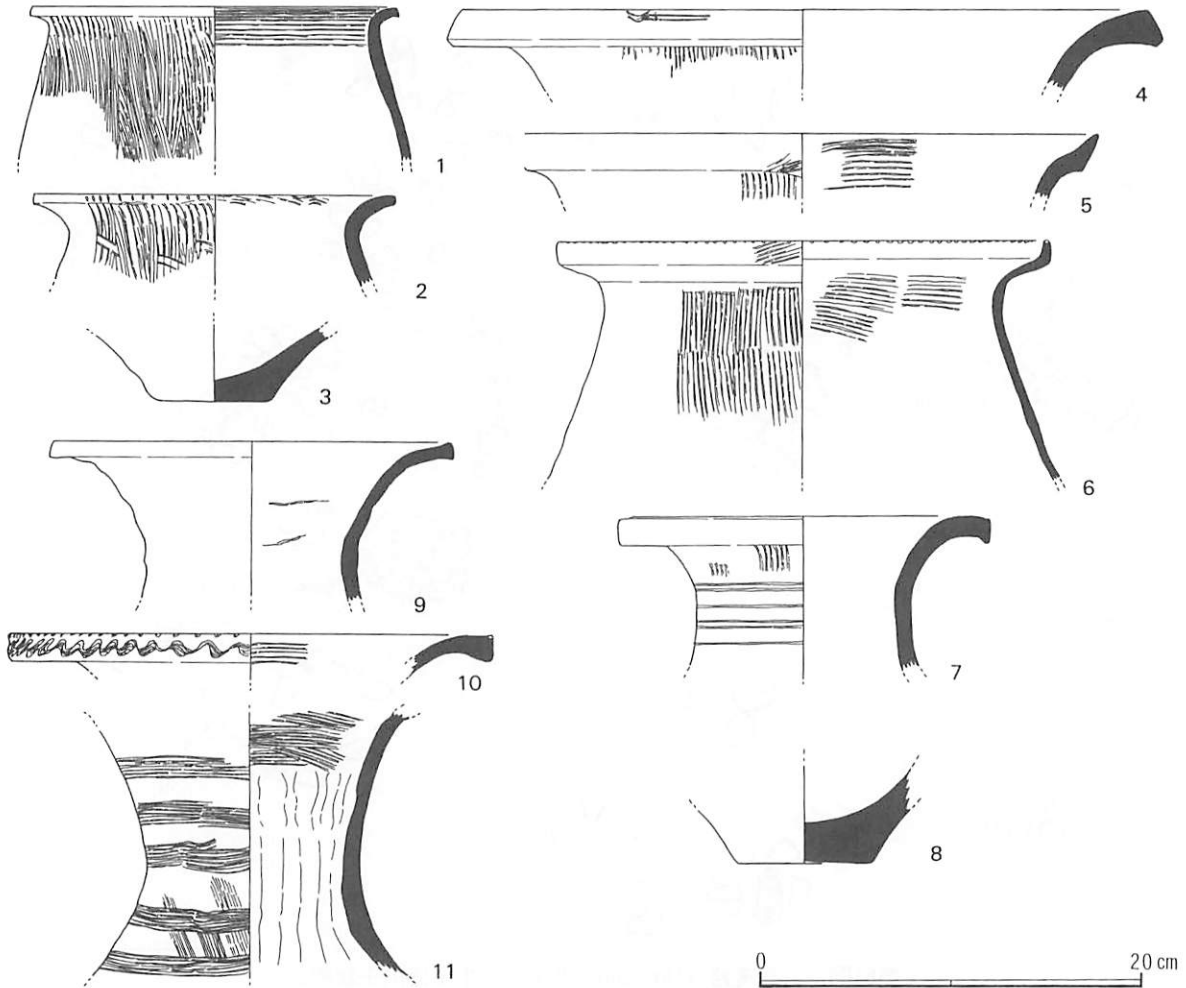
また、これとは異なる南北流路 (No. 200, 南区 : A3・4) を南区東方で検出し、コンテナ2箱分を採取した。幅は約70cmだが、後世の攪乱により詳細は不明で、北区で検出した東西流路との関係も握むことはできなかった。

弥生土器 (No. 200 : 南区, 第85図)

第85図1, 2は甕である。外面に粗いタテハケ, 口縁部内面にヨコハケを施す。色調は淡黄橙色を呈する。(他のものほとんど淡黄色を呈するものが多いため特に記述しない。) 2は口縁端部に刻み目を有する。3は底部である。9~11は壺である。10は口縁部である。端部は広い面をなし、波状文が巡る。上端は刻み目を有する。内面にはヨコハケを施す。11は頸部である。外面に時計回りにタテハケを施し、その後にクシ描直線文が巡る。内面はユビオサエによるナデで仕上げる。口縁部にはヨコハケを施す。4は口縁部である。端部は広い面を有し、波状文を施す。外面にはタテハケを施す。5, 6は甕である。口縁部は受け口状を呈する。近江系甕である。両者とも外面に粗いタテハケ, 内面にヨコハケを施す。端部は広い面をなし、斜め方向に粗いハケを施す。ハケの原体は内・外面と同一である。6は上端に刻み目を有する。7は壺である。頸部外面に半載竹管による直線文が巡る。一部に粗いタテハケが看取される。8は底部である。

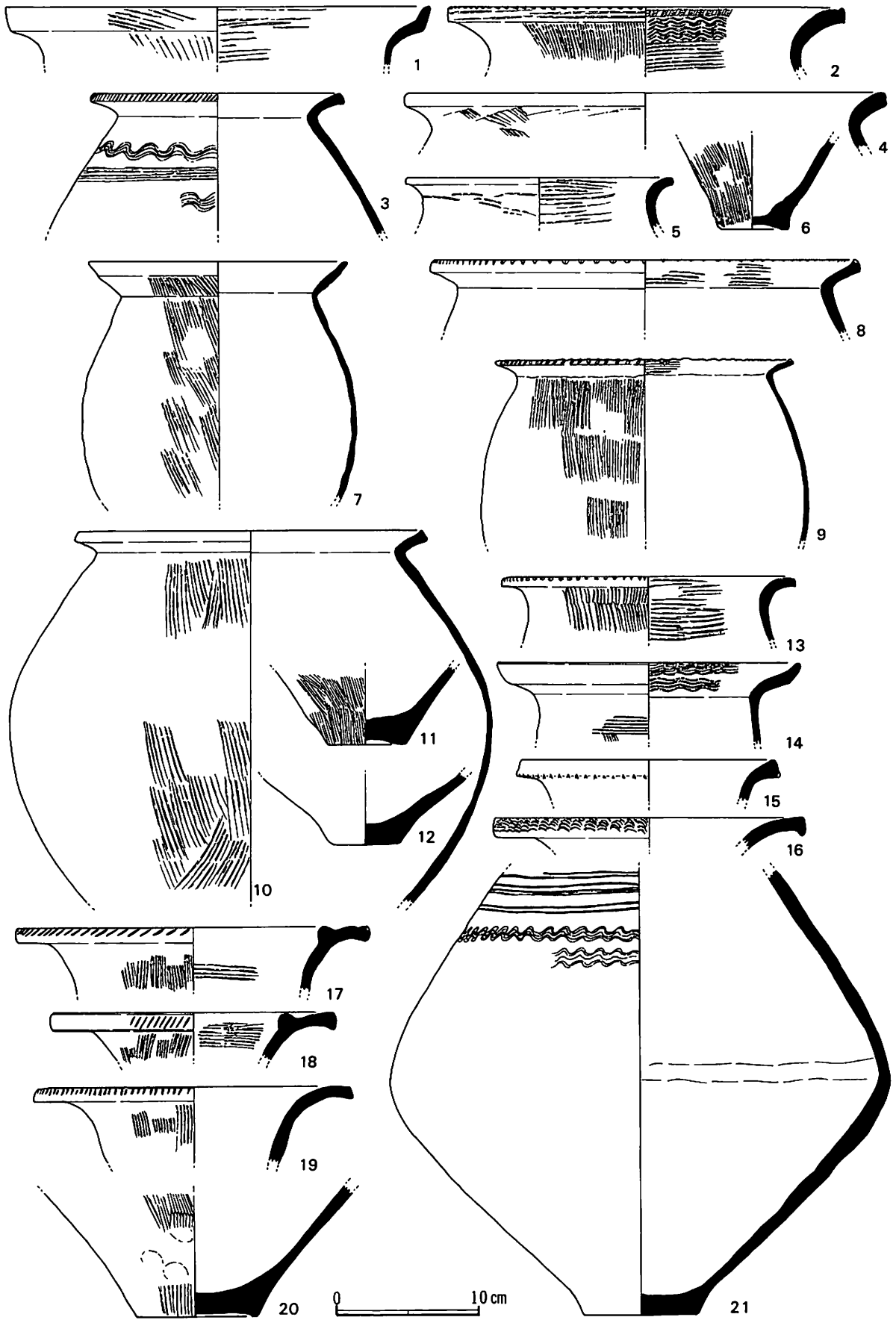
弥生土器 (No. 300 : 北区, 第86・87・88・89図)

第87図1~3は甕である。外面にタテハケ, 内面にヨコハケを施す。2は縦方向の板ナデを施す。端部には



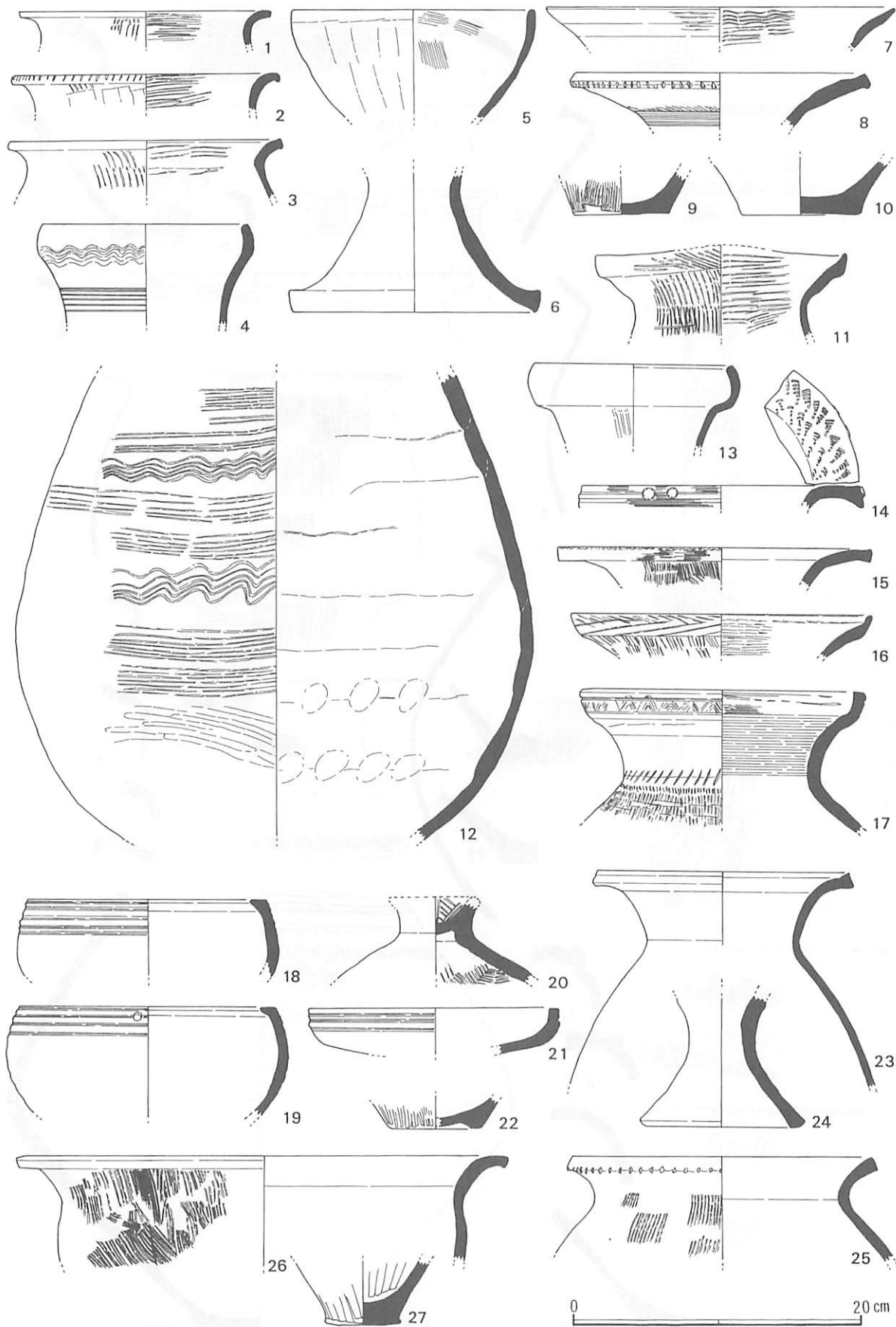
第85図 No. 200 出土弥生土器

刻み目を有する。4は壺である。口縁部は袋状を呈する。外面に櫛描直線文と波状文が巡る。5は鉢である。外面に縦方向の板ナデ、内面にヨコハケを施す。6は脚部である。7は近江系甕である。口縁部は上方に拡張され、内・外とも広い面をなす。内面に波状文、外面に直線文を有する。8は壺である。外面にタテハケを施し櫛描直線文が巡る。口縁部下端に刻み目を有する。9は底部である。外面にタテハケを施す。12(図版第20-5)は壺である。外面に粗い櫛描直線文と波状文が巡る。下半にヘラミガキを施す。内面には粘土紐の接合痕が看取される。10は底部である。11は近江系甕である。山形口縁を有する。外面には粗いタテハケ、内面はヨコハケを施す。口縁部には同一原体による斜め方向のハケを施す。13は壺である。口縁部は袋状を呈する。14~17, 23は壺である。14は口縁部である。外面には円形の貼付文を有する。内面には櫛状工具による扇形文二重に配する。15は外面にタテハケを施す。上端には刻み目を有する。16, 17は受け口状口縁を有する。16は外面に粗いタテハケ、内面にヨコハケを施す。端部外面には同一原体による斜め方向のハケを施す。17は頸部に瓜形文を配し、胴部には粗いタテハケを施す。頸部内面には細かいヨコハケが巡る。口縁部外面には櫛状工具による波状文を施し、その上に一条の凹線が巡る。24は脚部である。20は蓋である。つまみと体部内面にクモの巣状の粗いハケを施す。21は高杯杯部である。外面に3条の凹線が巡る。22, 27は底部である。両者とも外面に縦方向の細かい板ナデを施す。27は内面にも同様の板ナデを施す。18, 19は台付鉢の杯部である。口縁部は内側に水平に突出する。18は外面に5条, 19は4条の凹線が巡る。19は口縁部に一孔を穿つ。26, 25は甕である。両者とも外面に粗いタテハケを施す。25は口縁部下端に刻み目を有する。第86図1~4, 7は甕である。1は近江系である。受け口状口縁を有する。外面に粗いタテハケ、内面にヨコハケを施す。口縁部外面に



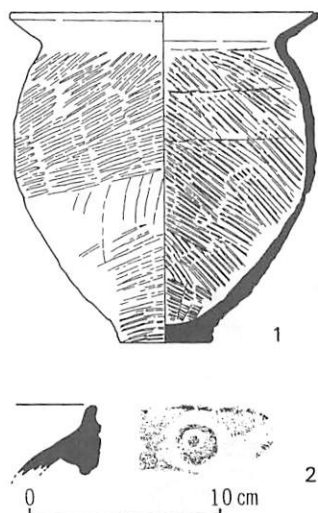
第86図 No. 300 出土弥生土器

1～6：アゼ以東4 7：アゼ以東3 8～20：アゼ以東6 21：アゼ以東1



第87図 No. 300 出土弥生土器

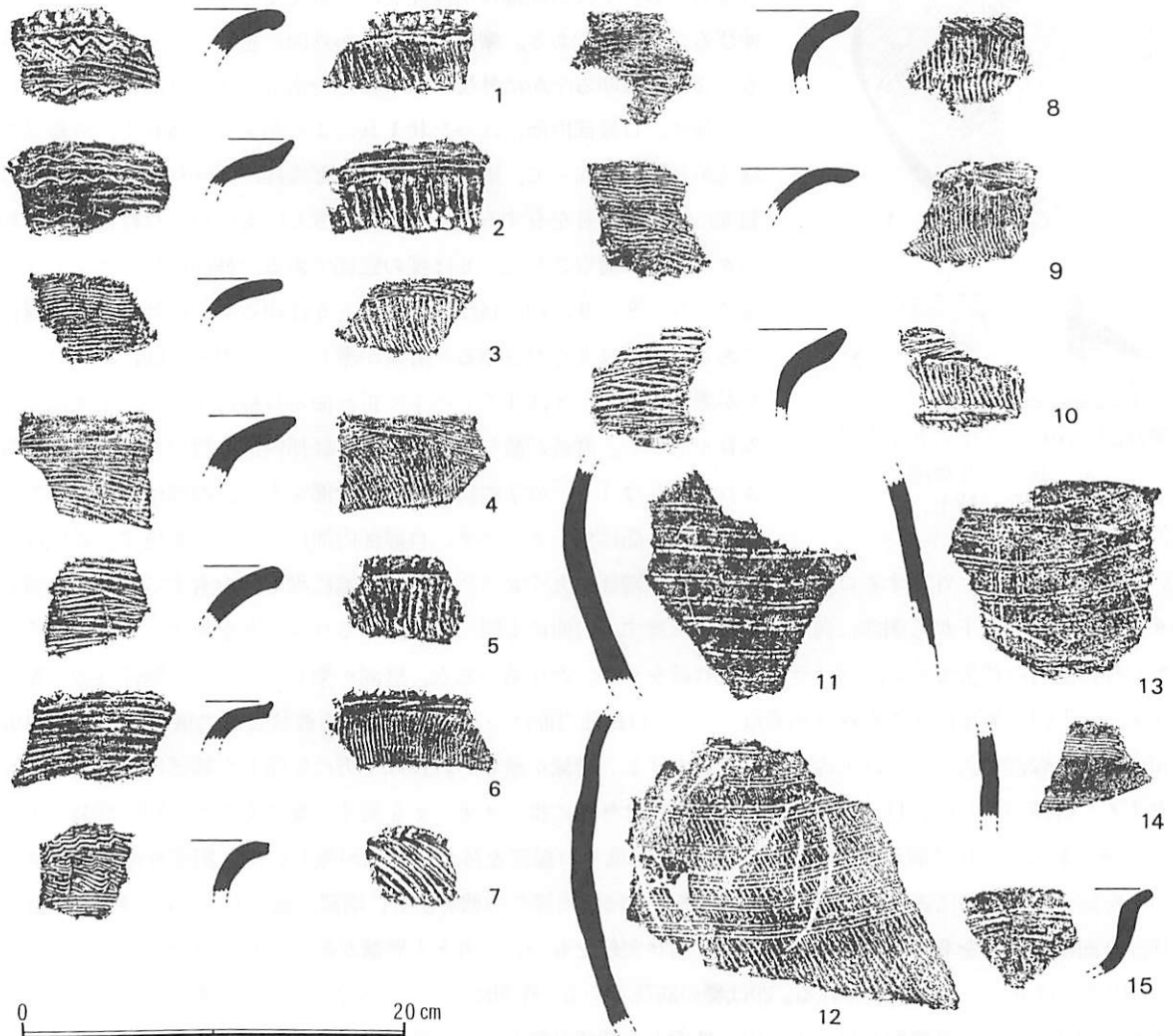
1～4 : A 4 北側泥砂 5～9 : A 5 10 : B 2-39 11 : B 4 12 : A 3 周辺 13 : E 5 断ち割 2
 14～17, 20～24, 27 : B 5 18, 19 : C 5 25 : 33東 26 : D 5



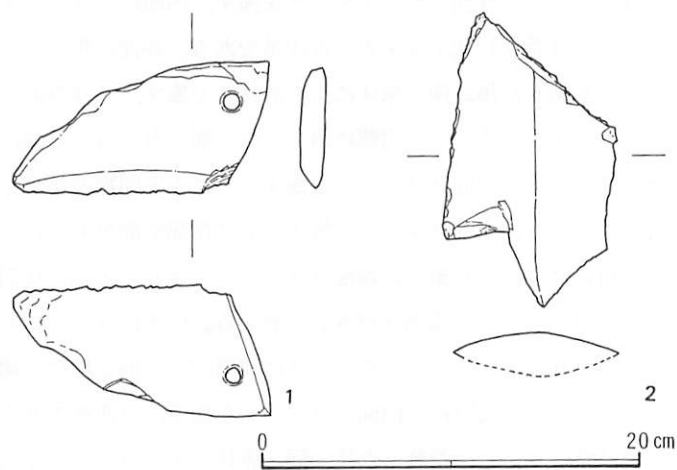
第88図 No. 300 出土弥生土器

- 1 : B 4 北砂泥
2 : D 5 粘土

は斜めのハケを施す。3は「く」の字に折れ曲がる口縁部をもつ。胴部外面に櫛描直線文と波状文が巡る。近江系であろう。口縁端部には刻み目を有する。7は口縁部は明確な受け口状を呈さず、上方にゆるやかに伸びる。近江系である。磨滅が激しいが外面に粗いタテハケが看取される。2, 4はゆるやかに外反する口縁部である。2は外面に粗いタテハケを施す。口縁部内面にはハケ状工具による刺突文, 波状文, 直線文を端部から頸部に向って, 順に施す。口縁部端部にはヨコハケ, 上端には刺突による刻み目を有する。4は磨滅が激しいものの, 口縁部外面に粗いタテハケが看取される。6は甕の底部である。外面に粗いタテハケを施す。5, 8, 9, 13, 14は甕である。5はゆるやかに外反する口縁部である。端部は丸くおさめる。磨滅が激しいが, 内・外面に粗いヨコハケが看取される。8は「く」の字に折れ曲る口縁部をもつ。上端には刻み目を有する。磨滅が激しいものの, 口縁部内面に粗いヨコハケが看取される。9は「く」の字に折れ曲る口縁部をもつ。端部は刻み目を有する。同部外面に粗いタテハケ, 口縁部内面にヨコハケを施す。器壁は薄い。13はゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめるが, 上端に刻み目を有する。外面に粗いタテハケを口縁直下から胴部に向って二段階に施す。内面にも同一原体によるヨコハケを施す。これは「大和型」甕に通用の技法である。14は受け口状口縁をもつ。近江系である。磨滅が激しいものの, 胴部外面に粗いタテハケと同一原体による直線文が看取される。口縁部内面はハケ状工具による波状文が二重に配される。15, 16は壺の口縁部である。15は下端に刻み目を有する。磨滅が激しい。16は下方に拡張した端部に櫛描波状文を有する。磨滅が激しい。11, 12は底部である。11は外面に粗いタテハケを施す。甕であろう。12は磨滅が激しい。壺であろう。10は胴が張り, 「く」の字に折れ曲る口縁部を持つ。磨滅が激しいが, 胴部外面に粗いタテハケを施す。17~19は壺の口縁部である。三者ともほぼ同様の形態を呈し, 端部は面をなす。17, 19は上端に, 18は全面に刻み目を有する。17, 18は内面に瘤状突起をもつ。三者とも磨滅が激しいが, 外面には粗いタテハケ, 内面にはヨコハケが看取される。20は甕の底部である。外面にタテハケを施し, 指頭圧痕が看取される。21は壺の胴部である。算盤形を呈する。内・外面とも磨滅が激しいが, 外面に半載竹管による直線文と櫛描直線文が看取される。内面には粘土紐の接合痕が残る。第89図1~10は口縁部である。1は端部を丸く納め, わずかに下方に拡張する。刻み目を有する。外面は粗いタテハケを施す。内面はヨコハケを施した後に, 同一原体による波状文を二重に配する。2は受け口状を呈する。近江系である。外面に粗いタテハケ, 端面にヨコハケを施す。内面は, 粗いヨコハケを施した後, 同一原体による波状文を施す。3は外面に粗いタテハケ, 端部にはヨコハケを施す。内面はヨコハケを施す。4は端部に斜めに広い面を有する。外面に粗いタテハケを施した後, 端面にはヨコハケを無造作に施す。内面はヨコハケを施す。5は1と同様の形態を呈する。端部に刻み目を有する。外面には粗いタテハケ, 内面にはヨコハケを施す。6は端部に面をもち, 上端はつまみ上げる。外面は細かいタテハケ, 内面は粗いヨコハケを施す。端部はヨコハケを施し, 上端には刻み目を有する。7は端部に面をもつ。外面は粗いタテハケを施し, 端部は刻み目を有する。内面にはハケ状の波状文を二段階に重ねて施す。8は端部にナメハケ, 外面にタテハケを施す。9は端部に広い面を持つ。端面には粗いヨコハケを施す。外面には粗いタテハケを上から二段階に, 内面はヨコハケを施す。近江系である。10は端部に広い面をもち, 山形口縁である。外面は粗いタテハケを施した後, 同一原体によるヨコハケを施す。内面にはヨコハケを施す。近江系である。11~15は壺の胴部である。11は半載竹管による直線文を施す。12は粗いタテハケをほどこした後, 櫛描直線文を施す。13は縦方向の櫛描直線文の上に横方向の直線文を施す。14は櫛描直線文を施す。15は鉢である。口縁部は短く外反する。櫛描直線文を施す。



第89圖 No. 300 出土弥生土器



第90圖 No. 300 出土石器
1 : A 4 北側上層 (砂泥) 2 : D 5 粘土

第88図1は甕である。「く」の字に折れ曲る口縁部を持つ。外面は左上りのタタキを施す。胴部中央は板ナデによってタタキ目が消される。内面は右上りの粗いハケを施す。底部にはクモノ巣状ハケが看取される。第5様式である。2は壺もしくは器台の口縁部である。円形浮文を配する。黄白色を呈する。これらの遺物は200はⅡ様式末～Ⅲ様式前半⁵⁷⁾、300はⅢ様式新～Ⅴ様式の特徴を有する。

石器 (第90図1・2)

1は石包丁である。半月形直刃である。紐を通す孔を穿つ。粘板岩製である。2は石剣である。中央に鑿を有する。上下は欠損する。破損が激しい。粘板岩製である。

参考文献

鋤柄俊夫『平安京出土土師器の諸問題』(『平安京出土土師器の研究』財)古代学協会、京都、平成6年)以下、土師皿の編年はこれに従う。
古伊万里については西田宏子・大橋康二『別冊太陽・古伊

万里』(東京、平成2年)を参考にした。
平安博物館編『平安京古瓦図録』(東京、昭和52年)年代観を含め、瓦全般に亘って植山 茂氏のご教示をいただいた。

註

- 1) 渡辺 誠『焼塩壺』(『平安京土御門烏丸内裏跡』[財]古代学協会、京都、昭和58年)
- 2) 小林 克『近世照明具研究へのアプローチ』(『季刊考古学』第53号、東京、平成7年)
- 3) 森 毅『16・17世紀における陶磁器の様相とその流通』(『ヒストリア』第149号、大阪歴史学会、大阪、平成7年)
- 4) 大橋康二、西田宏子『古伊万里』(『別冊太陽』63、東京、昭和62年)
- 5) 森 毅『16、17世紀における陶磁器の様相とその流通』(前掲)
- 6) 小林 克『近世照明具研究へのアプローチ』(前掲)
- 7) 大橋康二、西田宏子『古伊万里』(前掲)
- 8) 小林謙一・両角まり『江戸における近世土師質塩壺類の研究』(『東京考古』10、東京考古学談話会、東京、平成4年)
- 9) 大橋康二『国内出土の肥前陶磁』(九州陶磁文化館、佐賀、昭和59年)、小川 望「泉州麻生」の刻印をもつ焼塩壺に関する一考察』(『日本考古学』第1号、日本考古学協会、東京、平成6年)、小川 望他『江戸時代の遺物』(『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室、東京、平成2年)。
- 10) 鋤柄俊夫『平安京出土土師器の諸問題』(『平安京出土土師器の研究』所収古代学研究所報告第四輯、京都、平成6年)。以下土師皿の年代はこれに従う。
- 11) 近江俊秀『中世びとのくらしと喜怒哀楽』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、橿原、平成6年)。
- 12) 百瀬正恒・辻 裕司・南 孝雄「平安京左京五条三坊」(『平成二年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都、1994)
- 13) 網 伸也・山本雅和「平安京左京八条三坊の発掘調査」(『日本史研究』409、京都、1996)
- 14) 中野晴久『生産地における編年について』(『常滑焼と中世社会』小学館、東京、平成7年)
- 15) 間壁忠彦『備前焼』(『考古学ライブラリー』60、ニューサイエンス社、東京、平成3年)
- 16) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(『中近世土器の基礎研究』Ⅳ、日本中世土器研究会、高槻、昭和63年)
- 17) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
- 18) 佐々木英夫・寺島孝一・横田洋三『平安京左京五条三坊十五町』(『平安京跡研究調査報告』第5輯、(財)古代学協会、京都、1981)報告の「墓C」からは木片と釘が出土しているが、本遺構のNo. 36にみられる杭穴も検出されている。
- 19) 鎌倉の鶴岡八幡宮境内地から、八幡宮創建以前の層位より二体の男女合葬人骨と墓坑が検出されている。涅槃位で葬られた男女の人骨周辺には無数の浅い杭穴が検出され、また周囲には錯乱した五輪塔、碑伝などの塔婆類が出土し、層位より上述の合葬墓と同時期と推定されている(松尾宣方はか『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)』鎌倉市教育委員会、鎌倉、1985)。
方形土坑底面の杭穴を鎌倉の例と同じく塔婆を立てた痕跡とみても、床面に杭穴があり、かつその深さを考えると墓上から50cmも打ち込むとは考え難い。
- 20) 堀内明博「穴蔵に関する遺構群をめぐって—中世から近世に至る京都検出の地下式土坑群の類型化と変遷—」(『関西近世考古学研究』Ⅲ、大阪、1992)
註1報告の「墓C」も同じ類型である。
- 21) 森下大輔・宮原文隆「横穴式木室について」(加東郡教育委員会編『名草3号墳・4号墳』、兵庫県、1984)
- 22) 堀内氏は、B類②-0の性格づけとして、他の類型に比べて小規模であることに留意しながらも収納施設の可能性を指摘され、他にトイレなどの機能も考えられている。堀内氏前掲註3。
- 23) 鎮めの儀礼とするなら、民俗的な見地からの検討が必要となろう。日本人は古来より多くの神を祭ってきた。民間信仰による家神もまたそうで、竈神・廁神や納戸や倉にも神がいたとする。廁神の例では普請の時、便壺の下に人形・扇・麻・化粧道具を埋めるといふ。(飯島吉晴『竈神と廁神—異界と此の世の境』、京都、1986)。
- 24) 市内で類例は多くみられ、水溜め遺構と報告されるものも形状が非常に似通っている。尾藤徳行・竜子正彦・伊藤 潔「左京四条三坊十一町(91HL367)」(『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度、京都市文化観光局、

- 1993)。吉村正親・吉本健吾・竜子正彦「左京五条二坊十町(93HL432)」(『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度,京都市文化観光局,1995)など。但し杭は断面方形である。この遺構の機能解明については今後の資料の増加を待ち、ここでは方形土坑として報告しておく。
- 25) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
 - 26) 森田 勉『滑石製容器』(『佛教藝術』148,東京,昭和58年)
 - 27) 木戸雅寿『石鍋の生産と流通について』(『中近世土器の基礎研究』Ⅱ,日本中世土器研究会,高槻,平成5年)
 - 28) 中野晴久『生産地における編年について』(前掲)
 - 29) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
 - 30) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
 - 31) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
 - 32) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(前掲)
 - 33) 滋賀県余呉町下余呉八幡社崩れ谷出土土器に類例がある。余呉町教育委員会,〔財〕滋賀県文化財保護協会『余呉町埋蔵文化財発掘調査報告書』1(大津,昭和60年)
 - 34) 寺島孝一他『魚住古窯跡群発掘調査報告書』(明石市教育委員会,平安博物館,京都,昭和60年)
 - 35) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ(京都,昭和57年)
 - 36) 中野晴久『生産地における編年について』(前掲)
 - 37) 宇野隆夫『白河北壁北辺の土器・陶磁器』(『白河北壁北辺の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅱ,京都,昭和56年)
 - 38) 近江俊秀『大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討』(『古代文化』第43巻第10号,財団法人古代学協会,京都,平成3年)
 - 39) 寺島孝一『平安京左京七条三坊五町』(平安京跡研究調査報告第15輯,京都,昭和60年)
 - 40) 南 博史『吉田近衛町遺跡』(京都文化博物館調査報告第4集,京都,平成3年)
 - 41) 明石市教育委員会,平安博物館『魚住古窯跡群発掘調査報告書』(前掲)
 - 42) 中野晴久『生産地における編年について』(前掲)
 - 43) 横田賢次郎,森田 勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』(『九州歴史資料館研究論集』4,太宰府,昭和52年)
 - 44) 森田 勉『滑石製容器』(前掲)
 - 45) 九州歴史資料館『太宰府史跡』(太宰府,平成2年)
 - 46) 前川 要『猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ,瀬戸市歴史民俗資料館,瀬戸,昭和59年)
 - 47) 森 隆『西日本の黒色土器生産(上)』(『考古学研究』第37巻第2号,考古学研究会,岡山,平成4年)
 - 48) 平尾政幸『緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器』(『平安京提要』所収,京都,(財)古代学協会,平成6年)
 - 49) 前川 要『猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相』(前掲)
 - 50) 宇治田和生『河内国・楠葉牧における土器生産の展開』(『ヒストリア』第133号,大阪歴史学会,大阪,平成3年)
 - 51) 近江俊秀『大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討』(前掲)
 - 52) 横田賢次郎,森田 勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』(前掲)以下の分類はこれに従う
 - 53) 下條信行『後論第2節輸入陶磁について』(『平安京左京八條三坊二町』〔財〕古代学協会,京都,昭和58年)
 - 54) 植山 茂・山田邦和・南 博史編『平安左京三条四坊四町京都市中京区曇華院前ノ町』(京都文化博物館(仮称)調査研究報告第2集,京都,昭和62年)
 - 55) 山田邦和『平安左京五条二坊十六町京都市下京区傘鉾町』(京都文化博物館調査研究報告第6集,京都,平成3年)
 - 56) 西田宏子,大橋康二『別冊太陽・古伊万里』(前掲)
 - 57) 森岡秀人『山城地域』(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ,東京,平成2年),國下多美樹『山城地域における中期弥生土器編年』(『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』,大阪,平成5年)

第3章 後論

第1節 左京五条三坊八町出土の中近世土器について

千喜良 淳

池坊短大の敷地内からは多量の中近世土器が出土した。本稿ではこれらのうち土師皿、常滑焼、東播系須恵器などについて考察を巡らしてみたい。

1. 土師皿の分類

当調査地で出土した土師皿は胎土と形態によって13種類に区分された。以下、各器種について形態的特徴を述べる。(第91図)

各器種に共通するのは、口縁部にヨコナデを施し、外面にはユビオサエを施すことである。これらの特徴については必要な場合のみ述べることとする。

白色系A類

平坦な底部から斜めに伸びる口縁部を有する。内面にはナデ上げが看取される。

白色系B類

いわゆる「ヘソ皿」である。外面には強いユビオサエを施す。

白色系C類

やや丸みを帯びた底部から内弯気味に伸びる口縁部を有するものと、外反するものがある。

褐色系D類

底部から短かく立ち上がる口縁部を有する。外面のユビオサエは強い。

褐色系E類

やや粗雑な作りである。底部は粗いユビオサエが看取される。口縁部は外反して水平方向に伸びる。

褐色系F類

平坦な底部から口縁部が短かく直線的に伸びる。外面のユビオサエは弱い。

褐色系G類

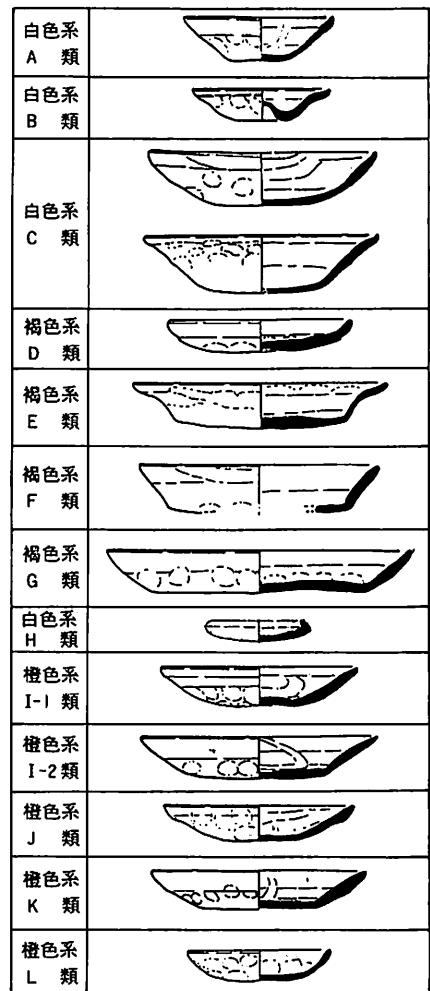
口径が大きく、底部には粗いユビオサエを施す。口縁部は斜めに伸びる。

白色系H類

いわゆるコースター形を呈する。平安時代以来存在するものである。口縁部は短かく内側へ折れ曲がる。

橙色I-1類

ユビオサエが施された底部から斜めに口縁部が伸びる。端部は



第91図 土師皿分類図

つまみ上げる。内面にはナデ上げによる凹線状の溝が巡る。

橙色 I-2 類

I-1 類より口径の大きいものである。形態的特徴は同じである。

橙色 J 類

やや丸みを帯びた底部からゆるやかに内弯気味に伸びる。端部はつまみ上げる。

橙色 K 類

平坦な底部から斜めに伸びる口縁部を有する。内面にはナデ上げが施されるが、内面に凹線状の溝は成形されない。

橙色 L 類

全体が手づくねによって作られた粗雑なものである。外面にはユビオサエが顕著である。

以上、これらの分類に基づいて説明を加えてゆくこととする。

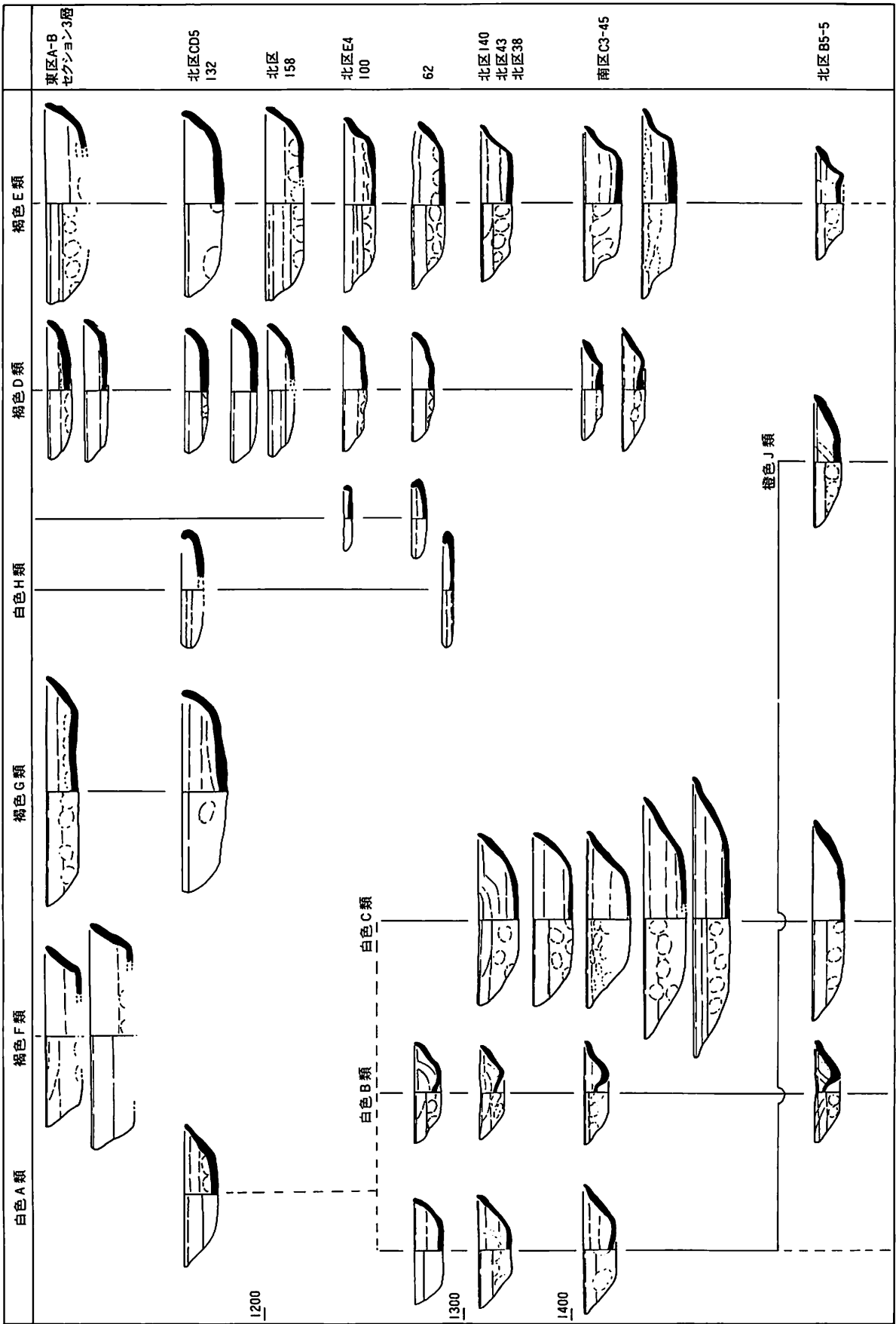
2. 当調査地出土の土師皿について

本調査地からは、平安時代から近世中頃に到るまでの土師皿が出土した。ここでは出土した土師皿のうち、中・近世に属するものに関して考察を加える。(第92, 93, 94図)

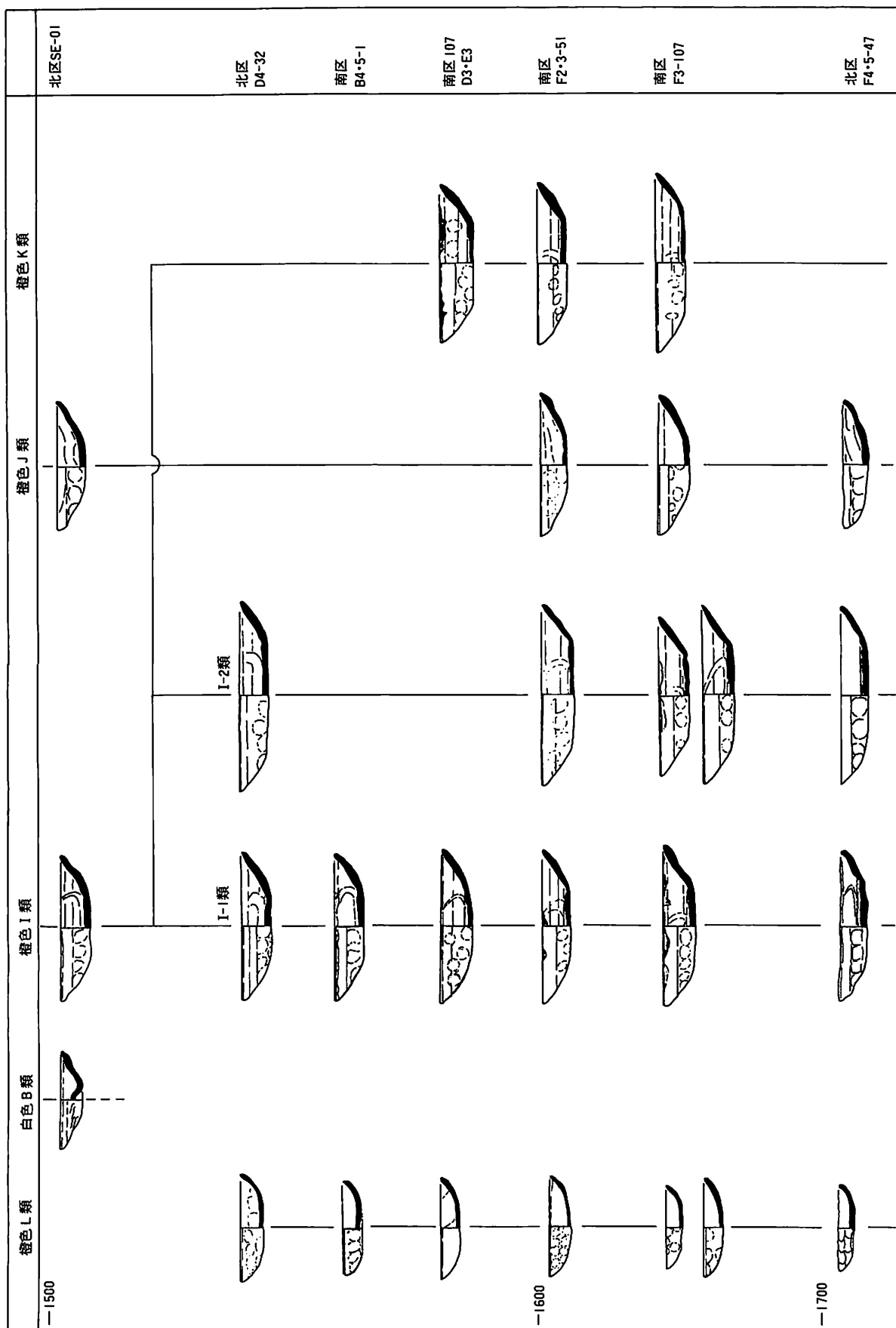
平安京内における土師小皿の研究は、これまで横田洋三¹⁾、宇野隆夫²⁾、伊野近富³⁾、鋤柄俊夫⁴⁾ 各氏によってなされ、近年では京都市高速鉄道烏丸線内の調査⁵⁾ と鋤柄氏によって詳細な編年案が出されている。また、田中一廣氏⁶⁾ によって民俗学的考察が試みられている。本稿では池坊短大敷地内において得られた一括と思われる遺物を中心に土師小皿の型式学的変遷を追ってみたい。

まず、鎌倉時代初頭に属するものとして、南区 A・B セクション 3 層例があげられる。暗灰褐色を呈する褐色系 D・E・F・G 類から構成される。D 類、G 類は前代から継続するものである。全て、口縁部をヨコナデし、体部下半にユビオサエを施す。これは土師皿の成形・調整として、これ以降も基本的な製作技法として用いられてゆく。No. 132 (北区: C・D 5) 周辺では褐色系 D・E・F・G 類の他、白色系 A・H 類から構成される。この時期になると、中世土器の主要な器種となる白色系が出現する。白色系 A 類は「白」色を呈し、胎土に砂礫などは含まず、十分、水簸されたと思われる。A 類は口縁部にヨコナデを行うものの、体部下半のユビオサエは顕著ではない。これ以降、A 類は B 類と器種分化してゆく。H 類は平安時代から残存し、胎土の点で A 類と近似する。粘土を水簸しているのであろう。G 類はこの時期まで存在する。従来、G 類は E 類に継続されてゆくと考えられてきた。しかし、G 類は口縁部のヨコナデ、体部下半のユビオサエが E 類ほど強くない。また、胎土も、前者は暗灰褐色～暗茶褐色を呈し、雲母を含むのに対し、後者は暗赤橙色～暗黄橙色を呈し、雲母はあまり含まない。以上の点から、G 類は E 類には継続しないと言える。E 類の成立には D 類、G 類とは別の系譜を考えたい。No. 158 (北区) は褐色系 D・E 類、白色系 C・H 類から構成される。この時期になると白色系 C 類が新しく出現する。胎土は水簸されている。No. 100 (北区: E 4) は褐色系 D・E 類、白色系 C・H 類から構成される。D 類、E 類は口縁部のヨコナデが強くなり、外反するようになる。E 類は前代に比べ、器壁も若干薄くなる。No. 62 (北区) は褐色系 D・E 類、白色系 A・B・C・H 類から構成される。この時期に白色系 B 類が量的に普遍化し、次代へ続く基本的な器種が成立する。H 類は、この時期まで残存する。各型式の口径を測ったところ、A 類は 7 cm、B 類が約 7 cm に集中する。C 類は 10.5～13 cm の間に分散する。D 類は 8 cm 前後にまとまる。E 類は 10～12 cm の間に分散する。各型式の割合は、A 類が 5% (2)、B 類が 23% (10)、C 類が 14% (6)、D 類が 27% (12)、E 類が 23% (10)、H 類が 9% (4) を占める。(括弧の中は個体数、以下同様)。B 類、D 類、E 類がほぼ同じ割合を示す。

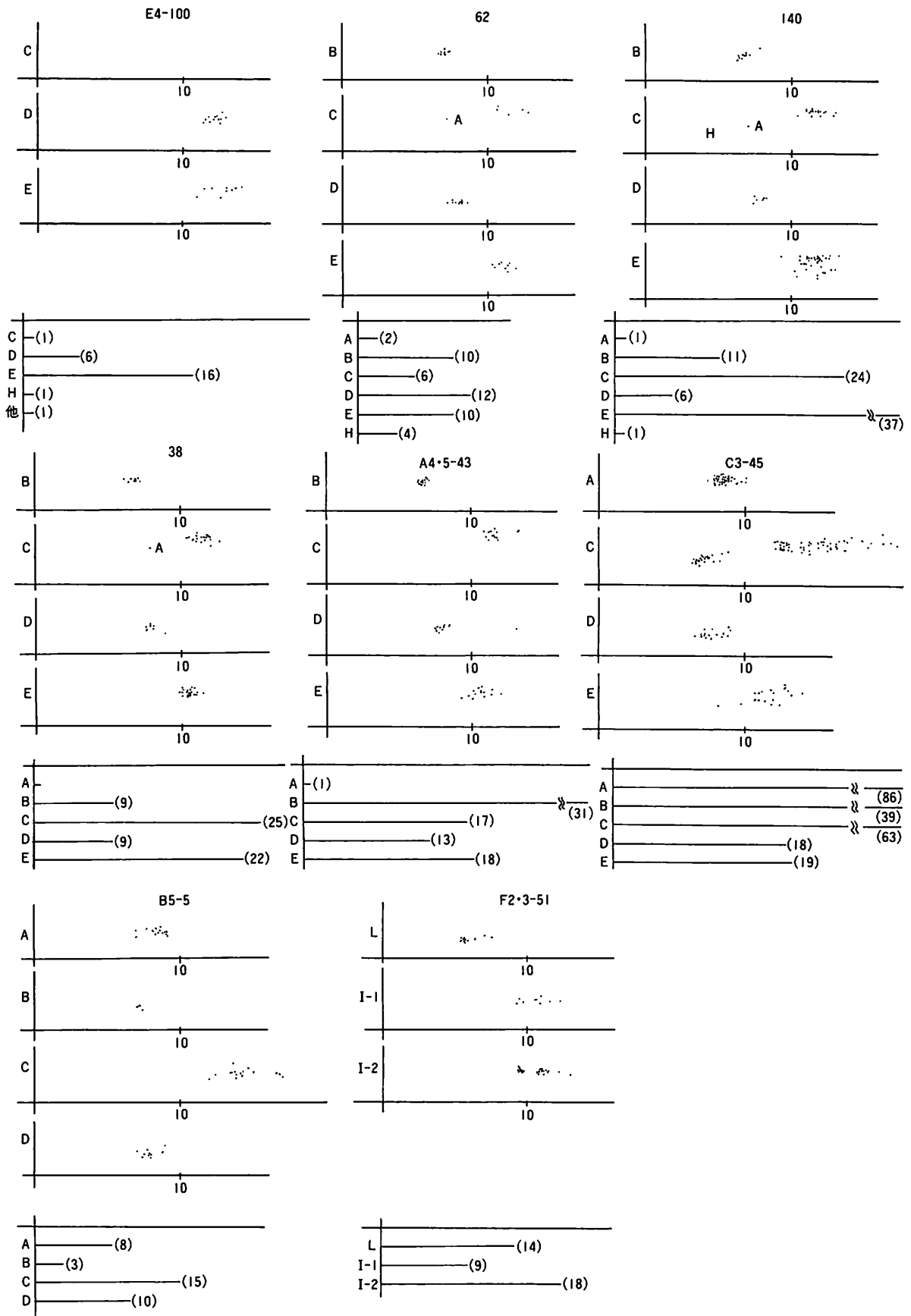
No. 140 (北区) は褐色系 D・E 類、白色系 B・C 類から構成される。D 類は口縁部のヨコナデ、体部下半のユビオサエが強くなり、その結果、形態的に歪みが大きくなる。C 類は深い皿状の体部から、ゆるやかに内



第92図 出土師皿編年試案図(1)



第93図 出土土師皿編年試案図(2)



第94図 土師皿法量グラフ (単位は cm, カッコ内の数字は個体数)

弯して立ち上がる口縁部を有する。端部はつまみ上げる。内面は時計回りのナデを三段階に施し、底から口縁に向かってナデ上げる。これはB類にも共通する技法である。各器種の口径は次のとおりである。B類が7cm前後にまとまる。C類は10～13cmの間に分散する。D類は8cm前後にまとまる。E類は10～13cmの間に分散する。各型式の割合はB類が14% (11), C類は31% (24), D類は8% (6), E類は47% (37) を占める。C類とE類が大半を占め、特にE類が多い。

No. 43 (南区: A 4・5) は褐色系D類, 同E類, 白色系A・B・C類から構成される。A類は、底の深い体部から、短い口縁部が外反する。依然として少量しか存在しない。C類は、体部のユビオサエが強くなり、口縁部がわずかながら外反するという新しい要素をもつものも出現する。各型式の口径は、A類が6.4cmである。B類は6～7cmの間に集中する。C類は11～13cmの間に分散する。D類は7cm前後に集中する。E類は9～12cmの間に分散する。各型式の割合はA類が0.1% (1), B類は39% (31), C類は21% (17), D類16% (13), E類23% (18) を占める。B類, C類, E類が大半を占める。特にB類の存在が注目される。

No. 38 (北区) は褐色系D・E類, 白色系A・B・C類から構成される。A類は依然として量は少ないが、前代に比べ口縁部が開く傾向が認められる。この形態は次代へ継承される。B類, C類は体部下半のユビオサエが一層強くなる。その結果、口縁部がゆるやかに外反するものが多くなる。この傾向はD類とE類にも観られ、両者とも口縁部が屈曲する。この時期の特徴として、上述したヨコナデとユビオサエの強化による形態的変容があげられる。各型式の口径は、A類が6.8cmである。B類は6～7cmの間にまとまる。C類は10～13cmの間に分散する。D類は7cm前後に集中する。そしてE類は10～11cmの間にまとまる。それぞれの割合は、A類は0.2% (1), B類は14% (9), C類は38% (25), D類は14% (9), E類は33% (22) を占める。C類とE類が、ほぼ同じ割合を示す。

No. 45 (南区: C 3) は白色系A・B・C類, 褐色系D・E類から構成される。A類が全体の中で一定量を占めるようになる。この時期が最も型式分化が進行し、C類, E類の中には形態差によってさらに数種類に分けられるものもある。A類は、皿状を呈す体部からゆるやかに外反する口縁部を有し、端部はつまみ上げる。B類は、浅い皿状を呈する。口縁部は短かく外反し、端部はつまみ上げる。C類も口縁部が外反しながら開く形態をとる。端部はつまみ上げる。大皿も出現する。C類は口径の個体差が大きい。A～C類に共通する属性として、外反する口縁部と端部のつまみ上げが認識できる。同一工人集団、もしくは同じ技術を持った工人達によって製作されていると考えられる。加えて、三者は、共に白色～黄白色の胎土を有することも傍証となる。D類, E類にもA～C類と同様の傾向がみられる。すなわち、口縁部の外反である。特にE類には水平方向にまで屈曲するものも出現する。両者とも端部は尖る。C類同様、E類も口径によるバラツキが大きくなる。また、D類の中には形態的にE類に近似するものも出現する。これも、E類とD類の相関性を考えさせる。両者とも同一工人集団による製作であろうか。各型式の口径は、A類が7～9cmの間にまとまる。B類は6～7cmの間にまとまる。C類は12～21cmの間に広く分散する。D類は6～9cmの間に分散する。E類は8～16cmの間に広く分散する。C類, E類は口径から数種類に分類されるかと思われたが、口径のグラフは一定のまとまりを示さない。従ってC類の中での規格性は認められない。各型式の割合は、A類が38% (86), B類は17% (39), C類は28% (63), D類は8% (18), E類は8% (19) を占める。A類とC類が大半を占める。特にA類の比率の高さが目立つ。

No. 5 (北区: B 5) は白色系A・B・C類, 褐色系D・E類に加え橙色系I-1類, 同I-2類から構成される。この時期になると、新たにI-1類とI-2類が出現する。両者とも近世に盛行する。A類は、口縁部の開きが著しくなり、より浅い皿状を呈する。B類はその数を激減させる。E類は口径を縮小する。形態的にD類と区別出来ないものも多くなる。I-1類, I-2類は、口縁部に強くヨコナデを施すものの、体部下半のユビオサエは顕著ではない。端部はヨコナデによって尖る。内面には強い時計回りのナデを施す。その結果、凹線状の溝が残るようになる。この特徴は、これ以降、橙色系I類において観られるようになってくる。

井戸 No. 1 (北区) 北西部は白色系B類, 同C類, 同J類から構成される。J類が新たに出現する。丸い底部から口縁部が伸び、端部はヨコナデによってつまみ上げる。外面はユビオサエによって仕上げ、内面は粗い時計回りのナデを施す。胎土は黄橙色を呈する。この時期には白色系のB類, C類とも、胎土が黄橙色を呈するようになる。従って、この時点で、粘土の素地の選択に変化があったと考えられる。B類, C類はこの時期で姿を消す。

No. 1 (南区: B 4・5), No. 32 (北区: D 4) は橙色系L類, 同I-1・2類から構成される。A類が新たに出現する。A類は手づくねで成形され、全体に指頭圧痕が残る。口縁は歪みが大きく、楕円形を呈すものも多い。I-1類には、I-2類と同様に内面に凹線状の溝を残すものが出現する。また、従来土師皿を中心とした供膳形態に、新たに瀬戸・美濃焼などの国産陶器が加わることとなる。

No. 107 (南区: D・E 3) は橙色系L類, 同I-1類と新しく出現するK類から構成される。K類は、平底の底部から、直線的に口縁部が伸びる。内面は、他の器種同様に時計回りのナデを3段階に施す。しかし、強いナデによる凹線状の溝は有しない。外面はユビオサエで仕上げる。この時点で、近世の土師皿を構成する全型式が揃う。

No. 51 (南区: F 2・3) は橙色系J類, 同I-1・2類・L・K類から構成される。形態的には前代との変化はない。各型式の口径はほぼ一定しており、これ以降は各型式とも形態変化はしない。

No. 107 (南区: F 3) は橙色系J類, 同I-1類, 同I-2類, 同K類, 同L類から構成される。J類・I-2類には口径による大・小2種類が存在する。K類はこの時期以降消滅する。I-1類は口縁部が体部から屈曲して伸びる。端部はヨコナデにより尖る。他の型式の口縁端部も同様に尖る。この時期の土師皿に共通する特徴である。

No. 47 (北区: F 4・5) は橙色系L類, 同I-1類, 同I-2類, 同L類から構成される。I-1類, I-2類は、内面に浅い溝を有する。この溝は、前代まで観られたナデによる凹線状の溝が形態化したものである。いわゆる『痕跡器官』であろう。I-1類にはナデ上げが観取されるものもある。各器種とも外面を強いユビオサエによって成形する。I-1類, I-2類, J類は口縁部にヨコナデを施し、端部はつまみ上げる。これがこの時期の土師皿の形態的特徴である。

以上、土師皿の型式変遷を観て来たが、画期となる時期が数回ある。

1) 中世的土器様式の形成期

A-B セクション3層~No. 158の期間である。平安時代より続く、褐色系D類と同G類とH類によって構成される。褐色系E類も存在するが量的にまだ少なく、主要な器種とは言えない。この時期に白色系A類が出現し、後のB類・C類を生み出すことになる。H類は前代から引き続き存在する。

2) 中世的土器様式の発展期

No. 100 (北区: E 4) ~No. 45 (南区: C 3) の期間である。

新たに出現した白色系A類, B類, C類と褐色系D類, E類によって構成される時期である。特にB類, C類, E類が主体を占め、A類は、はじめ少ないが、後半になって増加する。H類は13世紀後半前葉には消滅する。時期が新しくなるにつれて各器種とも形式変化をはじめ形態はより皿状を呈すようになる。15世紀前半になるとC類, E類の大きさに変化があり、器種の点において最大限の分化が観られる。胎土もこの頃には白色系土器は淡黄橙色を呈するようになり、粘土の素地においても、近世の土師皿に類似したものを使用しはじめる。

3) 中世的土器様式の解体期

No. 5 (北区: B 5) ~No. 1 (北区) 北西部の期間である。前代から引き続き存在する白色系と褐色系の土器の他に、橙色を呈する J 類, I 類が出現する時期である。これらの土器は前代に増加した白色系 A 類から系譜を引くものであると考えられる。この時期で白色系, 褐色系は姿を消し, これ以降, 橙色の土師皿が主流にとってかわる。この大きな変化の原因としては, 応仁の乱以降, 土師皿に対する使用方法, また, 祭祀形態が変化し, 中世色が払拭されたことが考えられるのではないだろうか。

4) 近世的土器様式の成立期

No. 32 (北区: D 4) ~No. 107 (南区: D・E 3) の期間である。

橙色系 L 類, I-1 類, I-2 類, J 類, K 類によって構成される。この時期以降形態的にはあまり変化を見せなくなる。それは, 国産陶器の出現や漆器の普及によって供膳形態としては, その機能を消失させていることが原因と考えられる。特に I 類, K 類などは前代に比べ燈明痕を残すものが多く, 燈明皿としての使用が考えられる⁷⁾。L 類もその形態や大きさから見て実用的とは思われない。これらの用途については, 近年まで土師皿を製作していた岩倉・木野の場合, 愛宕神社など神社に納めていたものであるため, 神社祭祀に関するものとして非日常的に使用するものであると考えられている。

5) 近世的土器様式の定着期

No. 47 (北区: F 4・5) 以降の期間である。この時期には K 類が消滅し, I 類, J 類, L 類によって構成される。これらの土師皿は鋤柄氏採集の岩倉木野愛宕神社資料⁸⁾ と何ら型式学的に変わるところはなく, 形式的変化をまったく見せなくなる。形態は固定化し, むしろ変化しないことに意義があるようになる。供膳形態としては国産陶器にかわって伊万里などの国産磁器が主体を占めるようになる。

以上のように, 土師小皿は平安時代以来, 中世を通じて形式的変化がおこなわれて来たが, 16世紀の国産陶器出現によって供膳具としての機能を失い, 近世以降は祭祀的性格を残したまま, 神社などで使用され, 今日に到ることになると言えよう。

3. いわゆる東播系須恵器について

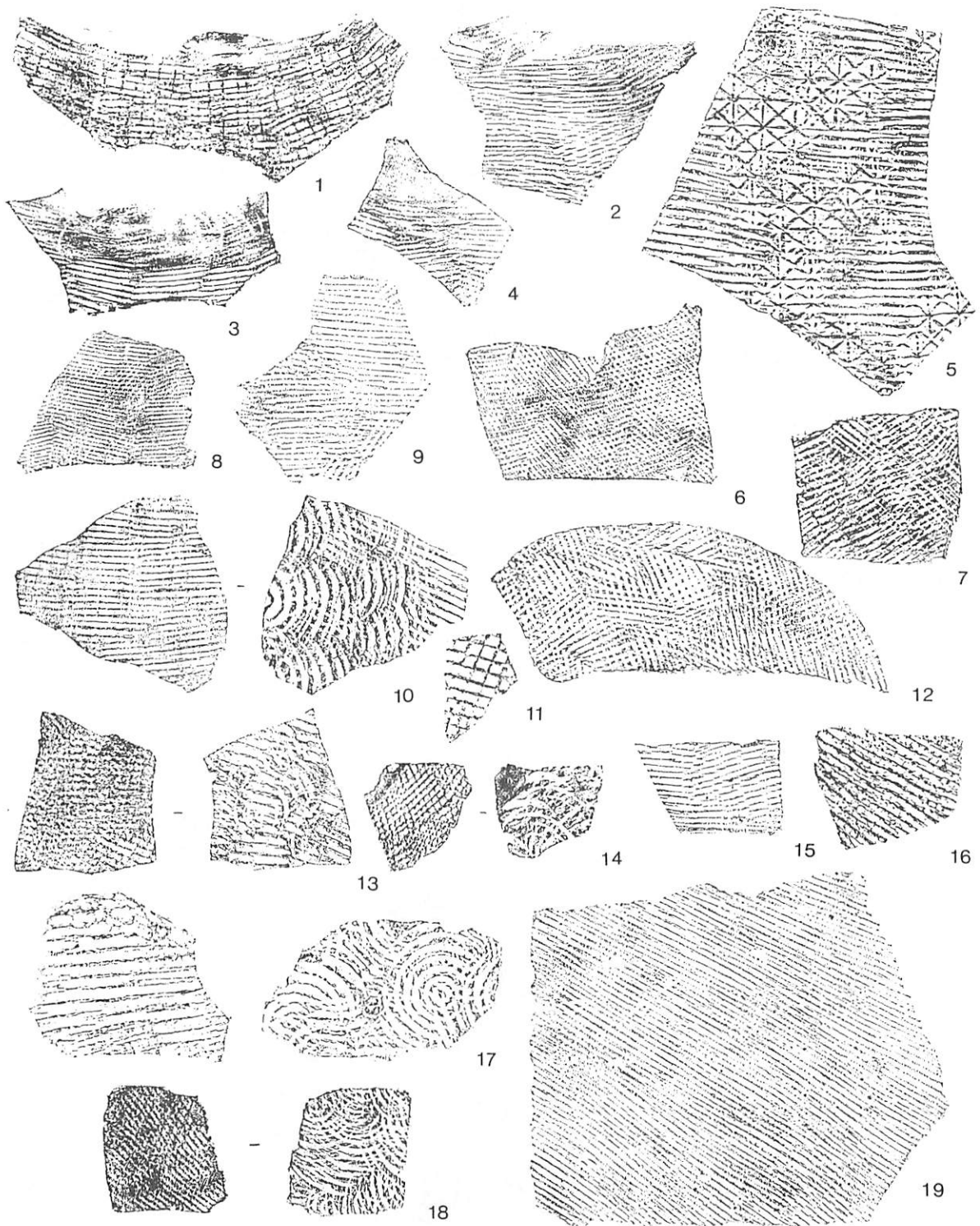
東播系須恵器と呼ばれる壺, 甕, 鉢は旧平安京内では普遍的に存在するものである。本調査地でも散見されるが, 特に No. 62 (北区: F) からは甕の破片がコンテナ約 1 箱分まとまって出土した。そこで, これらの壺, 甕について, 荻野繁春氏の研究⁹⁾ を基に産地同定を試みてみたい。(第95・96図)

壺 (第95図 1~4)

1~3は瓦質土器で灰黒色を呈する。4はやや軟質の須恵器で暗灰白色を呈する。1は平行条線叩き文痕+樹枝文痕 (G類) に相当する。魚住窯産である。2, 3は細目の平行条線叩き文痕に相当する。魚住窯産である。4も2, 3と同類に属する。魚住窯産である。しかし, 2, 3は叩き目の単位が明瞭に看取されるのに対して, 4は叩き目が錯綜している。従って, これらは同一原体を使用するものの, 技法的に若干異なると言える。

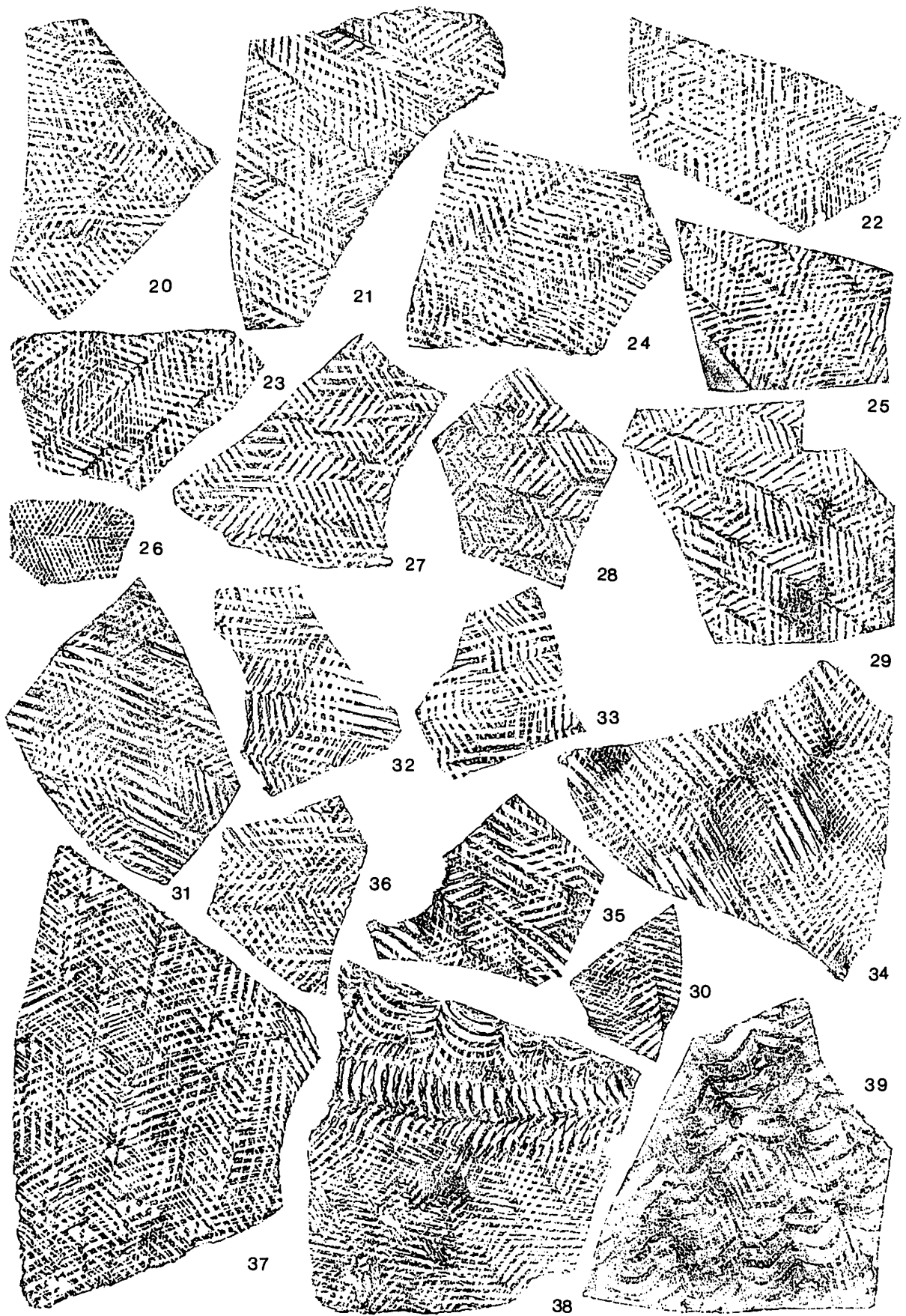
甕 (第95図 5~19, 第96図 20~39)

5~39は全て須恵質である。5は硬質で灰白色を呈する。長格子文 (M類) に相当する。三木窯産である。6, 7は硬質で灰白色を呈する。細目の平行条線叩き文痕 (B類) に相当する。魚住窯産である。しかし両者とも叩き目が非常に細かく, 樹枝文の一種に分類されるかもしれない。両者は技術的に同一系譜にあるだろう。8は軟質で, 暗青灰色を呈する。細目の平行条線叩き文痕 (B類) に相当する。魚住窯産である。9は軟質で, 暗青灰色を呈する。太目の平行条線叩き文痕 (A類) に相当する。魚住窯産である。叩き目が錯綜している。



第95図 東播系須恵器拓影(1) 1 : 3

4と同一系譜にある。10は軟質で、暗青灰色を呈する。太目の平行条線叩き文痕（A類）に相当する。裏面には当具の痕跡が残る。魚住窯産であろう。11は硬質で、暗青灰色を呈する。太目の平行条線叩き文痕（A類）に相当するが、叩き目は錯綜が激しく、単位は確認できない。三木窯産であろう。12は軟質で、暗青灰色を呈する。平行条線文痕+長格子文痕（E類）に相当する。裏面には当具の痕跡が残る。三木窯産であろうか。13は軟質で、暗青灰色を呈する。平行条線文痕+長格子文痕（E類）に相当する。裏面には当具の痕跡が残る。



第96図 東播系須恵器拓影(2) 1 : 3

8と同一系譜にあると思われるが、叩き目は一層細かい。三木窯産の可能性はあるが、断定は出来ない。14は硬質で、暗灰白色を呈する。太目の平行条線叩き文痕（A類）に相当する。4、9と同一系譜にある。4、9同様、魚住窯産かと思われるが、胎土や色調の点で異なる。断定は出来ない。

15は軟質で、暗青灰色を呈する。長格子文痕（D類）に相当する。格子文の大きさから考えると讃岐国・十瓶山焼の可能性はある。16は軟質で、暗青灰色を呈する。長格子文痕（D類）に相当する。格子文は非常に大きい。美作国・勝間田焼か備中国・亀山焼であろう。17は軟質で、暗青灰色を呈する。長格子文痕（D類）に相当する。裏面には当具の痕跡を残す。15と同様、十瓶山焼であろう。18は軟質で、暗青灰色を呈する。長格子文痕（D類）に相当する。裏面には当具の痕跡が残る。格子文は非常に小さい。勝間田焼の可能性はあるが断定は出来ない。15～18は共に長格子文痕を有することから、技術的に同一系譜にあると思われる。19は硬質で、暗青灰色を呈する。細目の平行条線叩き文痕（B類）に相当する。讃岐国・十瓶山焼の可能性が高い。

第96図20～39は全て樹枝文痕である。「肩部から底にかけて全面にわたり横方向（右開き）に叩くもの（A類）」（20～25）、「全面にわたり横方向（左開き）に叩くもの（B類）」（26～30）、「肩部に縦方向、胴上部にのみ横方向（右開き）に叩くもの（C類）」（30～38）、「肩部に縦方向、以下全面にわたり横方向（右開き）に叩くもの（D類）」（38、39）に分類される。

20は叩き目が乱れ、樹枝文の単位は確認できない、窯不明である。21は樹枝文が若干乱れている。三木（与呂木）窯産であろう。22は叩き目が錯綜し、単位の確認が困難である。窯は不明である。23は樹枝文の単位が若干乱れる。三木（与呂木）窯産であろう。24はかろうじて樹枝文の単位が確認できる。魚住（赤根川15号）窯産の可能性はある。25は単位は若干乱れているが、樹枝文は明瞭に確認できる。三木（与呂木）窯産であろう。

26は細かい樹枝文が明瞭に確認できる。三木（跡部1号）窯もしくは魚住（赤根川13号）窯産の可能性はある。27は叩き目が乱れているが、樹枝文ははっきりしている。魚住（赤根川12号）窯産であろう。28は樹枝文が途切れずに残る。三木（跡部1号）窯産であろう。29は叩き目が乱れるが、樹枝文は途切れずに残る。魚住（赤根川13号）窯産であろう。30は樹枝の先端が開き、B類とC類の中間形態をとる。

31は叩き目が錯綜し、樹枝文の確認は困難である。窯は不明である。32は叩き目が乱れるが、かろうじて樹枝文が確認できる。魚住（赤根川15号）窯に類似するが、断定は出来ない。33は叩き目が乱れ、樹枝文の確認は困難である。窯は不明である。34は叩き目が錯綜し、樹枝文の確認は困難である。窯は不明である。35は叩き目は乱れるが、かろうじて樹枝文が確認できる。窯は不明である。36は叩き目は乱れるが、樹枝文は明瞭に確認できる。窯は不明である。37は叩き目は錯綜し、かろうじて樹枝文が確認できる。

38は他に比べやや軟質である。上半と下半では使用する叩きの原体が異なる。下半は樹枝文を施す。叩き目は乱れるが、樹枝文は明瞭に確認できる。三木（与呂木）窯産の可能性はある。また、上半は弧状をえがく樹枝文を縦方向に、また、叩き目の接合面には横方向に施す。左京八条三坊二町¹⁰⁾出土の埋甕7に類似する。39は弧状をえがく樹枝文を施す。叩き目は乱れず、単位が明瞭に確認できる。三木窯産であろうか。

樹枝文を有する叩き目をA～Dの4類に分類したが、内訳を見ると、A類6点、B類3点、C類9点、D類2点、A類とB類の中間1点となる。A類とC類が大半を占める。これらのうち窯が確認出来たものを見ると、魚住窯産4点、三木窯産6点となり、若干三木窯産が多くなる。荻野氏によると、樹枝文の生産は三木窯が中心であったとされている。以上の分析結果は、この傾向に近似すると言える。

これらの叩き目の分析から以下のことが導き出せる。東播系と呼ばれる魚住窯、三木窯を中心とした各窯では、ほぼ同一の叩き原体を使用し、同一技法によって甕を製作していた。これは樹枝文を有する叩き甕が同一の色調、胎土を示すことからとも言える。荻野氏は前掲書の中で、これら樹枝文を有する甕を、広く大陸との関係で扱えようとしている¹¹⁾。これらの樹枝文は、微視的に見ると、全て、一個体ずつが、僅かながらに叩き技法異なっていることに気がつく。このため、これらの製作にあたっては、一ヶ所のみ窯ないしは工人ではな

く、複数の製作窯，工人によって行われていたと思われる。また，注目すべきは，僅かながらではあるが，讃岐国・十瓶山焼，備前国・亀山焼，美作国・勝間田焼が搬入されていることである。これらの甕は叩き技法から見て東播系須恵器と密接な関係があると考えられている。ただ，これらの甕は少量であるために，製品として搬入されたものではなく，何らかの内容物に供って搬入されたものであろう。今後は東播系須恵器とともに，これらの甕がどのように中世都市京都に搬入されたのか，解明が望まれる。

追記

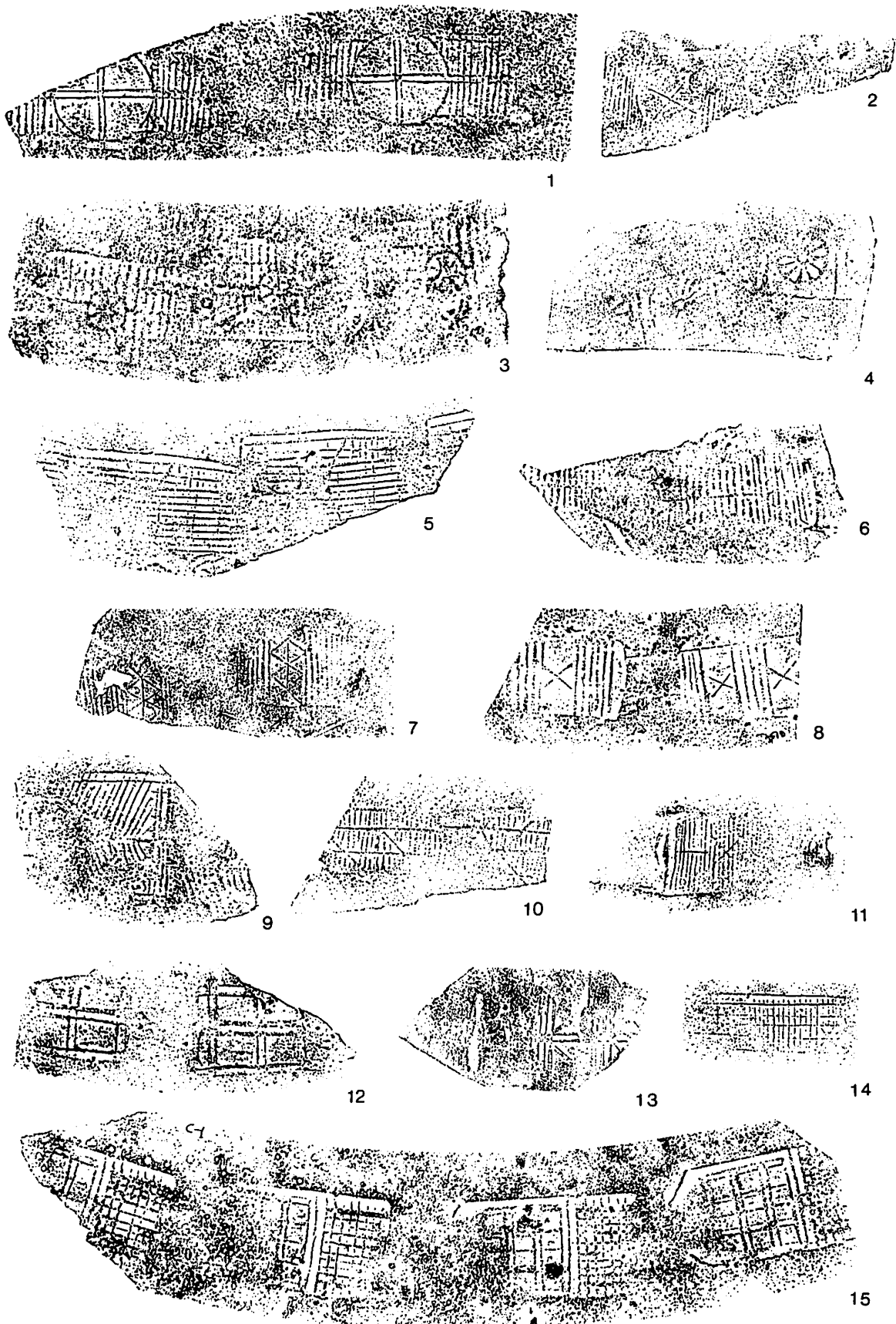
本文脱稿後，香川県立埋蔵文化財センター佐藤竜馬氏より貴重な御意見を賜った。それによると，当資料中荻野氏の分類のAc類に属するものは，21，23～35，37，AcもしくはC類に属するものは20，22，36，Aa類に属するものは29，Ab類に属するものは26，C類に属するものは39，Aa+C類に属するものは38，また，十瓶山及び亀山窯産と思われるものとして，10，15，17，19があるとの御教示を得た。

4. 常滑焼の押印文について

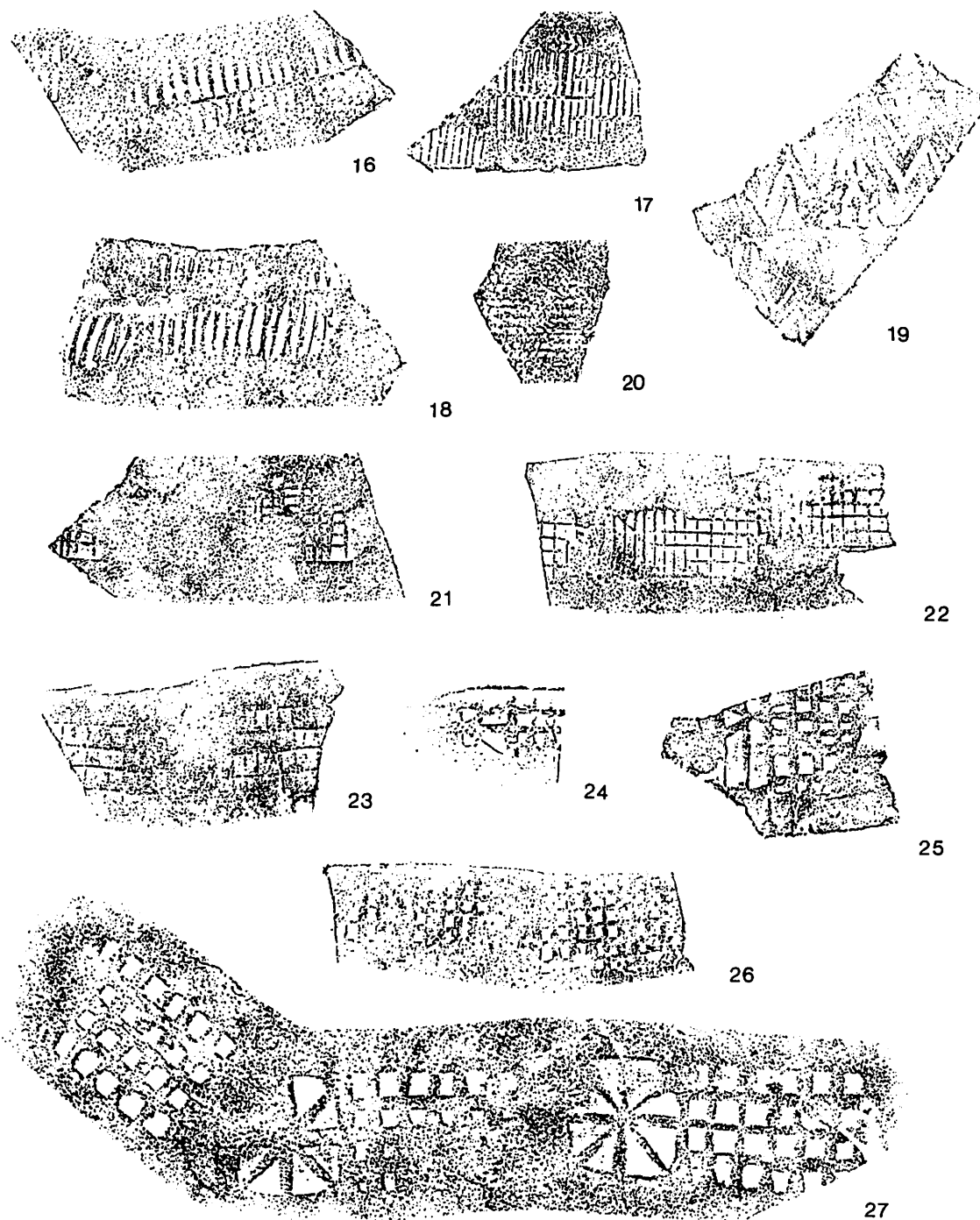
本調査地で出土した常滑焼のうち押印文を有するものについて，その生産地について中野晴久氏の研究¹²⁾を基に考察してみたい。(第97，98図)

第97図1は，格子文の中心に円形に十字の文様を有する。高坂第1号窯(14世紀前半)産である。2は，縦線文の中心に円形に十文字が組み合う。金色東古窯(14世紀前半)産に類似する。3は，格子文の中心に小さな円形文が組み合う。生産窯は不明である。12世紀後半～13世紀前半と考えられている。4は，菊花状の円形文である。金色東古窯例に類似する。14世紀前半の可能性がある。5は，格子文である。生産窯は不明である。6は，格子文に斜線文が組み合う。二ノ田古窯産であろう。12世紀後半に属する。7は縦線文に菱形文が組み合う。高坂第1号窯例に類似する。14世紀前半の可能性がある。8は縦線文に十文字が組み合う。毘沙ヶ古窯産である。14世紀前半に属する。9は斜線文である。鎗場御林古窯産である。14世紀前半に属する。10は格子文に斜線文が組み合う。生産窯は不明である。11は縦線文に十文字が組み合う。生産窯は不明である。12は格子文に十文字が組み合う。生産窯は不明である。13は縦線文に斜線文が組み合う。文様は太い。鎗場御林古窯E，D区例に類似する。12世紀後半であろうか。14は大きな格子文である。福住古窯例に類似する。13世紀後半～14世紀前半であろうか。15は，大きな格子文と小さな格子文が組み合う。生産窯は不明である。第98図16は格子文である。文様は太い。長曾古窯産であろう。12世紀後半～13世紀前半に属する。17は格子文である。二ノ田古窯例に類似する。12世紀後半であろうか。18は，16と同じ系譜の格子文である。16に比べ格子文は若干粗い。長曾古窯産であろうか。19は山形文である。文様は太い。上白田一合窯例に類似する。12世紀前半の可能性がある。20は細かい格子文である。四池南古窯採集例に類似する。12世紀後半であろうか。21は横長の格子文に斜線文が組み合う。文様は太い。生産窯は不明である。22は格子文である。格子は正方形を呈する。生産窯は不明である。23は格子文である。小森古窯例に類似する。12世紀後半～13世紀後半であろうか。24，25は格子文に小さな斜線文が組み合う。文様は太い。生産窯は不明である。26は縦長の格子文である。文様は太い。小森古窯例に類似する。12世紀後半であろうか。27は大きな格子文に米字文が組み合う。文様は非常に粗い。生産窯は不明である。

以上，文様の形態と生産窯について述べて来たことをまとめてみる。まず，生産窯の判明するものは，14世紀前半に属するものが多い。この時期に多く搬入されていると考えられる。ごく一部が，12世紀～13世紀に遡る。次に，格子文と斜線文が組み合うものが多いことから，これらの文様が押印文の基本的なパターンであることが考えられる。この組み合わせは類例も多い。また，生産窯の判明しないものもかなり存在することから，かなり多くの工人達によって甕が生産されていたことが伺える。



第97図 常滑大甕スタンプ文拓影(1) 1 : 3 (No. 62下層)



第98図 常滑大甕スタンプ文拓影(2) 1 : 3 (No. 45)

5. 大型甕について

1) 甕の出土状況

当調査地では、主に、No. 45 (南区 : C 5) と No. 62 下層 (北区) から大型甕が出土した。前者は出土した土師皿から15世紀前半後葉に、後者は14世紀前半前葉の年代が与えられている。両者には100年の年代差が存在するが、両者とも数型式の甕から成り立っている。そこで前者の甕を観てゆくと、常滑焼が19個体、備前焼が10個体と常滑焼が数の上では多くなっていることに気がつく。そこで各甕の型式による年代であるが、第27図2, 6が中野編年¹³⁾ 4期(1190年~1220年)に属し、同図5, 10が9期(1400年~1450年)に属し、最

大260年の幅がある。また備前焼では第28図2, 4が間壁編年¹⁴⁾ II期(13世紀初頭~13世紀後半)に属し、他はIII期(13世紀後葉~14世紀末)に属す。このため No. 45 では13世紀初頭~14世紀末までは常滑焼と備前焼が交互に補完し合う関係であったが、その後は備前焼よりも常滑焼が主体となってゆき、西日本の一般的な傾向とは若干異なると言ってもよい。両者の関係は、常滑焼が4期~9期までほぼ各型式が存在するのに対し、備前焼はII及びIII期に限定されていることも注目される。

次に、No. 62下層では常滑焼ばかりが19個体も覓られ、他に東播系甕が存在するが、備前焼は含まれていない。常滑焼は6a期, 7期(1275年~1350年)の75年間のものが中心であり、ほぼこの間に甕が搬入されたことを示している。荻野氏は13世紀中頃に常滑焼が他の甕に比べ最大¹⁵⁾であると述べられており、当調査地での結果とはほぼ一致する。同時期のNo. 45と比較してみると、No. 62下層は常滑焼と東播系須恵器とで成り立っている点が注目される。これらの事実は同じ調査地でも甕の搬入のされ方は異なっており、それぞれ異った流通経路に乗った「商品」としての甕が存在したと言うことであろう。それぞれの甕は搬入ルートは異なり、それと併に経済的背景も異ったものであろう。注目すべき点は、各時期において、甕の流通ルートには複数あったと言うことであり、一元的に限定できるものではないと言うことである。

また、これらの甕の用途としては藍甕・酒甕・油甕などが考えられ¹⁶⁾、断定は出来ないが、応永三二、三三年頃はこの地が酒屋であったことが記されており¹⁷⁾、今のところ酒屋であったと考えるのが妥当であろう。

また、使わなくなった井戸を埋めるに際し、壺や甕を利用する例があるものの、これらは小型のものの口縁部や底部を打ち欠いたものを納める例が多く¹⁸⁾、No. 45のように数十個体の甕を打ちこわして埋める例は管見に及ばない。No. 45は特異な例と言える。

2) 左京五条三坊八町内における甕の産地別割合

ここでは各調査地における常滑焼、備前焼、東播系須恵器の割合を覗いてみる。

南区では常滑焼66.85kg、備前焼18.94kg、東播系須恵器5.79kg出土した。また、北区では常滑焼236.61kg、備前焼15.65kg、東播系須恵器44.46kg出土した。これらの数字は鎌倉、室町時代にかけて常滑焼が非常に多く搬入され、備前焼や東播系須恵器は少なかったことを示している。

次に土師小皿の年代から15世紀前半後葉が与えられているC 3-45では常滑焼90kg、備前焼72kg、信楽焼2kg出土し、やはり常滑焼が多いことに気付かされる。これらのことは一般的に平安京内ではこの時期備前焼が主流を占めると言われているものの、少なくとも当調査地では常滑焼が大半を占めており、様相を異にする。今回は細かい時期別にそれぞれの甕の割合を出すことができなかつたために、時期ごとの趨勢は不明であるが、今後はこれらの点を踏まえた分析が必要であろう。

また、平安京内への常滑焼の搬入の背景には土師皿を大量生産していた醍醐寺¹⁹⁾があるのではないかと。当時の商品の流通は権門勢力と密接な関係があり²⁰⁾、東播系須恵器については藤原氏との関係が森田稔氏²¹⁾によって述べられている。従って、常滑焼にも当然権門勢力との関係はあったと考えられる。宇野隆夫氏²²⁾によると伊勢神宮や熊野社のような寺社権門との関係が指摘されている。そこで当時の尾張国の支配状況をみると、南北朝貞治五年(1367年)尾張の国衙職が醍醐寺三寶院であった記載があり²³⁾、常滑焼などの商品流通に大きな影響を及ぼした可能性はないだろうか。

6. 近世の土器について

No. 107(南区:D・E3)及びNo. 51(南区:F2・3)からは近世初頭の土器がまとめて出土した。

No. 107では土師皿と併に唐津焼、焙烙、中国製染付がセットで出土しており、唐津焼の出現は日常雑器として国産陶器がこの頃に生産可能になったことを示しており、焙烙の出現は食生活を中心とした生活様式が変化したことを伺わせるものである。また、瀬戸・美濃焼の天目茶碗の出現はこの時期になっての一般への茶の

普及を示すものと言え²⁴⁾、京都での中世的生活様式から近世的生活様式にこの時期、変化したことが考えられる。

No. 51 では徳川初期²⁵⁾と思われる国産陶器が出土した。これらの陶器は森毅氏²⁶⁾、松尾信裕氏²⁷⁾などが大阪城の調査で述べられたものとセット関係の点ではほぼ同じものであり、No. 51 も当時の商品として旧平安京内に流通したのと考えてよいだろう。

7. まとめ

当調査地からは中近世土器が多量に出土した。これらについては以上のように考察を試みたが、全てについては触れることはできなかった。特に平安時代の土師皿や緑釉陶器、輸入陶磁などは編年など問題となる点が多々あるが筆者の力不足のためはたすことができなかった。今後はこれらの点を踏まえ、平安京内での土器様式の移りかわり²⁸⁾、土器のセット関係やより細かな編年などをめざしたいと思う。

本論を書くにあたって下記の方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい。宇野隆夫、堀内明博、植山 茂、鋤柄俊夫、森下英治、佐藤竜馬、國分政子、江谷 寛、桐山秀穂、寺升初代、山本祐子、村松裕紀、各氏。

註

- 1) 横田洋三『出土土器編年試案』(『平安京跡研究調査報告』第5輯[財]古代学協会, 京都, 昭和56年)
横田洋三『付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形, 規格の変化と製作技術について』(『平安京跡研究調査報告』第12輯[財]古代学協会, 京都, 昭和59年)
横田洋三『土師器皿の分類と編年観』(『平安京左京四条三坊十三町』[財]古代学協会, 京都, 昭和59年)
横田洋三『中世土師器皿と生産地』(『紀要』第1号[財]滋賀県文化財保護協会, 大津, 昭和63年)
- 2) 宇野隆夫他『京都大学埋蔵文化財調査報告』II(京都大学埋蔵文化財研究センター, 京都, 昭和56年)
- 3) 伊野近富『「葉碗」「葉皿」考』(『京都府埋蔵文化財情報』第5号[財]京都府埋蔵文化財調査研究センター, 京都, 昭和57年)
伊野近富『かわらけ考』(『京都府埋蔵文化財論集』第1集[財]京都府埋蔵文化財調査研究センター, 京都, 昭和62年)
- 4) 鋤柄俊夫『畿内における古代末から中世の土器』(『中近世土器の基礎研究』IV, 日本中世土器研究会, 高槻, 昭和63年)
鋤柄俊夫『平安京出土土師器の諸問題』(『平安京出土土器の研究』[財]古代学協会, 京都, 平成6年)
- 5) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会(『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』III, 京都, 昭和56年)
- 6) 田中一廣『京・岩倉木野の土師器生産と流通(i)』(『研究紀要』2[財]大阪府埋蔵文化財協会, 大阪, 平成7年)
- 7) 鋤柄俊夫『平安京出土土器の諸問題』(前掲)
- 8) 鋤柄俊夫『平安京出土土器の諸問題』(前掲)
脱稿後, 小森俊寛, 上村憲章『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』(『研究紀要』第3号[財]京都市埋蔵文化財研究所, 京都, 平成8年)に接した。大変精緻な編年研究であり, 今後の土師皿研究の基礎的役割を荷なうものと思われる。
- 9) 荻野繁春『中世西日本における貯蔵容器の生産』(『考古学雑誌』第78巻第3号, 日本考古学会, 東京, 平成5年)
- 10) 鈴木忠司他『平安京左京八條三坊二町一第2次調査』(財団法人古代学協会, 京都, 昭和60年)
- 11) 荻野繁春『中世西日本における貯蔵容器の生産』前掲
- 12) 中野晴久『中世知多古窯址群の押印文』(『知多半島の歴史と現在』日本福祉大学知多半島総合研究所, 東京, 平成4年)
- 13) 中野晴久『生産地における編年について』(『常滑焼と中世社会』小学館, 東京, 平成7年)
中野『赤羽・中野「生産地における編年について」』(『全国シンポジウム「中世常滑焼をおいて」資料集』, 美浜町, 平成6年)
- 14) 間壁忠彦『備前焼』(『考古学ライブラリー』60, ニューサイエンス社, 東京, 平成3年)
- 15) 荻野繁春『西国における常滑焼』(『全国シンポジウム「中世常滑焼をおいて」』, 美浜町, 平成6年)
荻野『西国の常滑焼の出土状況』(『常滑焼と中世社会』小学館, 東京, 平成7年)
- 16) 菅原正明『甕倉出現の意義』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集, 国立歴史民俗博物館, 佐倉, 平成4年)
荻野繁春『壺甕はどのように利用されて来たか』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集, 国立歴史民俗博物館, 佐倉, 平成4年)
- 17) 芝野康之『姉小路烏丸の地と大甕について』(『平安京跡研究調査報告』第12輯[財]古代学協会, 昭和59年)
- 18) 荻野繁春『壺・甕はどのように利用されて来たか』(前掲)
- 19) 横田洋三『中世土師器皿と生産地』(『紀要』第1号[財]滋賀県文化財保護協会, 大津, 昭和63年)
- 20) 脇田晴子『中世土器の生産と流通』(『中近世土器の基礎研究』II, 日本中世土器研究会, 高槻, 昭和61年)
- 21) 森田 稔『東播系中世須恵器生産の成立と展開』(『神戸市立博物館研究紀要』3, 神戸市立博物館, 神戸, 昭和61年)
- 22) 宇野隆夫『中世陶器の生産と流通について』(『研究紀要』第5輯, [財]瀬戸市埋蔵文化財センター, 瀬戸, 平

- 成9年)
- 23) 上村喜久子『国人層の存在形態』(『史學雜誌』第74編第7号, 東京, 昭和40年)
- 24) 松本洋明氏は14世紀の瓦器碗の小型化を喫茶の風習を示すものと考え、国産陶器の出現よりも前にはじまったと考えておられる。
松本洋明『総括』(『十六面・薬王寺遺跡』奈良県立橿原考古学研究所, 奈良, 昭和63年)
- 25) 松尾信裕「大阪出土の桃山陶磁」(『大阪出土の桃山陶器』[財]大阪市文化財協会, 大阪, 平成5年)
- 26) 森 毅『16・17世紀における陶磁器の様相とその流通』(『ヒストリア』第149号, 大阪歴史学会, 大阪, 平成8年)
- 27) 松尾信裕『大阪出土の桃山陶磁』(前掲)
- 28) 中近世土器の様式については伊野近富氏が総合的な研究を発表されている。伊野近富『原型・模倣型による平安京以後の土器様相』(『中近世土器の基礎研究』V, 日本中世土器研究会, 昭和63年)
伊野近富『古代～中世洛外産土師器皿の生産と流通』(『中近世土器の基礎研究』IX, 日本中世土器研究会, 高槻, 平成5年)

第2節 土地区画の歴史的変遷 —左京五条三坊八町—

前川佳代

はじめに

本調査地は平安京の条坊表示によると、左京五条三坊一保八町西三行北三門に該当し、中世には四条南室町西、鶏鉾町と月鉾町にまたがる位置にある。いずれの場合も通りには面さず、一町の「奥」・「裏」の空間に当たる。

当地は中・近世京都においては下京中組のいわゆる「古町」に属し、「室町通」の西側で、新町通（町小路）にはさまれた商工業の中核域を構成する一画でもあった。ところで室町通は、平安京の室町小路を起源とし主要道としての性格を帯びるのは永和四年（1378）に足利義満が北小路室町に室町殿を造営してからのことで、戦国期には「構」によって分離された上京と下京を結ぶ唯一の幹線道路となった。そして信長・秀吉の洛中改造によって「構」は解体され、京の町並みは変化をとげた。この室町通こそ中近世京都の変容をつぶさにみていた証人といえるだろう。

今回の調査では弥生時代から近現代までの約3mの堆積層が確認された。特に平安時代から江戸時代にかけての地割と考えられる区画遺構が検出されたことは、当町域内の地割の変遷を知る良好な資料となった。ここでは調査区の遺構の変遷を概観し、宅地割の変化と土地利用について、歴史的な変容過程を追ってみたい。

1. 調査区遺構の変遷（第99図）

1) 平安時代

調査区西部において、幅2.0m以上と推察される溝（No. 200）が検出された。南区では溝の肩が削平されていたため検出が困難であったが、北区で検出された溝の延長上に同時期の遺物を含む層を確認しているため、この溝は両調査区を南北に貫いていたものと考えられる。溝の埋土からは、平安時代中期後半代の遺物が出土しており、また1009年鑄造の北宋銭「祥符元宝」も出土している。遺物の年代は中期を下るものはないため、北宋銭はこの溝の上限を示すものと考えてよいだろう。このことからこの溝は11世紀初頭以降廃絶したと考えられ、その後は生活面となっていたのであろう。

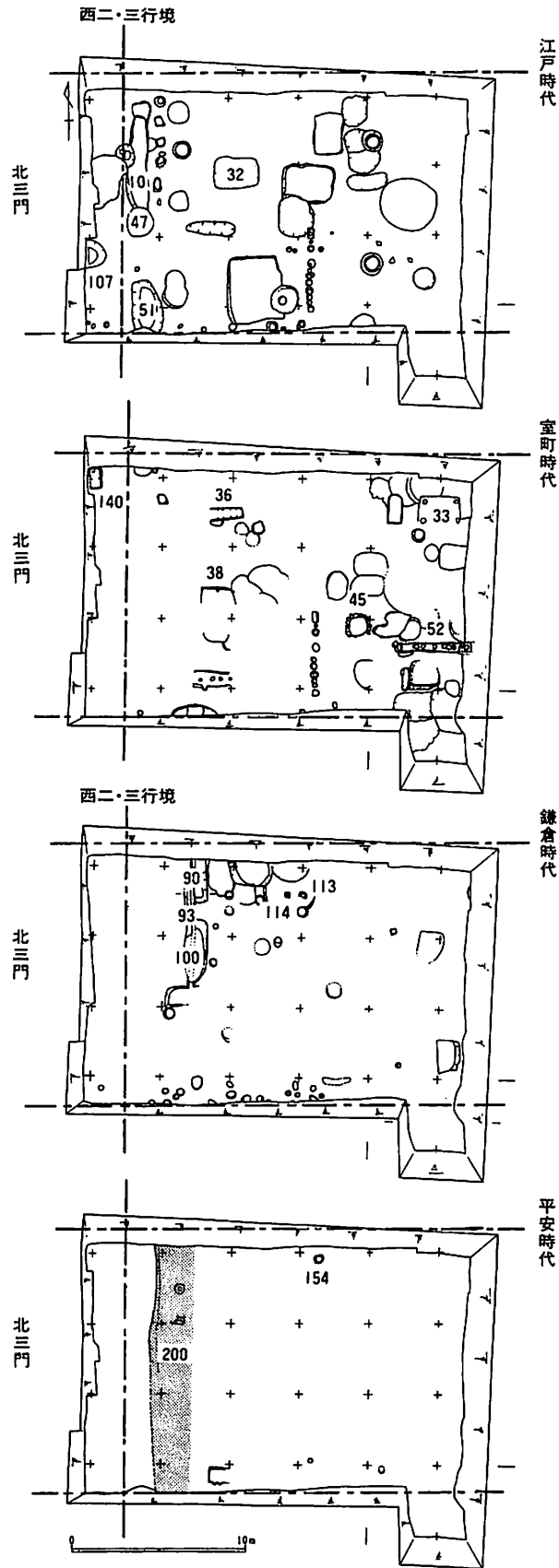
2) 鎌倉時代

調査地の北部には土取りの穴と思われる土坑が重複しており、それを整地した上に、埋甕が置かれている（No. 113・114）。また調査区南端には柱穴が東西方向に並び、この位置は四行八門制でいう北三門・四門境に相当する。平安時代の南北溝の東脇には幅50cmの溝（No. 93）が開削されるが、南区では検出されなかった。この南北に走る溝は浚渫を何度か行っているようで、長細い土坑が2基検出された（No. 90, 100）。溝や土坑からは、鎌倉時代後期の遺物が出土している。当域の区画施設は、平安時代中期後半以降みられなくなり、鎌倉時代後期に背割溝的な遺構の出現をみるが、これ以後、江戸時代まで当域を境界とする区画は認められない。

3) 室町時代

調査区中央東寄りに南北方向の柱穴列があり、部分的な区画施設とみられる。また東壁際に塀の基礎と思われる布堀りの溝状遺構（No. 52）が現室町通りに向かって続くことから、東西の区画割の存在が想定される。両者の間には、多量の甕と土師器を出土する石組み井戸（No. 45）が設けられている。また調査地北西部に、方形で堅穴状に掘り窪めた壁際に杭穴や柱穴が並ぶ方形土坑が三箇所検出されている。No. 36・140は13世紀後半～14世紀、No. 38は14～15世紀である。東北部には根石を持つ室跡（No. 33）がある。

調査区東南では焼土塊を多量に含む方形の土坑が検出された。火事場の後片付けと土取りを併用したものと



第99図 調査地遺構変遷図
 -.-は四行八門制推定ライン (S = 1/400)

考えられる。前述の布掘りの溝状遺構には、一部この土坑と同じ埋土が入っており、なおかつその土中に堀の芯とみられる柱が立ち腐れていたため、土坑より布掘りの溝状遺構の方が新しい。土坑は15世紀後半とみられ、同じ埋土を使用していることから、両者の作業はあまり時を隔てず行われたものと考えられる。

4) 江戸時代

江戸時代には再び調査地北西部に区画施設が現れる。作り替えの見られる柱穴列や廃棄土坑を兼ねた背割溝 (No. 10)、そして井戸が南北に並ぶ。これらには時間差があって確実なセット関係はつかめなかった。土坑 No. 32・51、下部に石組みの構造を持つ No. 107 は近世初頭で、背割溝や井戸 No. 47 は江戸時代前期から中期までの遺物を含む。これら以外は江戸時代中期以降の遺構である。

2. 調査地の歴史の変遷

八町内の居住者を一覧にしてみたのが、第4表である。次節以降で時代別に調査区の遺構との関連性について検討したい。

1) 平安時代

南北溝が機能していたころ、当地は右近衛中将源雅通の「四条宅」であったことがわかる。源雅通は宇多源氏の左大臣雅信孫、権左少弁時通男で母は但馬守源堯時女。永延元年(987)に父の卒去に際し、祖父雅信の養子となった。寛仁元年(1017)七月十日卒去、時に従四位下右近衛中将であった²⁾。雅通の「四条宅」は『今昔物語』に「四条ヨリハ南、室町ヨリハ西」とあって、当調査地を含む一帯と考えられる。この「四条宅」はもともと陸奥守藤原済家の家であったが、雅通が伝領したという³⁾。祖父雅信の娘が、時の権力者藤原道長に嫁いでいたため、道長とも懇意であったらしく、この宅に投宿したことがある。『小右記』長和二年(1013)七月二十日条には、

丹波中将雅通言去夜焼亡由云々、雅通日者住四^(宅カ)条宅云々、

第4表 左京五条三坊八町の居住者・所有者一覧

時代	年代	所有者	地区表示	規模	出典
1	平安 11世紀初頭	源雅通	四条ヨリハ南、室町ヨリハ西也		『今昔物語』巻第27第29
2	平安 久安六年(1150)	藤原氏女	四条町切草坐棚、自南二番三番		「藤原氏女家地券紛失状」『平遺』2700
3	平安 長寛元年(1163)	藤井国方 →高橋正重	四条南自町東町面	口捌尺陸寸伍分 東西伍丈伍尺捌寸	「藤井国方家地売券」 『平遺』3255
4	平安 治承四年(1180)	秦国清 →源光清	自四条南自町東町面	口老丈式尺柒寸 奥捌丈	「秦国清家地売券」 『平遺』補130
5	室町 永和二年(1376)	彦次郎	四条町南東類		「大山崎住京新加神人等被放札注文」 『大山崎離宮八幡宮文書』
6	室町 応永三二年(1425)	祐善	四条室町南西類		「酒屋交名」
7	室町 〃	祐仙	四条町東南類		『北野天満宮史料』
8	室町 〃	国次	四条町南東類		
9	戦国 文明十年(1478)	日野政資の 所領地	四条町、上者錦小路、東者室町、下者綾小路、西者西洞院		『大日本史料』第八編之十、同日条の禁制
10	江戸 寛永 寛永十九年(1642)	京極若狭守	「京極若狭守宿」 「京極若狭守」		『寛永平安町古図』 『洛中絵図寛永後万治前』
11	江戸 慶安五年(1652)	松平大隅守	「松平大隅知行、七十二万九千石」		『京都大絵図』

と雅通の「四条宅」が焼亡したことが確認できる。さて、この雅通の邸宅はどれくらいの規模であったらうか。

南北溝は一町の中心ラインの東に位置している。平安京の都市計画を記した『延喜式』京程によれば、「凡町内開小径者、大路辺町二五分一丈、市人町三五分一丈、自余町一五分一丈」とある。当町であれば一条の小径が設定されていた可能性があるが、溝の西側は後世の削平が著しく小径らしき道路の痕跡は検出されなかった。この南北溝が宅地割のそれであるとする、屋敷地は二分の一町、あるいはそれ以下という可能性が考えられる。

ところで、周知の如く平安京では宅地班給が実施されていたのであるが、その規定は藤原京や聖武朝難波京のように現在に残っておらず不明である。ただ、それに若干の示唆を与える史料としてよく取り上げられるのが、後三条天皇の長元三年（1030）の『日本紀略』三月二十三日条に載せる次の一文である。

伏議、諸国吏居処不可過四分一宅、近来多造營一町家、不濟公事、又六位以下築垣并檜皮葺宅可停止者、長元三年という雅通の「四条宅」が焼失して17年後ということになるが、諸国の国司クラス、つまり五位相当の官位しかもたない者が一町規模の邸宅を構えていることに懸念を示している。聖武朝難波京でも、「三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分一町之一以下」と規定しており⁴⁾、ほぼそれぐらいの班給規定が平安京にも存したのであろう。平安京の宅地班給規定と、検出された南北溝の存在から、二分の一町以下の宅地規模が想定できよう。

当調査では調査地北壁際に柱穴 No. 154 が検出されたが、ここからはほぼ完形になる平安時代中期の須恵器の瓶子が出土した。埋納遺構かと思われたが、割れた壺以外の遺物はみられなかった。東に隣接したガレージの調査では、須恵器の瓶子と土師器を埋納した祭祀遺構が三基検出されている。二基は10世紀後半、もう一基は11世紀中葉で東西・南北に配されていたという。京都市埋蔵文化財研究所の百瀬氏によると、No. 154 とほぼ同じ位置に沿って、その祭祀遺構を二基検出したという⁵⁾。これらが出土した位置は、四行八門制でいうなら、北二門と三門の境界上にはほぼ重なる。百瀬氏はこれらを地鎮遺構とらえられているが、この境界を中心に、北部の北一門二門分を半折すると、北三門四門となり、ちょうど四分の一町となる⁶⁾。そのように考えると、雅通の「四条宅」は四分の一町であった可能性が出てこよう。以上のような推測が成立するが、今後のこの周辺の調査に期待したい。

2) 鎌倉・室町時代

遺構数も増えるが、出土遺物中に甕が占める割合が高くなる。第4表からみてもわかるように、当地周辺には酒屋が住んでおり、また大山崎の油座の神人が京都に住む「大山崎住京神人」として町小路付近に住んでいたことがわかる。鎌倉期の埋甕の存在や室町期の石組み井戸 No. 45 からの大量の甕は酒や油などの備蓄に使用されたことが推察される。

鎌倉期には、調査地北西部に南北溝が築かれるが、この溝はほぼ現行の町境上に位置するため、地境の背割溝と考えられる。また埋甕は東西方向に並んでおり、室町通りに面する町屋の奥に、甕を据えた何らかの施設が存在したのであろう。『明月記』寛喜三年（1231）一月十五日条に当地周辺の火事の記載がある。それによると「自四条町出、南綾小路、北六角町、四条坊門以南、西洞院室町商賈之輩悉焼云々」とあり、西洞院通と室町通の六角通から綾小路までの間に「商賈之輩」がいたことがわかる。また『師守記』貞治三年（1364）二月一日条によれば当地付近で市が開かれたという。

調査地南東隅で検出された焼土を多く含む土坑は、当地周辺が火災にあったことを物語っているが、上述の『明月記』のような火事の記事は平安時代から後を断たない。それだけ火災しやすい状況、つまり家屋が密集していたことが伺えるわけであるが、この土坑から火災の時期を考えると、まず思い浮かぶのはいわゆる「応仁・文明の乱」（1467～1477）の戦火であろう。しかし、最近吉村亨氏は、当該期の戦火地を史料より抽出され、戦火によって「京都が燃えた」のは大乱の初戦であり、本陣が築かれて幾度となく戦火に包まれたのは上京域であること。そして「都市京都の再生産機能を持たされた」下京域はそれほど戦火を被っていないことを

明らかにされている⁷⁾。戦火地の位置図をみると、当地は戦火地とはなっていない。以上を念頭において火事の記事を捜すと、『後法興院記』明応三年(1494)七月六日条にのせる焼亡記事がある。火事は四条室町で起こり、東は烏丸、西は堀川、南は五条、北は四条の範囲が焼けたといい、この日記の著者である近衛政家が「近来大焼亡也」と記すほどの大火であったらしい。本調査区で検出された壁土の採取と火事場の後片付けを併用した土坑からは、被災の復旧作業が迅速かつ合理的に実施されたことが伺い知れるのである。この火事後、塀と思われる施設が構築されるが、東隣の調査でもこの遺構に続くものが検出されており、それが戦国期の土坑に切られていることから、塀の存続は短かったようである。

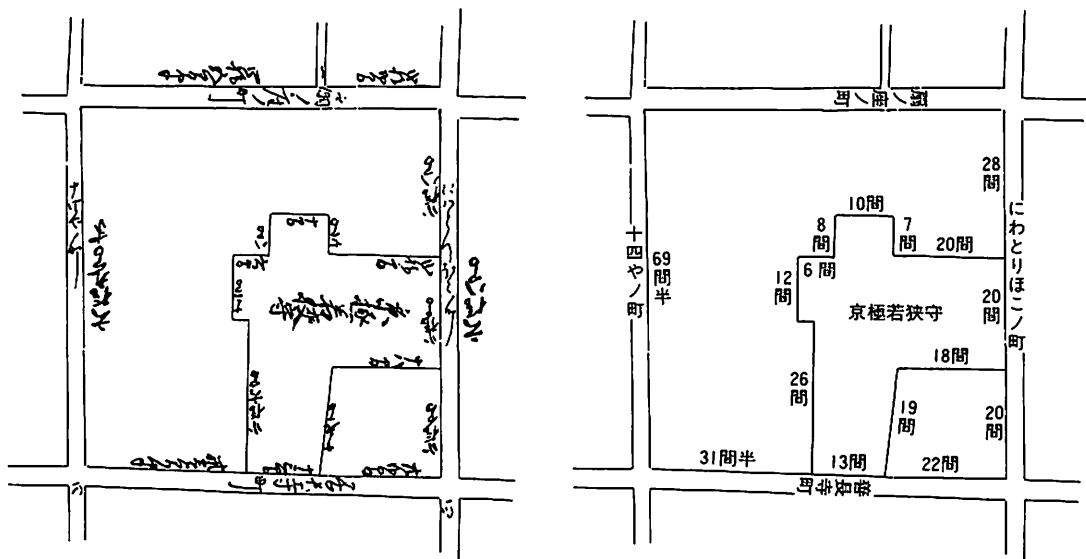
なお、文明期当地域の権門領主は日野政資で、しかも当地は幕府への「朝恩」に対する「御恩地」であって、幕府から下賜されたものであった。この時代にあっても、町衆は土地の所有者ではなかったのである⁹⁾。

3) 江戸時代

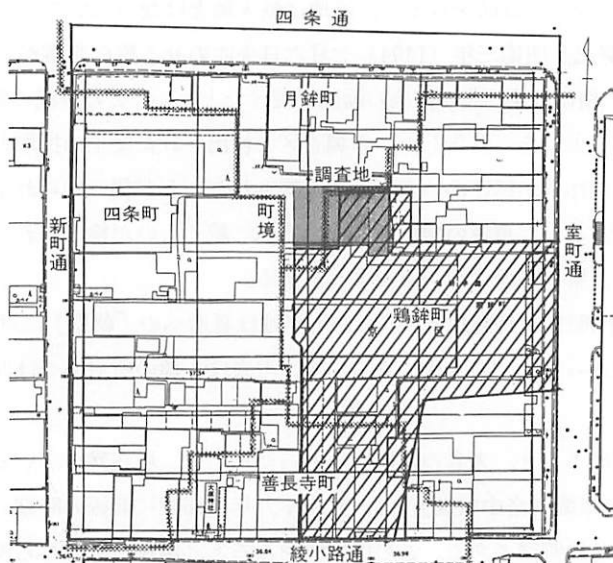
次いで近世には、絵図類によると、大名の京屋敷であったらしい。現在残っている絵図類中でも、いわゆる『寛永後万治前洛中絵図』(以降『洛中絵図』)は、寛永十九年(1642)前後の時期の洛中全域をおよそ千三百六十八分の一の縮尺で記した地割図である。この区画割をみると、現在の町割からみて当調査地は京極若狭守なる大名屋敷の北端の一部である(第100図)。

この絵図の間は6尺5寸と考えられており¹⁰⁾、調査地相当域と思われる区画を現尺で換算すると、西端境は室町通から58.5m、東端境は39.0m、北端境は現綾小路通から89.7~91.65mと算出できる。

この『洛中絵図』の一町の規模と平安京の条坊の一町と比較すると、南辺が66間半=129.675m、東辺が68間=132.6m、西辺が69間半=135.525mと一町=120mを大きく上回る。町屋が大路・小路を侵食していった巷所化を明瞭に示している。ところが現代になると現四条通や室町通の拡幅に伴い、今度は町屋が削平された。現況図の新町通と綾小路通の側面を基準に、『洛中絵図』に図示された一町を重ねると第101図のようになる。東辺は約4m室町通に入り、北辺は約13m四条通に食い込む形になる。そして京極若狭守の屋敷地は、室町通に開く敷地の北辺が四行八門制の北三門と四門の境と重なり、敷地中央の突出部北辺は現行の月鉾町と鶏鉾町の町境と重複し、また北二門と三門境にも近い。平安京の宅地割が江戸期にも生きていたことが読み取れる。突出部西辺もまた町境と考えていだろう。本調査区北西部で検出された区画施設は、少しはずれるが突出部西辺に関する遺構とも考えられる。



第100図 『寛永後万治前洛中絵図』に描かれた八町域
(臨川書店刊『洛中絵図 寛永後万治前』よりトレース)



第101図 『洛中絵図』に描かれた八町の範囲と調査地 (S = 1/2000)

さて、当屋敷の主「京極若狭守」なる人物であるが、京極忠高の可能性が高い¹¹⁾。忠高は文禄二年(1593)に生まれた。父は若狭国小浜藩城主高次。慶長十一年三月に従五位下侍従となり、若狭守と称した。同年五月には従四位下になっている。室は將軍秀忠の四女初姫である。大坂冬の陣では玉造口を固め、嫡母常高院(淀君の妹、徳川秀忠室崇源院姉)と講和に尽力し、夏の陣では京口に陣したという。寛永三年八月の將軍家光御上洛に従い、十九日に京都において左少将となっている。また十一年の上洛に際しても京都に赴いており、当屋敷は『寛永平安町古図』に「京極若狭守宿」と記すように、上洛の際の宿館と思われる。

ところで、藤川昌樹氏は、徳川期京都の武家屋敷の成立過程を論じられる中、『洛中絵図』より武家屋敷の立地形態を町人地との関わりにおいて、「独立型」・「町並型」・「町奥型」の三つに類型化された¹²⁾。京極氏の屋敷はその分類でいうなら、「町奥型」となる。そして「町奥型」の成立過程は幕府からの拝領によるものが多く、幕府の都市計画を反映しているとされている。京極忠高は、徳川氏の姻族として優遇されたようで、商工業の中核地である当地の町奥に広大な京屋敷を営むことができたのも、幕府の拝領に与ったためと推測される。

ところが、忠高が寛永十四年(1637)六月十二日に45才で没すると、継子がなかったため、甥の高和を末期養子としたが、幕府に認められず、領地は没収された。おそらくこの京屋敷もその時に召し上げられたとみられる。忠高の没年は、この絵図が描かれたと推測される寛永十九年と5年の齟齬をきたす。改易の憂き目をみた高和は、出雲隠岐をおさめることになり、その後、祖父高次の勲功と忠高の忠勤を認められて、播磨国六万石を賜ったというが、若狭守と称した形跡はなく、『洛中絵図』に記された「京極若狭守」とは忠高のことと考えられるのである。

続いて元禄九年(1696)の『京都大絵図』には「松平大隅知行、七十二万九千石」と記されている。この松平大隅守という人物は、薩摩藩主嶋津光久に該当すると思われる¹³⁾。光久は元和二年(1616)生まれで、父は家久。初めは又三郎忠元と称したが、寛永八年(1631)に將軍家光の前で元服し、家光の一字を賜い、従四位下侍従に叙任して光久と名乗り薩摩守と称した。この時、松平の称号を賜り、以後継豊まで松平姓を名乗る。慶安四年(1651)十二月二十五日少将に進み、大隅守となった。元禄七年(1694)十一月二十九日鹿児島において卒去。この場合も絵図の年代と合致しないが、光久子綱久は延宝元年(1673)二月十九日に父に先立っており、その子綱貴は大隅守とは称していないことから、絵図にある「松平大隅守」とは光久の事と判断した。光久の京都における事績は見出せないが、京極氏と同じく、京屋敷、京藩邸¹⁴⁾として利用していたのである。

う。

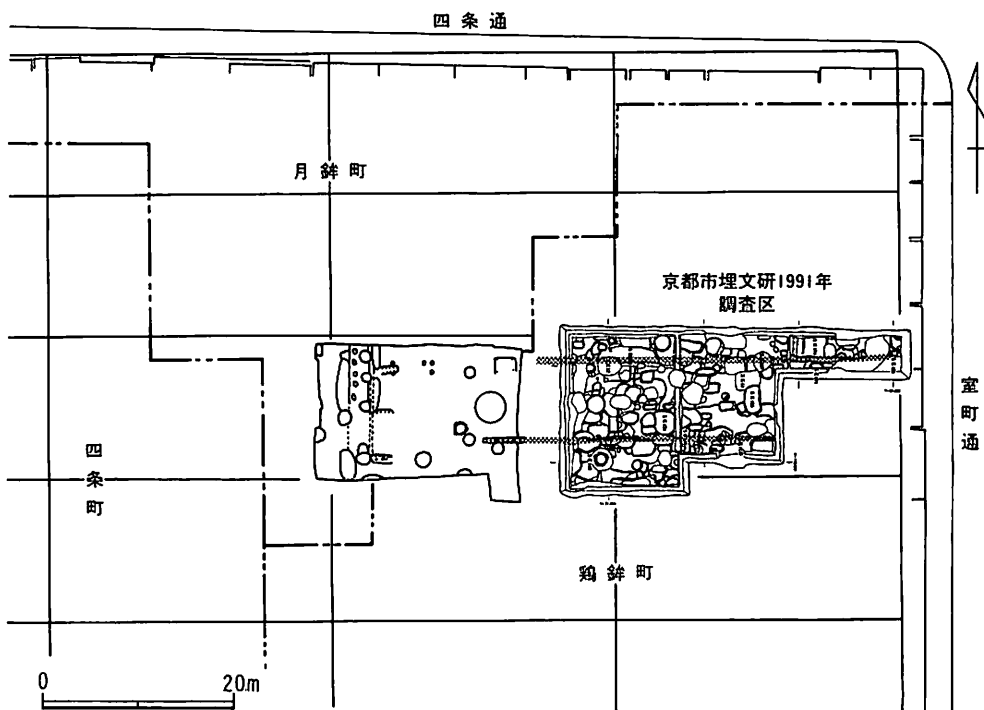
このように17世紀末まで大名の京屋敷であったことがわかるが、柱穴列が設置されている場所に井戸やゴミ穴が南北に連なって出現するのは18世紀以降である。江戸期には裏庭の井戸が減少する傾向にあるといわれるが、当地についていうなら、むしろ地境を明示するかのよう井戸が設けられている¹⁵⁾。

3. むすびにかえて一八町域の土地利用— (第102図)

いわゆる平安京が中世京都へと変貌する過程は、たとえば街区表示が四行八門制から通り名を交差して直交座標表示に変化し、また一町の区画から「四面町」・「四丁町」・「両側町」へと変化する。そしてさらに近世京都への変化に町組の形成をあげられる秋山国三氏以来の研究がある¹⁶⁾。高橋康夫氏は「町」空間から「とおり」という道路を主体とする都市空間の変化を指摘されている。また氏は下京の都市空間構成である町割は祇園会山鉾維持運営のあり方より、下京鉾町の町割の骨格は少なくとも天文期に溯るとする¹⁷⁾。藤川氏も徳川期京都の武家屋敷の配置が豊臣期の都市計画に準じていると推測されている¹⁸⁾ 点では時期的に齟齬はないであろう。考古学の立場から近世京都の成立をとらえられる堀内明博氏は、現行の町割の起源は16世紀末から17世紀初頭とされ、信長入京と秀吉の京都改造時を画期としつつ¹⁹⁾ も、最近の発掘成果から天正地割が施された地域も平安京の条坊制・四行八門制を踏襲して宅地割の再開発がなされることを明らかにされており、天正地割によって京の町並みが全く変わってしまったかのような通説に対し危惧されている²⁰⁾。

さて、当調査地である八町域においてはどうかであろうか。区画割に関しては、上述のように平安時代南北溝が中期後半以降埋没した後、鎌倉後期になってほぼ同位置に背割溝が現れる。室町期には明瞭な区画施設はみえず、江戸時代になって再び同位置に柱列や背割溝・井戸がみられる。その位置は現行の町境である。当域ではこのように平安中期の区画が途切れながらも現代に生きているという下京「古町」たる所以を明瞭に示していた。

また当調査地は一町の「裏」の空間であったが、いわゆる「裏地」の利用については、洛中洛外図にみられるような空閑地があり、共同井戸や便所、あるいは畑地であるといわれる。当域では中央北部に鎌倉後期に埋



第102図 八町の四行八門制 (—) と町割 (— · —) 及び調査区位置図

甍が東西に据えられており、なんらかの施設の存在が示唆できる。明瞭な地境がない室町期には方形土坑が設けられている。これも既述したように倉状の施設と認識されている遺構である。このようにみると当地においては「裏地」は全くの空閑地ではない。

ところで、室町期には明瞭な地境は見られず、調査地中央やや東よりに柱列が現れる。当期の地境を考える上で、方形土坑の方位性に注目したい。現在鶏鉾町に属する No. 36・38 は東西を主軸にもち、現月鉾町に属する No. 140 は南北を主軸とする。それぞれ町屋が面すると思われる方向に小口を向けるのである。これら方形土坑はほぼ正東西南北を軸にもつ、極めて規則性のある構築物と考えられる。これについては町並みの形成という問題が関わり、当地のみで判断は尽きかねるので、今回は指摘するに留めたいが、俗に京都の町屋はうなぎの寝床といわれるような、通りに間口をもち、奥に長い町屋の構造をこれら方形土坑の方位性は指向しているように思えるのである。

八町域は商工業の中核である室町通と町通に面する「まちなか」で、時の権力者による改造を受けなかった「古町」に属するがゆえに、平安京の一町区画が生き残っている地域であり、現行の町境に平安京の名残りを留める希な地域である。四条室町の交差点はいつの頃からか「鉾の辻」と称されるように、京都に夏を告げる祇園祭では多くの観衆で賑わう。下京中組に属した当地からは、応仁の乱以前には鶏鉾町から鶏鉾を、月鉾町からは桂男鉾を出し、現在は鶏鉾、月鉾として巡行している。千二百年を経た京都はビルの合間に瓦屋根の町屋がひしめき、祇園祭の運営も年々危ぶまれるようになってきている。ビルに囲まれた町屋はさしずめ町人地内に出現した武家屋敷といったところだろうか。京都の再生に向かって、地下遺構から得る知識をぜひとも現代にいかしてほしいものである。

註

- 1) 東隣の調査でも同様の遺構が検出されている。百瀬正恒・辻裕司・南孝雄『平安京左京五条三坊』(『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1994)
- 2) 関口力『源雅通』(『平安時代史事典』)
- 3) 『小右記』長和二年七月二十日条
- 4) 『続日本紀』天平六年九月辛未条
- 5) 前掲註1), 百瀬氏の御教示による。
- 6) 平安時代の埋納遺構には久世康博氏の研究がある。同氏『平安京の埋納遺構』(考古学を学ぶ会編『考古学論集』, 大阪, 1990)
- 7) 吉村亨『応仁・文明の炎』(足利健亮編『京都歴史アトラス』, 東京, 1994)
- 8) 前掲註1), 百瀬氏の御教示による。
- 9) 町衆が土地を所有できるようになったのは、天文十八年(1549)頃とみられる。高橋康夫『戦国時代の京の都市構造一町組をめぐって一』(『京都市中世都市史研究』, 京都, 1983)
- 10) 川上頁『洛中絵図寛永後万治前解題』(『洛中絵図寛永後万治前』全七十四図, 臨川書店, 京都, 1979)
- 11) 岩沢愿彦『京極忠高』(『国史大辞典』, 『寛政重修諸家譜』巻四一九)
- 12) 藤川昌樹『徳川期京都における武家屋敷の成立一「宿」の性格をめぐって一』(宮崎勝美・吉田伸之『武家屋敷一空間と社会一』, 東京, 1994)
- 13) 原口虎雄『嶋津光久』(『国史大辞典』, 『寛政重修諸家譜』巻百八)
- 14) 武家屋敷の機能については『京都の歴史』五・六・七, 京都, 1972~74)を参照の事。
- 15) 武家地から町屋地へと変化した例で、藤川氏が引用されている例に、西洞院六角下ルの飯田藩邸がある(藤川氏前掲註12))。当地はその後の所有者三井家の史料から、この敷地が武家地から町屋地へ変化した、どの町にも属さない性質を持っていたことが伺えるという。その事から、当地は幕府からの拝領地であったがゆえにそのような性質を持つにいたったと推測される。本調査地では、近世半ば以降多くのゴミ穴や南北に走る背割溝を兼ねたようなゴミ穴、そして南北方向に連なる井戸を多く検出した。武家地から町屋へと変化した土地利用の一つのあり方であろうか。
- 16) 秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』(東京, 1975)
- 17) 高橋康夫『中・近世都市の空間と構造一京都を事例として』(関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究』Ⅲ, 大阪, 1992)
- 18) 藤川氏前掲註12)
- 19) 堀内明博『近世都市京都の成立について一考古学的成果をもとに一』(関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究』Ⅰ, 大阪, 1991)
- 20) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広『平安京左京二条四坊』(『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』, 京都, 1996), 堀内明博『近世城下町京都の成立』(同氏著『ミヤコを掘る一出土した京都の都市と生活』, 京都, 1995)

EXCAVATIONS AT THE EIGHTH INSULA, REGIO V, DECUMANUS III IN THE PARS ORIENTALIS OF THE CAPITAL HEIAN

Summary

The present report summarized the results of the excavation owing to the construction of building at the Ikenobô junior college, located in the center of the city of Kyoto. The excavated area measuring approximately 400 m² was comprised in the eighth insula, regio V, decumanus III of the pars Orientalis of the capital Heian in the Heian period.

According to the literature "Konjaku monogatari" (今昔物語), the mansion of Minamoto-no-masamichi (源 雅道) who occupied a position of the Ukonoenochûjô (右近衛中将) used to be there in that period. Though the thin layer and the south-north ditch belonging to the Heian period leave in the western part of the excavated area about 2.5m below the ground surface, a trace of the mansion was not found. Supposing that the south-north ditch which runs a little to the east of the center line of the eighth insula had been a ditch to fix the limits of the mansion, the mansion would have been a half of insula or a little smaller than it.

The pars Orientalis prospers as a commerce and industry area in the Kamakura period following to the Heian period. In the eighth insula, that sake seller's and oil seller's occupied was estimated by documentary records. An existence of sake seller's in the excavated area was proved archaeologically in not only the Kamakura period but also the Muromachi period. Restored to nineteen big jars for storing sake which were dumped into a stone made well belong to the thirteenth and the fourteenth centuries and a large quantity of unglazed small plates which unearthed from the same well belong to the first half of the fifteenth century. A bronze pot for warming up sake was unearthed from the same well, too. These finds are estimated to have been dumped at the same time by a state of discovery. However, a trace of building was not found.

Besides, three square pits belonging to the Muromachi period are noticeable. There are a variety of views about its character, for example, grave, storage room, institution for a ground-breaking ceremony etc. An iron plow and cylinder shaped iron goods in addition to deep holes lined on both sides of pits which were found in this time posed a question against a view that they are graves.

In the Edo period, many wells were sunk and a large quantity of ceramic made in not only various parts of Japan but also China were unearthed from wells. Imported ceramic wares were found in each layer and structure from the Heian period to the Edo period. Among them, a bowl of the Lee dynasty in Korea and long neck jar "Meipin" (梅瓶) made in China are special mentioned.

Furthermore, many Yayoi pottery were unearthed from a trace of stream in the lowest level. According to the distribution of Yayoi pottery and stone tools in the eighth insula and its neighborhood, a fair-sized Yayoi village to the east of this excavated area are supposed.

Two essays are added at the end of a volume. One is an analysis of pottery unearthed in this excavation. Another one is an examination about historical transition of land division.

圖 版



調査地調査前風景（西より）



調査地調査前風景（東より）

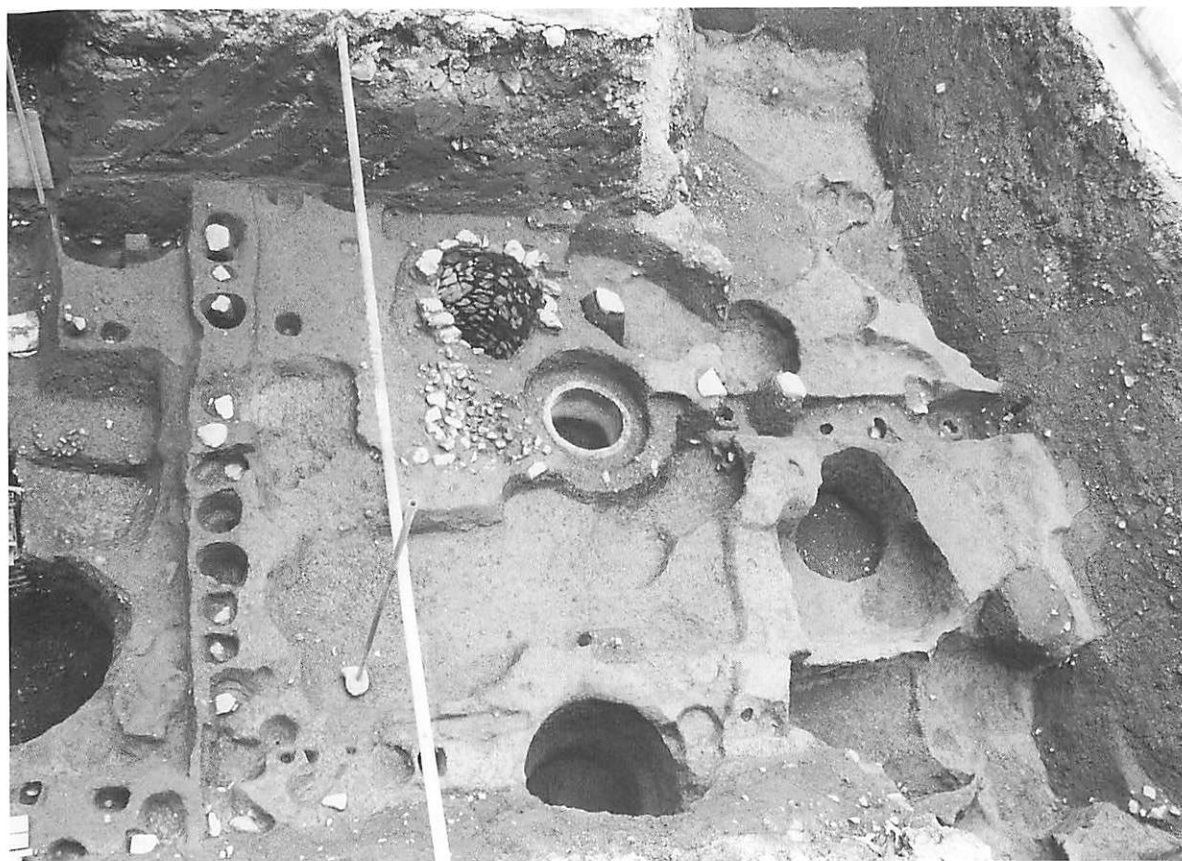
図版第 2



南区全景（西より）



北区全景（西より）



室町時代～江戸時代の遺構（南区）

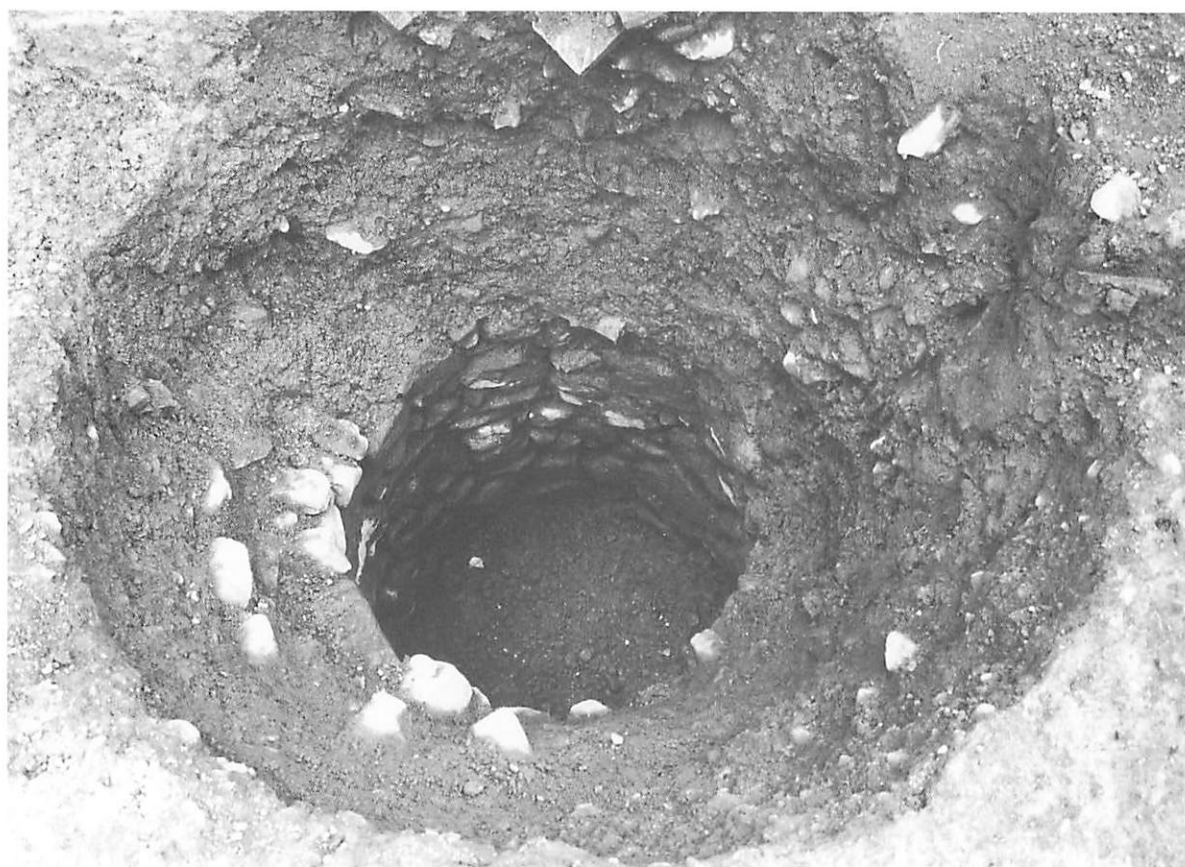


同 上

図版第 4



井戸 No.19 (北区、E 5)



井戸 No.107 (南区、F 3)



布掘りの溝状遺構 No.52 (南区、A・B3)



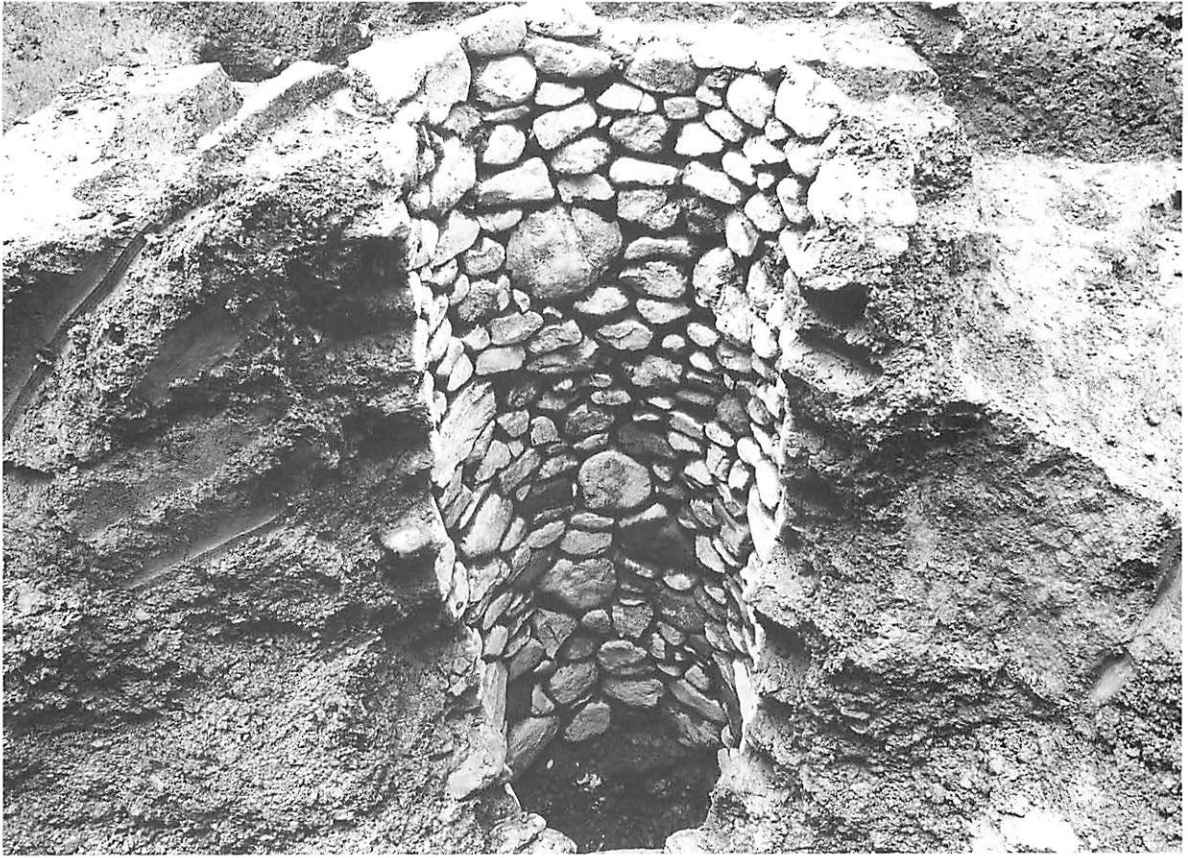
同 上



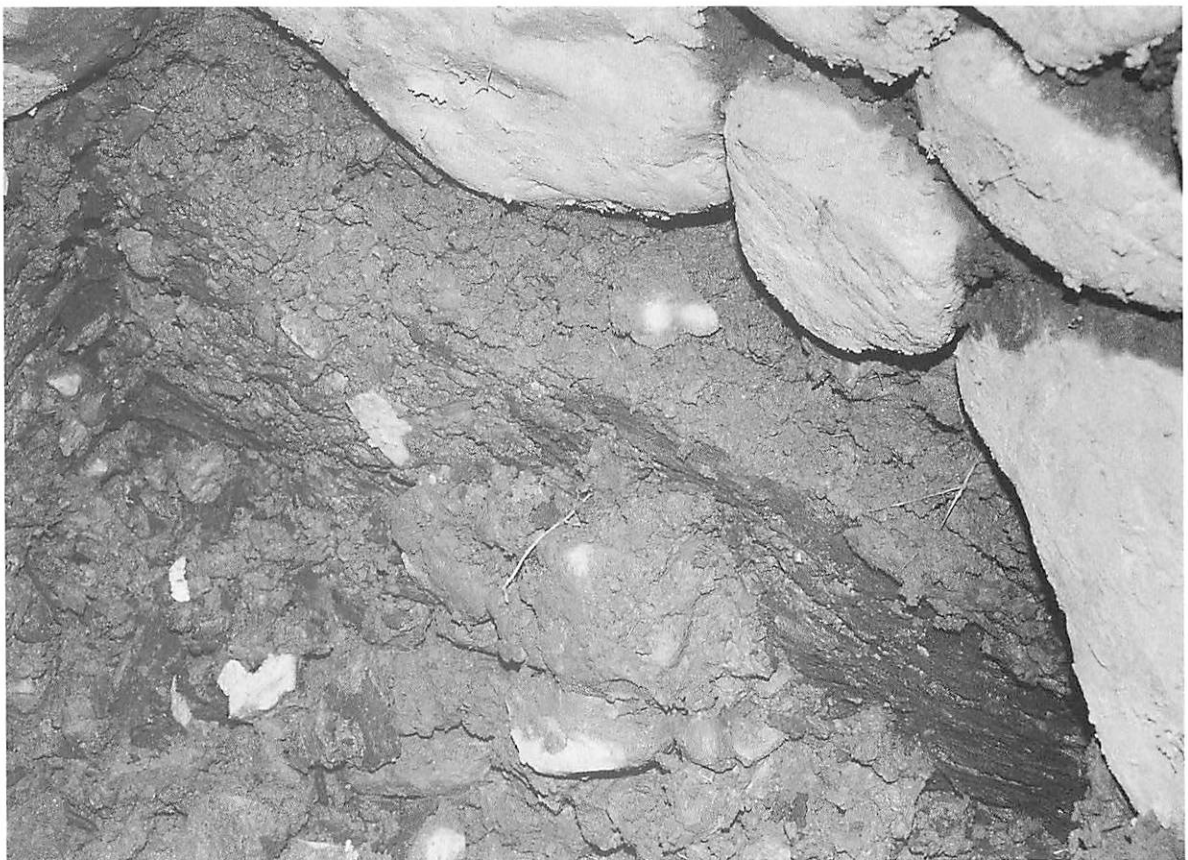
布掘りの溝状遺構 No.137 (南区、E 3)



室跡 No.33 (北区、A・B 5)



井戸 No.45 断ち割り状況 (南区、C3)



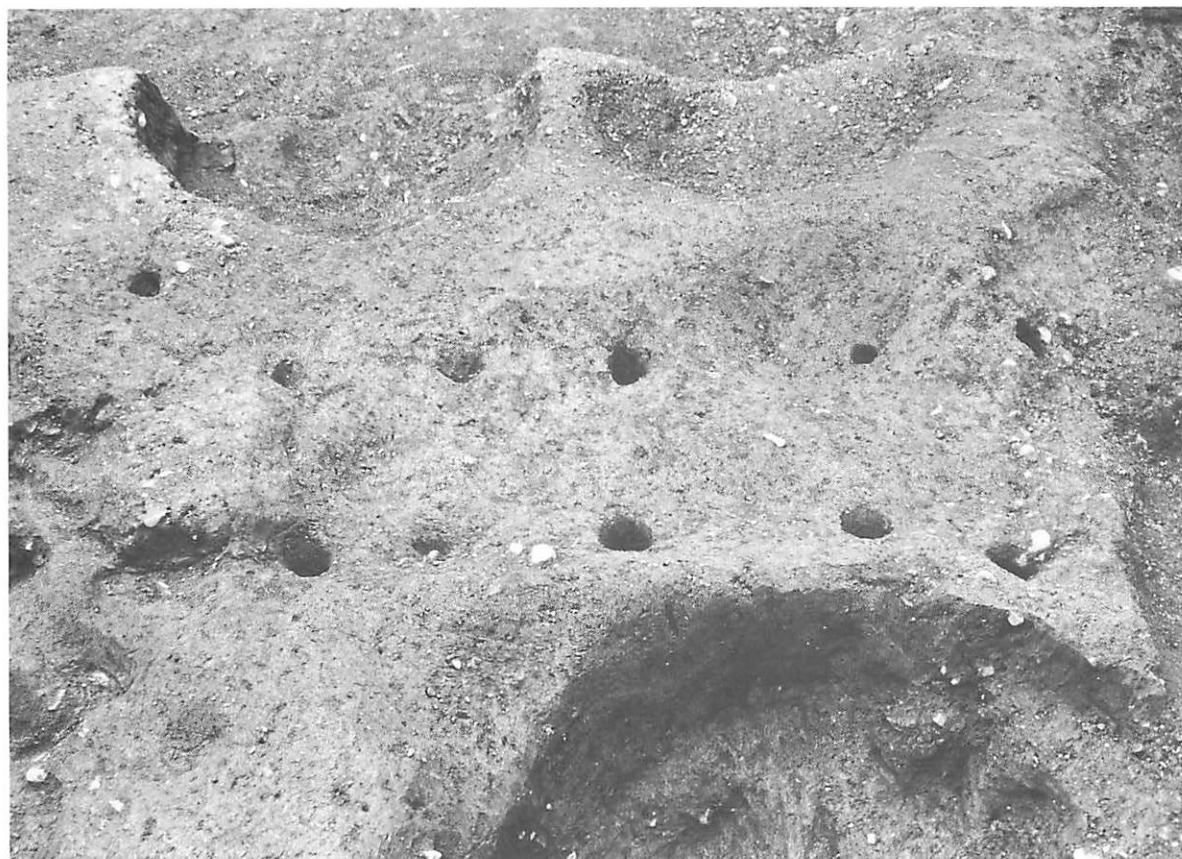
同上 井戸木枠



土坑 No.36 (北区、D·E 5)



同上 土器出土状況



土坑 No.36 完掘状況 (北区、D・E 5)



同上 北側杭列断ち割り状況



土坑 No.38 (北区、E 4)



同上



土坑 No.38 鋤先出土状況（北区、E 4）



同上 完掘状況



土坑 No.140 (北区、F・G 5)



同上 鉄製品出土状況



土坑 No140 完掘状况 (北区、F·G 5)



土坑 No61 (北区、B 5)



かわらけ溜り No.43 (南区、A 4・5)



甕出土状況 No.62 (北区、B 5)



土坑 No.44 遺物出土状況 (南区、A 3)



埋め甕出土状況 No.113・114・129 (北区、C・D 5)



平安時代の溝 No200 (北区、E 5・6)



同上 遺物出土状況



自然流路 No.300 (北区)



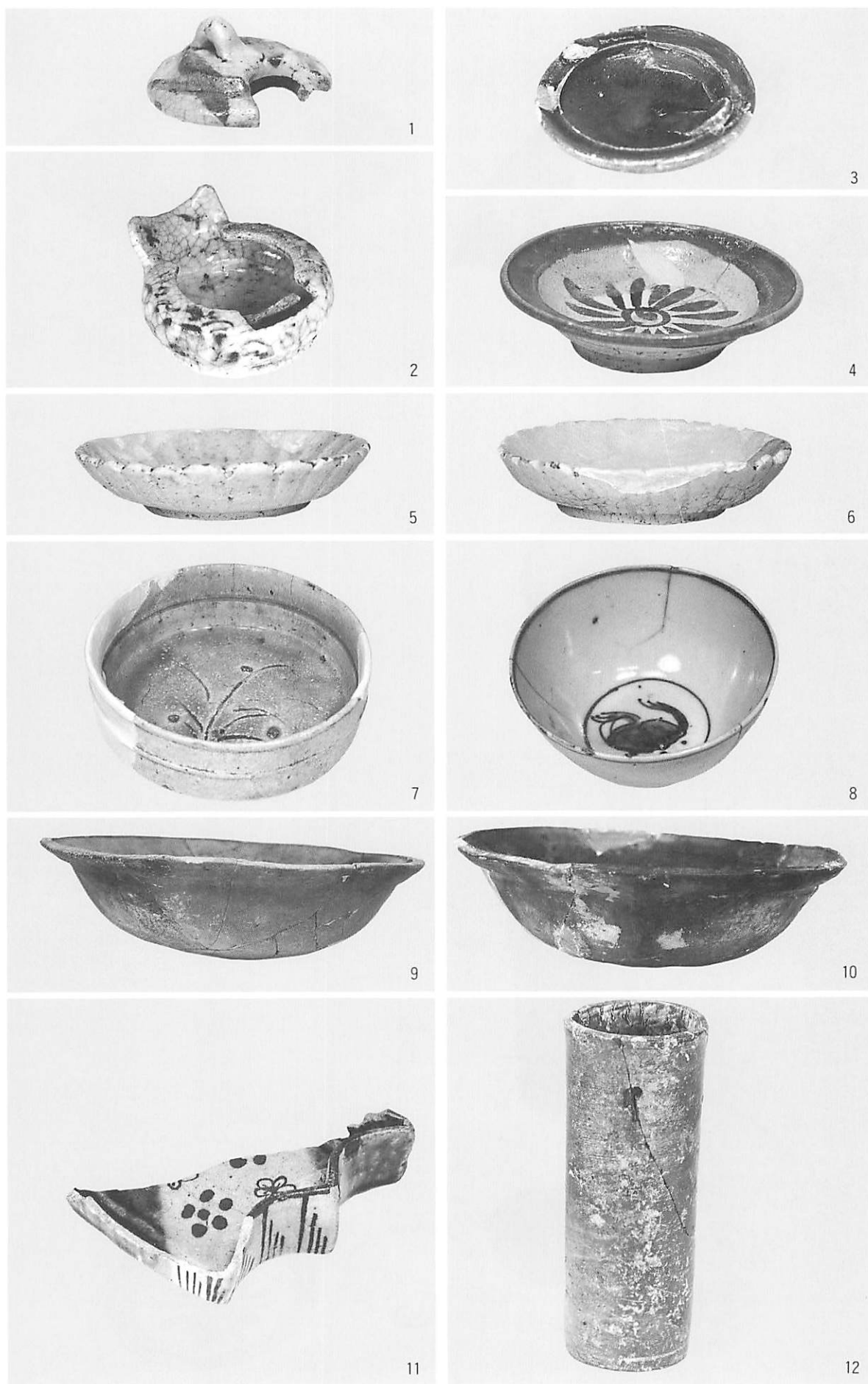
同上



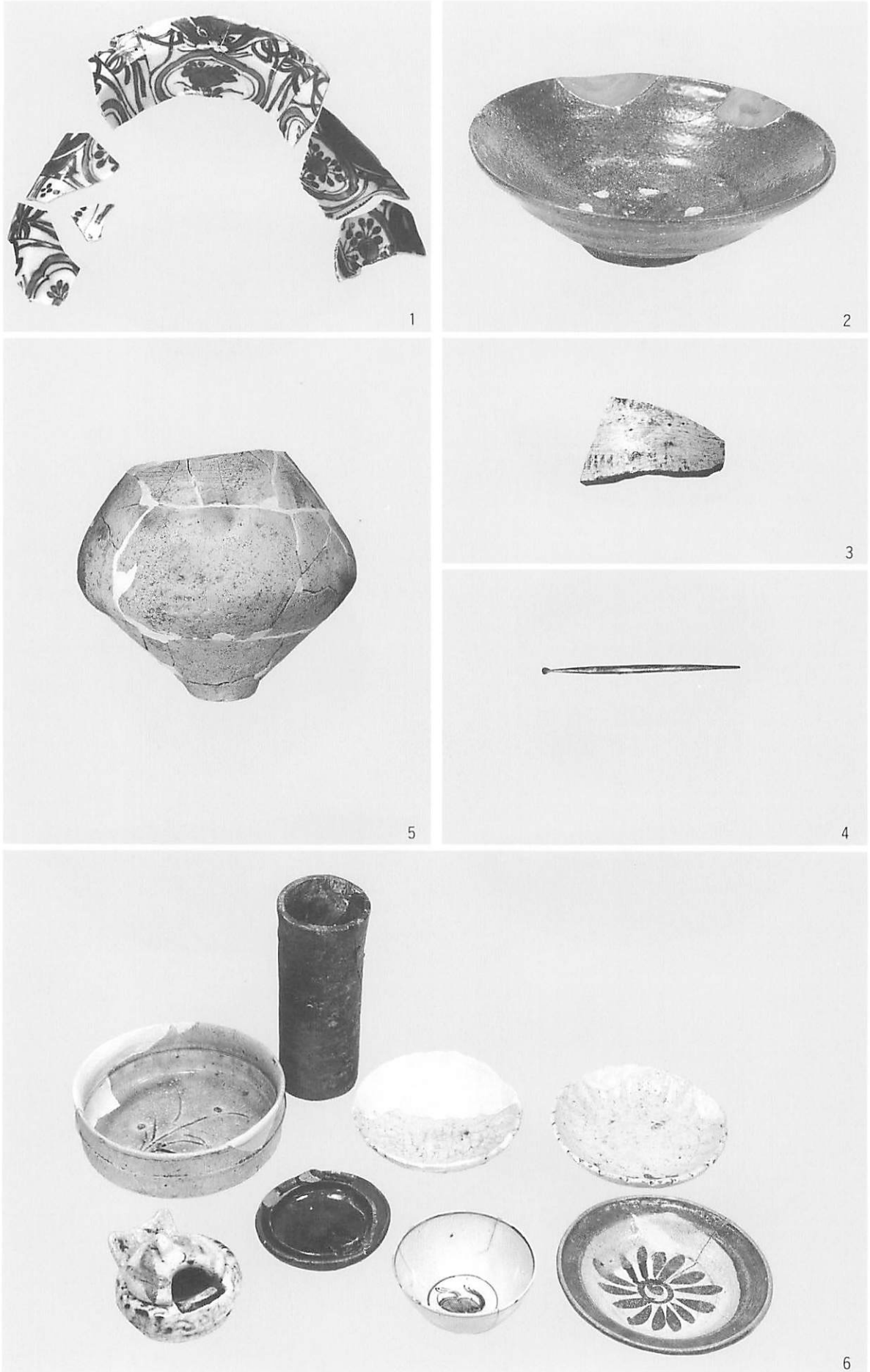
自然流路 No.300 遺物出土状況（北区）



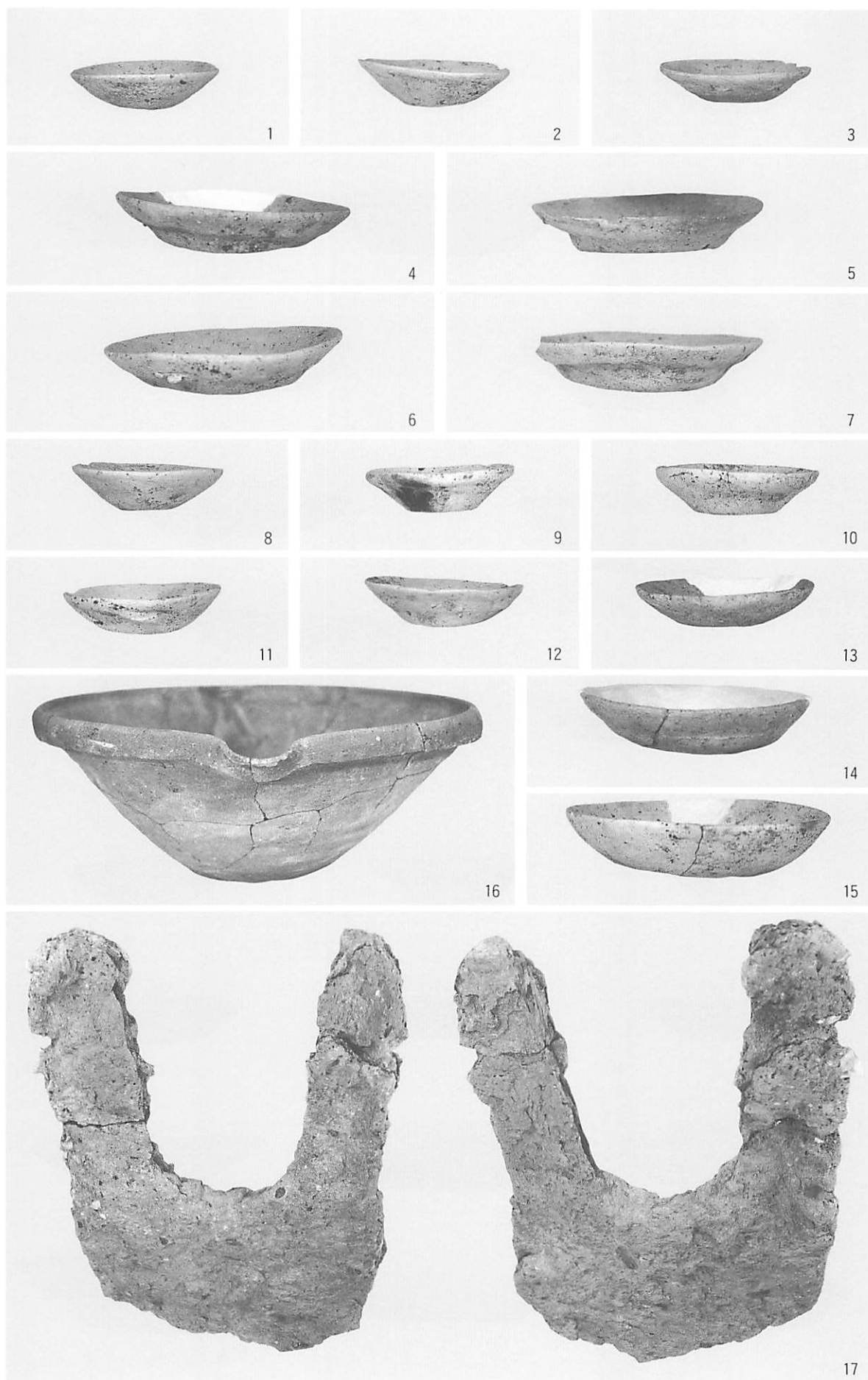
同上



江戸時代土坑出土遺物（1～10：No.51，11：No.40，12：No.10）

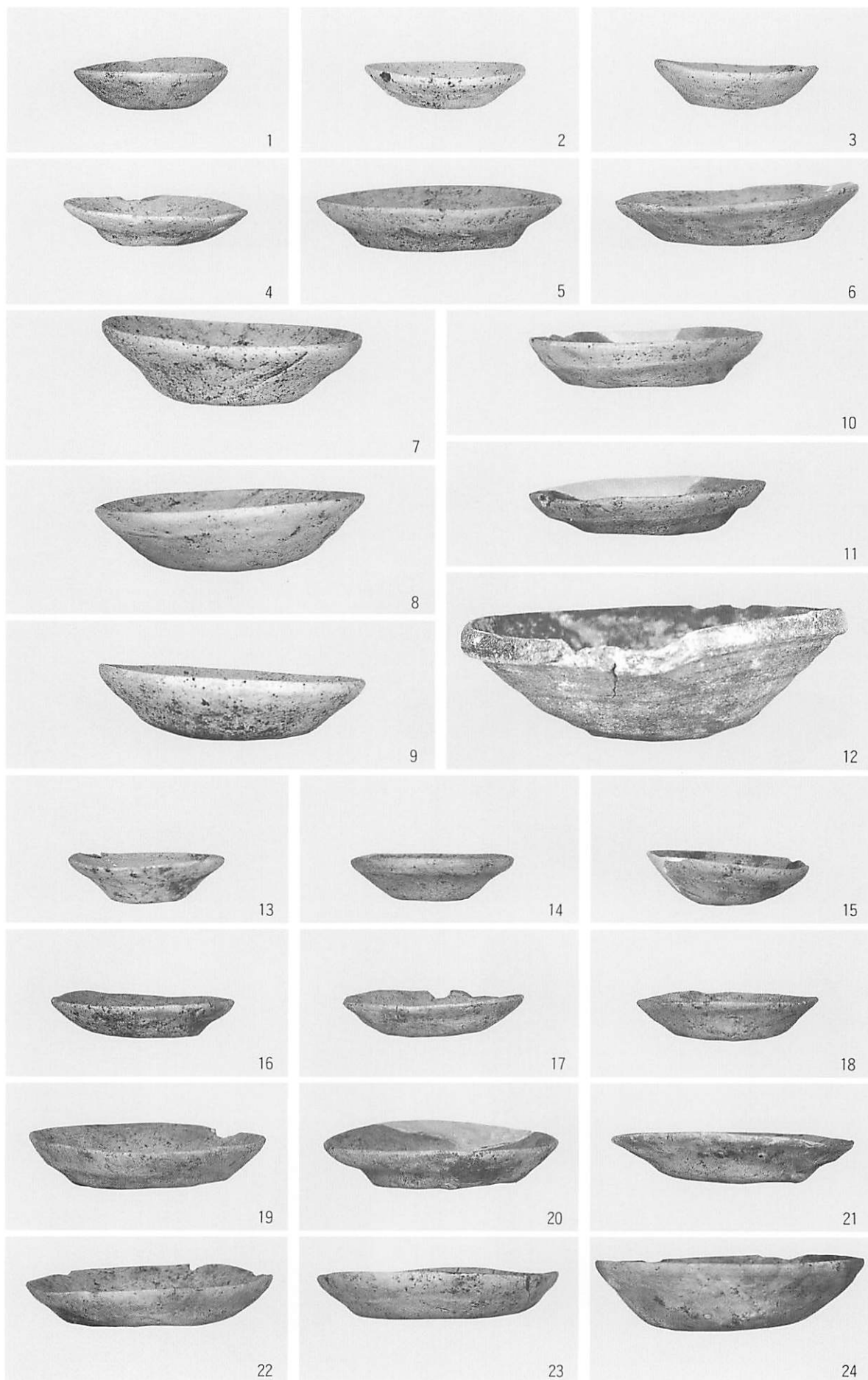


江戸時代土坑及び包含層出土遺物と弥生土器（1～4・6：No.7・51・70・10・包含層，5：No.300）

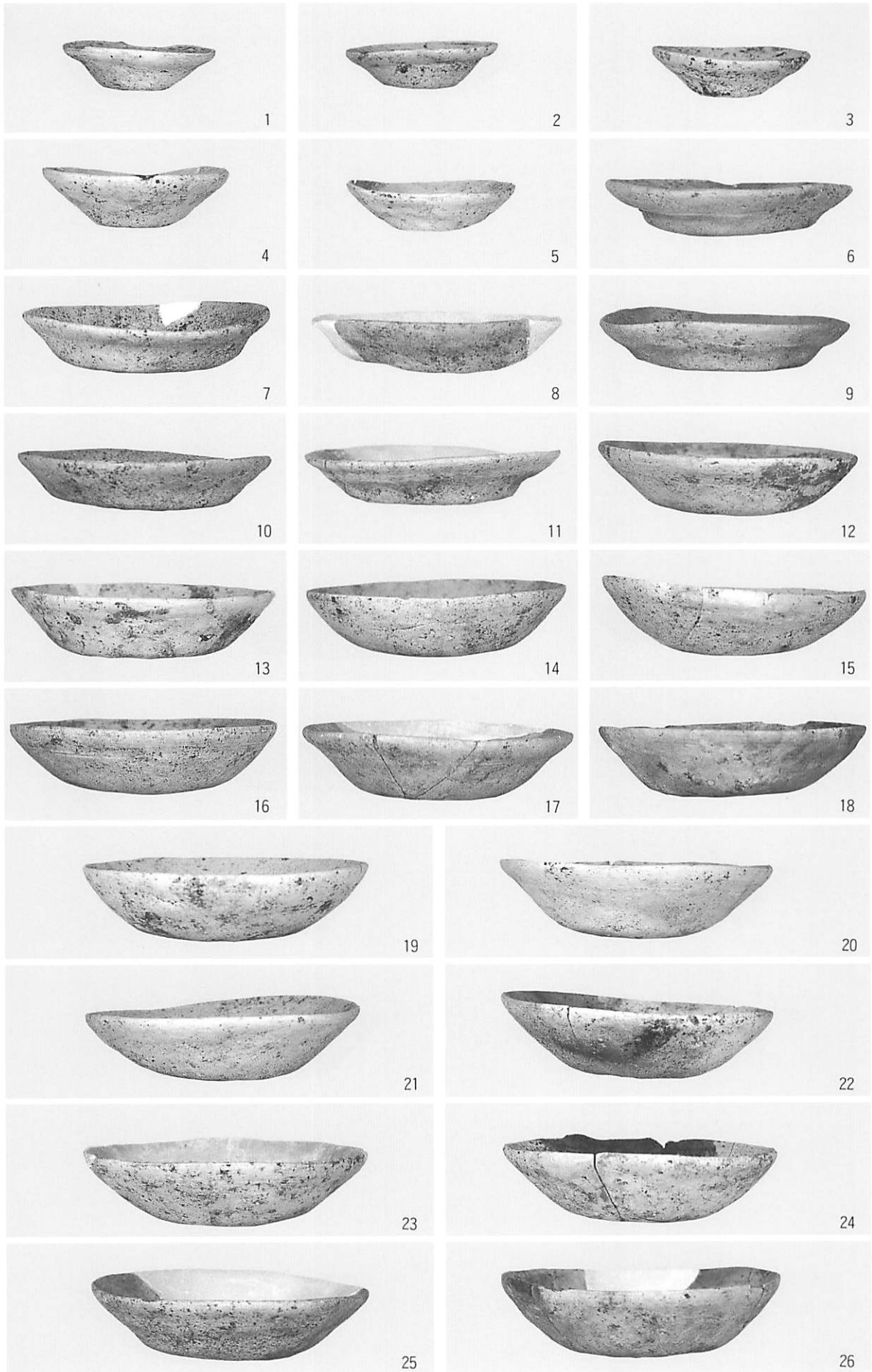


室町時代土坑出土遺物（1～7：No.62，8～16：No.36，17：No.38）

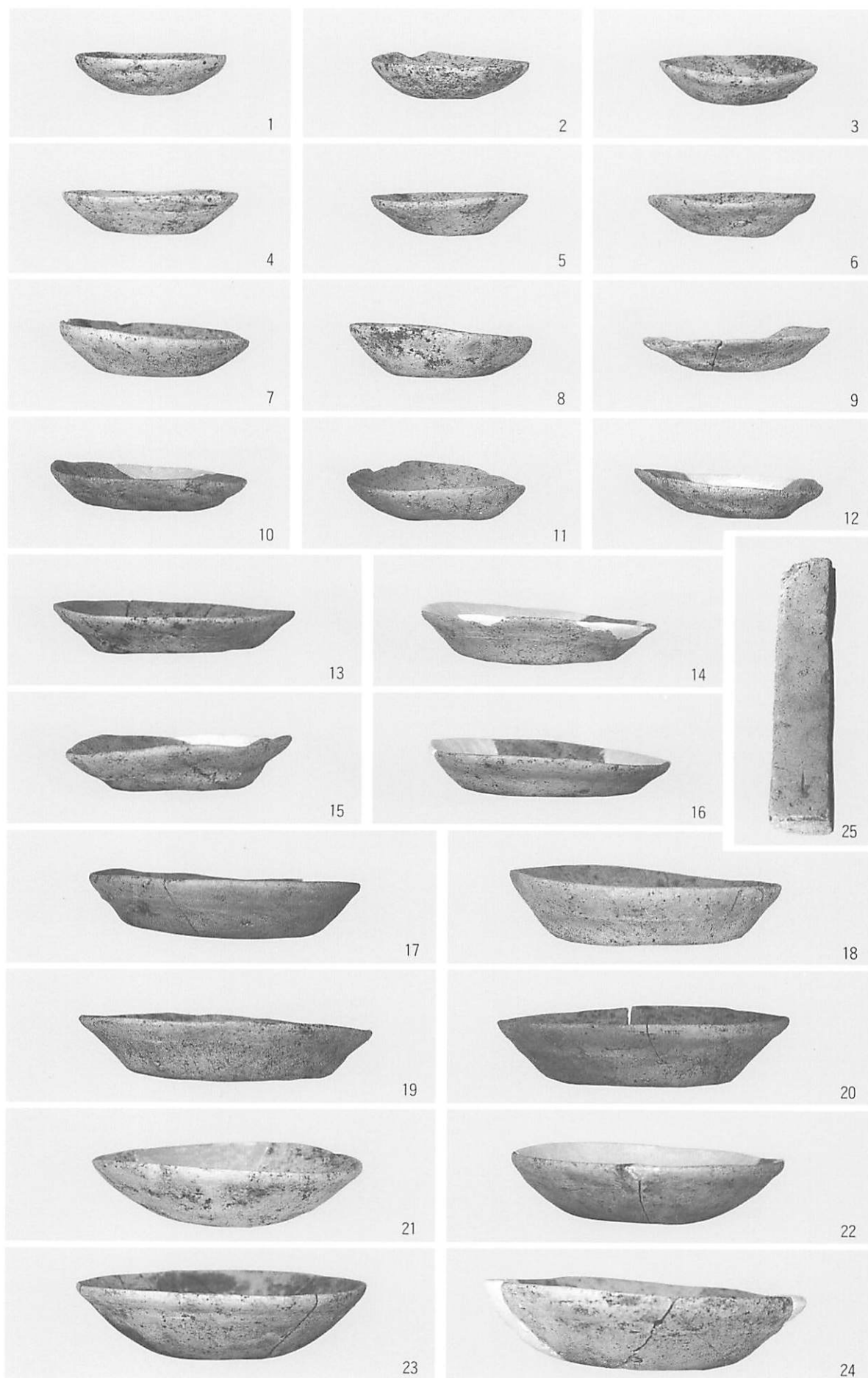
図版第22



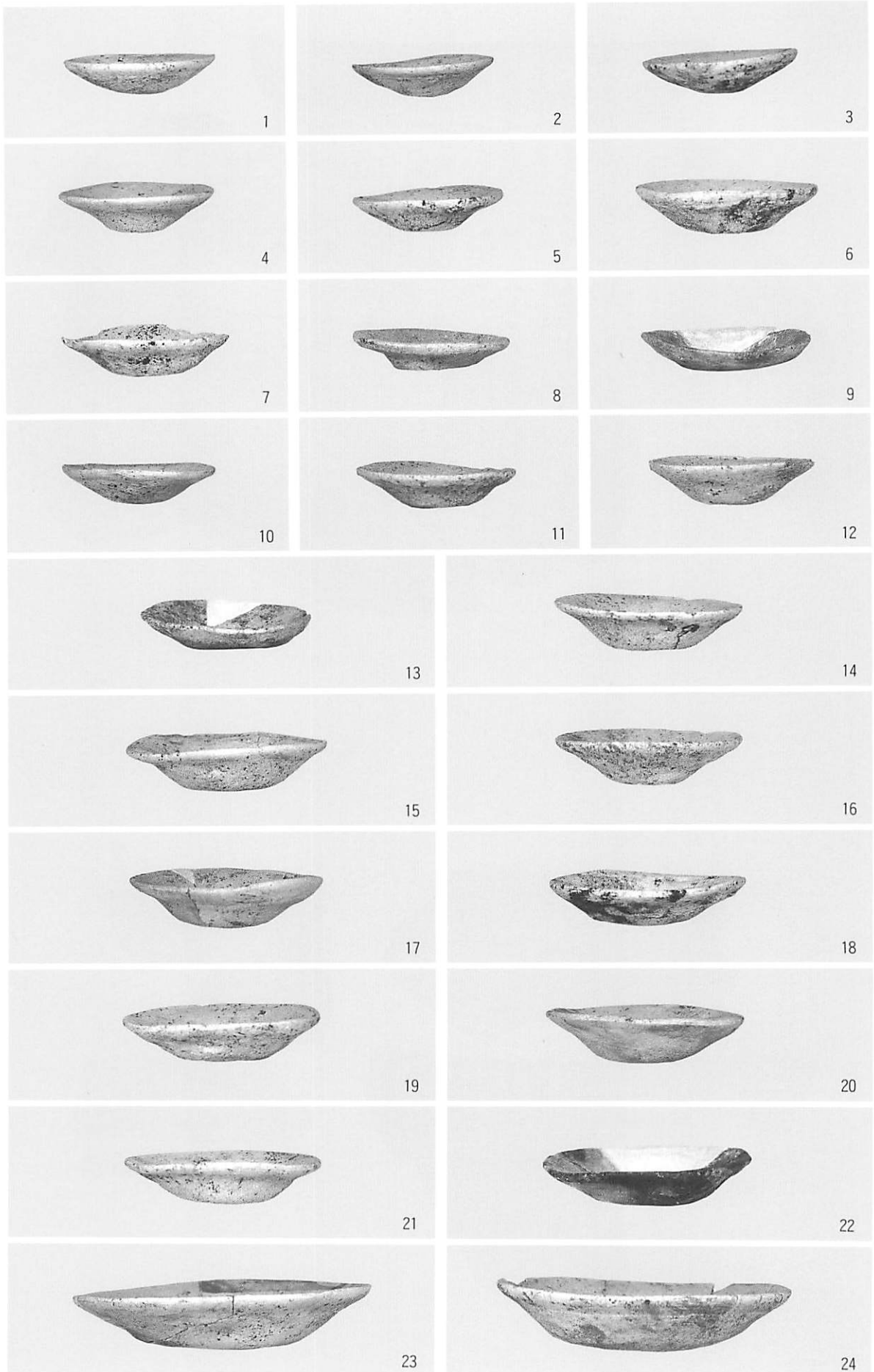
室町時代土坑出土遺物（1～12：No.38，13～24：No.38下層）



室町時代土坑出土遺物 (No.38最下層)



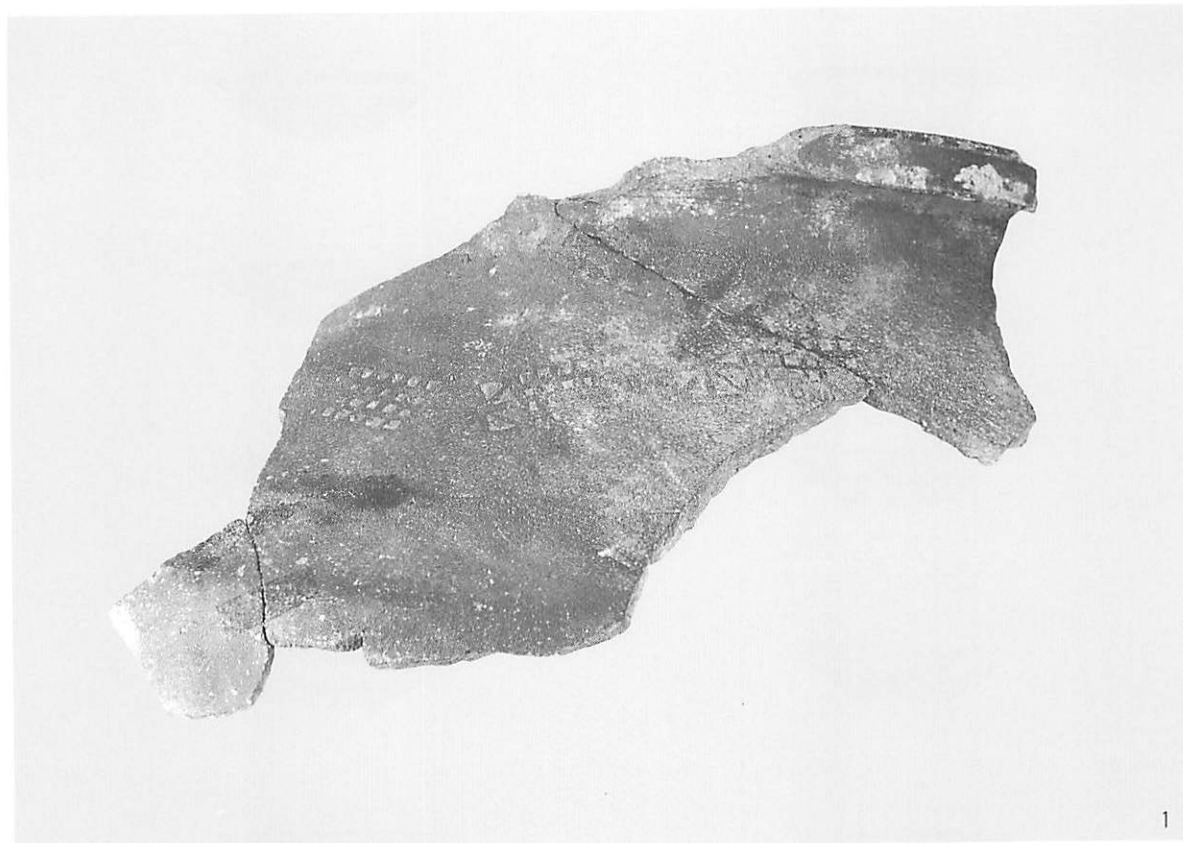
室町時代土坑出土遺物 (No.140)



室町時代井戸出土遺物 (No.45)



室町時代井戸出土遺物 (No.45)

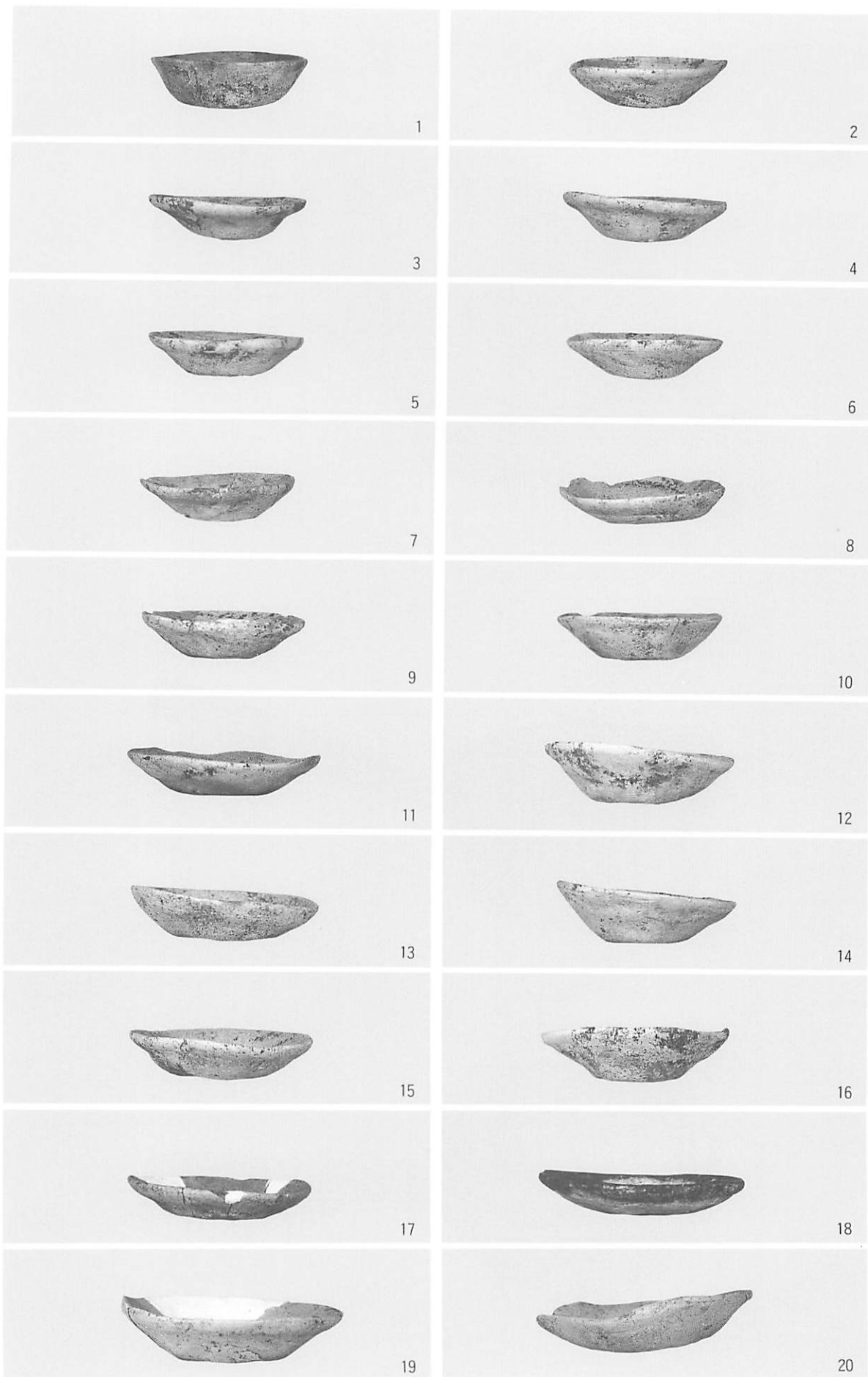


1

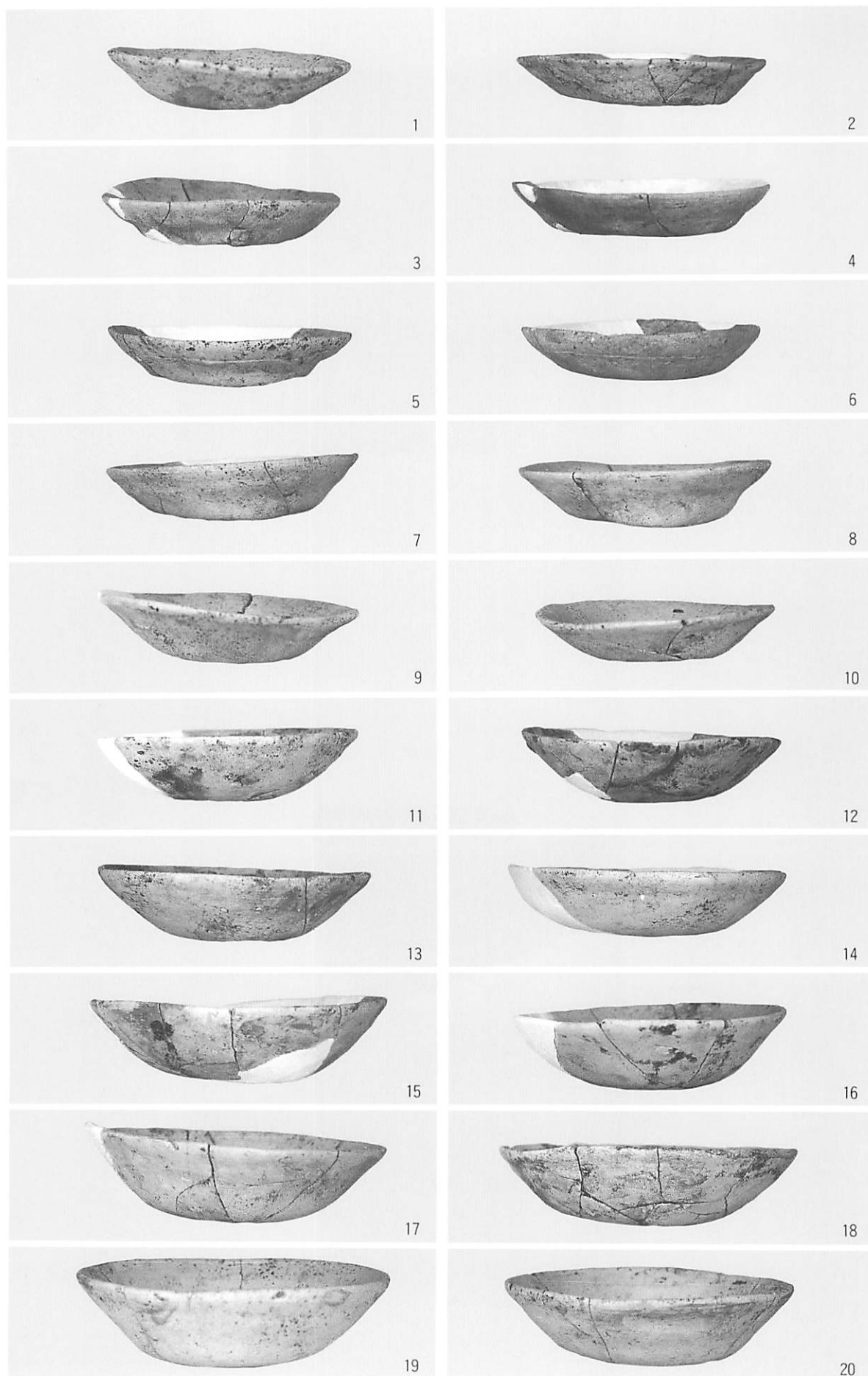


2

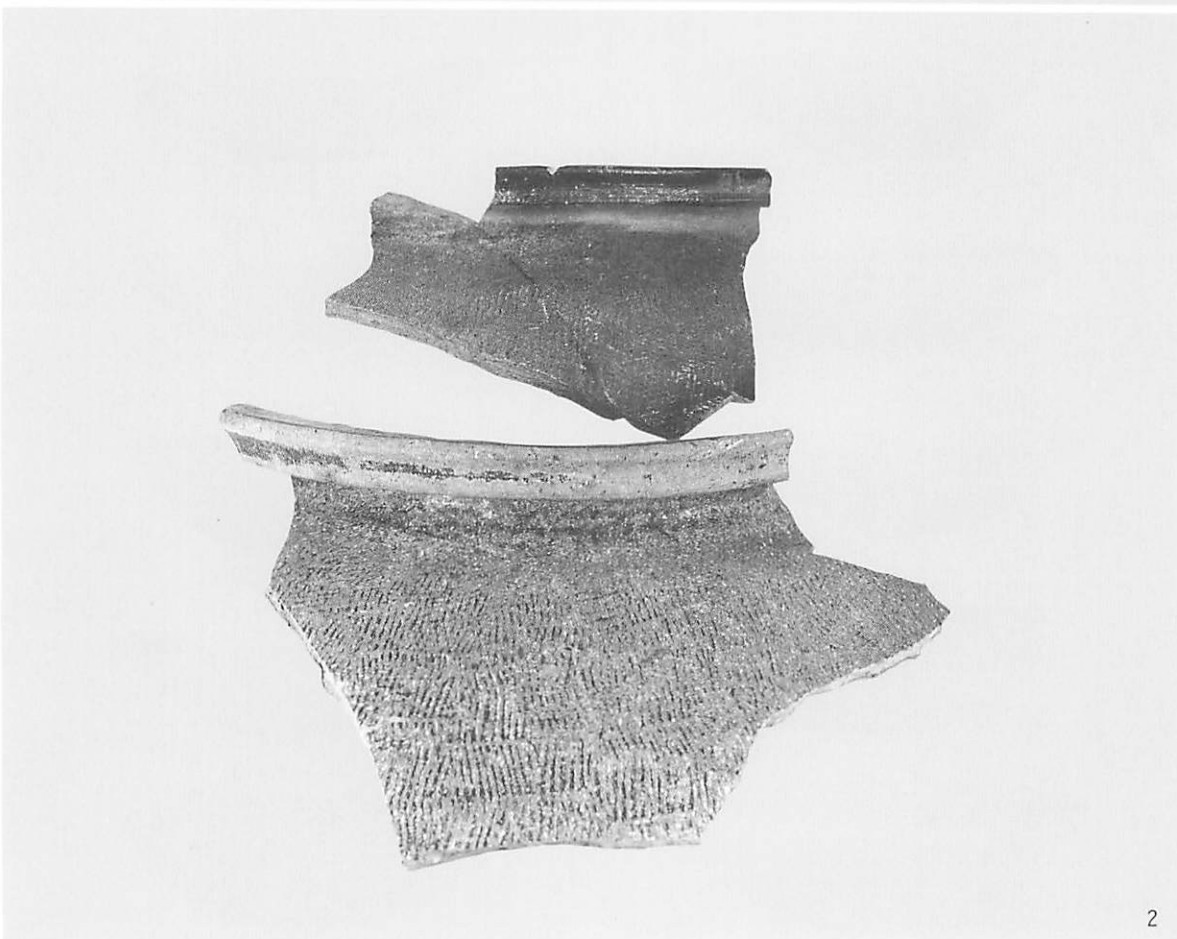
室町時代井戸出土遺物 (No.45)



室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No.43)



室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No.43)



室町時代かわらけ溜り出土遺物 (No.43)



鎌倉時代の土坑及び包含層出土遺物
 (1～5:No.128, 6・7:A・B2セクション3層, 8～12:No.100, 13:No.132周辺)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうはっちょうはっくつちょうさほうこく							
書名	平安京左京五条三坊八町発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ番号	第19輯							
編著者名	辻村純代, 千喜良淳, 前川佳代							
編集機関	財) 古代学協会							
所在地	〒604 京都 都道(府) 京都市中京区三条高倉 TEL 075-252-3000							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
平安京	京都市下京区室町 四条下ル鶏鉾町 491番地			35度 0分 0.02秒	135度 45分 37秒	1995年1月5日) 1995年3月6日	400	池坊学園学舎改 築に伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京	宮都	室町時代	方形土坑(4基) 布掘り溝 井戸(石組)	土師皿・東播系須恵器 鉄製鋤先 土器・瓦 土師皿・国産陶器 (常滑・備前)		杭跡が並ぶ。 宅地割りの基礎。 深さ3.63m		
		平安時代	溝	土師皿・灰釉陶器		10c末～11c初頭 1町内の区画割の溝か。		
		弥生時代	自然流路	弥生土器 石器		第Ⅱ様式～第Ⅲ様式 が主。 石包丁・石剣		

平安京左京五条三坊八町
平安京跡研究調査報告 第19輯

発行日 平成9年3月31日

編集発行 財団法人 古代學協會

604 京都市中京区三条高倉
振替 01080-4-850
Tel. 075-252-3000

印刷 中西印刷株式会社

602 京都市上京区下立売通
小川東入
Tel. 075-441-3155

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XIX

EXCAVATIONS AT THE EIGHTH INSULA,
REGIO V, DECUMANUS III IN THE PARS
ORIENTALIS OF THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MCMXCVII